特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ

第３５次　第５６･８５次　第６１･６２次調査

１９９９

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

第35次調査　SE1351・SX1392（北から）

第35次調査　粉青沙器象嵌瓶

第56次調査全景（南から）

第85次調査全景（北から）

第61・62次調査環境整備全景（西から）

序

一乗谷朝倉氏遺跡は昭和42年に発掘調査を開始してから、一昨年の平成９年をもって30年が、また特別史跡に指定されてから25年が経過いたしました。当資料館ではこれを記念して平成９年と10年の２ヵ年にわたり特別事業を実施致しました。

まず平成９年には特別展「眠りからさめた戦国城下町」を地元一乗谷で開催し、翌年の平成10年には、記念巡回展として京都及び横浜に於て「越前朝倉氏・一乗谷」展を開催いたしました。それぞれ夏季の約１ヵ月余という短い期間ではありましたがいずれも成功裡に終えることができました。この記念すべき年に本報告書を刊行できますことは、まことに意義深いものがあります。

本年度刊行の報告書Ⅶでは、一乗谷朝倉氏遺跡の顔でもあり、城下町の構造を考える上で欠くことのできない上・下城戸をとりあげております。重さが45トンを超す巨石を積み上げ、食い違い土塁や枡形虎口をもった下城戸の偉容と、長さ100メートルにも達する長大な土塁を築いた上城戸の姿を、発掘調査で明らかにされた成果を最大限に盛り込んで、その解明に力を注ぎました。一乗谷朝倉氏遺跡の理解への一助になれば幸いです。

最後になりましたが、事業の実施にあたりましては文化庁をはじめ、県・市関係者ならびに地元の皆様方よりひとかたならぬご指導、ご協力をいただき、感謝にたえないところです。今後共変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年３月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長　　青　木　豊　昭

目　　　　次

口絵
序
目次 …… 9
図版目次 …… 10

Ⅰ　事業概要 …… 15

1．調査の目的 …… 15
2．調査の経過 …… 15
3．調査の方法と調査組織 …… 17
4．経費 …… 20
5．報告書について …… 20

Ⅱ　第35次調査（下城戸町屋） …… 23

1．調査の経過と概要 …… 23
2．遺構 …… 25
3．遺物 …… 30
4．小結 …… 41

Ⅲ　第56・85次調査（下城戸） …… 43

1．調査の経過と概要 …… 43
2．遺構 …… 45
3．遺物 …… 48
4．小結 …… 53

Ⅳ　第61・62次調査（上城戸） …… 55

1．調査の経過と概要 …… 55
2．遺構 …… 60
3．遺物 …… 64
4．小結 …… 72

Ⅴ　考察 …… 79

1．上・下城戸に関する歴史的考察 …… 79
2．一乗谷出土のカワラケ分類基準の検討 …… 85

図版目次

口　絵（カラー）

1．第35次調査　　SE1351・SX1392（北から）　粉青沙器象嵌瓶
2．第56・85次調査　全景（南から）　全景（北から）
3．第61・62次調査　環境整備全景（西から）

図　面

第35次調査

遺構

第１図　第35次調査30ライン西面土層図
第２図　第35次調査トレンチ西面土層図
第３図　第35次調査遺構詳細図（１）
第４図　第35次調査遺構詳細図（２）
第５図　第35次調査遺構詳細図（３）
第６図　第35次調査遺構詳細図（４）
第７図　第35次調査遺構詳細図（５）
第８図　第35次調査遺構詳細図（６）
第９図　第35次調査遺構詳細図（７）

遺物

第10図　第35次調査出土遺物（１）
第11図　第35次調査出土遺物（２）
第12図　第35次調査出土遺物（３）
第13図　第35次調査出土遺物（４）
第14図　第35次調査出土遺物（５）
第15図　第35次調査出土遺物（６）
第16図　第35次調査出土遺物（７）
第17図　第35次調査出土遺物（８）
第18図　第35次調査出土遺物（９）
第19図　第35次調査出土遺物（10）
第20図　第35次調査出土遺物（11）
第21図　第35次調査出土遺物（12）
第22図　第35次調査出土遺物（13）
第23図　第35次調査出土遺物（14）
第24図　第35次調査出土遺物（15）
第25図　第35次調査出土遺物（16）

第56・85次調査

遺構

第26図　第56・85次調査遺構詳細図（１）
第27図　第56・85次調査遺構詳細図（２）
第28図　第56・85次調査遺構詳細図（３）
第29図　第56・85次調査遺構詳細図（４）
第30図　第56・85次調査遺構詳細図（５）
第31図　第56・85次調査遺構詳細図（６）
第32図　第56・85次調査遺構詳細図（７）
第33図　第56・85次調査遺構詳細図（８）

遺物

第34図　第56・85次調査出土遺物（１）
第35図　第56・85次調査出土遺物（２）
第36図　第56・85次調査出土遺物（３）
第37図　第56・85次調査出土遺物（４）

第61・62次調査

遺構

第38図　第61・62次調査土層図
第39図　第61・62次調査各石垣立面図
第40図　第61・62次調査遺構詳細図（1）
第41図　第61・62次調査遺構詳細図（2）
第42図　第61・62次調査遺構詳細図（3）
第43図　第61・62次調査遺構詳細図（4）
第44図　第61・62次調査遺構詳細図（5）
第45図　第61・62次調査遺構詳細図（6）
第46図　第61・62次調査遺構詳細図（7）
第47図　第61・62次調査遺構詳細図（8）
第48図　第61・62次調査遺構詳細図（9）
第49図　第61・62次調査補足図（部分図）

遺物

第50図　第61・62次調査出土遺物（1）
第51図　第61・62次調査出土遺物（2）
第52図　第61・62次調査出土遺物（3）
第53図　第61・62次調査出土遺物（4）
第54図　第61・62次調査出土遺物（5）
第55図　第61・62次調査出土遺物（6）
第56図　第61・62次調査出土遺物（7）
第57図　第61・62次調査出土遺物（8）
第58図　第61・62次調査出土遺物（9）
第59図　第61・62次調査出土遺物（10）
第60図　第61・62次調査出土遺物（11）
第61図　第61・62次調査出土遺物（12）
第62図　第61・62次調査出土遺物（13）

写　真　図　版

第35次調査　遺構

ＰＬ．1　第35次調査区全景（南から、北から）
ＰＬ．2　第35次調査区主要遺構　SS1340（北から）、SX1389SE1349SX1385SD1369（東から）、SD1369・1371SZ1382（南から）
ＰＬ．3　第35次調査区主要遺構　SB1342（東から）、SX1386（東から）、SB1344（西から）
ＰＬ．4　第35次調査区主要遺構　SB1348SX1401（北から）、SB1346・1347SX1388（北から）、SX1388（北から）
ＰＬ．5　第35次調査区主要遺構　SD1378SF1362・1363（北から）、SX1399・1400SK1384（南から）、SX1405・1406（北から）
ＰＬ．6　第35次調査区主要遺構　SF1358・1359（東から）、SF1360（北から）、SF1362・1363（北から）、SF1364（北から）、SF1366（東から）
ＰＬ．7　第35次調査区主要遺構　SE1349（東から）、SE1350（南から）、SE1351（東から）、SE1352（南から）、SE1353（西から）、SE1354（東から）、SE1355（南から）、SE1356（北から）

第35次調査　遺物

ＰＬ．8　第35次調査区主要遺物（1）
ＰＬ．9　第35次調査区主要遺物（2）
ＰＬ．10　第35次調査区主要遺物（3）
ＰＬ．11　第35次調査区主要遺物（4）
ＰＬ．12　第35次調査区主要遺物（5）
ＰＬ．13　第35次調査区主要遺物（6）
ＰＬ．14　第35次調査区主要遺物（7）
ＰＬ．15　第35次調査区主要遺物（8）
ＰＬ．16　第35次調査区主要遺物（9）
ＰＬ．17　第35次調査区主要遺物（10）
ＰＬ．18　第35次調査区主要遺物（11）

第56・85次調査　遺構

ＰＬ．19　第56・86次調査空中写真

ＰＬ．20　第56次調査区全景（南から）（西から）、（東から）

ＰＬ．21　第56次調査区主要遺構　SA3380SV3390SI3387（東から）、SA3380・3381SX3398 SV3390（東から）、SA3381SV3390（東から）

ＰＬ．22　第56次調査区主要遺構　SA3380SV3388（南から）、SA3380・3383SB3384（東から）、SA3380（東から）

ＰＬ．23　第56次調査区主要遺構　SA3380（東から）、SB3384・3385SX3393・3394（南から）、SB3386（南から）

ＰＬ．24　第85次調査区主要遺構　（北から）（南から）

ＰＬ．25　第85次調査区主要遺構　SS4400（北から）、SV3388・4401（西から）、SI3387（東から）

ＰＬ．26　第85次調査区主要遺構　SV4401（西から）

第56・85次調査　遺物

ＰＬ．27　第56次・85次調査区出土遺物（１）

ＰＬ．28　第56次・85次調査区出土遺物（２）

ＰＬ．29　第56次・85次調査区出土遺物（３）

第61・62次調査　遺構

ＰＬ．30　第61・62次調査区全景　（西から）（南から）

ＰＬ．31　第61・62次調査主要遺構　SA3631（南から）　同（北から）　同（東から）

ＰＬ．32　第61・62次調査主要遺構　SA3631SV3651（南から）、SA3631西半部（北から）、SV3652～54SV3655・56SX3669～3671（北から）

ＰＬ．33　第61・62次調査主要遺構　SA3631SS3650他（東から）、SS3650SZ3662～64他（西から）

ＰＬ．34　第61・62次調査主要遺構　SD3634（西から）同（東から）

ＰＬ．35　第61・62次調査主要遺構　SV3655・56SX3671（北から）、SV3659（北から）、SV3657（南から）

ＰＬ．36　第61・62次調査主要遺構　SS3650東半部（西から）、10ライン拡張トレンチ（東から）、SF3647（北から）、SF3644・45（北から）

ＰＬ．37　第61・62次調査主要遺構　SD3636（北から）、SF3644（西から）、SF3648・49（東から）、SF3648・49（北から）、SV3651（西から）

ＰＬ．38　第61・62次調査主要遺構　SE3643SZ3665SE3642SX3688・89SF3648最終確認プランSV3660（北から）

第61・62次調査　遺物

ＰＬ．39　第61・62次調査出土遺物（１）

ＰＬ．40　第61・62次調査出土遺物（２）

ＰＬ．41　第61・62次調査出土遺物（３）

ＰＬ．42　第61・62次調査出土遺物（４）

ＰＬ．43　第61・62次調査出土遺物（５）

ＰＬ．44　第61・62次調査出土遺物（６）

ＰＬ．45　第61・62次調査出土遺物（７）

ＰＬ．46　第61・62次調査出土遺物（８）

ＰＬ．47　第61・62次調査出土遺物（９）

ＰＬ．48　第61・62次調査出土遺物（10）

ＰＬ．49　第61・62次調査出土遺物（11）
ＰＬ．50　第61・62次調査出土遺物（12）
ＰＬ．51　第61・62次調査出土遺物（13）
ＰＬ．52　第61・62次調査出土遺物（14）
ＰＬ．53　第61・62次調査出土遺物（15）
ＰＬ．54　第61・62次調査出土遺物（16）
ＰＬ．55　第61・62次調査出土遺物（17）
ＰＬ．56　第61・62次調査出土遺物（18）
ＰＬ．57　第61・62次調査出土遺物（19）
ＰＬ．58　第61・62次調査出土遺物（20）

挿　図

挿図　1　第35次調査区周辺地形図
挿図　2　第35次調査区グリッド設計図
挿図　3　大甕埋設遺構　SX1386セクション図
挿図　4　下城戸濠中トレンチ全景（南から）
挿図　5　SE1357全景（西から）
挿図　6　焼土層出土金属製品
挿図　7　硯裏面拓本
挿図　8　越前焼壷
挿図　9　第56・85次調査区周辺地形図
挿図　10　第56・85次調査区グリッド設定図
挿図　11　第56次調査区出土石仏と拓本
挿図　12　下城戸出土緡銭
挿図　13　第61・62次調査区周辺地形図
挿図　14　上城戸・周辺地籍図
挿図　15　上城戸土墨略測図
挿図　16　上城戸櫓模式図
挿図　17　第61・62次調査区グリッド配置図
挿図　18　SV3661エレベーション
挿図　19　越前焼壷
挿図　20　青磁花瓶
挿図　21　銅銭拓影図
挿図　22　柿経
挿図　23　板碑
挿図　24　土層断面図
挿図　25　上城戸遺構復元図
挿図　26　下城戸遺構模式図
挿図　27　グリッド別遺物出土分布図（全体）
挿図　28　グリッド別遺物分布図（越前焼）
挿図　29　グリッド別遺物分布図（土師質土器）
挿図　30　各調査区出土のカワラケの分類構成（1）
挿図　31　各調査区出土のカワラケの分類構成（2）
挿図　32　各調査区出土のカワラケの分類構成（3）
挿図　33　第61・62次調査出土土師質皿（カワラケ）

表

表　1　第35次調査出土遺物一覧表
表　2　第35次調査出土銅銭一覧表
表　3　第35次調査出土土師質皿の法量比
表　4　第56次調査出土遺物一覧表
表　5　第85次調査出土遺物一覧表
表　6　下城戸出土銅銭一覧表
表　7　第61・62次調査区遺構一覧表
表　8　第61・62次調査区遺物一覧表
表　9　銅銭一覧表
表　10　各器種別割合比
表　11　カワラケの分類基準

付　図

付図．1　一乗谷朝倉氏遺跡地形図
付図．2　第35次調査全測図
付図．3　第56・85次調査全測図
付図．4　第61・62次調査全測図

Ⅰ　事業概要

Ⅰ　事業概要

1．調査の目的

一乗谷朝倉氏遺跡は昭和46年に国の特別史跡に指定され、47年には福井県教育委員会によって、本格的な発掘調査・環境整備事業を開始した。現在、この事業は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が継続して実施に当たっているが、本報告書の刊行事業を実施する平成10年度は、指定25周年を迎え、又発掘調査・環境整備事業については、足羽町段階における昭和42年以降の庭園、朝倉館の発掘調査・整備事業から数えて30年という区切りの年を迎えるに至った。

この記念すべき年に、当資料館は特別記念事業として、京都と横浜において巡回展を実施した。平成９年の一乗谷での特別展に続くもので、発掘調査と整備事業の成果を広く県外の方々に知ってもらうために企画されたものである。この記念巡回展は、京都、横浜いずれも１万人を超す入場者を数え、所期の目的は達成されたものと考えられるが、それ以上に見学者から遺跡も訪ねてみたいという声が多く寄せられ、戦国城下町の史跡公園として朝倉氏遺跡が果している役割や、その比重の大きさを反面教師として認識させられると言う効果を生んだ。

このように、一乗谷朝倉氏遺跡は平地部に残る城下町の遺構、一乗谷城を中心とする山城跡を広域保存し、発掘調査によって検出された遺構を平面整備や立体復原整備によって、分かりやすく露出展示するという、「史跡公園」づくりを目的として30年に亘って諸事業を実施してきた。戦国大名朝倉氏の研究および戦国城下町の実態解明はまだ緒についたばかりであり、これらの目的の最終的な完遂を目指して、新たな目標を設定すべき段階に入っていると思われる。

2．調査の経過

経過　戦国大名朝倉氏の城下町が一乗谷にそっくり残されているという事実が知られるようになったのは、それほど古いことではない。それまでに伝えられていた近世の地誌類や伝承によって、城主の拠った山城跡や居館跡、家臣の屋敷跡、あるいは寺院跡などがおおまかに認識されていたに過ぎない。

昭和５年に朝倉館をはじめとして、湯殿跡庭園、諏訪館跡庭園、南陽寺跡庭園、あるいは西山光照寺跡などが部分的に国史跡に指定されたことにより、組織的に行政の手によって保護・活用が図られる道を歩むこととなるが、本格的な調査と保護・活用を目的に整備事業が開始されるのは、戦後も20年を経過した昭和40年代を待たねばならなかった。

足羽郡一乗谷村から足羽町に管理が移り、昭和40年に入ると屋根の葺き替えを主とした館の唐門修理を手始めに、英林塚の覆屋建設、朝倉氏遺跡の３庭園、館を対象とした発掘・整備事業が開始されることとなる。折からの考古ブームにも乗って遺跡を訪れる見学者が次第に増え始め、ようやく遺跡の存在がクローズアップされることとなった。そうした中で、昭和40年代半ばに入ると、一乗地区の農業構造改善事業が開始されることとなり、水田や畑の区画整理によって谷の景観が一変するかも知れないという、未曽有の危機に直面することとなる。一乗地区全体の農業生産の将来を左右する大きな問題として行政による精力的な取り組みが行われ、保存か開発かをめぐって精力的な議論が交わさ

れた。全国的にも例のない大規模な城下町の遺跡を、貴重な歴史遺産として保存することで、最終的には地元側もこれに応じて歩み寄り、城戸ノ内町をはじめとする地区民の全面的な合意を得て朝倉氏遺跡の広大な範囲278haの保存が実現した。

事業計画

○第１次５ヵ年計画（昭和42～46年　発掘面積　6,780㎡）

計画の当初は足羽町の事業としてスタートしたが、足羽町の福井市編入に伴い、史跡の管理・土地買収は福井市が、調査と整備は福井県が分担することが定められ、事業が引き継がれた。朝倉館跡の主要部の調査と南陽寺跡庭園、湯殿跡庭園、諏訪館跡庭園の環境整備を主な内容として事業が進められた。また、史跡整備の基本図である1,000分１地形図も作成された。

○第２次５ヵ年計画（昭和47～51年　発掘面積　18,989㎡）

特別史跡としての整備のマスタープランが策定され、このプランに沿った基本計画案が48年に上程され、朝倉氏遺跡研究協議会で承認された。朝倉館、外濠、重臣の武家屋敷、寺院、町屋など一乗谷の城下町としての概要を把握することに主眼をおいて調査が行われ、いずれの調査地においても初期の予想を上回る城下町としての新しい知見が得られた。整備では朝倉館跡をはじめ、中ノ御殿、蛇谷など朝倉館周辺の遺構復原整備、修景工事を実施した。また昭和51年には本格的な調査開始10周年を記念して、市内の県立岡島記念館において記念展示を行った。

○第３次５ヵ年計画（昭和52～56年　発掘面積　29,310㎡）

第２次５ヵ年計画に引き続き、城下町の構造を把握することに主眼が置かれ、赤淵・奥間野地区の寺院、町屋、武家屋敷の調査を集中的に実施した。整備は平井地区武家屋敷をはじめ、瓢町、赤淵・奥間野などの町屋群の遺構復原整備を継続して実施した。昭和56年には見学の拠点である資料館を安波賀町の現在地に開館し、見学者の来訪に備える体制を整えた。

○第４次５ヵ年計画（昭和57～61年　発掘面積　16,513㎡）

第３次５ヵ年計画に引き続き、赤淵・奥間野地区町屋、武家屋敷群の調査と整備を継続して実施した。整備では赤淵・奥間野地区の遺構復原整備を実施し、また朝倉館と平井地区、赤淵・奥間野地区などの周辺地区を結ぶ、導線としての園路計画にも取り組んだ。更に国の「ふるさと歴史の広場事業」として、平井地区の中規模武家屋敷の立体復原整備工事を行った。一方、福井市は史跡の維持・管理のセンター的役割をはたす「史跡公園センター」をオープンし、休憩所や駐車場・レストランを確保して見学者への利便性の一層の向上を図った。

○第５次５ヵ年計画（昭和62～平成３年　発掘面積　21,553㎡）

第５次以降は、福井県の第１次中期10ヵ年計画として位置付け、一乗谷の核とも言える主要な遺構の調査、整備を遂行することに主眼を置き、上・下城戸、中惣、権殿、御所・安養寺、西山光照寺等の調査と整備が盛り込まれた。また追加買収が計画されている山城の公有地化と、調査・整備を開始することも目標として位置付けされた。整備事業としては、「ふるさと歴史の広場特別対策事業」としての町並み立体復原事業が平成３年度より平井地区において開始された。並行して建設省の進める「ふるさとの川」整備事業にのって一乗谷川の河川改修工事に伴う事前調査も開始されることとなった。

○第６次５ヵ年計画（平成４～平成８年　発掘面積　12,800㎡）

10ヵ年計画の中間の見直しが行われ、町並み立体復原整備と並行して平井地区、斉藤地区の重臣に連なる武家屋敷における、未調査ヵ所の調査と整備が追加して行われた。これによって、町並み立体復原地区は、面的整備を含めてほぼ全体の整備を終了することとなった。当初の計画に沿った調査と

して西山光照寺、御所・安養寺の発掘が実施され、山城等の未買収地の調査地を残して計画の半ばを終了した。

3．調査の方法と調査組織

調査は国の国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて、福井県が実施している。実施機関としては昭和47年より56年まで福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所があたり、同56年８月20日以降は福井県立朝倉氏遺跡資料館の新設・改組に伴い、資料館が引き継いであたっている。環境整備事業も同資料館で実施している。又、事業の遂行にあたっては指導機関として朝倉氏遺跡研究協議会を設置し、年度毎の計画と事業内容等について指導・助言を受けている。

本報告書に関する年度の組織を以下に記す。

○昭和54年度（第35次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園　謙三郎	（福井テレビ社長）
委員	大久保　道舟	（県文化財専門委員長）
委員	黒板　昌夫	（国士館大学教授）
委員	田治　六郎	（大阪公園協会理事長）
委員	戸塚　文子	（作家）
委員	松下　圭一	（法政大学教授）
委員	水上　勉	（作家）
委員	木村　竹次郎	（保存協会会長）
委員	石田　昇	（城戸ノ内町内会長）
専門委員	伊藤　滋	（東京大学助教授）
専門委員	岸谷　孝一	（東京大学教授）
専門委員	木原　啓吉	（朝日新聞編集委員）
専門委員	近藤　公夫	（奈良女子大学教授）
専門委員	重松　明久	（福井大学教授）
専門委員	田畑　貞寿	（千葉大学助教授）
専門委員	坪井　清足	（奈良国立文化財研究所長）

朝倉氏遺跡調査研究所

所長	藤原　武二	（庭園）
文化財調査員	水藤　真	（歴史）
文化財調査員	水野　和雄	（考古）
文化財調査員	小野　正敏	（考古）
文化財調査員	岩田　隆	（考古）
文化財調査員	吉岡　泰英	（建築）
文化財調査員	南　洋一郎	（考古）

事務補助員　吉越　強

○昭和61年度（第56次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員　青園　謙三郎（郷土史家）
委員　石井　進（東京大学教授）
委員　岸谷　孝一（東京大学教授）
委員　木原　啓吉（千葉大学教授）
委員　近藤　公夫（奈良女子大学教授）
委員　重松　明久（福山女子短大教授）
委員　田畑　貞寿（千葉大学助教授）
委員　坪井　清足（前奈文研所長）
委員　戸塚　文子（作家）
委員　水上　勉（作家）
委員　木村　竹次郎（保存協会会長）
委員　細田　堅（城戸ノ内町内会長）

朝倉氏遺跡資料館

館長　藤原　武二（庭園）
次長　西嶋　泰隆（事務）
文化財調査員　水野　和雄（考古）
文化財調査員　岩田　隆（考古）
文化財調査員　吉岡　泰英（建築）
文化財調査員　南　洋一郎（考古）
文化財調査員　佐藤　圭（歴史）
文化財調査員　月輪　泰（考古）
非常勤嘱託　山田　武男（学芸）
非常勤嘱託　久保　昭三（事務）

○昭和63年度（第61・62次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員　青園　謙三郎（県文化財保護審議委員）
委員　石井　進（東京大学教授）
委員　木原　啓吉（千葉大学教授）
委員　小林　健太郎（滋賀大学教授）
委員　近藤　公夫（奈良女子大学教授）
委員　重松　明久（扇城学園中津女子短期大学長）
委員　田畑　貞寿（千葉大学教授）
委員　玉置　伸悟（福井大学教授）
委員　坪井　清足（国文化財保護審議委員）
委員　平井　聖（東京工業大学教授）

委　　員　石田　昇（保存協会長）
委　　員　上坂　義雄（城戸ノ内町内会長）

朝倉氏遺跡資料館

館　　長　藤原　武二（庭園）
次　　長　木澤　山栄（事務）
主　　査　水野　和雄（考古）
文化財調査員　岩田　隆（考古）
文化財調査員　吉岡　泰英（建築）
文化財調査員　南　洋一郎（考古）
文化財調査員　佐藤　圭（歴史）
文化財調査員　月輪　泰（考古）
非常勤嘱託　山田　武男（学芸）

○平成６年度（第85次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委　　員　近藤　公夫（神戸芸術工科大学教授）
委　　員　河原　純之（奈文研埋蔵文化財調査センター長）
委　　員　木原　啓吉（千葉大学教授）
委　　員　小林　健太郎（滋賀大学教授）
委　　員　田畑　貞寿（千葉大学教授）
委　　員　玉置　伸悟（福井大学教授）
委　　員　坪井　清足（大阪文化財センター理事長）
委　　員　平井　聖（昭和女子大学教授）
委　　員　松浦　義則（福井大学教授）
委　　員　吉田　伸之（東京大学教授）
委　　員　石田　昇（保存協会長）
委　　員　奥田　道雄（城戸ノ内町内会長）
専門委員　近藤　公夫（神戸芸術工科大学教授）
専門委員　河原　純之（奈文研埋蔵文化財調査センター長）
専門委員　高橋　康夫（京都大学教授）
専門委員　玉置　伸悟（福井大学教授）
専門委員　坪井　清足（大阪文化財センター理事長）
専門委員　平井　聖（昭和女子大学教授）

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館　　長　貴志　真人（美術）
次　　長　大塚　セツ子（事務）
主任文化財調査員　岩田　隆（考古）
主任文化財調査員　吉岡　泰英（建築）
主　　査　佐藤　圭（歴史）

主　　査　赤澤　徳明（考古）
文化財調査員　木村　伸行（考古）
非常勤嘱託　舟澤　茂樹（学芸）
非常勤嘱託　高野　正春（事務）

また、発掘調査、遺物整理を進めるにあたっては、以下に記す作業員の方々の協力を得た。

（発掘調査）

伊予道太、加藤義雄、岸上　勉、小林秀男、木村正志、斉藤喜代松、島作計、田中文右衛門、谷口惣次郎、谷口仁作、土田徳栄、西川末松、西田　忠、林　滋、平鍋与津治、福岡　栄、福岡遊蔵、福岡義信、藤田武志、藤田　忠、細田志学、細田弥三郎、堀田　深、山根木茂麿、吉川　斉、吉川京一、吉川宗男、吉村正雄

石田カズイ、石田艶枝、石田はまを、石田ミヨ子、今吉ハギ、伊予ふじ子、上坂和子、梅田みさを、奥田恵美子、奥田末子、奥田まつえ、奥田ユリ子、岸田あや子、小林澄子、小林ヒサヲ、鈴木繁子、田中和子、田中トシ子、戸田起世子、福岡敏子、福岡まつ子、前田しなえ、三崎千恵子、山下喜美子、山下千代子、山下ミチ子、吉川サダ子、吉川はつ子

（遺物整理）

朝倉八重子、上田優子、梅田由里、石田隆代、上都由利子、川中三恵子、佐飛康子、田中直美、長谷川和子、藤田恵美子、辻岡幸子、天井康夫、石倉孝雄

4．経費

○昭和54年度（第35次調査他）

発掘調査費　30,000千円　［対象調査面積1,630㎡］

○昭和61年度（第56次調査他）

発掘調査費　25,097千円　［対象調査面積1,200㎡］

○昭和63年度（第61・62次調査他）

発掘調査費　30,122千円　［対象調査面積4,100㎡］

○平成６年度（第85次調査他）

発掘調査費　33,103千円　［対象調査面積400㎡］

5．本報告書について

内　容　本報告書は、国庫補助事業として福井県が昭和54年度、61年度、63年度及び平成６年度に実施した第35次調査、第56次調査、第61・62調査、第85次調査の報告である。各年度毎に概要を報告しているが、内容については本報告書が優先する。また、下城戸の調査については、第56次調査と第85次調査を一括して報告する。

本書の構成は５章からなり、Ⅰは事業概要、Ⅱは第35次調査、Ⅲは第56次・85次調査、Ⅳは第61・62次調査について記し、Ⅴには考察を付した。

執　筆　本報告書は各年度の調査諸記録をもとに、館長青木豊昭の指導を得ながら以下の分担により執筆し、全体の編集は南洋一郎が担当した。

Ⅰ　南洋一郎、Ⅱ—1・2　水村伸行、Ⅱ—3・4　宮永一美、Ⅲ—1・2　水村、Ⅲ—3・4　宮永、Ⅳ、Ⅴ—1佐藤　圭、Ⅴ—2　南

図　面　遺構平面図はアジア航測（株）に委託し、空中写真測量により作成したものを用いた。遺物実測については、各担当者が作成し、遺物整理作業員がこれを助けた。付図及び挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（1／1,000）及びその集成図である。

その他　本報告書の遺構図に用いた座標は、国土座標系「第Ⅵ系」である。

また、遺構番号の頭に付した略記号は以下の分類による。

SA：土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘立柱等）、SD：石組溝（濠）、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭（池）、SI：門、SK：土壙（ピット・埋甕遺構等）、SS：道路（通路）、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他の遺構

Ⅱ　第 35 次 調 査

Ⅱ　第35次調査（下城戸町屋）

1．調査の経過と概要

第35次調査の対象とした地区は、上城戸・下城戸に区画された内側である城戸ノ内の北端、下城戸に隣接する地点である。（挿図１）本地点は城戸ノ内でも最も谷幅の狭まった地点であり、幅約120mを測る。その狭小な地点に一乗谷川や上城戸から下城戸へ通じる南北主要道が集中してくる場所でもあることから、南北主要道の検出とその付近の遺構の性格を把握することを主目的として調査を開始した。調査区の設定は、東側は県道に、西側は福井平野と一乗谷を区画する山に挟まれるという制約を受けるため、東西15～20m・南北85m・面積約1,630㎡（下城戸外濠確認トレンチ面積95㎡を含む。）という細長い調査区の設定となった。

本調査区の周辺における既往の発掘調査地点は、一乗谷川を挟んだ東南100mの地点である出雲谷地区である第20次調査、および県道改良工事に伴い第35次調査区の南隣の発掘調査であった第43次調査がある。

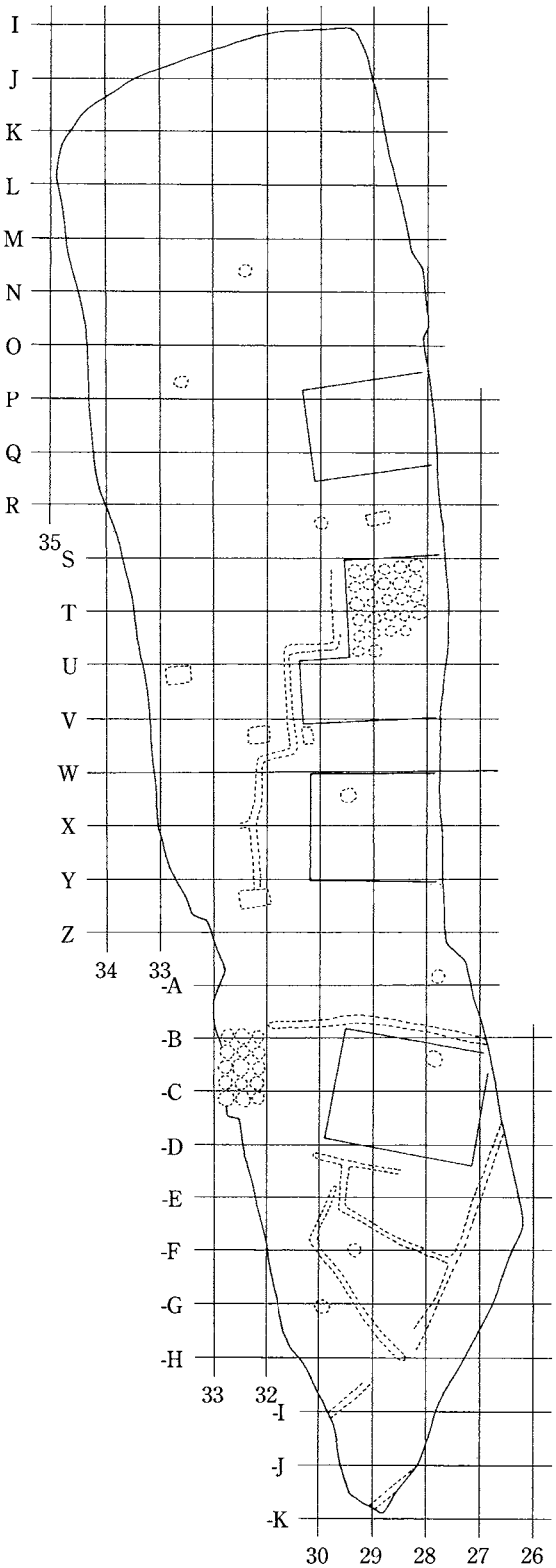
第20次調査地点は、春日神社所蔵「一乗谷古絵図」により「魚住出雲守」と記載されている地点であり、下城戸にも近く軍事的に重要な地点でもある。発掘調査の結果、後世の 削平が大きく屋敷の規模や建物の構成など不明な点が多かったものの武家屋敷跡を確認することができた。

第43次調査は道路改良工事に伴うものであり、延長400mにおよぶ調査区である。調査区を７地区に区分し発掘調査をおこなっているが、このうち北端の調査区であるＨ地区が第35次調査区と隣接するものであり、H区北端が第35次調査で検出した道路SS1340に接続する。本調査区では、下層に土塁で区画される武家屋敷が検出されており、中・上層では町屋群が検出されていることから、当初は武家屋敷として区画された町並みが、途中で町屋に区画し直されていることが判明した。

挿図１　第35次調査区周辺地形図（S=1/2000）

調査日誌抄

5／28	本日より35次調査を開始。発掘器材の運搬、テントの設営。
5/29～6/2	調査区下草刈り。
6／ 4	本日より耕土取り開始。E～J区をおこない、井戸、石列を検出。
6／ 5	A～E区の耕土取り。甕11個体（C群甕ピット）、石列を検出。
6／8～13	A～J区の遺構確認。井戸、石列、石組、道路など多数の遺構を検出。
6／15～16	H30～Z30列以西の耕土取り。遺構はR～Z列では検出されるものの、R列以北では未検出。
6／18	H30～Z30列以東の耕土取り。Q～Z列では井戸、石列、焼土面などを検出するが、Q列以北では遺構がほとんど確認されない。本日で調査区全体の耕土取りを終了。
6／20	道路面の調査をおこなう。最低2時期あることを確認。A23区付近で井戸、笏谷石製板石、石組遺構を伴う台所？を検出。
6／22	S29区付近の焼土層を除去する。下層より大甕群を検出。（A群甕ピット）それを取囲むように礎石建物と掘立柱建物を検出。M32区井戸より元亀2年銘の石仏出土。
6／25	28～31列の遺構確認。八戸市職員研修。
6／26	H31～L31付近に伸びる礫の除去をおこない、下層から石列を検出。昨日に引続き八戸市職員研修。C群甕ピット埋土の除去をおこなってもらう。青磁皿2枚が甕内より出土。
6／28	H31～L31の付近の石垣の掘下げを継続。A群甕ピット群付近の掘下げをおこなう。7ケ所終了。C群甕ピット群のセクション図作製。
7／ 3	長雨で調査区水没のため排水作業。M31区井戸完掘。
7／ 5	D29区井戸完掘。下層遺構確認のため、N31～34区にトレンチ設定後掘下げ開始。
7／ 6	昨日設定したトレンチ内より井戸を検出。井戸内は礫で埋められていることを確認。N31～34トレンチをP列まで拡張。A群甕ピット群完掘。
7／ 7	下層遺構の調査継続。
7／ 9	下層遺構の確認をR～T列まで拡張。
7／10	調査区北端付近で石組遺構を検出。調査区内の不要な石を搬出。
7／13	調査区北側の下層確認を開始。F29区井戸の掘下げ開始。
7／16	Q28～29列以北の掘下げ。明治頃と考えられる石垣の下層から石列を検出。F29区井戸完掘。
7／17	A列以南の調査。C28区を中心とした焼土の除去を進める。
7／18	昨日に続き焼土の除去を進める。焼土中よりの出土遺物が多い。井戸付近からカマドと想定される遺構を検出。
7／19	C28区検出の屋敷から伸びる溝が、H28付近まで南下することを確認。
7／20	C群甕ピットの埋土を完掘。C28区検出の建物を完掘。
7／23	主な遺構の掘下げ終了。
7／24	セクション面の清掃。
7／25	セクション図作製。
7／26	R29区井戸掘下げ開始。V29区で石積遺構検出。
7／27	R29区井戸完掘。セクションベルト除去。
7／28	ベルトコンベア、テント撤去。
7／30	清掃開始。
7／31	清掃終了。
8／ 1	写真撮影。
8／2～28	下城戸トレンチ調査。
8／29	下城戸外濠トレンチセクション図作製。器材撤収。



挿図2　第35次調査区グリッド設定図

2．遺構（第１図～第９図，ＰＬ.１～ＰＬ.７）

調査区全体図を見てもわかるように、南北に細長い調査区のうち南側については遺構の残存状態は良好であったが、北側については削平を受けており、あまり良好と言える状態ではなかった。

第１図は調査区を南北に縦断する30ラインの土層セクション図である。調査区南側であるＺ～Ｇ地区では厚さ0.3m前後の旧水田面の床土を除去すると、遺物を包含する暗茶褐色や茶褐色土が存在する。本土層は上層の遺構面を覆う埋土である。 調査区北側のＨ～Ｚ地区は南側の調査区に比して0.4m前後低くなっており、これは水田耕作時に削平を受けたためである。本地区では厚さ0.2m前後の床土を除去すると、遺構面の一部を確認することができた。この遺構面は南側地区で検出された遺構群と同時代のものとは考えられず一段階古いものと想定される。

SS1340　調査区南端で検出された道路であり、幅5.5mを測る。北側が一乗谷川および現有道路により切断されているものの、延長約23mを確認することができた。全面砂利敷の道路であり、両側には石組の側溝SD1367・1368が付属する。

SD1367　調査区南端で検出された石組溝であり、道路SS1340の南側側溝である。内法約20cm、深さ約15cmを測る。水流は南から北へ流れていたものと想定される。

SD1368　道路SS1340に付属する北側側溝であり、規格はSD1367と同じく内法約20cm、深さ15cmを測る。水流は南から北へ流れていたものと想定される。

SE1349　調査区南端で検出された井戸であり、朝倉氏遺跡で通有に認められる石積のタイプである。平面プランは円形であり、直径0.6mを測る。埋土は石と焼土であった。

SD1369　屋敷を区画する石組溝と想定されるが、後述するSD1371によって壊されている。SS1340の端から伸びたのち、東方向へほぼ直角に屈曲する。

SE1350　SD1369により区画された内側に位置する、石積みの井戸である。天場石での内径は0.7m、深さ2.98m、低部での直径0.83mを測る。井戸内からは、越前焼甕、鉄釉小壷、漆皿、石臼などが出土している。

SD1370　道路SS1340の北側側溝である、SD1367と接続する。北東へ伸びたのち西へ屈曲するが、屈曲部では暗渠SZ1382と接続する。

SD1371　古い時期の屋敷の排水溝と想定されるSD1369を壊して構築されている。前述のSD1370には暗渠SZ1382を挟んで接続する。

SD1372　建物SB1342に並行する石組溝であり、SD1371に接続する。内法約20cmを測る。

SX1410～1411　時期的にもっとも新しい遺構であり、SD1372を壊してつくられている。

SF1358　長軸1.4m、短軸1.2mを測る方形石積遺構であるが、東側の１辺を除き積石は存在しない。

SF1359　長軸1.5m、短軸0.9mを測る略方形を呈する石積遺構である。石積は大部分が除去されいる。

SB1342　東辺を道路SS1340に面して建てられられた礎石建物であり、間口6.3m、奥行8.5mを測る。建物裏側には1×3.8mを測る小さな庇を持つ。建物南辺は幅0.5mを測る2列の石列で、北辺は石組溝SD1374で区画されており、西辺は付属建物SB1343との間の広場に接している。建物内北側は土間と考えられ、その北東隅には洗い場の石組遺構SX1392が存在する。井戸SE1351はSX1392に隣接して作られており、両者が密接した関係を持っていたことが伺える。炉は笏谷石を彫って作られた置き炉のものと、河原石を積んで構築したSX1391が設置されている。建物全面を焼土で整地しており、この整地土を覆う埋土も焼土であった。

SX1391　約1.4m四方を測る方形の炉であり、河原石を3段の高さに積み上げている。

SX1392　長軸2.1m、短軸1.7mを測る洗い場と想定され、水槽部分は長軸1.7m、短軸1.5mを測る。北側部分には小さな排水溝が付属し、SD1374に排水する構造となっている。水槽内には笏谷石製の切石が設置されていた。

SE1351　建物SB1342の土間に設置され、洗い場SX1392に隣接する井戸である。内径0.6mを測り、埋土は焼土であった。

SB1343　SB1342の付属建物であり、敷地が背後の山により制約を受けたため主屋とは14度の振れをもって建てられている。南北5.4m、東西3mに想定される建物内には15個体の越前焼大甕SX1386が設置されている。

SX1386　SB1343内に横5個体、縦3個体が設置されていた越前焼大甕である。甕内からは越前焼鉢・擂鉢、青磁皿、白磁皿、染付皿・坏、タイ製陶器壺が大甕内埋土から出土している。SX1386が火災により焼失したのち火事場整理として整地されていることが、挿図３大甕セクション図から想定される。

SD1373　SB1342を区画する北側の溝であり、SB1343の軒下を西端として東方へ伸びる。東端は調査区域外のため不明であるが、SS1340の側溝であるSD1368に接続するものと想定される。また、中程ではSD1375と接続する。溝内埋土は焼土であり越前焼擂鉢、染付碗などが出土している。

SB1413　SB1342に隣接する建物であり、北側はSD1375に、南側はSD1373により区画されている。大部分が削平されており規模は不明であるが、建物内に井戸SE1352を有する。

SD1375　SB1413の西側を区画する溝であるが、大部分は大きく削平を受けており、約3mを検出したのみである。SD1373に南側で接続する。

SE1352　建物SB1413の土間に設置された井戸であり、内径0.7mを測る。埋土は焼土である。

SF1360　長軸1.5m、短軸0.7mを測る石積施設であり、河原石を3段に積上げている。埋土は礫混じりの焼土であった。

SX1395　性格不明の遺構である。直径0.4m前後を測り、円形を呈する。

SF1361　長軸1.4m、短軸0.5mを測る石積施設である。

SB1344　大きく削平を受けているため正確な平面プランは不明である。建物内北側は土間になっており、井戸SE1353を設置している。

SE1353　建物SB1344の土間に設置された井戸である。内径0.8mを測り、深さ3.1mを測る。低部に木枠を組んであった。木枠は長さ0.8m以上、幅0.1m、厚さ0.1mを測る。埋土は焼土であり、越前焼甕・擂鉢・鉢、鉄釉茶入、白磁皿、銅銭、石塔の台座などが投げ込まれていた。

SB1345　SE1353の付属建物であり、東西1.4m、南北1.9mを測る。SE1353はSB1344の建物内に設置されている井戸であるにもかかわらず、覆屋と想定される付属建物が設置される。

SD1376　SB1344の西側の区画溝であり、幅0.4mを測る。北方へ直線的に伸びたのち、東方へ直角に折れ約1m伸びたのち、再度北へ伸びSB1346の西側区画溝となる。

SD1377　SD1376から直角に分岐し西方へ伸びる溝であるが、大部分が削平されており、長さ0.5mを検出したのみである。幅0.3mを測る。

SD1378　SD1377の延長にある溝であり、幅0.3mを測る。SB1346の建替えにともないSD1376を一部作り替えた溝である。端部は東側側石の一部は破壊された状態であり、西側側石のみ遺存している。

SD1379　SB1346の西側区画溝として構築されていたが、SB1346のSB1347への建替えにともない廃棄された溝であり、側石の一部が残存していたことからSD1376が直線的に伸びていたことが判明した。

SB1346　東側が大きく削平を受けているため全体的な大きさについては不明であるが、東西7.5m以上、南北9.3mを測る。のちにSB1347に建替えられている。

SB1347　SB1346の建替えに伴う建物である。SB1346と同様に建物東側が削平を受けているため全体的な大きさについては不明であるが、東西最大幅7.8m以上、南北8.9mを測る。SB1346の北西部分をカットし、側壁を逆L字状に建替えている。また、建替えに際して主軸を1.5度ほど南に振っている。建物内には越前焼大甕の埋甕であるSX1388が設置される。

SX1388　越前焼大甕26個体を数える埋甕であり、SB1347内北側の土間に設置されている。遺構検出時には9個体のみ甕を検出することができ、残りの17個体については抜かれた状態であった。これらの甕については、建替え前の建物であるSB1346の段階から設置されていたかは不明であるが、恐らくは建替えに伴い設置された可能性が高いものと想定される。

SX1398　SX1388と同様にSB 1347内において検出されたものである。検出時には埋甕が抜かれた状態であったが、規模および形状から越前焼大甕2個体が設置されていたものと想定される。

SF1363　SB1347西側隅に位置する石積遺構である。長軸0.9m、短軸0.5mを測り、側石は2石積みである。北側側石のうち一石をSB1347の礎石し兼用している。

SX1397　SF1363の西端より東に伸びる石列であり、SB1347とSB1344に並行し、両建物の敷地を区切る形で長さ7.3mに渡り検出された。石列の面は北側を向いている。

SF1362　調査区中央、SD1367がL字型に屈曲する西側に位置し、主軸を東西方向に向ける石積遺構である。長軸1.2m、短軸1.0mを測り、側石は2石積みである。

SX1396　SF1362の西側で検出された逆L字型を呈する石列である。

SF1364　下層で検出した石積施設である。長軸1.7m、短軸1mを測り、側石は5段積みである。割石を丁寧に積んでいるものの、西側半分は側石を欠失しており残存状態は悪い。

SF1365　SB1346・1347の北側に位置する石積施設である。主軸は東西方向であり、長軸1.5m、短軸0.7mを測る。

SE1354　SF1365の西側に位置する井戸である。内径0.8mを測り、底部には木枠を組んでいる。井戸内からは越前焼甕・壺、鉄釉椀、白磁皿、染付皿、木製釣瓶などが出土した。

調査区を東西に横断する石列であり、長さ13.8mを検出した。石列が抜かれた部分が存在するため連続はしていないが、おそらく連続する同一の遺構と考えられる。石列の面は南側を向いている。

SX1400　下層で確認した東西に伸びる石列でありSX1399に並行するものの、基底部の高さはSX1399より高く揃わない。しかし、面の向きや位置関係などから想定するとSX1399とセット関係を持つ土塁の石列とも考えられる。

SB1348　SB1346・1347の北側に隣接する礎石建物である。東西5.5m、南北4.5m以上を測るが、東側が削平を受けているため規模は不明である。また、礎石自体も多くが抜かれていた。

SX1401　SB1348を壊して作られた石列である。南北方向に5.8m伸びたのち、東西方向へ直角に1.3m伸びるが、削平を受けているため全体については不明である。

SE1355　下層で確認した井戸であり、内径0.7mを測る。上面は削平されており天場は存在せず、埋土はガラ石であった。井戸内からはバンドコが出土している。

SE1356　上層の井戸である。内径0.8m、深さ2.7mを測るが、底部の木枠は用いられない。埋土はガラ石であり、内部からは越前焼甕、バンドコ、石臼、石仏などが出土している。

SD1380　調査区北部で検出した短い溝であるが、側石はほとんど抜かれており掘り方を確認した。

北方向へ4.5m伸びたのち、石列であるSX1403により切断されている。

SD1381　SX1403に接する形で東方へ伸びる溝であるが、大きく削平を受けており延長0.9mを確認したのみであった。

SX1403　SD1381に接する形で4.0m北方へ伸びたのち、直角に西方へ2.8m伸びる石列である。

SX1404　SD1381に接する形で北方へ伸び、SX1403に平行する石列である。延長2.8mを確認した。

SX1405　調査区北部で検出された東西4.6m、南北10.8mを測る石列である。南北列の中程には他の石列であるSX1406が接続している。

SX1406　SX1405に接続し、西方に開いたコ字状を呈する石列である。1辺は約2.5mを測る。

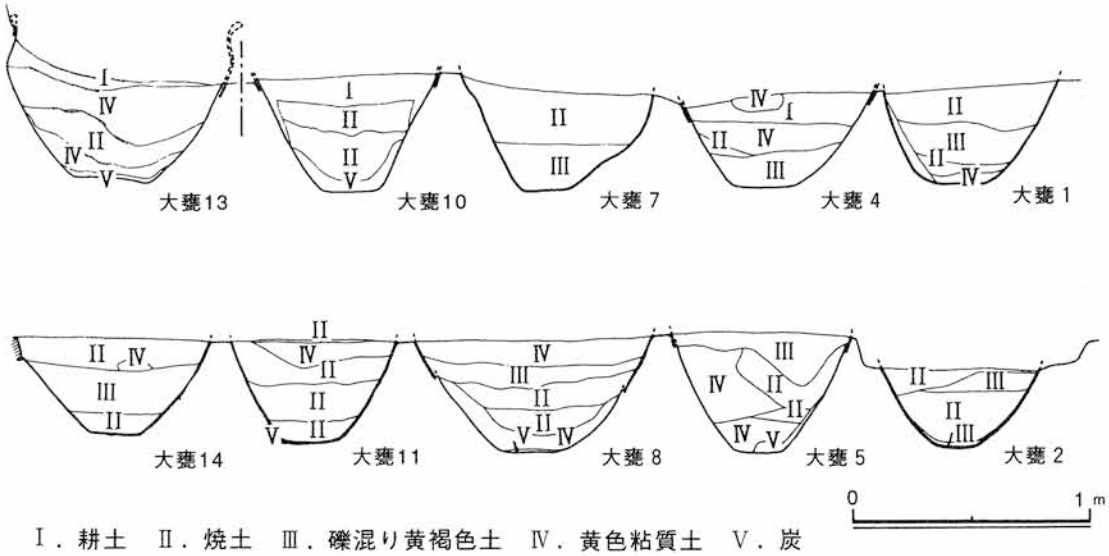
SF1366　調査区北端で検出された石組遺構である。主軸は南北方向であり、長軸1.1m、短軸0.8mを測る。側石は1段のみ確認した。埋土はガラ石であり、灰釉碗、かわらけなどが出土している。

SA3380　調査区北方に設定したトレンチ内にて検出した下城戸土塁である。

SD1409　下城戸外濠の確認のために設定された東・中・西の3本のトレンチ内より検出された濠であり、SA3380に付属する外濠である。東トレンチでは濠の両肩を確認することができ、幅約11mを測る濠であったことが確認された。第１・２図は各トレンチのセクション図であるが、作業安全上のため濠底部までは完掘していないため、深さについては不明である。もっとも全体の様相が判明した東トレンチにおける所見によると、土塁側である南側の肩部において石垣を検出することができ、さらに石垣と土塁の間に約３ｍを測る平坦部を確認することができた。この平坦部は犬走りと想定される。また、中トレンチ北側の肩部において表土下1.4m付近において後述する井戸SE1357（挿図４・５)を検出した。本井戸の確認面上部には多数のかわらけが堆積しており、厚さ0.2mを測るかわらけ溜まりを形成していた。本かわらけ溜まりは完形品を多数含むことや、間層を含まないことなどから一括廃棄されたものと想定することができる。

SE1357　航空測量後の発掘調査最終段階において下城戸外濠中トレンチ内で検出した。（挿図４）本井戸はSD1409北側の肩部において検出されたものであり、上部はSD1409掘削時に削平されていることから本来の天場の位置については不明である。底部については井戸確認面より0.7m弱で確認している。

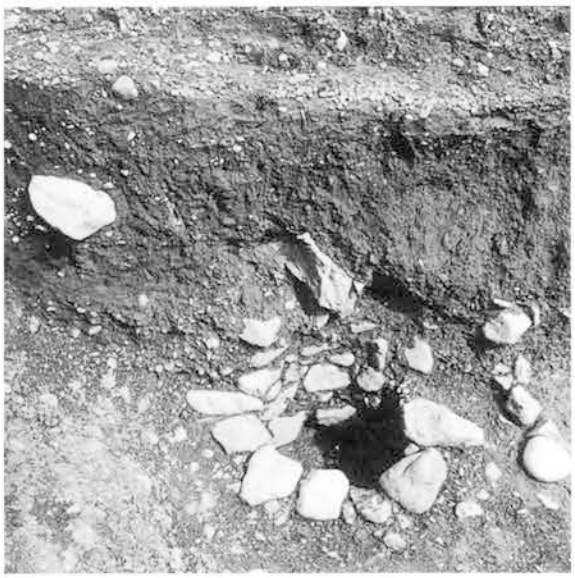
Ⅱ　第 35 次 調 査



Ⅰ．耕土　Ⅱ．焼土　Ⅲ．礫混り黄褐色土　Ⅳ．黄色粘質土　Ⅴ．炭

挿図３　大甕埋設遺構SX1386セクション図

挿図４　下城戸外濠中トレンチ全景（南から）



挿図５　SE1357全景（西から）

3．遺物（第10図～25図　PL．8～PL．18）

ここで取り扱う遺物は、第35次調査区より出土した遺物群である。総点数は26,797点であり、面積1,630㎡あたりの密度は16.43点／㎡となる。遺物ごとの内訳をみると、土師質土器が14,755点とその半数以上を占める。この土師質土器の大半は下城戸外濠トレンチから出土した。この地区は、調査区南側の上層遺構の残存状態が良好で、焼土で整地した礎石建物や、埋甕施設・井戸・溝などが検出している。しかし、北側山際と用水路付近は攪乱を受けており、上層遺構が削平されて、下層遺構が検出された。全体として耕作土・床土からの遺物はわずかで、遺物の多くは、広い範囲で検出した焼土層や、下城戸外濠確認トレンチから出土した。

整理の方法としては、遺物包含層を礫層・焼土層・炭層などの土層にわけて扱った。また井戸や埋甕遺構・石組溝などの遺構内から出土したものについては、遺構ごとに一括遺物としてまとめた。出土遺物の内訳については表１のとおりである。遺物の分類については既刊の報告書を踏襲し、越前焼大甕・擂鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質皿は『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年、染付は「15，16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　1982年、による。

器種			破片数	%
日本製陶磁器	越前焼	甕	7,040	
		壺	1,556	
		鉢	88	
		擂鉢	427	
		薬研	1	
		その他	2	
		計	9,114	34
	鉄釉	碗	121	
		皿	11	
		壺	115	
		鉢	2	
		香炉	2	
		茶入	5	
		水注	2	
		その他	3	
		計	261	1
	灰釉	碗	14	
		皿	159	
		香炉	8	
		その他	1	
		計	182	0.7
	土師質	皿	14,640	
		羽釜	66	
		壺	26	
		土鈴	7	
		土錘	2	
		灯芯押	1	
		その他	13	
		計	14,755	55
	瓦質	火鉢	4	
		香炉	14	
		その他	54	
		計	72	0.3
小計			24,384	91.2

器種			破片数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	187	
		皿	103	
		壺	6	
		鉢	14	
		香炉	8	
		盤	3	
		その他	7	
		計	328	1.2
	白磁	碗	3	
		皿	591	
		坏	34	
		壺	1	
		その他	7	
		計	636	2.4
	染付	碗	139	
		皿	253	
		坏	16	
		壺	2	
		その他	4	
		計	414	1.5
	赤絵	皿	2	
		坏	1	
		計	3	0.01
	華南彩釉陶器	皿	9	
		水滴	1	
		その他	1	
		計	11	0.04
朝鮮製		碗	23	
		皿	5	
		壺	92	
		その他	2	
		計	122	0.5
タイ製		壺	25	
		計	25	0.1
小計			1,539	5.7
陶磁器合計			25,923	96.7

器種			破片数	%
金属		銅銭	565	
		釘	82	
		刀子	1	
		小柄	5	
		胸板	1	
		仏餉器	1	
		紅皿	1	
		銅壺	1	
		鉄鍋	8	
		蓋	1	
		その他	45	
		計	711	2.7
石製品		バンドコ	18	
		その他	55	
		計	73	0.3
木製品		漆椀	2	
		漆皿	1	
		釣瓶	4	
		下駄	1	
		計	8	0.01
近世		陶磁器類	82	
		計	82	0.3
		合計	26,797	100

表１　第35次調査出土遺物一覧表

暗褐色土・礫混り黄色土層出土遺物（第10図）

耕作土からの遺物は、越前焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器などがあったが、数が少なく小破片であったため図示しない。暗褐色土・礫混り黄色土層は調査区北側の包含層で、遺物量は少ない。出土した遺物には、越前焼・土師質土器・瀬戸美濃・瓦質土器・中国製陶磁器・石製品等があった。

越前焼　(1) の鉢は胎土が灰黒色で焼き締まっている。口縁部が内側にナデながら押されて内湾している。(2) は口縁部が薄く尖り、断面が三角になる小型の鉢で、口径18.2cmを測る。胎土は赤褐色で焼成良好。(3) はⅣ群の擂鉢は口径35.4cmを測る。胎土は白く焼成不良のため摩耗が激しい。(4) は口縁断面が三角形の小型の擂鉢で、9条1単位の擂目を持つ。(16) はⅢ群ｂに属する擂鉢で、口径36.4cmで、10条1単位の擂目を持つ。やや焼成が不良で、内面の下部は摩耗して擂目が消えている。(17) も同じくⅢ群ｂの擂鉢であり、片口を持つ。11条を1単位とする擂目を有する。

土師質土器　(5)・(6)・(18) はＣ類に属する。(18) は口径9.0cm、器高1.7cmで、口縁部はナデによる摘み上げがされている。

瀬戸・美濃焼　(7) は口径5.4cm、器高1.5cmを測る灰釉の小皿である。碁笥底で、腰部から高台にかけてヘラ削りされている。釉は内面から外面腰部までかかるが、火を受けて外面の釉は剥落している。(19) は口径8.8cm、器高2.1cmを測る灰釉皿である。釉は火膨れをおこし、白く変色している。見込みには菊花の印花文があり、底部には輪トチン痕が残る。

中国製陶磁器　(8) は口径11.4cmを測る青磁碗で、体部外面には剣頭と蓮弁を揃えて比較的丁寧に施文した線描蓮弁文を有する。内面にも刻花文と思われる線刻がある。(9) は口径12.6cmの青磁碗で、口縁部と体部に沈線がめぐる。(10) は口径10.6cm、器高2.8cmを測る碁笥底の青磁皿である。胎土は完全には磁器化しておらず黄白色で、外面は腰部から底部にかけて露胎となっている。見込みには一部分であるが魚文らしき陽刻が確認できる。(11) は内面に刻花文を有する青磁の皿で、口径21.0cmを測る。外面体部には間隔を揃えずに沈線がめぐる。(12) は口径11.8cm、器高5.9cmを測る染付碗である。口縁部は内面と外面に2本の界線がめぐり、高台にも2本描かれる。体部には渦状の花文を有する。畳付は釉を削り露胎となっている。

朝鮮製陶磁器　(13) は暗灰緑色の蕎麦釉が全体にかかる皿で、口径10.0cm、器高2.9cmを測る。見込みにトチン痕が残る。朝鮮製陶磁器は碗や徳利が多く、皿の割合は少ない。

金属製品　(14) は銅製の紅皿である。口径5.8cm、器高2.6cmを測る。同様の輪花状の紅皿は金箔が残った状態の良いものが40次調査などでも出土しているが、これは腐食が進んでおり、全体が緑青に覆われている。

石製品　(15) は笏谷石製のバンドコである。楕円形で、身の底径は10.8cm、器高は7.1cmで、これにあう蓋は出土しなかった。このような小型のバンドコについては用途が確定できないが、他に、第18次調査でも非常に小型のＤ型のものが出土している。

焼土層出土遺物（第11・12図）

焼土層は埋甕施設ＳＸ1386・ＳＸ1388や、ＳＤ1378などを埋めており、調査区南側を広く覆う。礎石建物ＳＢ1342は建物全面を焼土で厚く整地している。この層からの出土は遺物量・種類ともに多く、越前焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器・金属製品・石製品等が出土した。

越前焼　(20) はⅣ群ａに属する大甕の破片。胎土は灰黒色で焼成は良好で、割れ口に漆が残っていることから修理して使用していたことがわかる。(21) は完形の壺で口径7.1cm、器高13.1cmを測る。赤

褐色で焼き締まっており、肩部にヘラ記号を持つ。口縁部を内側に押して鳶口を作ってある。(22) は口径9.8cmを測る壺で、肩部から下に叩き締めの痕が残る。(23) は口縁部が三角に肥大した壺で焼成は良好である。(24) は口径15.3cmを測る鉢である。口縁部は内側に押され薄く尖り内湾する。(25) の鉢は口径15.5cm、器高6.5cmを測る完形の鉢である。焼成は良好で内面は粘土紐のつなぎ目が良くわかり、底部には藁もみの跡が残る。ＳＢ1342の台所に据えられた笏谷石製の板石脇に、ひっくりかえった状態で出土した。(26) ・ (27) はⅣ群の擂鉢で、口縁は内傾し擂目は不規則に入る。(28) ・ (29) ・ (33) はⅢ群ｂの擂鉢である。(28) は口径36.3cm、器高10.9cmを測る擂鉢で、胎土は黄白色で焼成不良。9条1単位の擂目を持ち、内面下部は擂目が摩耗している。(30) ・ (31) ・ (32) はⅣ群の擂鉢である。(30) は口径40.2cm、器高15.2cmを測り、擂目が重ねて密に入れられている。

土師質土器　土師質土器には皿・耳皿・灯芯押え等があった。(34) はＢ類の皿で、口径6.6cm、器高1.9cmを測る。内面には肘に押し当てた圧痕が残り、器壁が不均一で底部が不安定なため傾く。(35) ～ (38) は口径7.0cm以下のＣ類の小型の皿である。胎土は白く、(35) ・ (38) は口縁部にわずかにタールが付着している。(39) はＣ類の皿で口径9.1cm、器高2.1cmを測る。外面は丁寧に調整されており、底部から口縁部に向かって器壁が厚く作られている。(40) のＣ類皿は口径8.6cm、器高1.9cmを測る。器壁は薄く、口縁部は摘み上げながらナデ調整している。また口縁部全体にタールが付着する。(41) はいわゆる耳カワラケで口径5.5cm、器高1.6cmを測る。儀式の正式な膳に使われる箸置きと考えられており、これまでの出土例は朝倉館からが一番多い。35次調査では下城戸外濠トレンチから大量の土師質土器が出土したが、耳皿については特徴的な口縁からかろうじて判断できる小破片しかなく、完形のものは (41) 1点のみであった。(42) は灯芯押えである。直径2.0cm、厚さ0.3cmの円盤の真ん中に0.6cmの穴を穿つ。

瀬戸・美濃焼　(43) は口径11.3cmを測る鉄釉碗である。(44) は口径10.5cm、器高2.2cmを測る碁笥底の鉄釉皿である。鉄釉が二重がけされ、底部は中央が少し厚く作られているため、見込み周辺に釉溜まりができている。内部に3つのトチン痕と、底に輪トチン痕が残る。(45) は鉄釉の鉢で底径12.8cmを測る。胎土は灰色で肌理が細かい。底部からほぼ垂直に立ち上がり、胴部はやや脹らむ。内面全体と外面の胴部下まで釉がかけられるが、残りの部分は露胎である。(46) は器高3.9cmを測る鉄釉の水注である。棒で穴が開けられた注口が付き、その上と後ろにそれぞれ耳が付けられている。細かい灰色の良く焼き締まった胎土で、全体にしっかりした作りになっている。内部全体と外面下半まで釉がかかり、底部にかけてはシブ鉄が施されている。また一部に二次的に火を受けている。(47) は灰釉の皿で、口径10.4cm、器高2.8cmを測る。胎土はやや粗く黄灰色をしている。口縁内面に沈線で輪花状の模様が付けられている。高台の周りと見込みには厚く釉が溜まり、貫入が全面に入る。(48) は口径10.5cm、器高2.8cmを測る灰釉皿である。断面三角形の付高台を有し、底部には輪トチン痕が残る。(49) は口径17.4cm、器高4.0cmを測る灰釉皿で、断面三角形の付高台を持ち、底径10.0cmの底部から立ち上がり内湾する。白くやや粗い胎土で全体に薄く釉がかかる。

中国製陶磁器　(50) は青磁の碗で、口径10.6cm、器高6.7cmを測る。体部外面には線描蓮弁文を有し、高台内を残して半透明の緑がかった釉が薄くかかる。見込みには瑞果の印花を有する。胎土は黄白色でやや焼成不良。(51) は同じく線描蓮弁文を持つ青磁碗で、くすんだオリーブ色の釉がかかる。(52) は口径10.0cmを測る青磁綾花皿で、折腰から口縁部に向かって外反する。内面は口縁に沿って3本の孤線が付けられる。(53) は青磁の輪花皿で、青灰色の釉がかけられ薄い作りになっている。(54) は碁笥底の白磁皿である。口径10.0cm、器高2.5cmを測る。胎土は灰色で釉も灰色ががかっている。口縁は

ゆるく内湾し、施釉後、畳付の釉をヘラ削りしてある。(55) ～ (58) は端反の白磁皿である。(55) は口径11.8cm、器高3.0cmを測り、底部中央は器壁が少し厚くなっている。内傾する高台は釉をヘラ削りされ砂高台になっている。(58) は口径14.4cm、器高3.8cmを測り、作りは (55) ～ (57) と同じであるが、釉の発色が良好で、胎土は完全に磁器化している。また高台内に方形の青花銘を持つ。(59) は白磁の坏で、口径7.8cm、器高4.5cmを測る。高い高台を持ち、折腰から口縁へ外反気味に開く。灰色の釉には細かい貫入が入り、畳付から高台内は鉄釉が施されている。また畳付の白磁釉は内傾してヘラ削りされている。(60) は口縁外面に波涛文帯が描かれる染付碗である。(61) ・ (62) ・ (69) は碁笥底の染付皿である。(61) は口径12.0cm、器高3.4cmを測り、胎土は黄白色で完全には磁器化していない。朝倉館や85次調査で出土したものと同じく、見込みに「喜」を人形化した吉祥字が描かれている。(62) は口径10.0cm、器高2.9cmを測る。外面は波涛文帯と芭蕉葉文、見込みには捻花が描かれるが、やや文様が粗雑になっている。(63) ～ (68) はＢ群に属する端反の染付皿である。(63) は口径9.0cm、器高2.4cmを測り、見込みに十字花文が描かれる。(64) は口径11.0cmを測り外面には牡丹唐草が描かれ、見込みは玉取獅子と思われる文様がみられる。(65) は口径14.0cm、器高2.9cmを測り、口縁部には四方襷文、見込みには人物らしき文様がみられるが粗略な描き方で、焼成も不良である。(66) ・ (68) は外面に牡丹唐草が描かれ、(67) は外面に渦状の密な唐草、内面にはアラベスクが描かれる。(70) ・ (71) は華南彩釉陶器の皿である。(70) は口径12.0cmを測り、胎土は黄褐色を帯び、細かいが焼成はあまい。青緑色の釉は部分的に赤紫色や虹色に変化しているが、二次的に火を受けているためほとんど変色し火膨れを起こしている。ＳＢ1342の台所付近から出土した。(71) は器壁が薄い別個体の皿で、やはり釉が火膨れのため剥落している。高台内と畳付は露胎になっている。

金属製品　挿図６は焼土層から出土した金属製品で、(72) は小柄で腐食が激しいが、残存長20.1cm、幅1.3cmを測る。(73) は短刀で刃渡り19.0cm、幅2.8cmを測り、茎の部分は欠けていて全体を錆が厚く覆う。ＳＢ1342を覆う焼土から出土した。

挿図６　焼土層出土金属製品

石製品　(74) は笏谷石製のバンドコの蓋である。Ｄ型のもので、正面が約21cm、奥行き約17cmぐらいの大きさと推定できる。内面にはノミの加工痕が確認でき、ノミ幅は約3.5cmと推定される。

炭層出土遺物（第13・14図）

この土層は調査区北側で検出された下層遺構にともなうものである。礫混り黄色土を除去した後検出した。越前焼の甕について見てみると、口縁帯が残っていたり、口縁が肥大しきっていない古いタイプの破片が見られた。また越前焼の擂鉢について他の層と比較すると、Ⅲ群のものが多く、Ⅳ群のものは少なかった。朝鮮製陶磁器で珍重された三島手の花生が出土したほか、石製品では鳥居や波模様を細かく彫刻した硯なども出土した。

越前焼　(75) は中甕で口縁帯のなごりがみられ、口縁内側にはわずかに凹線も残る古いタイプである。胎土は粗く灰褐色で焼成良好。(76) はⅣ群ａに属する大甕の破片である。(77) は口径18.4cmを測る小型の甕である。胎土は細かく灰色で焼成も良く、表面は茶褐色である。広い口縁部は短くやや外反して立ち上がる。口縁内面は横ナデの調整の痕がよくわかり、肩部の内面にも指の押えの痕が確

認できる。(82) の壺も口径が14.4cmで、外側に反りながら立ち上がる。(78) は器高が25.0cm以下の小壺で、口縁部はやや外側に開きながら立ち上がる。口縁部の器壁は、口縁下がくびれているため中央が厚くなっている。(80) も同様の壺で口径14.2cm、器高25.5cmを測る。口縁には片口が付き、肩部にヘラ記号を有する。体部は全体的に叩き締められ、最後に横ナデで調整されている。(79) は小さい口縁が真っすぐ立ち上がるタイプの壺で、端部は丸く整えられている。(81) は同じく小さい口縁部が真っすぐ立ち上がり、端部が外側に反っている。口径12.4cm、器高41.6cmを測る四耳壺で、耳の部分は欠損しており、貼付けられていた位置に石膏で復元している。表面は黒褐色で焼き締まっており、叩き締めて調整されている。(83) の鉢は口径31.0cm、器高6.8cmを測る浅めの鉢で、内面の一部に横方向の擂目が入る。焼成は良好で、口縁を指で弱く押して片口が作られる。擂鉢はⅢ群のものが多い。(86) ・ (89) は口縁断面が丸いⅢ群aで、(84) ・ (85) ・ (87) ・ (88) はⅢ群ｂの擂鉢である。(85) は口径36.6cm、器高12.8cmを測る擂鉢で、10条1単位の擂目を持ち、内面底部にも擂目がある。

土師質土器　(90) ～ (93) はＣ類の皿。(93) は口径12.2cm、器高2.8cmを測り、器壁は厚くしっかりと作られている。口縁部全体にタールが付着し、よく使用されたことがわかる。

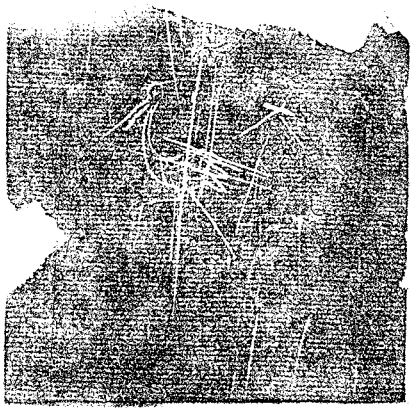
瀬戸・美濃焼　(94) は口径11.6cm、器高5.8cmを測る鉄釉の碗である。(95) は口径7.3cmを測る鉄釉の小壺である。いわゆる内海茶入で、丸く張った肩部から頚部が短く立ち上がり、口縁はやや外反し丸く成形されている。焼成は良好だが釉が火膨れしている。(96) は口径4.0cm、器高1.2cmを測る小型の灰釉皿である。碁笥底で、底部内面に印花文らしきへこみがあるが一部のため文様は不明。胎土は黄白色で焼成があまい。(97) も灰釉皿で、口径10.8cm、器高2.5cmを測る。貼付け高台を持ち、胴部はヘラ削りで成形され、口縁が外反する端反の皿である。胎土は黄白色で粗い。

中国製陶磁器　(98) は青磁の碗で、口径10.9cm、器高7.0cmを測る。内面底部に瑞果の印花文を有する。高台内も含め全体に施釉され、高台内にトチン跡が残る。(99) ・ (100) は口縁部に沈線が1本めぐる同型の青磁碗で、(100) は口径12.0ｃｍ、器高7.3cmを測る。内面底部には菊の印花文を有し、高台内にトチン跡が残る。(101) は口径12.0cm測る青磁碗で、体部には線描蓮弁文を有する。釉は火を受けているためか全体的に黄色く変色している。(102) は青磁の稜花皿で、内面は口縁部にかけて線刻がある。胎土は灰色で青灰色の釉がかかる。(103) は染付碗で、口径12.3cm、器高6.4cmを測る。底部を欠いているが、Ｅ群の饅頭心の碗と思われる。口縁部は内・外面に1本づつ界線がめぐり、底部と高台際にも界線が線描きされる。体部には白磁釉の下に、微かに花の文様が線刻されているが、染付はされていない。高台は、施釉後畳付の釉をヘラ削りしてある。胎土は白色で焼成良好。(104) はＣ群の染付碗で、外面胴部には芭蕉葉文が描かれ、見込みには法螺貝が描かれる。低い高台を持ち、畳付はヘラ削りされ、高台内は露胎となっている。(105) は口縁に波涛文帯、胴部にアラベスクが描かれる。(106) ・ (107) は端反の染付皿である。外面には牡丹唐草が描かれる。(108) は碁笥底の染付皿で、見込みには花文が描かれる。釉は全体的に火膨れをおこしており、胎土も粗く完全には磁器化していない。(109) は見込みに玉取獅子が描かれ、(110) は十字花文が描かれる。共にＢ群の染付皿である。(111) は口径9.5cm、器高2.2cmを測る、Ｂ群の小型の染付皿である。外面には牡丹唐草、見込みには十字花文が描かれる。胎土は白色で焼成良好。

朝鮮製陶磁器　(112) は口径17.8cmを測る、朝鮮半島製の白磁碗である。器壁は底部から口縁にかけて徐々に薄く仕上げられ、口縁部で緩やかに外反する。胎土は灰色で、肌理が細かく完全に磁器化している。釉は灰色で薄くかけられる。(113) は朝鮮半島製の粉青沙器壺で、体部はどっしりと膨らみ、底部は高台が付く。頸部を欠くが、鶴首型の花生と考えられる。いわゆる三島手で、外面には細かく

象嵌が施されている。象嵌模様は高台を除いて頚部まで施され、4段の界線で区切った間が、密な格子模様になっている。(114) も朝鮮半島製の壺で、口径8.2cmを測る。胎土は灰色で白砂粒が混じる。焼成良好で灰緑色の釉が薄くかかる。

石製品　(115) は幅8.5cm、厚さ2.0cmの硯で、鳥居・山・波模様などが彫刻される。挿図7の (116) も硯で、長さ12.9cm、幅7.8cmを測る。裏面に落書きのような走る鳥や「太」の文字が線刻されている。一乗谷からはこのように落書きのようなものが線刻された遺物がいくつか出土している。朝倉館からは土師質皿の見込みに、花押らしき線刻が複数あるものが出土している。また硯には年号の彫り込まれているものもあり、第42次調査出土の硯は、裏に「天文廿二年」と線刻されている。



挿図7　硯裏面拓本

ＳＤ1373出土遺物（第15図）

この溝は、調査区南側の礎石建物ＳＢ1342と埋甕施設ＳＸ1386の間を、北側に接しながら走る溝である。

越前焼　(117) はⅣ群に属する擂鉢で、口縁は内傾し、擂目が密に引かれる。

中国製陶磁器　(118) はＥ群に属する饅頭心の染付碗で、口径11.4cm、器高6.0cmを測る。口縁には界線がめぐり、胴部は内外面ともに無文で、見込みには座した人物が描かれる。高台内には「長命富貴」の銘がある。

ＳＥ1349出土遺物（第15図）

この井戸は調査区内では一番南側に位置する。

瀬戸・美濃焼　(119) は口径10.0cm、器高2.3cmを測る鉄釉皿である。口縁は内湾し、碁笥底で、底部に輪トチン痕が残る。また見込みにもトチン痕が残る。焼成良好。

ＳＥ1350出土遺物（第15図）

調査区南側に位置する井戸で、深さ2.98mの井戸底からは、瀬戸美濃焼の鉄釉瓶や、上質の漆皿が出土した。

越前焼　(120) は口径19.7cm、器高7.2cmを測る鉢である。口縁は内湾する。胎土は赤褐色で焼成良好。

土師質土器　(121) はＢ類に分類される土師質皿である。口径7.8cm、器高1.9cmを測る。器壁は厚く、タール痕がある。

瀬戸・美濃焼　(122) は口径4.4cm、器高8.8cmを測る小型の鉄釉瓶である。

木製品　(123) は漆塗りの皿である。口径9.3cm、器高2.8cmを測る。内面は朱漆で、外面は黒漆が塗られる。内部の木の部分は腐っているが、表面の漆が厚いので形状を保っている。

ＳＥ1353出土遺物（第15図・第21～25図）

この井戸は、礎石建物ＳＢ1345の中に位置する井戸で、銅銭が井戸の底から409枚まとまって出土した。この他、越前焼の甕や擂鉢、瀬戸美濃焼の小壺なども出土した。

瀬戸・美濃焼　(124) は鉄釉小壺で、口径3.4cmを測る。ふっくらと体部が膨らみ、小さい口縁が摘み上げて作られる壺で、胎土は赤く焼きが甘い。

金属製品　出土した銅銭は、空気に触れていなかったため、表面の腐食がほとんどなく良好な状態を

保っている。種類の内訳は下記の表２のとおりである。図版第21～25図に示した拓本は、各銭種を字体ごとに分類し、1点づつ紹介している。枚数の内訳で最も多いのは、49枚の元豊通宝で、次いで43枚の皇宗通宝である。字体の種類が多かったのは、同じく皇宗通宝の15種類であった。

銭貨名	初鋳造年	枚数	図版番号	タイプ数	銭貨名	初鋳造年	枚数	図版番号	タイプ数
中　国					治平元宝	1064　宋	8	317～321	5
開元通宝	621　唐	13	228～234	7	治平通宝	〃　〃	1	322	1
周通元宝	955 後周	1	235	1	熙寧元宝	1068　〃	41	323～335	13
宋通元宝	960　宋	2	236・237	2	元豊通宝	1078　〃	49	336～347	12
太平通宝	976　〃	1	238	1	元祐通宝	1086　〃	30	348～360	13
淳化元宝	991　〃	5	239～242	4	紹聖元宝	1094　〃	17	361～373	13
至道元宝	995　〃	9	243～248	6	元符通宝	1098　〃	4	374～376	3
咸平元宝	998　〃	7	249～252	4	聖宋元宝	1101　〃	16	377～387	11
景徳元宝	1004　〃	14	253～257	5	大観通宝	1107　〃	3	388・389	2
祥符元宝	1008　〃	21	258～263	6	政和通宝	1111　〃	16	390・399	10
祥符通宝	1008　〃	18	264～266	3	正隆元宝	1167～78　金	2	400	1
天禧通宝	1017　〃	22	267～273	7	淳熙元宝	1174 南宋	1	401	1
天聖元宝	1023　〃	22	274～281	8	紹熙元宝	1189　〃	2	402・403	2
明道元宝	1032　〃	1	282	1	嘉泰元宝	1201　〃	2	404・405	2
景祐元宝	1034　〃	5	283～285	3	嘉定通宝	1208　〃	1	406	1
皇宋通宝	1039　〃	43	286～300	15	景定元宝	1260　〃	2	407・408	2
至和元宝	1054　〃	7	301～306	6	洪武通宝	1268　明	1	409	1
至和通宝	1054　〃	3	307・308	2	弘治通宝	1288　〃	1	410	1
嘉祐元宝	1056　〃	6	309～311	3	不明		4		
嘉祐通宝	〃　〃	8	312～316	5	合計		409		

表２　第35次調査出土銅銭一覧表

ＳＥ1354出土遺物（第15図）

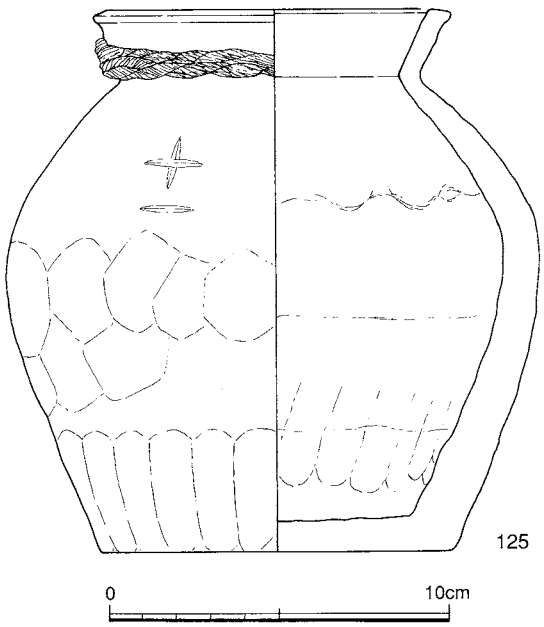
この井戸は、埋甕施設ＳＸ1388に隣接する井戸で、深さ3.3mの底からは、水汲みに使用したと思われる越前焼の壺や、木製の桶が複数出土した。

越前焼　挿図８の（125）は口径9.2cm、器高16.0cmを測る壺である。頚部に巻かれた縄が残った状態で出土した。水を組み上げるために使用した釣瓶と考えられる。体部外面は叩き締めて調整されており、肩部に「±」とヘラ描きがある。胎土は灰色で焼成良好。

瀬戸・美濃焼　（126）は口径12.0cm、器高8.0cmを測る完形の鉄釉碗。口縁下で軽くくびれ、胴部は直線的で、削りだしの内反り高台を有する。腰部までは鉄釉がかかり、その下はシブ鉄が施されている。

中国製陶磁器　（127）は口径11.2cm、器高6.4cmを測る青磁碗である。外面には線描蓮弁文が施される。（128）は碁笥底のＣ群に属する染付皿である。口径10.4cm、器高2.8cmを測る、外面の口縁部には波涛文帯、胴部には芭蕉葉文、見込みには捻花が描かれる。底部には漆が付着している。

木製品　（129）は高さ24.0cm、上辺



挿図８　越前焼壺

21.0cm、下辺17.0cmを測る釣瓶である。側面の板は端に刻みを入れて竹釘でとめている。松材を横に使用している。同様の釣瓶桶の木材が複数出土し、少なくとも4個体あったことがわかる。

ＳＥ1355出土遺物（第15図）

この井戸は調査区北側に位置し、バンドコ・石臼・石仏などの石製品が出土した。

石製品　（130）は笏谷石製のバンドコで楕円形のもの。窓は5つあり、底部のみ残る。全体に火を受けて赤く変色している。

ＳＦ1359出土遺物（第15図）

礎石建物ＳＢ1342の南側に隣接する石積施設である。

中国製陶磁器　（131）はＣ群の染付碗で、口縁は欠けるが広く開いた浅めの碗で、底部は高台内にへこむ。低く薄い高台は、畳付がヘラ削りされる。見込みには果樹が描かれ、体部には唐草文が描かれる。割れ口に漆が残り、補修して使用したことがわかる。

ＳＦ1362出土遺物（第15図）

この石積施設からは、越前焼の甕や壺・鉢の他、灰釉皿なども出土した。

越前焼　（132）は口径22.6cm、器高8.9cmを測る鉢で、口縁は内傾する。胎土は灰色で焼成良好。（133）は口縁部が内湾する鉢で、口径17.2cm、器高6.8cmを測る。胎土は灰黒色。

ＳＸ1388出土遺物（第16・17図）

この埋甕施設からは甕が28個体出土した。内訳は口縁部が10cm程度立ち上がる中甕が2個体と、残りは大甕であった。

越前焼　（134）～（138）は、いづれも口縁部が完全に肥大したⅣ群に属する大甕である。（134）は口径72.5cm、器高83.5cm、最大径83.0cm、底径30.4cmを測る。色調は暗赤茶色で焼成良好。肩部下まで降灰がある。（135）は口径78.5cm、器高86.4cm、最大径87.0cm、底径25.3cmを測る。色調は淡茶色で焼きムラがある。肩部上部に弱い線刻があり、ナデで消されている。また格子目のスタンプもナデで少し消えている。（136）は口径94.5cm、器高88.9cm、最大径100.0cmを測る。色調は淡灰紫色を呈し、やや焼成不良。内部には右回りで押えた指頭圧痕が残り、胴部中半以下はナデで仕上げている。肩部内面は指で押さえた後、下から上に斜めに粘土を掻き上げている。肩部外面は「本」と格子目のスタンプを押し、またヘラ記号も有する。（137）は口径76.5cm、器高91.5cm、最大径80.0cm、底径26.0cmを測る。胴部まで降灰により灰緑色を呈するが、全体の色調は明灰色で、焼成はやや不良。内面は工人が右回りで押えた指頭圧痕が残る。肩部には「本」と格子目のスタンプを押す。（138）は口径85.4cm、器高92.0cm、底径29.0cmを測る。色調は淡灰色で焼成良好。肩部には「本」と格子目のスタンプを押す。（139）は中甕で、口縁は肥大せず、外反気味に立ち上がる。（140）は小さな口縁が真っすぐ立ち上がる壺で、肩部は大きく張り、小さな底部を持つタイプのもの。口縁は互い違いに削り取られている。（141）～（144）はⅣ群の擂鉢で、擂目が密に入る。（141）は口径37.2cm、器高17.2cmを測る。（142）の胎土は赤褐色で焼成良好。（143）は胎土が黄白色で焼成不良。

土師質土器　（145）はＣ類の土師質皿である。内面外面全体にタール痕があり、よく使用されている。口径9.4cm、器高2.2cmを測る。

瀬戸・美濃焼　（146）は口径11.4cm、器高2.5cmを測る灰釉皿である。しっかりした高台を持つ端反皿で、口縁部を指で摘んで輪花皿に成形してある。見込みに印花文が施される。高台内にトチン痕が残る。

中国製陶磁器　（147）は口径13.8cm、器高6.2cmを測る青磁碗である。口縁のやや開いた浅めの碗で、

外面には薄く間隔の広い線描き蓮弁文が施される。高台畳付は釉が削り取られている。胎土は灰色で、青灰色の釉がかかる。(148) は青磁盤で、体部内面には波模様の線刻が施されている。胎土は白く完全に磁器化しており、青緑色の釉が厚くかかる。(149) はE群に属する染付碗である。見込みには牡丹唐草が描かれ、高台内に「長命富貴」の銘を有する。

ＳＸ1386出土遺物（第17図）

この埋甕施設からは甕が16個体出土した。また甕内からは白磁皿・染付皿・染付坏など、多数の中国製陶磁器が出土した。

越前焼　(150) は口径69.2cm、器高88.6cmを測る。肩部には「本」と格子目のスタンプを押す。(151) は他の大甕と比較して胴部から肩部にかけて大きく膨らむ。肩部より上部を欠くが、最大径94.0cm、底径30.0cmを測る。胎土は暗灰色でやや焼成不良。(152) は口径26.6cm、器高17.2cmを測る鉢である。広い底部から緩やかに開きながら立ち上がり口縁部で内湾する深鉢である。(153) も同じく口縁部が内湾する鉢である。(154) ・ (155) はⅣ群の擂鉢である。(155) は胎土が赤褐色でやや焼成が甘い。

中国製陶磁器　(156) は口径5.8cm、器高1.2cmを測る青白磁の小皿である。腰部にわずかに稜があり、口縁を花形に削っている小型の稜花皿で、完形の状態で8号甕から3点出土した。青白色の釉が薄くかけられる。高台内は露胎。(157) は端反の白磁皿で、口径13.0cm、器高3.2cmを測る。高台畳付は断面三角に大きく釉が削り取られる。(158) は同じく端反の白磁皿だが、体部をヘラ削りしてある。口径12.5cm、器高3.2cmを測り、高台はやはり三角に尖らせて削られている。(157) ・ (158) は胎土が白く、やや青みがかった釉がかかる。(159) は口縁が内湾する白磁皿で、口径12.7cm、器高3.1cmを測る。胎土は灰色で釉も灰色がかっており、細かく貫入が入る。(160) の白磁皿も胎土は灰褐色で細かい貫入が全体に入る。碁笥底で、体部から口縁部にかけて直線的に、わずかに外反して広がる。畳付は尖らせて丁寧に釉が削り取られている。(161) ～ (165) は白磁の菊皿で12個体まとまって出土した。胎土は白く焼成良好で、青みがかった釉がかかる。(161) は口径12.0cm、器高2.8cmを測る。(162) は口径12.4cm、器高3.4cmを測る。(163) は口径12.5cm、器高3.2cmを測り、高台内に「宣徳年製」の銘を有する。(164) は口径13.6cm、器高3.6cmを測り、高台内に「長命富貴」の銘を有する。(165) は完形で口径12.0cm、器高3.6cmを測り、高台内に「天明年造」の銘を有する。(159) ～ (165) の白磁皿は、15号甕からまとまって出土した。(166) ・ (167) は口縁が内湾するC群の染付皿である。外面には口縁部に波涛文帯、腰部に芭蕉葉文が描かれる。(167) は口径10.2cm、器高3.0cmを測り、碁笥底で、見込みには捻花が描かれる。(168) は端反の染付皿で、口径9.0cm、器高2.1cmを測る小型の皿である。外面には牡丹唐草が描かれる。(169) ・ (170) はC群の染付皿で、見込みの界線内に草花文を描き、中央に鉄分を含んだ土の魚文を白磁釉をかけた上に置いている。外面は無文。15号甕から7点出土した。(169) は口径11.8cm、器高3.0cmを測り、完形である。(171) ・ (172) は染付坏で、外面には唐草文が描かれる。低く小さな高台を持ち、畳付は釉が削り取られ、高台内は露胎となっている。5号甕内より出土した。

タイ製陶器　(173) は口径18.6cmを測る大型の壺である。体部でも器壁は約1.3cmと厚く、口縁部は丸く肥大している。胎土は赤灰色で大粒の黒砂粒が混じる。内面は露胎で外面には薄く鉄釉がかかる。4号、7号甕内などから出土した。

下城戸外濠東トレンチ出土遺物（第19図）

3本のトレンチのうち、東側のトレンチより出土した遺物を扱う。点数は495点とそれほど多くはなく、そのうちの400点以上が土師質皿であるが、越前焼・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器はもちろん、越前

焼の薬研や漆椀・下駄・鎧部品や鉄鍋などバラエティに富む。

越前焼　(174) は薬研で、胎土は黄褐色で焼成不良。焼きが甘いため摩耗が激しい。

土師質土器　(175) はB類の皿で、口径6.4cm、器高1.9cmを測る。(176) ～ (179) はC類の皿で、(179) は口径14.6cm、器高2.4cmを測る。(180) は口径19.0cm、器高2.8cmを測る大きめの皿で、広く平らな底部を持ち、腰部から底部にかけてヘラのような道具でナデ調整される。(181) は口径33.6cmを測る大型の皿で、器壁もぶ厚い。外面は口縁部をナデ調整し、腰部から底部にかけては細いヘラで丁寧に磨いている。胎土は肌理が細かく焼成良好。

瀬戸・美濃焼　(182) は鉄釉の小壺で、口縁を欠くが、芋子の形をしている。外面は腰部まで釉がかかり、底部にかけてはシブ鉄が塗られる。胎土は灰色で焼成不良のためボソボソしている。

中国製陶磁器　(183) は口径9.4cm、器高2.8cmを測る青磁皿である。底部から直線的に開き、口縁部でさらに外反する。外面を口縁から高台にむかって鎬状に削り、端反した口縁部も波型に削る。見込みには印花文を有する。青白色の釉が高台内も含め全体に薄くかかり、畳付には砂が付く。同様の皿は第24次発掘調査でも井戸の中から複数出土している。(184) は口径11.6cm、器高3.3cmを測る、端反の白磁皿である。高台内は一部露胎で、畳付の釉は削り取られておらず繊維や砂が付着している。胎土は黄褐色で完全には磁器化しておらず、口縁部は胎土が透けて赤みを帯びている。(185) は染付碗で、胎土は黄白色で磁器化していない。高台は露胎で見込みに文様が描かれる。

金属製品　(186) は鎧の部品である。中央に3つ孔があり、下部に綴るための孔が開く。形状から大鎧の右胸に付ける栴壇板と考えられる。鉄製で厚さは部分によって多少差はあるもののおよそ1㎜と薄い。(187) は鉄鍋で、腐食が激しく底部のみ出土したが、第46次発掘調査で出土した完形の鍋と同様で、三足を有し、底部中央に湯口が突出している。底部の直径は約27cmで、器壁は底部中央ににむかって厚くなっていく。

木製品　(188) は漆塗椀で、口径14.6cm、器高5.0cmを測る。全体に黒漆が薄く塗られ、外面に秋草文や鳥が朱漆で描かれている。(189) は連歯下駄である。長さ21.8cm、幅10.3cmを測り、材質は杉と推定される。歯を上部から竹釘を5本打って留めている。表面には使用痕が残り、そこから足の大きさは約19cmと推定される。

下城戸外濠中央トレンチ出土遺物（第19・20図）

中央トレンチからは、まとめて投棄されたと見られる土師質皿が大量に出土した。3941点の出土品のうち、3775点が土師質皿である。これは第35次調査の遺物総点数から見ても、約14％を占めている。特徴として完形品が多数含まれ、A～D類の各種がそろっている。また、羽釜も複数出土し、土錘・土鈴など土師質土器製品が多種出土した。

越前焼　(190) は口径7.4cm、器高12.2cmを測る壺である。口縁部には指で押さえて片口が作られ、型部にはヘラ記号を有する。内面は粘土紐のつなぎ目や指頭圧痕が残り、外面はヘラでナデ調整される。胎土は灰黒色で焼成良好。(191) は口縁が内湾する鉢で口径19.4cm、器高7.2cmを測る。見込みの一部に擂目を入れる。胎土は黄褐色で焼成良好。(192) ・ (193) はⅣ群の擂鉢である。

土師質土器　(194) はB類の皿で、口径6.0cm、器高1.6cmを測る。中央トレンチからはB類の皿も完形のものが複数出土したが使用痕は見られず、手のひらの上で成形しているため手の皺もくっきりと残る。(195) はA類の皿で口径7.0cm、器高1.7cmを測る。中央ヘソの部分は底部に押し上げた指と爪痕が残る。見込みのヘソ部分を残してナデ調整されている。(196) ～ (201) はC類の皿である。(196) は口径8.1cm、器高2.0cmを測り、口縁部にタール痕を有する。(197) は口径8.4cm、器高1.8cmを測る。

器壁は薄く作られ、胎土は白く細かい。(198) は口径9.0cm、器高2.1cmを測る。(199) は口径9.0cm、器高2.2cmを測り、口縁部をしっかり摘み上げて成形する。(201) は口径10.2cm、器高2.4cmを測る。器壁が厚くしっかりした作りで外面を丁寧に指で押して形を整えている。口縁部は摘み上げしていない。(202) は口縁部の四隅を摘んで正方形に成形した皿で、一辺4.2cm、器高2.0cmを測る。(203) ～ (211) はD類の皿である。(203) は口径10.6cm、器高2.4cmを測り、口縁部内外面にタール痕を有する。(204) は口径12.0cm、器高2.5cmを測り、器壁は厚く作られる。(205) は口径12.6cm、器高2.5cmを測り、器壁は均等に厚く作られ、見込みも横方向に指でナデ調整されている。(206) は口径13.6cm、器高2.2cmを測り、内外面に指頭圧痕が残り、器壁を薄く整えている。見込みは横方向にナデ調整される。(207) は口径14.4cm、器高2.2cmを測る。底部からの立ち上げが弱く、器壁は厚く、胎土は赤みが強い。(208) は口径14.6cm、器高2.8cmを測る。(209) は口径16.3cm、器高2.8cmを測る。器壁は厚く、胎土は白く細かい。(210) ・ (211) は口径20cmを超える大型の皿で、胎土は白く細かい。(210) は口径20.4cm、器高2.7cmを測る。体部の内外面に指頭圧痕が残り、丁寧に成形されている。(211) は口径20.4cm、器高3.2cmを測る。(212) ～ (215) は羽釜で、口径14cmの大型のものから8cmの小型のものまで出土した。(212) は口径13.8cm、器高9.4cmを測り、手づくねで成形したあと、羽の部分を指で押し付けて、羽の縁から口縁にかけてはナデ調整している。羽より下部は内外面ともに指頭圧痕が残り、使用したためススが付着する。(213) は口径9.8cm、器高8.5cmを測り、使用痕はない。(214) は口径9.4cm、器高8.8cmを測り、下部を指で丁寧に押して丸く張った形に成形している。羽部と口縁部はナデ調整される。使用痕はない。(215) は口径8.0cm、器高7.5cmを測り、小型で器壁も薄めに作られている。使用痕はない。(216) は土鈴で、通常遺跡から出土するものと同様の作りで、袋状に成形したあと、捻って鈕を作っている。直径2.7cmで、胎土は白い。(217) ・ (218) は土錘で、重さは共に40gを測る。粘土塊を握り締め表面の形を整えて、穴を開けている。長さ5.4cm、直径2.8cmを測る。(219) は用途不明の円盤状の土師質製品で、直径2.2cm、厚さ0.4cmを測る。

瀬戸・美濃焼　(220) は鉄釉碗で、口径12.3ｃｍを測る。胎土は黄白色で、腰部まで飴色の釉がかかる。

瓦質陶器　(221) は口径11.5cm、器高4.8cmを測る香炉である。3足をヘラで削って作りだし、底部から体部はほぼ垂直に立ち上がる筒型をしている。体部外面は円形の列点文のスタンプがめぐる。

中国製陶磁器　(222) は口径11.2cm、器高3.2cmを測る白磁皿である。端反で、高台の釉はヘラ削りされる。胎土は白く、乳白色の釉がかかり、部分的に釉が縮みをおこしている。

下城戸外濠西トレンチ出土遺物（第11図）

西トレンチからは96点と、出土点数は少なかった。越前焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器などが少量づつ出土した。

土師質土器　(223) は口径6.2cm、器高1.9cmを測るＢ類の皿である。(224) は口径10.5cm、器高2.0cmを測る。底部がへこむ。内側にタール痕を有する。(225) は口径11.0cm、器高2.5cmを測る。

瀬戸・美濃焼　(226) は鉄釉の香炉で、口径11.0cmを測る。口縁部は真っすぐ短く立ち上がり、胴部はどっしりと膨らむ。

石製品　(227) は笏谷石製のバンドコでＤ型のもの。幅23.6cm、高さ17.2cmを測る。正面に5つの窓を持ち、底部に残るノミ痕からノミ幅は約2.5cmとわかる。

4．小結

遺物

第35次調査で出土した遺物の様相は、前項で述べたとおりである。更に追加するならば、下城戸外濠に向かって設定した3本のトレンチより、土師質土器がまとまって出土し、それは遺構の項でも触れたように、中央のトレンチで顕著なものがあった。恐らく、外濠の北側に展開していたであろう、町家もしくは武家屋敷などの住居から一括廃棄されたものと考えられ、下城戸遺構、あるいは下城戸南側で検出された町屋群とは一旦切り離して捉えるべきものではあるが、補足の意味で取り上げることとする。

東トレンチは、出土数495点で、うち413点が土師質土器であった。羽釜破片3点以外は土師質土器皿である。

中央トレンチは3941点のうち、3812点が土師質土器で、完型の羽釜や耳皿、土鈴、土鐘等を含み、3775点が皿であった。砂質土層から1949点、粘砂質土層から1826点と一度に大量に投棄されたと思われる。

西トレンチは96点と出土点数が少なく、56点が土師質土器であった。

これらを合計すると、下城戸外濠トレンチ出土の土師質土器は4281点となり、数字自体は第35次調査遺物総点数の16%にあたる。皿類が完型、または完型に近いものが多く、各種そろっていたことから、土師質皿の使用度合いを以下の表にまとめた。

A類は、底部を指で押し上げてくぼませた「へそ皿」で、出土点数自体は少ない。灯芯痕はなかった。B類は灯芯痕のあるものが、ないものの3倍強あった。C_2類は点数が多く、99点と50%以上を占める。D_1類は口径によって灯芯痕の有無の割合が異なる。3.5寸のものはほぼ1：1、4寸ものは1：2であった。口径4.5寸以上のD_2類には灯芯痕のあるものがない。以上からC_2類は灯明皿としての使用が主で、D_1類、D_2類と口径が大きくなるに従い、灯明皿としての使用は減り、D_2類は盛皿用として使用されたと思われる。

類　型	口　径	灯芯痕有	%	灯芯痕無	%	計	%
A類	2寸			2	10	2	1.0
B類	2.3寸	18	9.6	5	2.6	23	12.3
C_1類	2寸	2	1.0			2	1.0
C_2類	3寸	65	34.7	34	18.1	99	52.9
D_1類	3.5寸	16	8.5	18	9.6	34	18.1
	4寸	7	3.7	13	6.9	20	10.7
D_2類	4.5寸以上			7	3.7	7	3.7
計		108	57.8	79	42.2	187	100

表3　第35次調査区出土土師質皿の法量比

ここで越前焼大甕埋設遺構SX1386、SX1388について、若干触れてみたい。

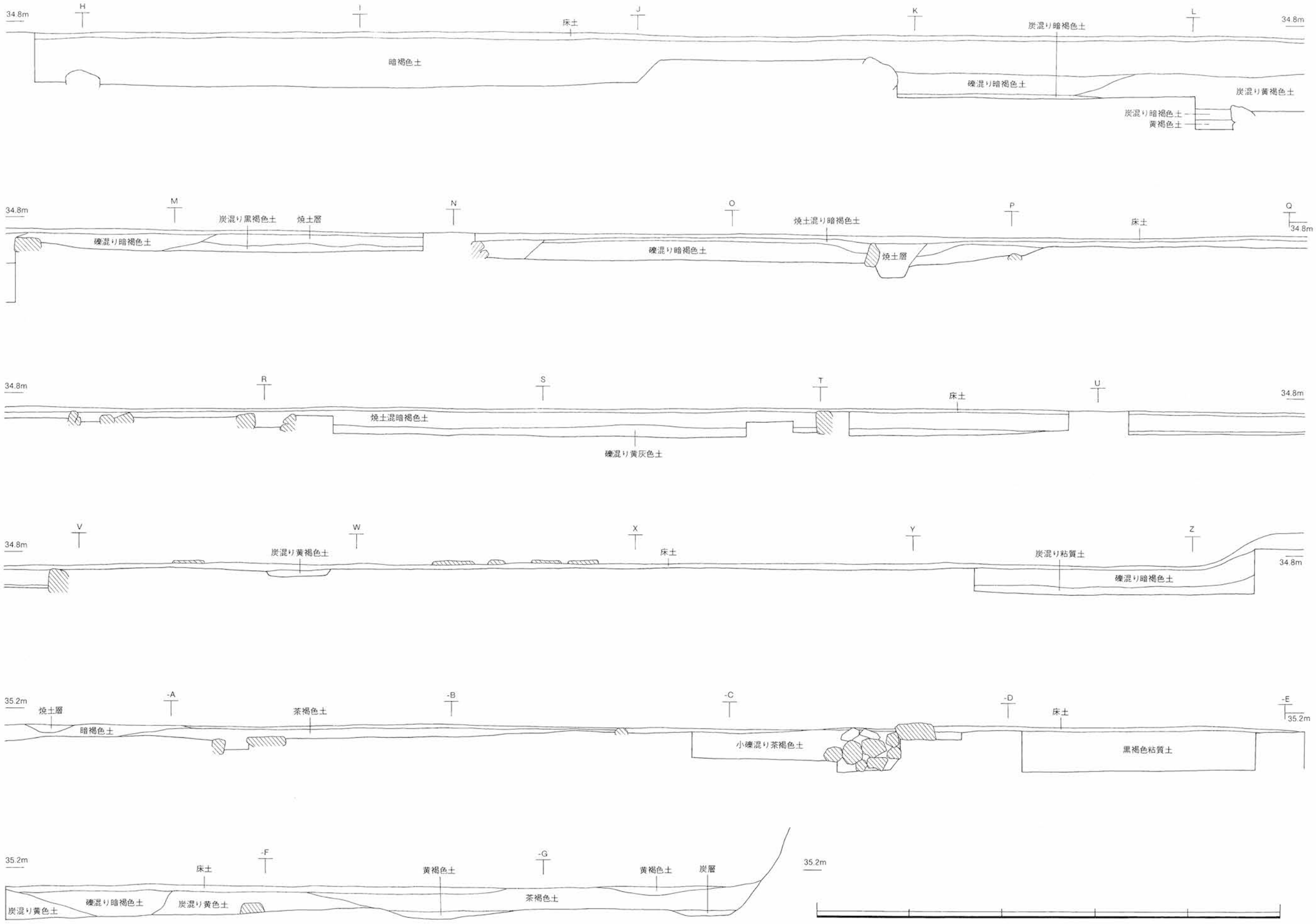
町家の２区間で大甕を16あるいは26個体以上埋設した遺構が検出されている。以前の調査区では第15次、第18次、第29次、第30次調査区で、また以後の調査区でも第36次、第42次、第44次等で既に検出され、大甕を複数個並べている遺構を紺掻（こうかき）職人の工房跡としている。通常、こうした大甕埋設遺構は、独立して埋設されている場合もあるが、多くは並んで検出される場合が多く、一つの特徴となっている。第29次、第30次の場合や第36次、第42次の場合がそれに当てはまる。これらは紺掻職人が「集住」する傾向を示唆しているものと判断される。

また、埋設された大甕はいずれもが形式的にみて１形式に集中することはなく、大概は複数の形式にまたがり、時期差が認められる。これは甕１個の耐用年数がかわらけ、擂鉢等の日常生活における使用頻度の高い、従って買い換えのケースが多いものと比較して、長いスパンで使われたとしても、ヒビ割れや破損等により取り替えが間々行われていたことが考えられる。本調査区大甕埋設遺構SX1388では26以上の大甕の固体数が確認されるが、甕の掘り込み穴は南北にみると６個が２列、東西には５個が４列穿たれ、あとは端数分となる。これは当初30個分が埋設されていた可能性が考えられる。現状では攪乱されたものか、規則的な配列とはならない。これに対してSX1386では南北に５個ずつ規則的に３列分穿たれている。双方が場所的に近いこともあり、ここはSX1386と同様にSX1388も東西方向に５個ずつ６列分が配列されていた（あるいは当初に設定された）と考えたい。

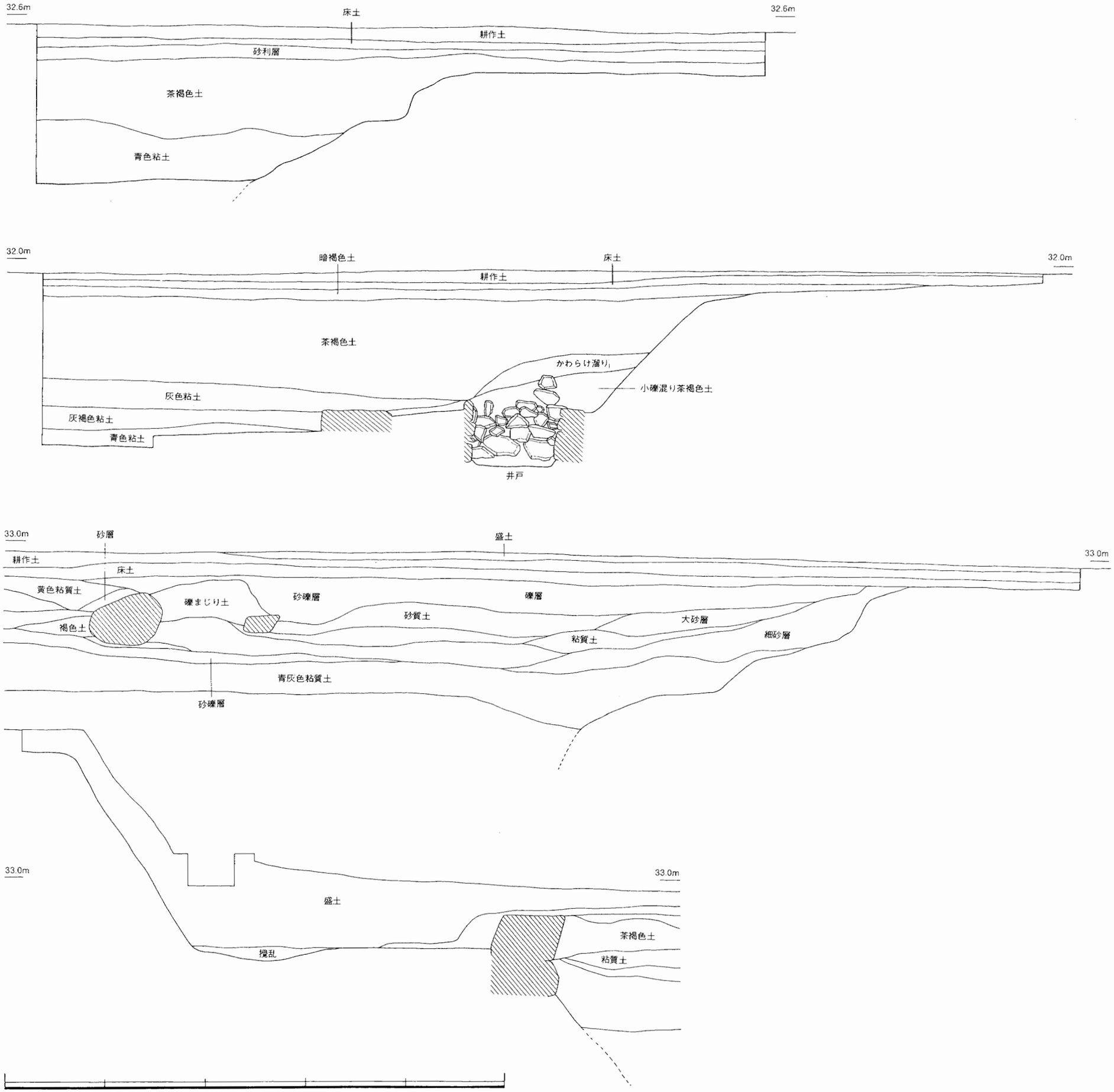
ちなみに『朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅵ』（1997年刊行）では第Ⅱ章第４節小結で、これらの大甕埋設遺構に関する考察がなされ、甕を肩部まで深く掘りこんで並べるパターンと、浅く埋めるパターンに分類し、バラツキはあるが、４～５個体で並べる例が多いことを指摘している。

また、甕を埋める際の埋め土に焼土を用いる例が多いことも指摘されているが、本調査区でもこの焼土を用いた例に分類でき、熱効率上保温性に有効な焼土利用が一般的であった可能性が高いと考えられる。

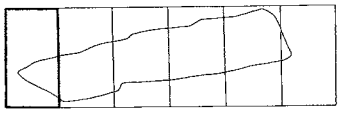
第1図　第35次調査30ライン西面土層図

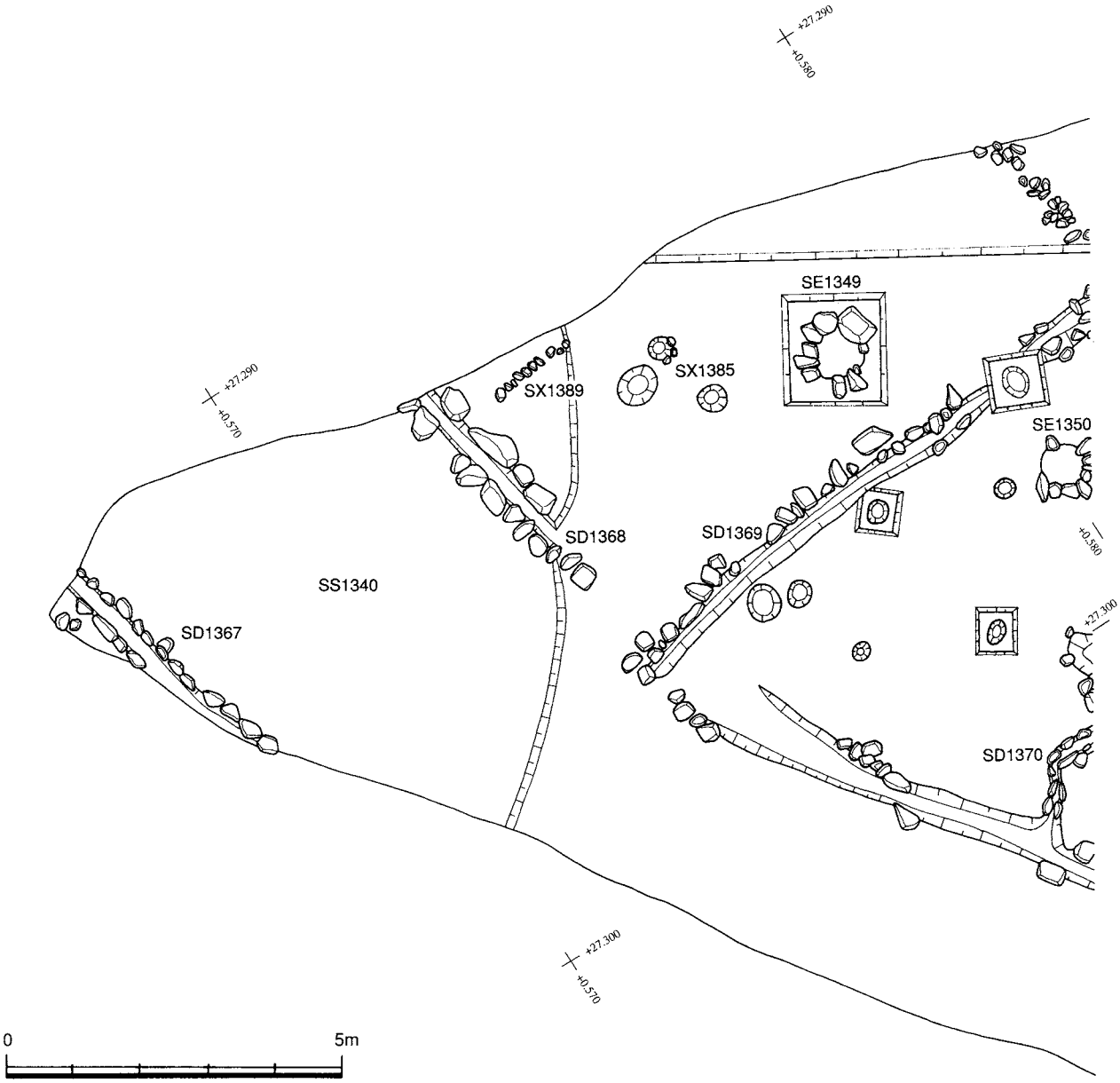


第2図　第35次調査トレンチ西面土層図

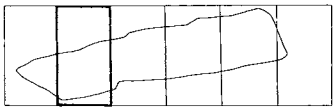


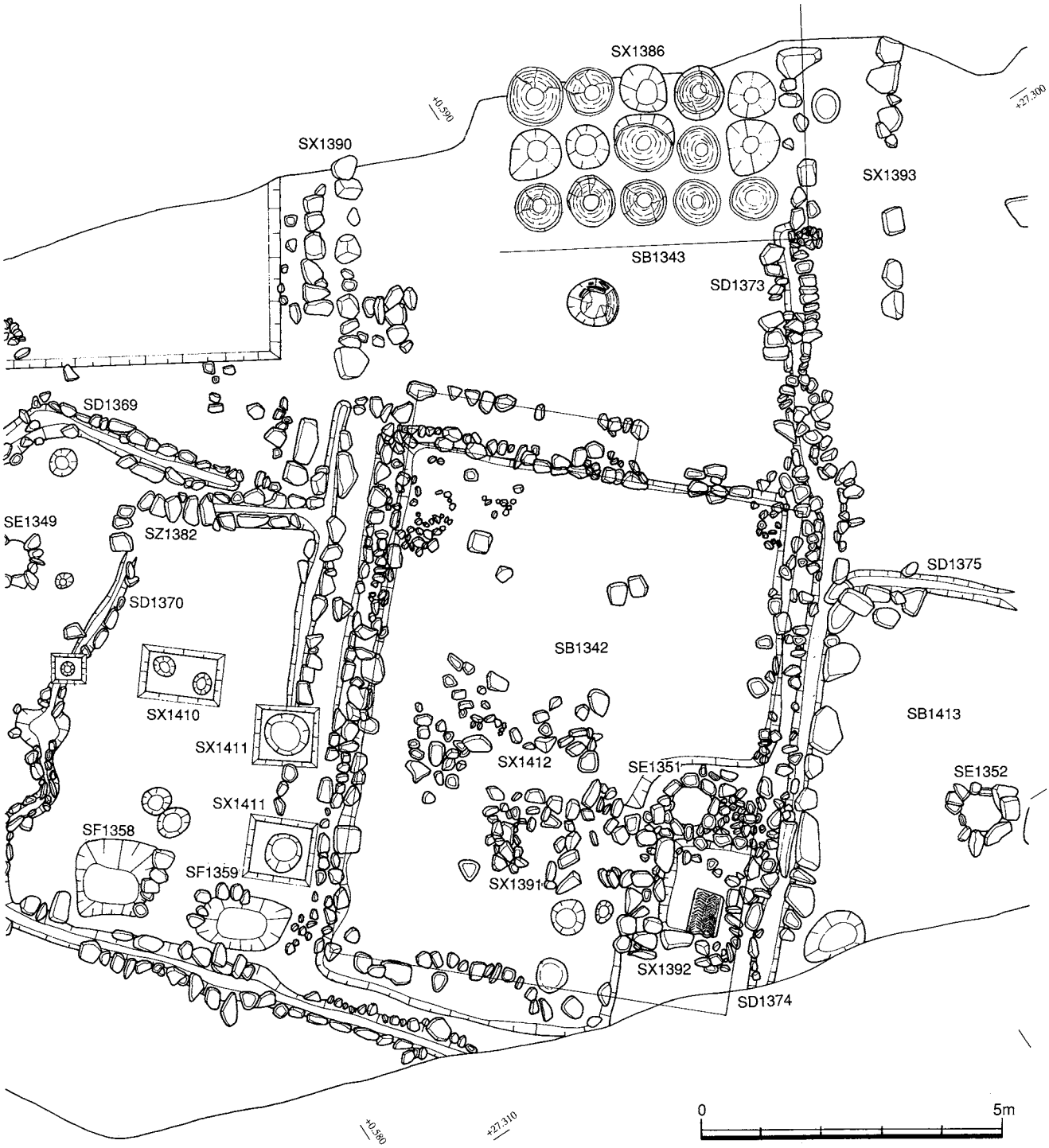
第3図　第35次調査遺構詳細図（1）



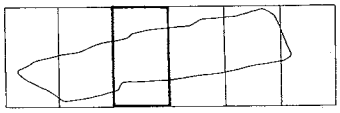


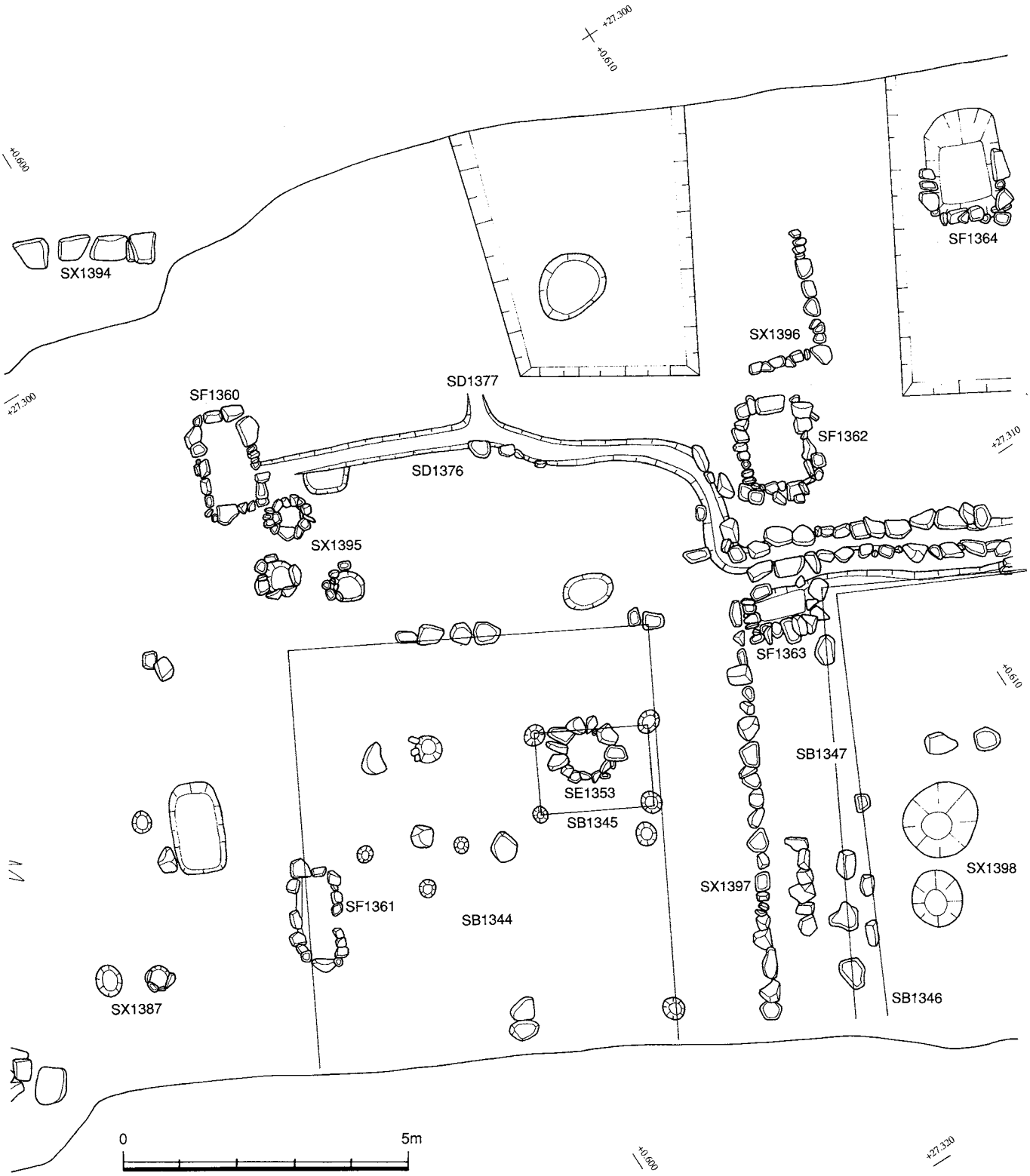
第4図　第35次調査遺構詳細図（2）



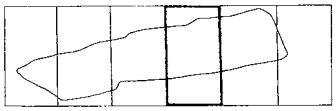


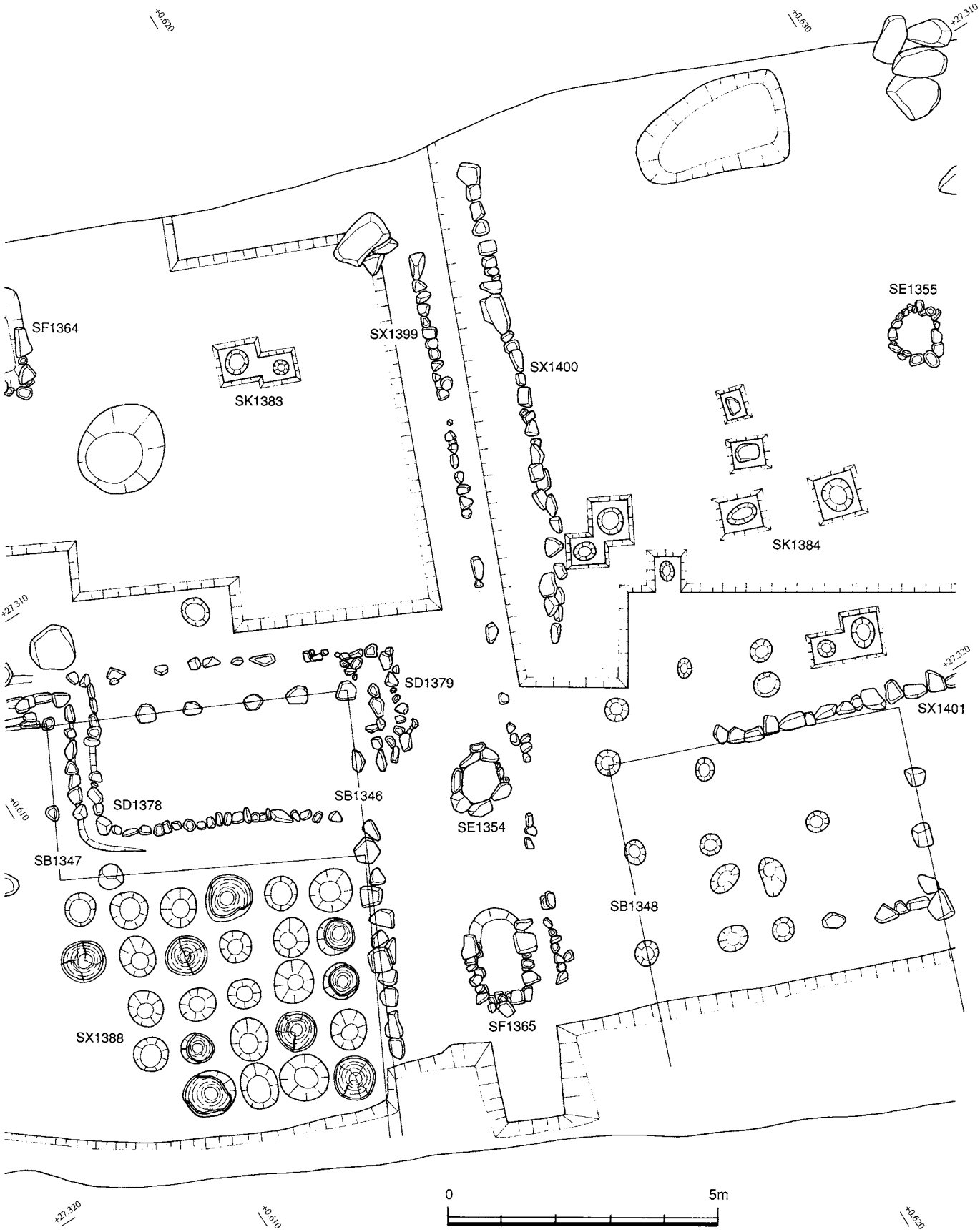
第5図　第35次調査遺構詳細図（3）



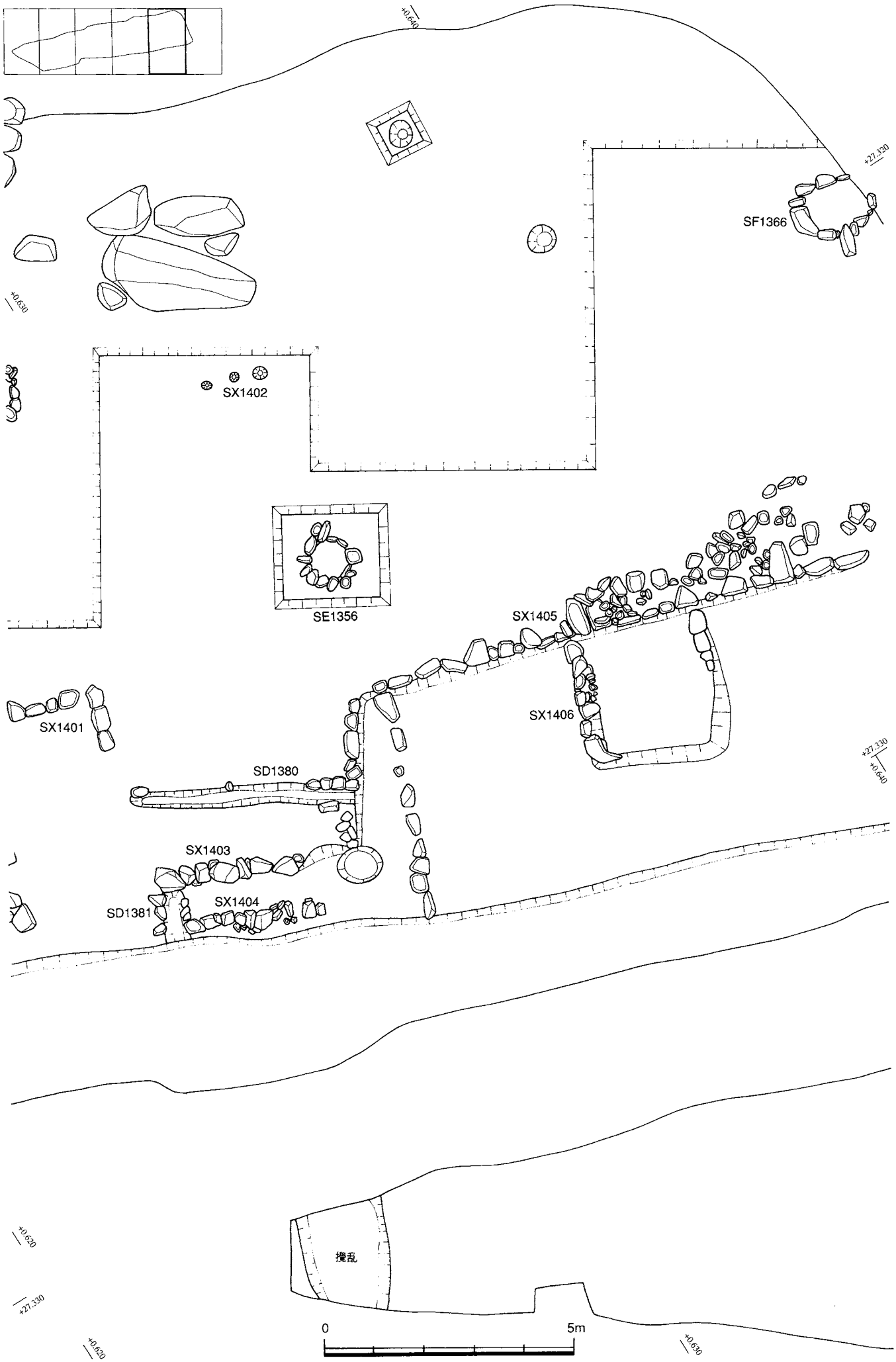


第6図　第35次調査遺構詳細図（4）

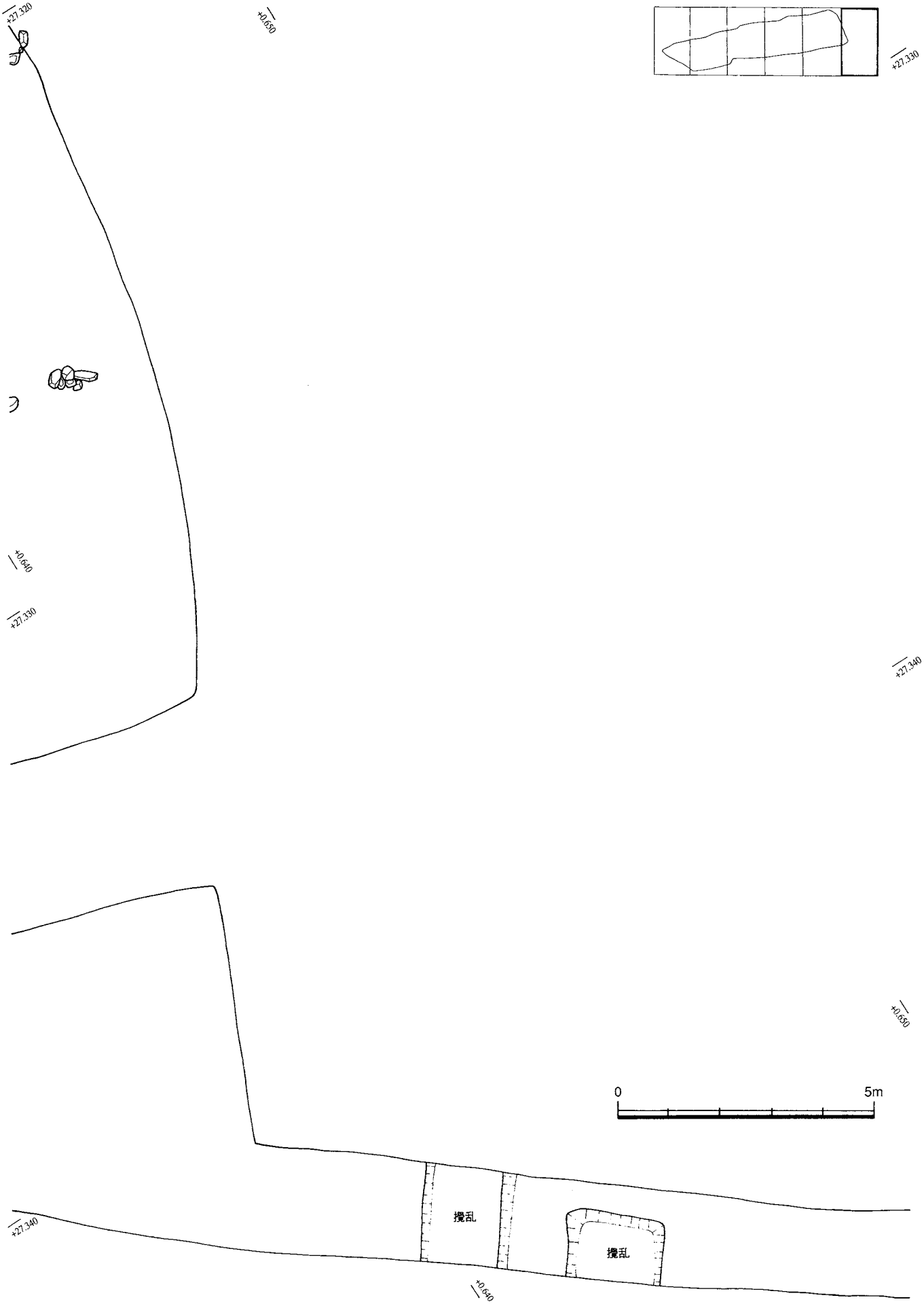




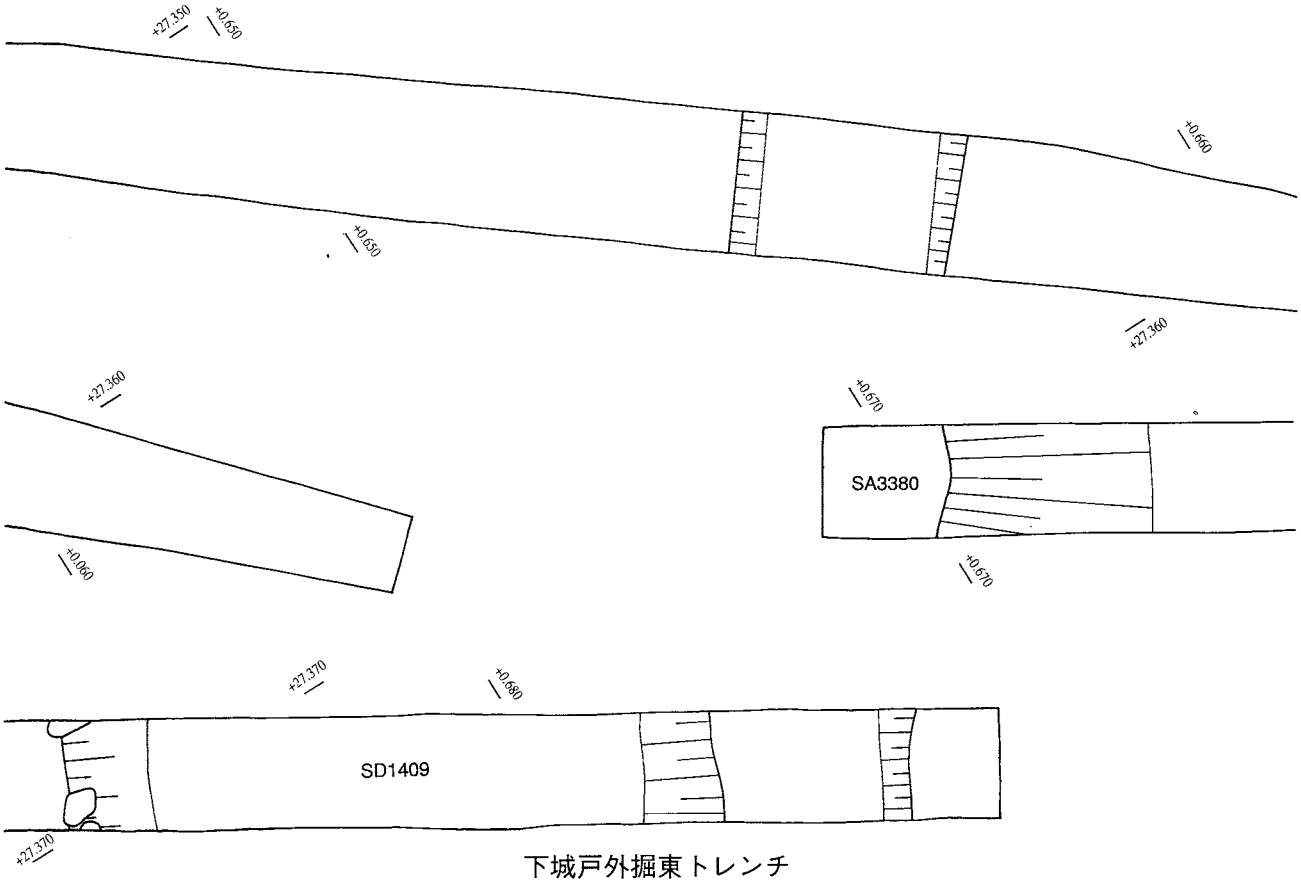
第7図　第35次調査遺構詳細図（5）



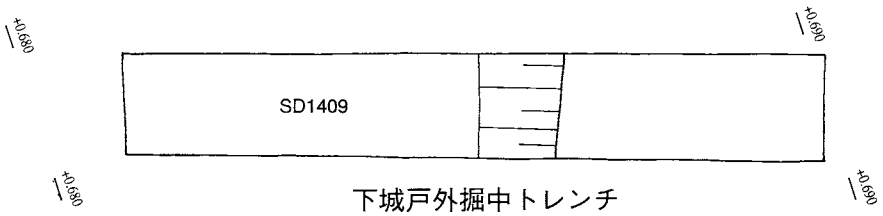
第8図　第35次調査遺構詳細図（6）



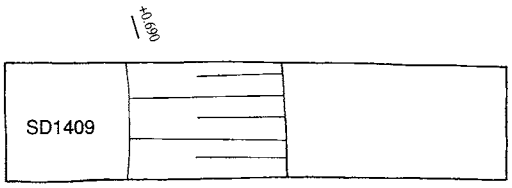
第9図　第35次調査遺構詳細図（7）



下城戸外掘東トレンチ



下城戸外掘中トレンチ



下城戸外掘西トレンチ

第35次調査
調査区全景

（南から）

（北から）

第35次調査
主要遺構

ＳＳ１３４０
（北から）

ＳＸ１３８９
ＳＥ１３４９
ＳＸ１３８５
ＳＤ１３６９
（東から）

ＳＤ１３６９
ＳＤ１３７１
ＳＺ１３８２
（南から）

第35次調査
主要遺構

ＳＢ１３４２
（東から）

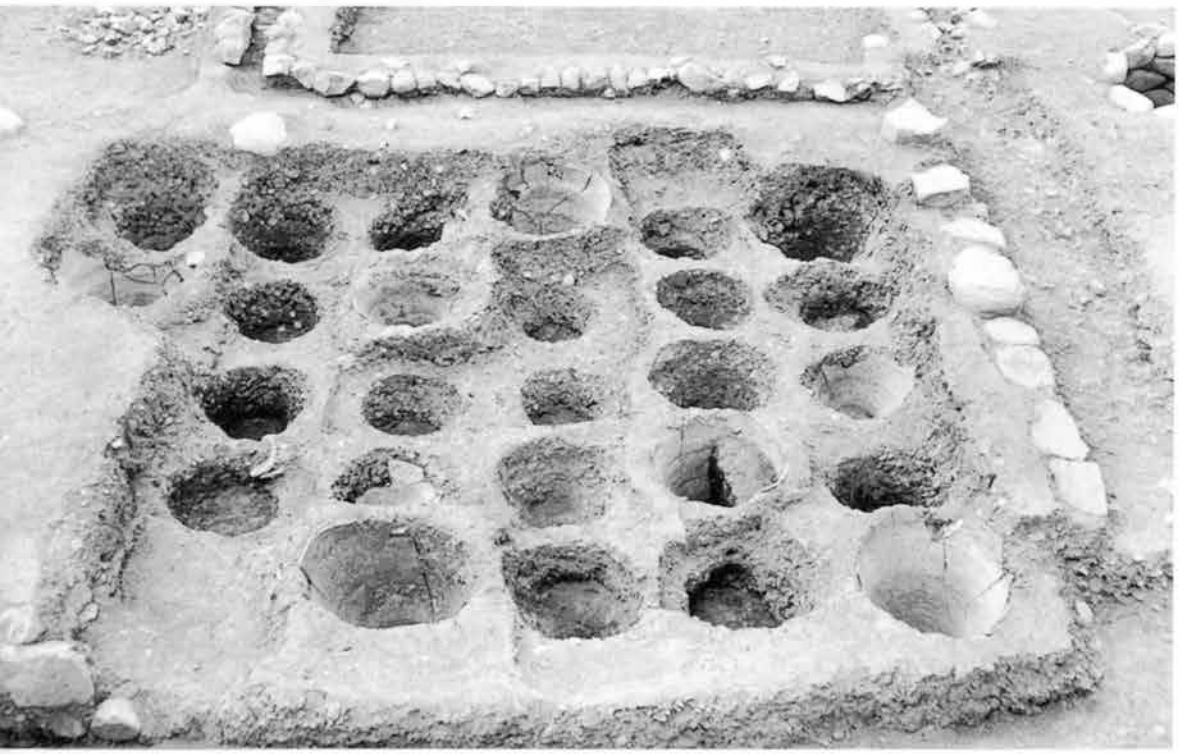
ＳＸ１３８６
（東から）

ＳＢ１３４４
（西から）

第35次調査
主要遺構

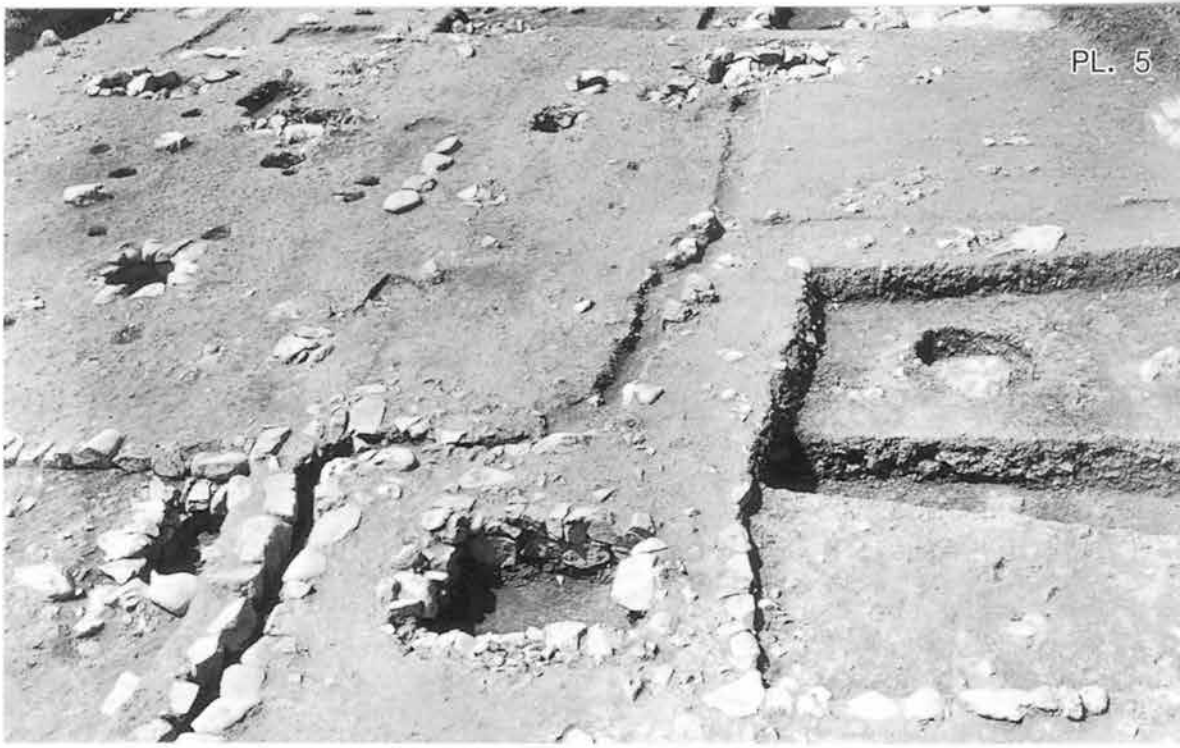
ＳＢ１３４８
ＳＸ１４０１
（北から）

ＳＢ１３４６
ＳＢ１３４７
ＳＸ１３８８
（北から）



ＳＸ１３８８
（東から）

第35次調査
主要遺構



SD1378
SF1362
SF1363
（北から）

SX1399
SX1400
SK1384
（南から）

SX1405
SX1406
（北から）

第35次調査
石積施設

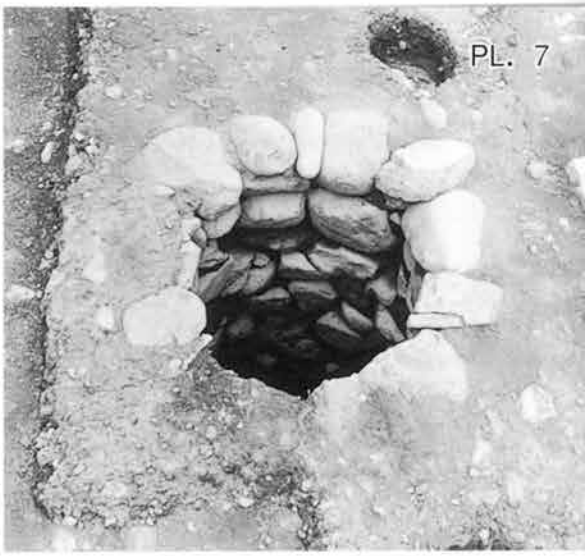
左・ＳＦ１３５８
右・ＳＦ１３５９
（東から）

ＳＦ１３６０
（北から）

左・ＳＦ１３６２
（北から）
右・ＳＦ１３６３
（北から）

左・ＳＦ１３６４
（北から）
右・ＳＦ１３６６
（東から）

35次調査井戸



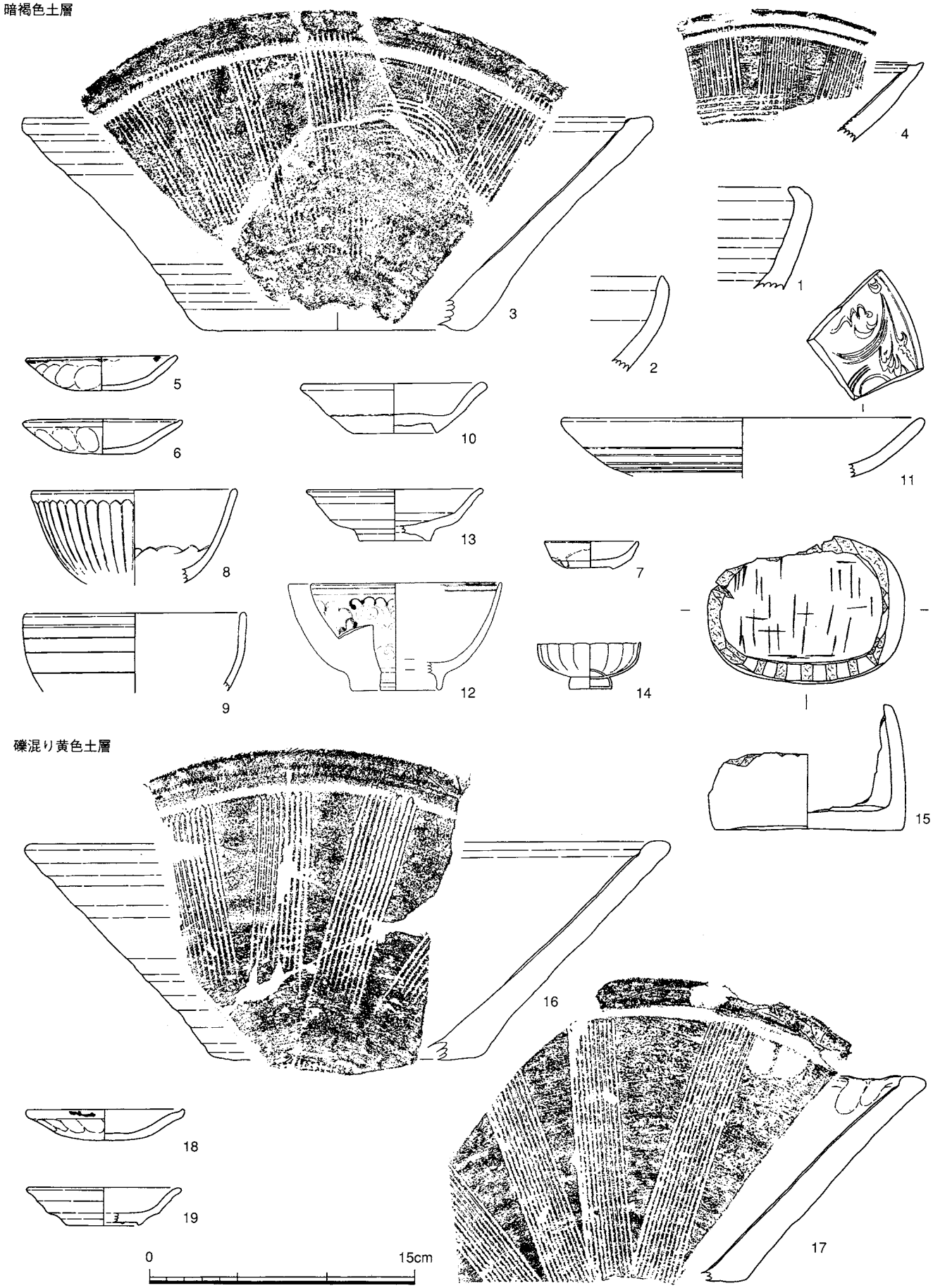
・ＳＥ１３４９
（東から）
・ＳＥ１３５０
（南から）

・ＳＥ１３５１
（東から）
・ＳＥ１３５２
（南から）

・ＳＥ１３５３
（西から）
・ＳＥ１３５４
（東から）

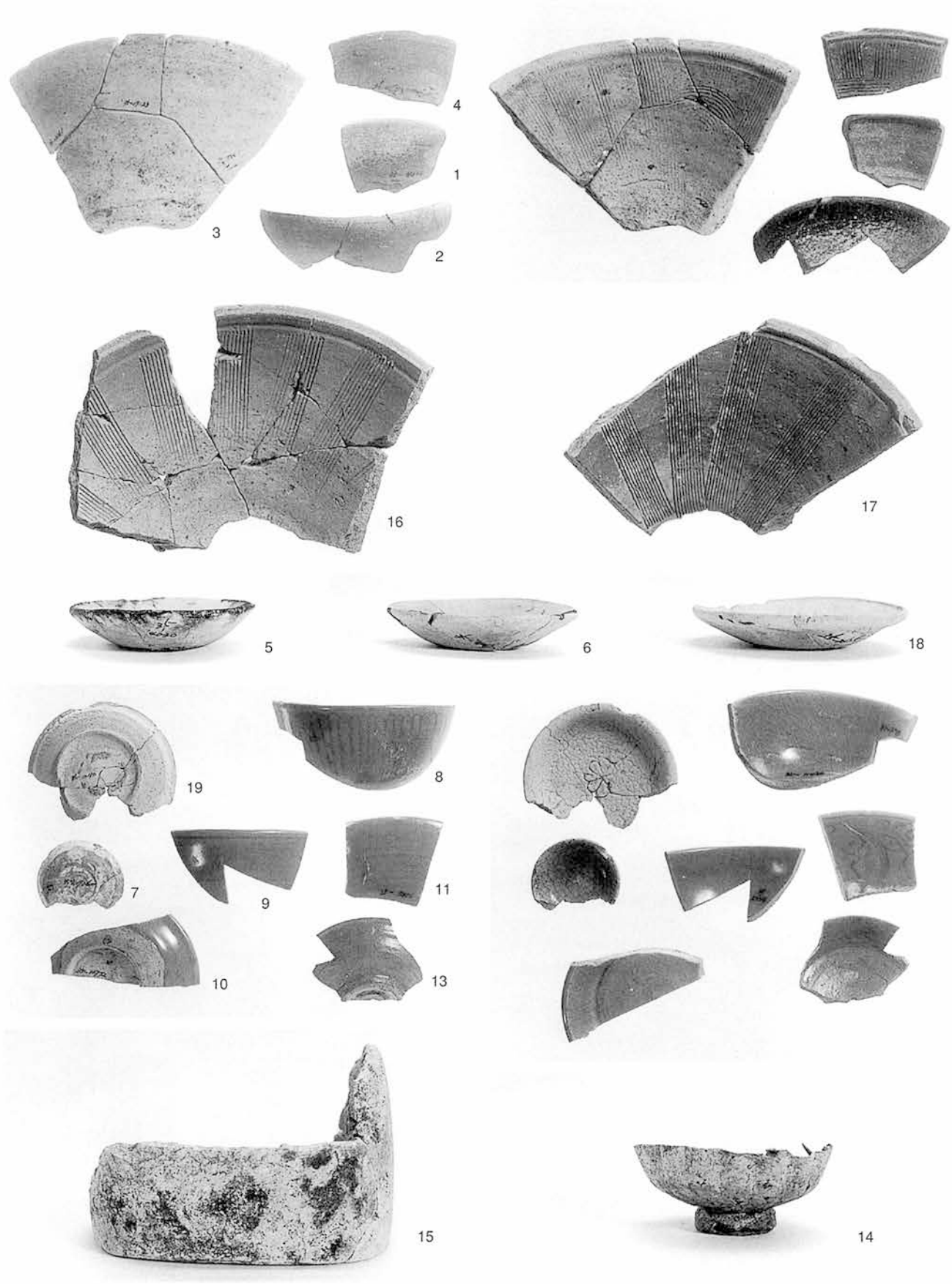
・ＳＥ１３５５
（南から）
・ＳＥ１３５６
（北から）

第10図　第35次調査出土遺物（1）



越前焼鉢1・2　擂鉢3・4・16・17　土師質Ⅲ5・6・18　灰釉Ⅲ7・19　青磁碗8・9　Ⅲ10・11　染付碗12　朝鮮Ⅲ13　金属製品紅Ⅲ14
石製品バンドコ15

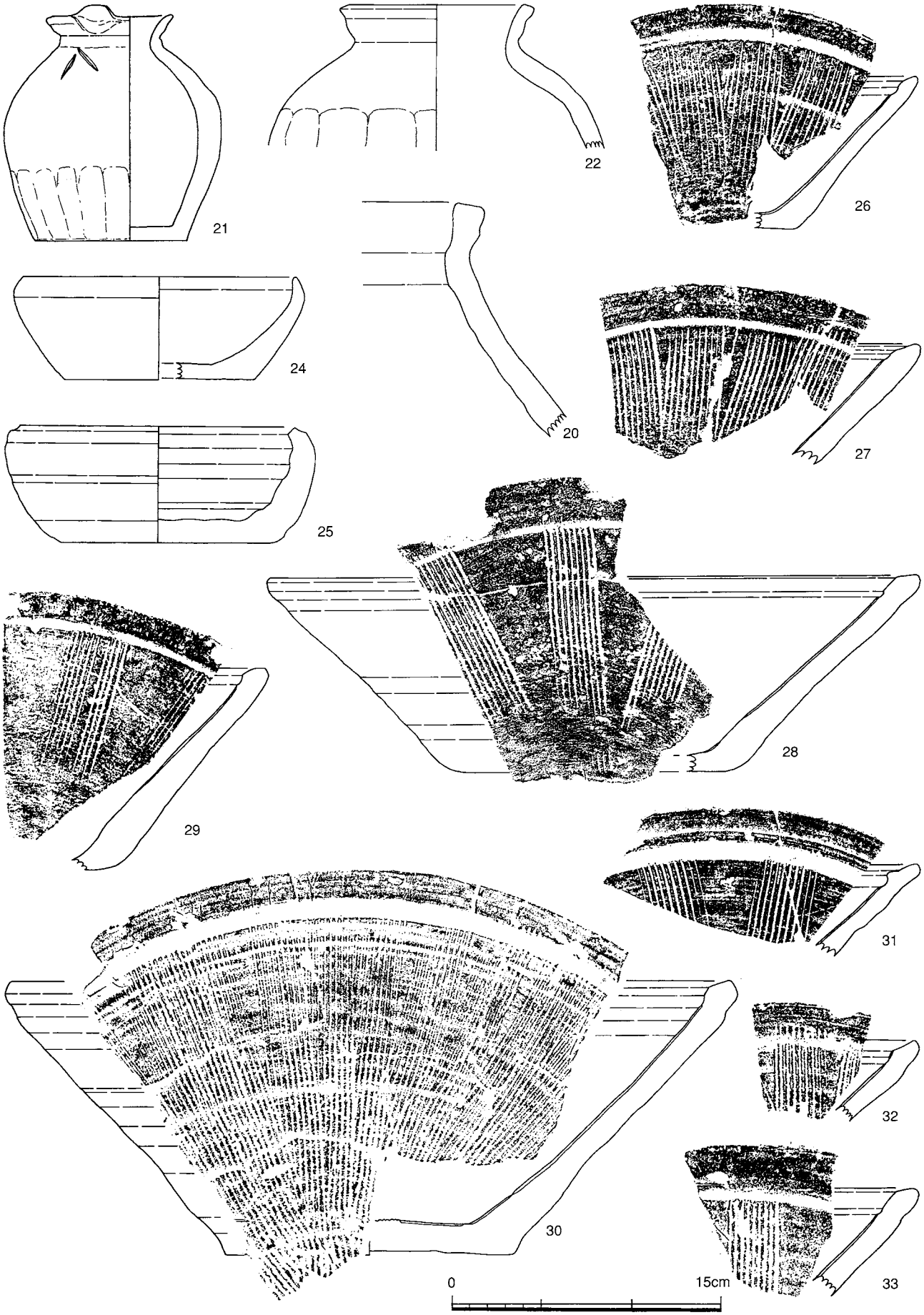
第35次調査出土遺物（1）



暗褐色土層 越前焼鉢1・2　擂鉢3・4　土師質皿5・6　灰釉皿7　青磁碗8・9　皿10・11　朝鮮皿13　金属製品紅皿14　石製品バンドコ15
礫混り黄色土層 越前焼擂鉢16・17　土師質皿18　灰釉皿19

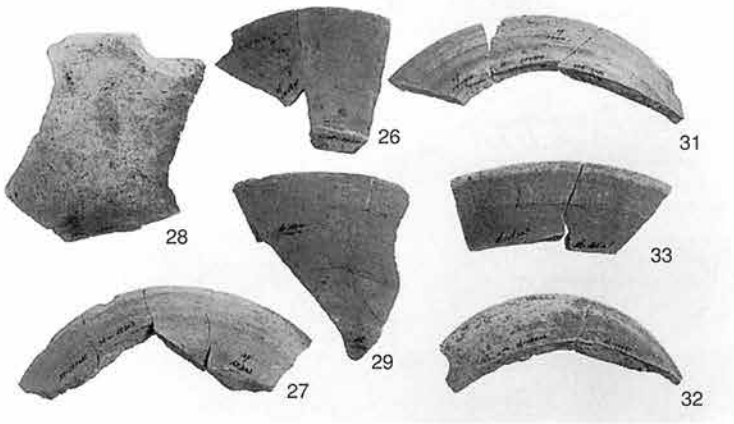
第11図　第35次調査出土遺物（2）

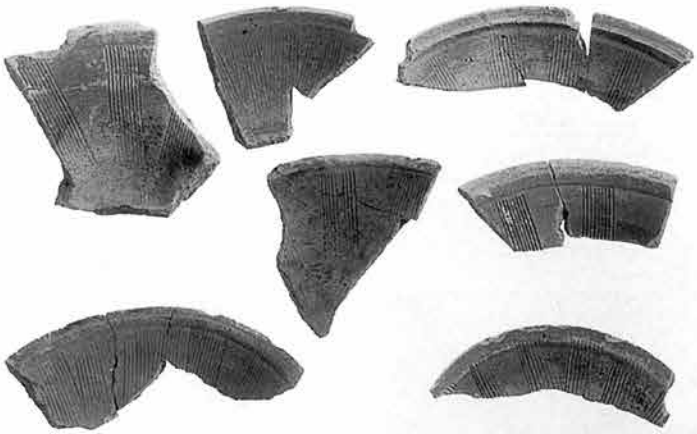
焼土層

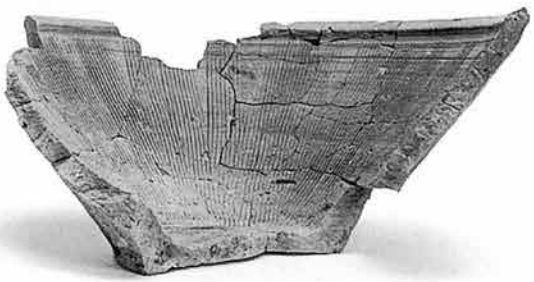


越前焼甕20　壺21・22　鉢24・25　擂鉢26～33

第35次調査出土遺物（2）



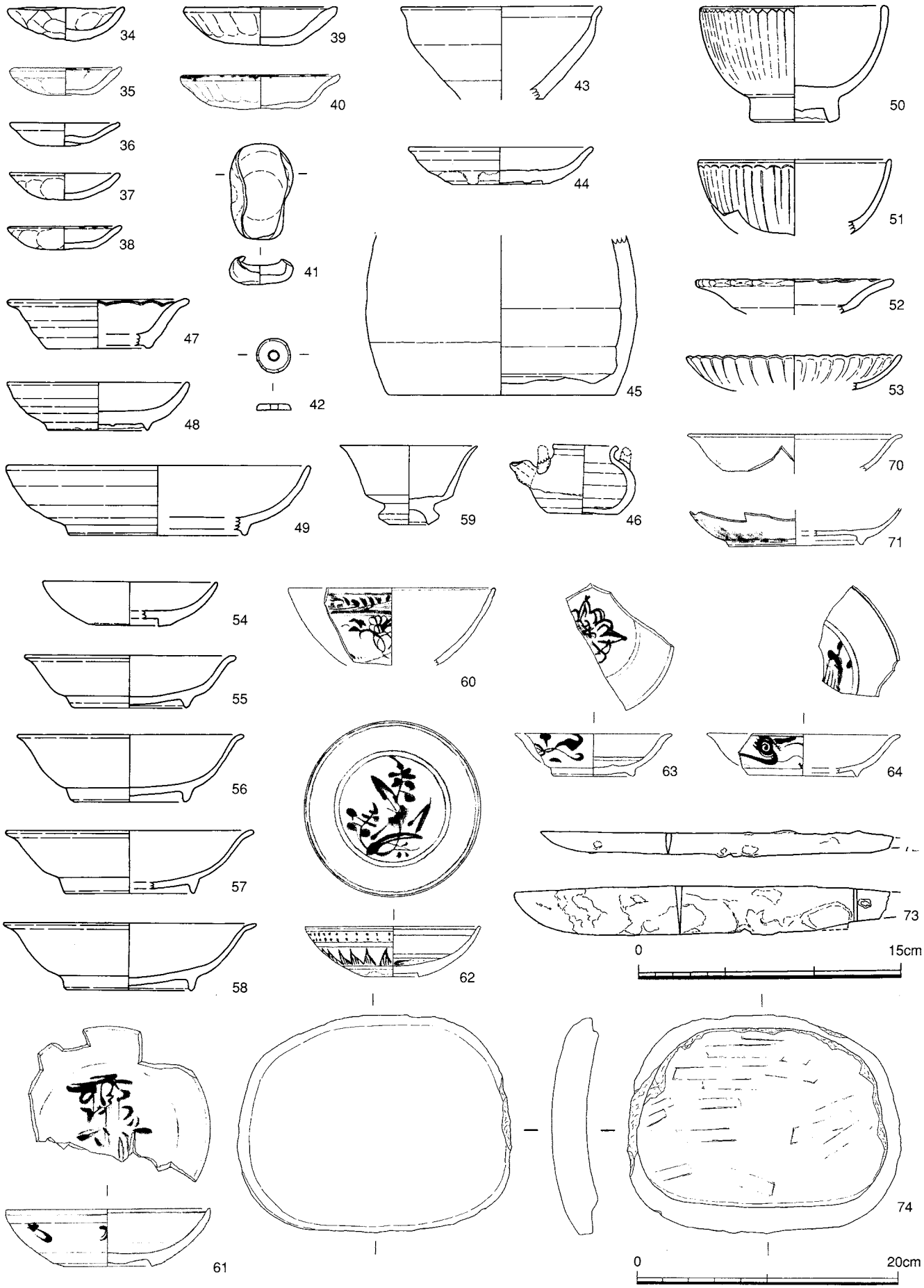




焼土層 越前焼甕20　壺21～23　鉢24・25　擂鉢26～33

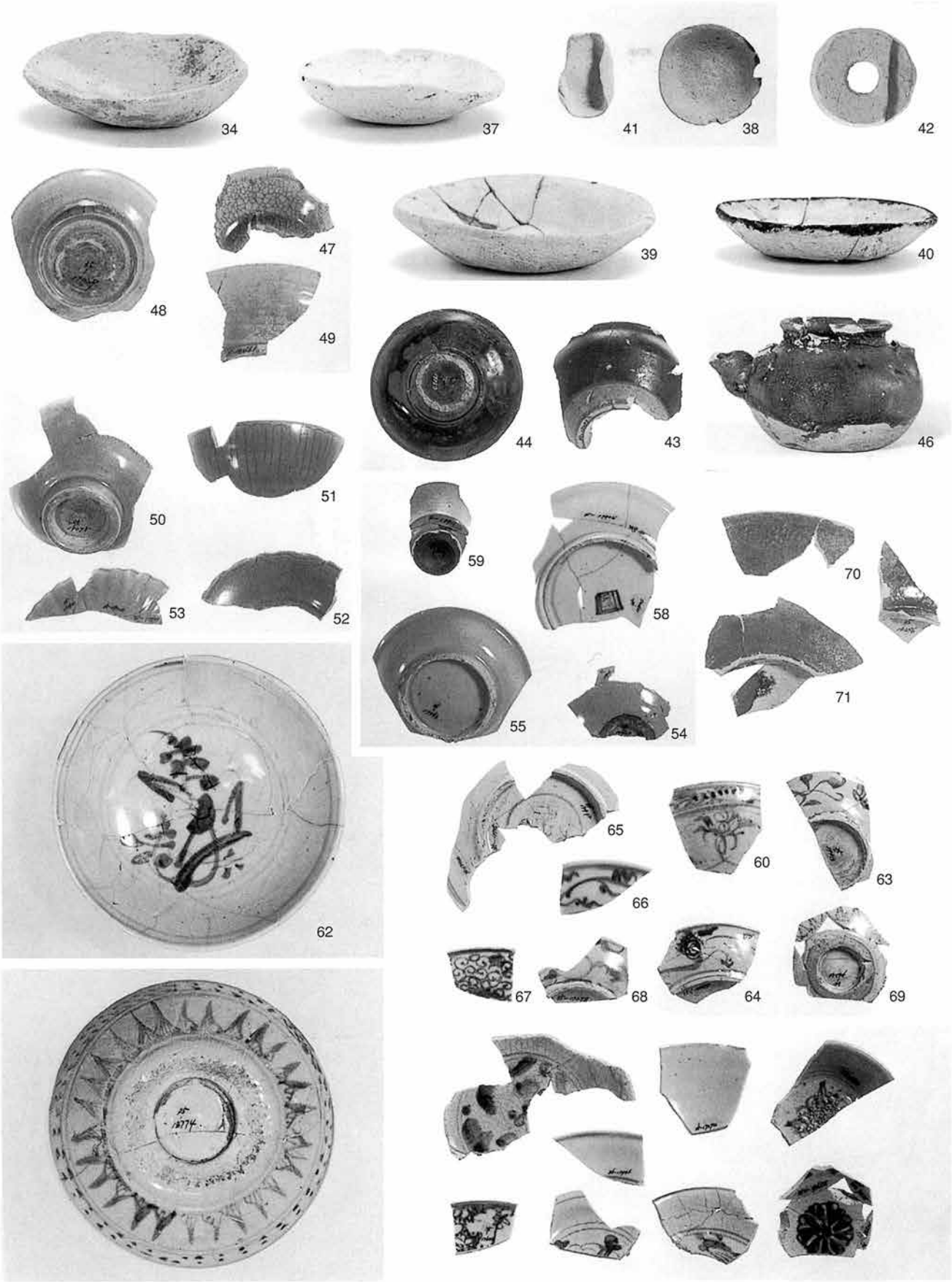
第12図　第35次調査出土遺物（3）

焼土層



土師質皿34～40　耳皿41　灯芯押え42　鉄釉碗43　皿44　鉢45　水注46　灰釉皿47～49　青磁碗50・51　皿52・53　白磁皿54～58　坏59
染付碗60　皿61～64　華南彩釉陶器皿70・71　金属製品小柄72　短刀73　石製品バンドコ74

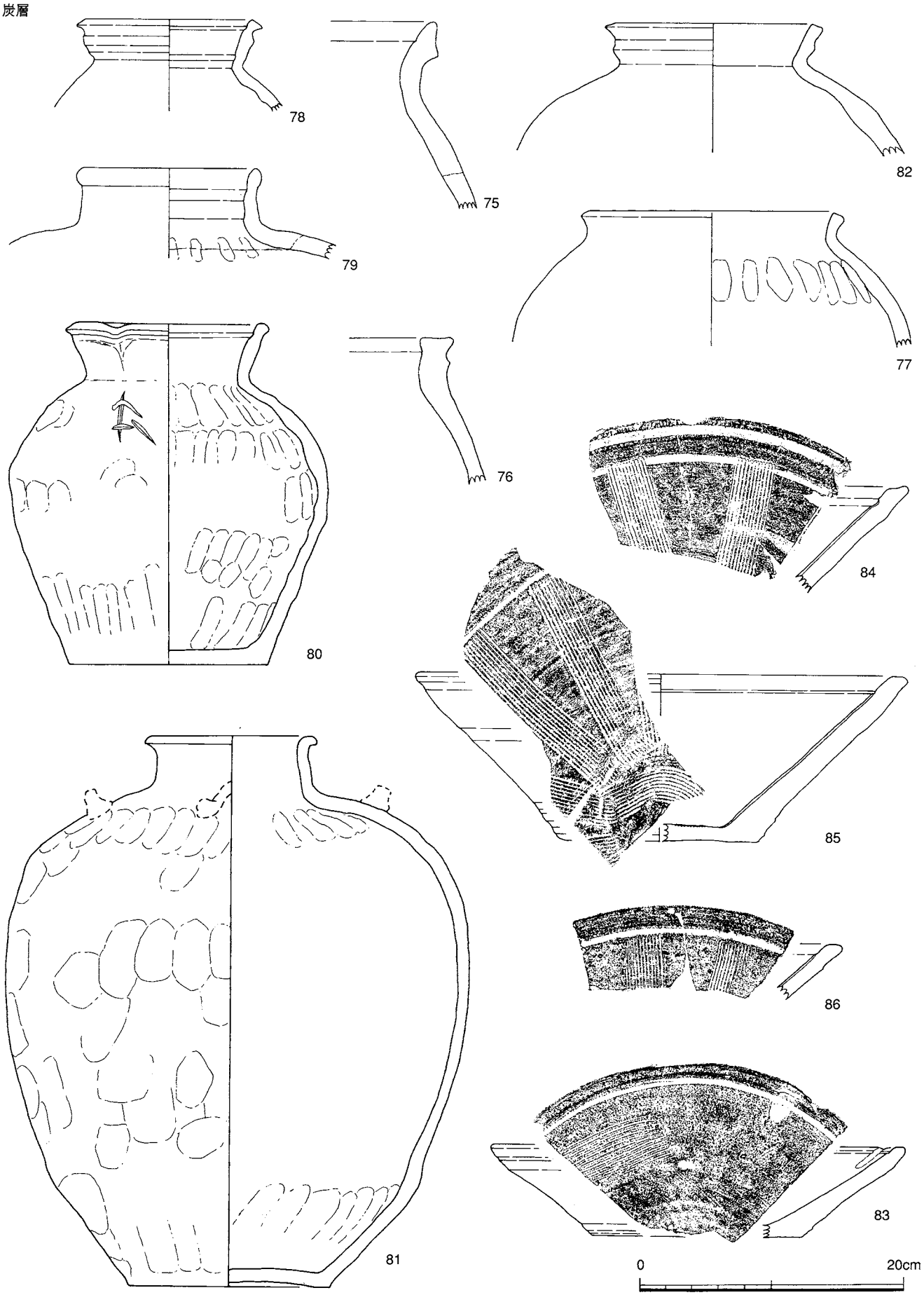
第35次調査出土遺物（3）



焼土層 土師質皿34・37～40　耳皿41　灯芯押え42　鉄釉碗43　皿44　水注46　灰釉皿47～49　青磁碗50・51　皿52・53　白磁皿54・55・58　坏59　染付碗60　皿62～69　華南彩釉陶器皿70・71

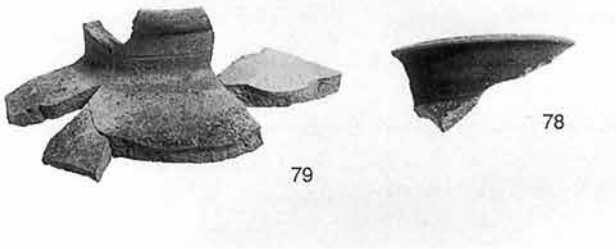
第13図　第35次調査出土遺物（4）

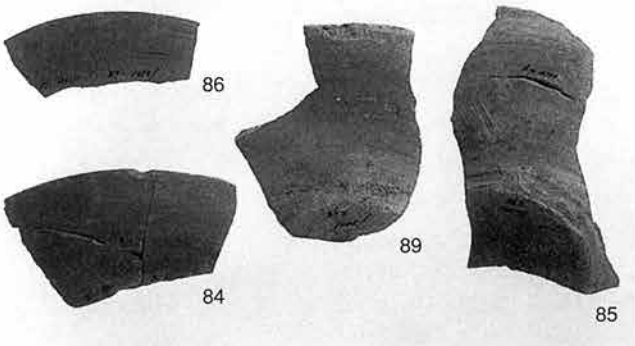
炭層

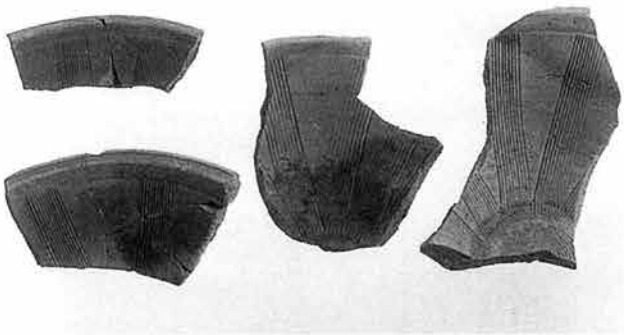


越前焼甕75～77　壺78～82　鉢83　擂鉢84～86

第35次調査出土遺物（4）



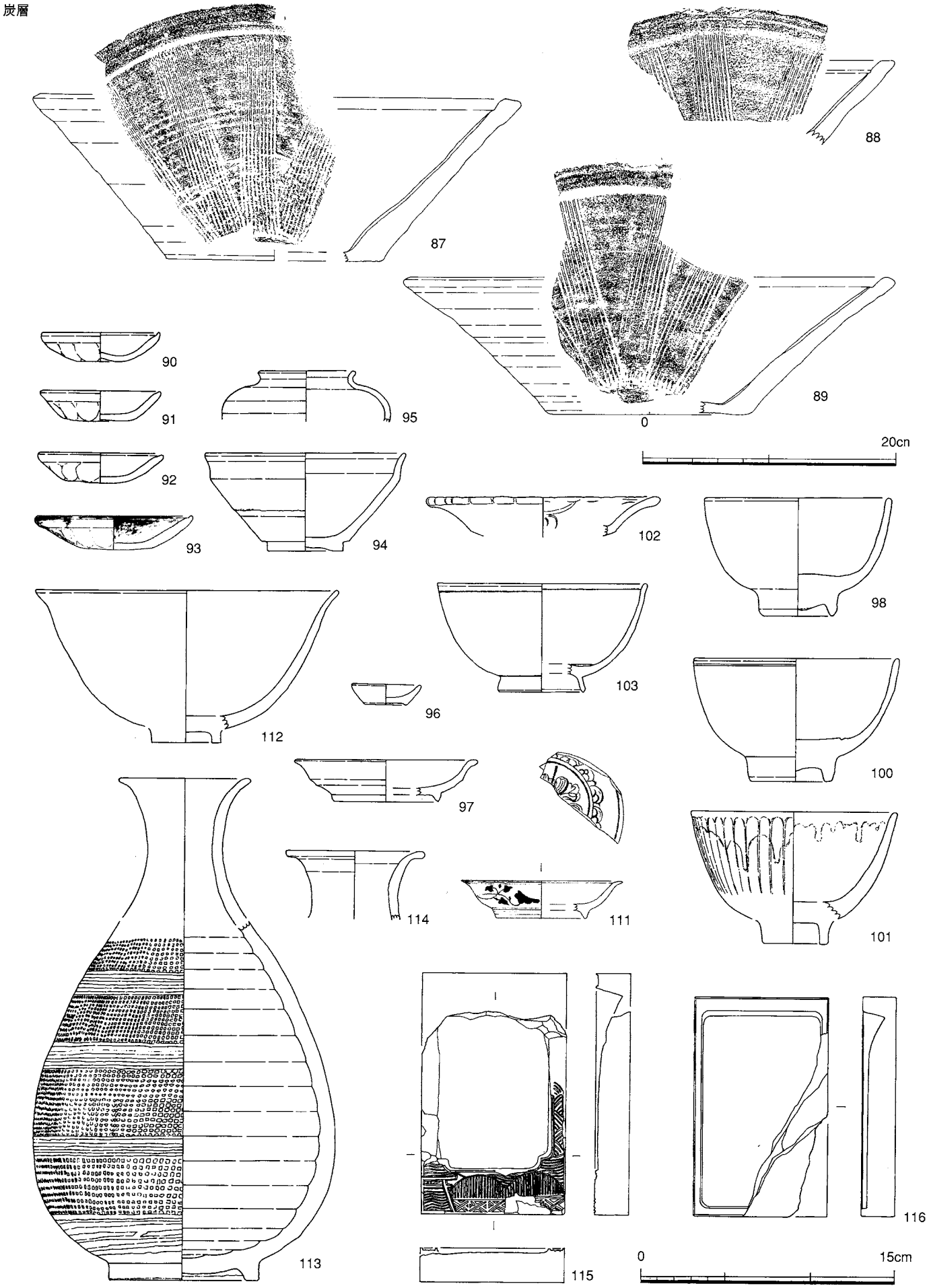




炭層 越前焼甕75・77　壺78～82　鉢83　擂鉢84～87・89

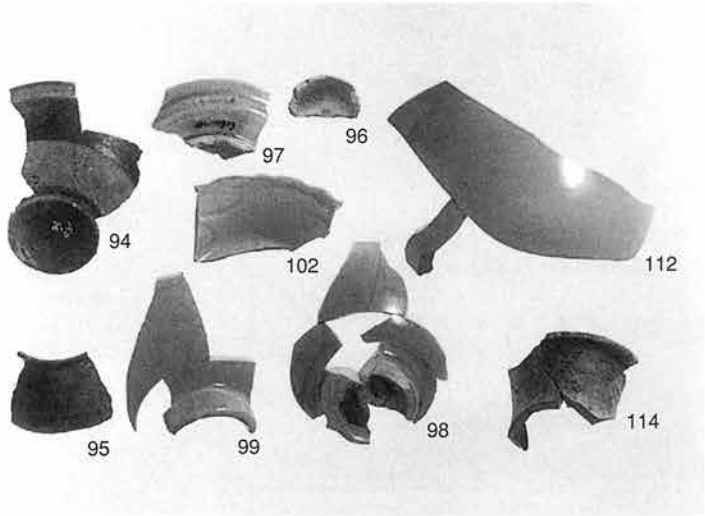
第14図　第35次調査出土遺物（5）

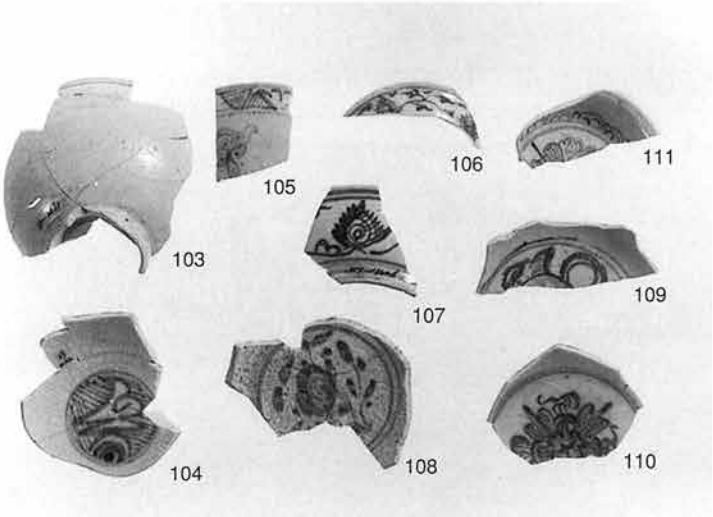
炭層

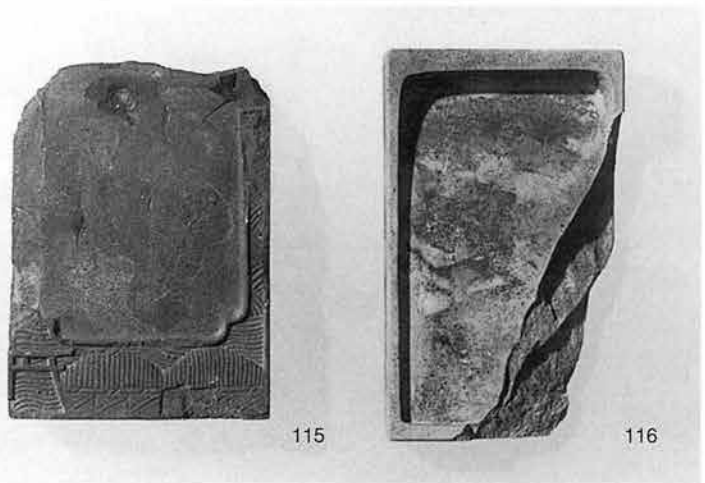


越前焼擂鉢87～89　土師質皿90～93　鉄釉碗94　茶入95　灰釉皿96・97　青磁碗98～101　皿102　染付碗103　皿111　朝鮮碗112　壺113・114
石製品硯115・116

第35次調査出土遺物（5）

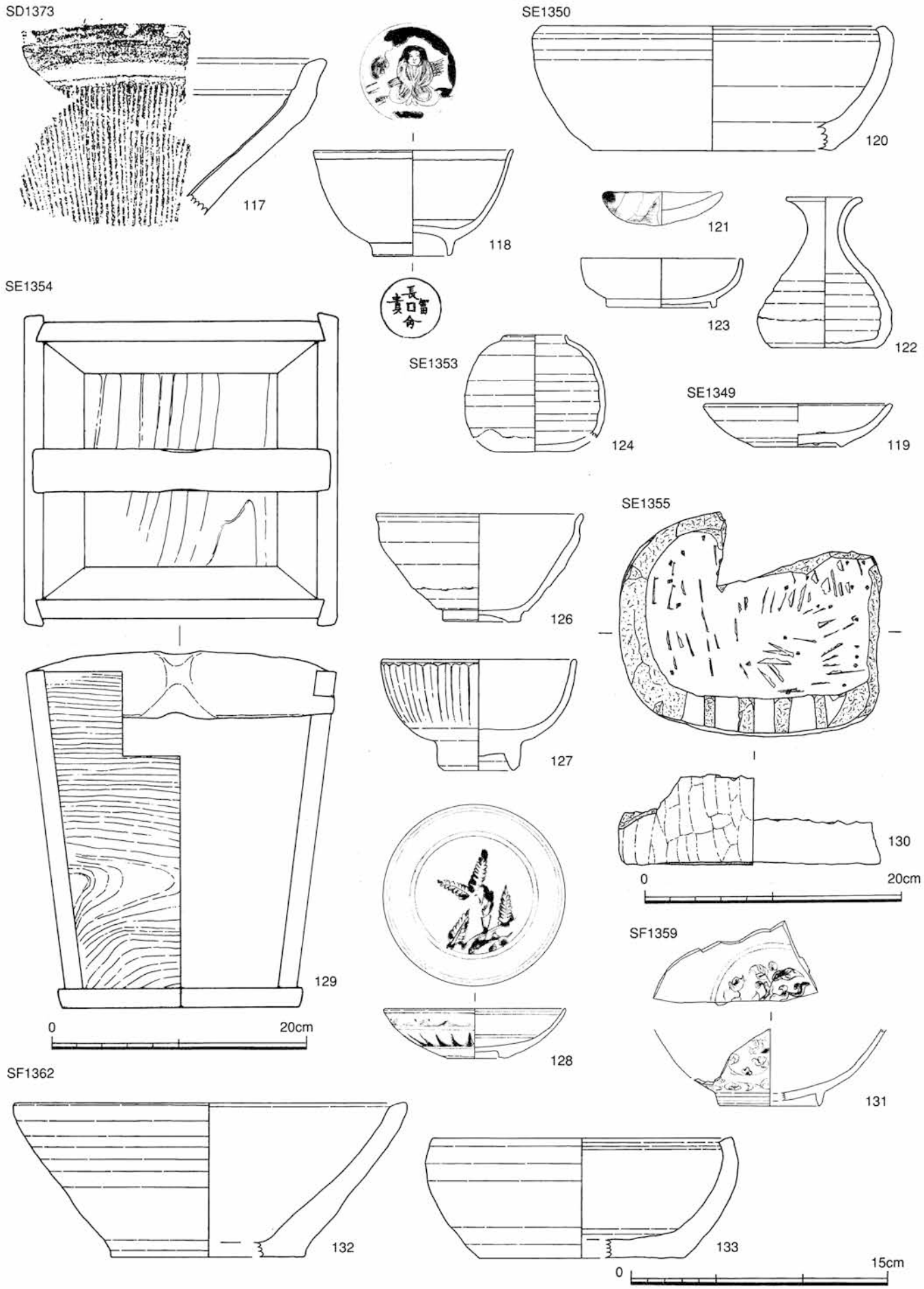






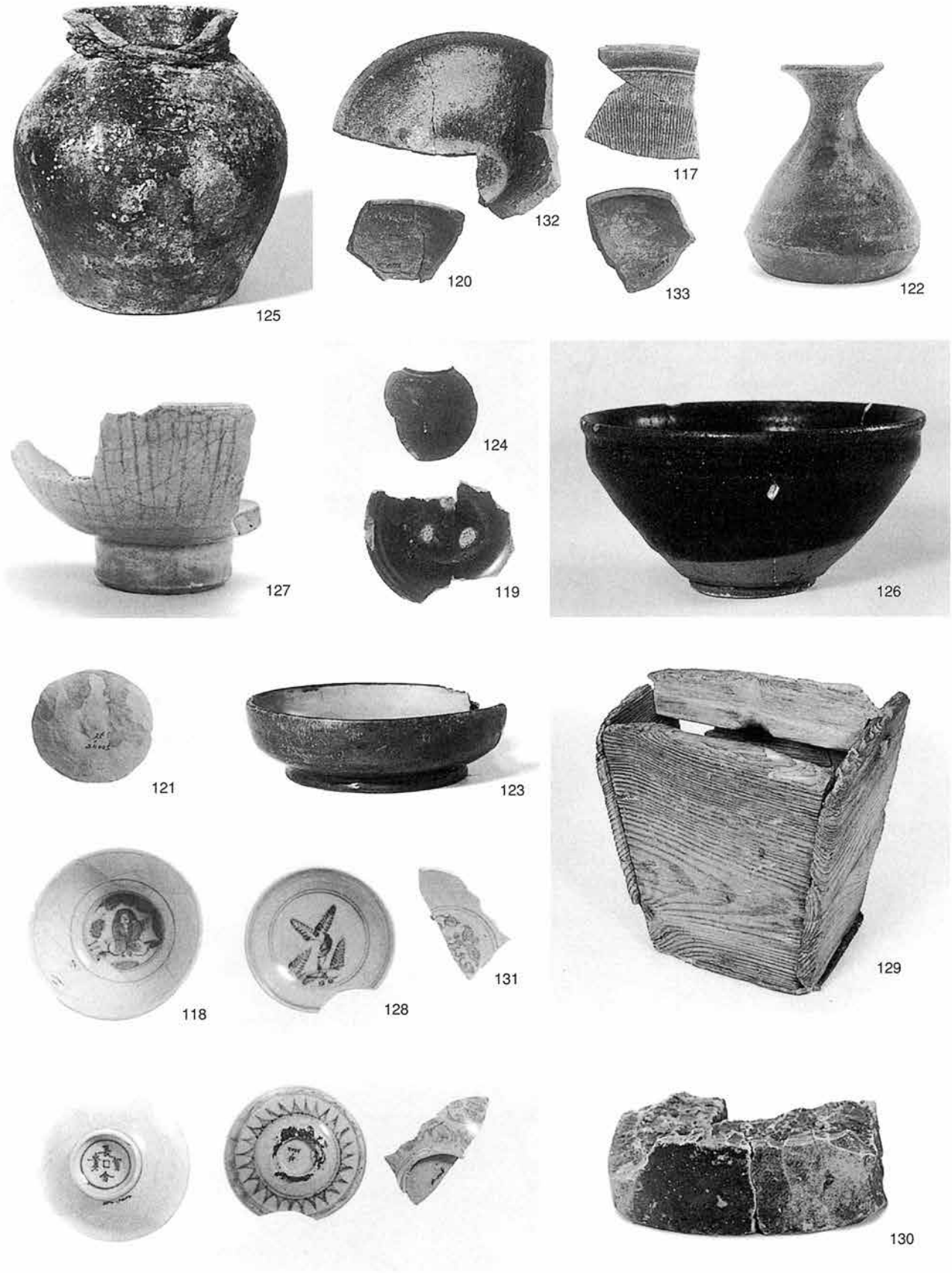
炭層 土師質皿90～93　鉄釉碗94　茶入95　灰釉皿96・97　青磁碗98～101　皿102　染付碗103～105　皿106～111　朝鮮碗112　壺113・114
石製品硯115・116

第15図　第35次調査出土遺物（6）



越前焼鉢120・132・133　擂鉢117　土師質皿121　鉄釉碗126　皿119　瓶119　茶入124　青磁碗127
染付碗118・131　皿128　木製品皿123　釣瓶129　石製品バンドコ130

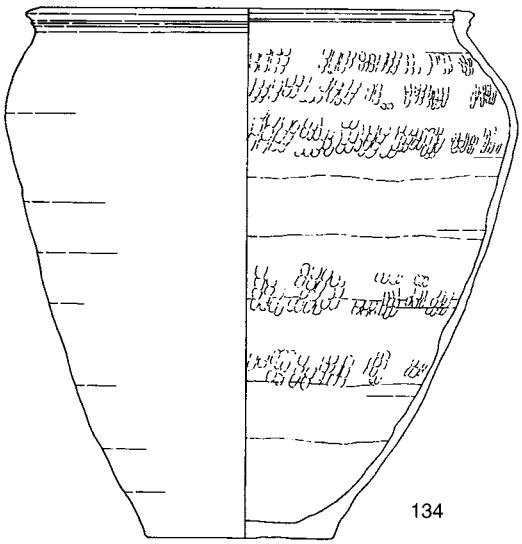
第35次調査出土遺物（6）

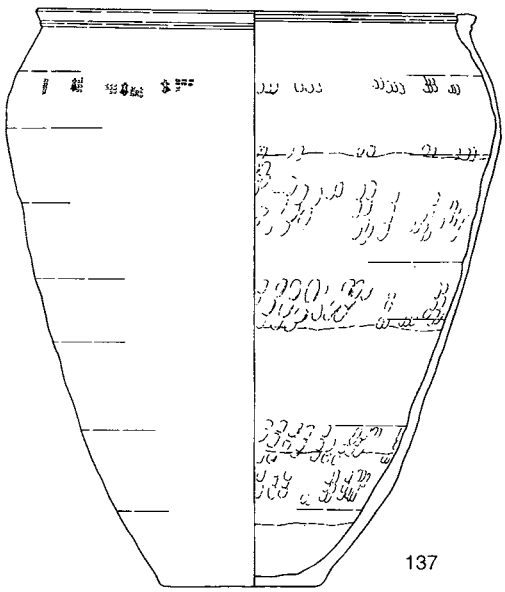


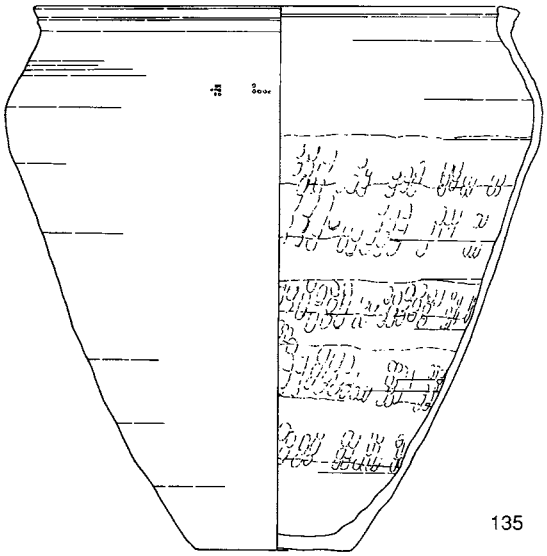
SD1373 越前焼擂鉢117　染付碗118　SE1349 鉄釉皿119　SE1350 越前焼鉢120　土師質皿121　鉄釉瓶122　木製品皿123
SE1353 鉄釉茶入124　SE1354 越前焼壺125　鉄釉碗126　青磁碗127　染付皿128　木製品釣瓶129　SE1355 石製品パンドコ130
SF1359 染付碗131　SF1362 越前焼鉢132・133

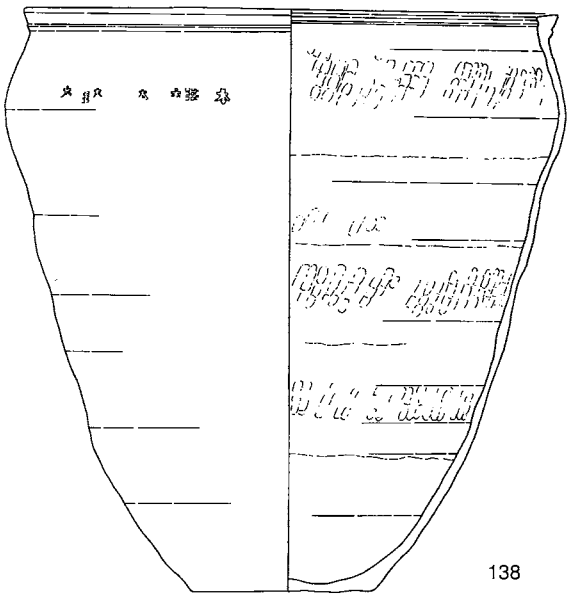
第16図　第35次調査出土遺物（7）

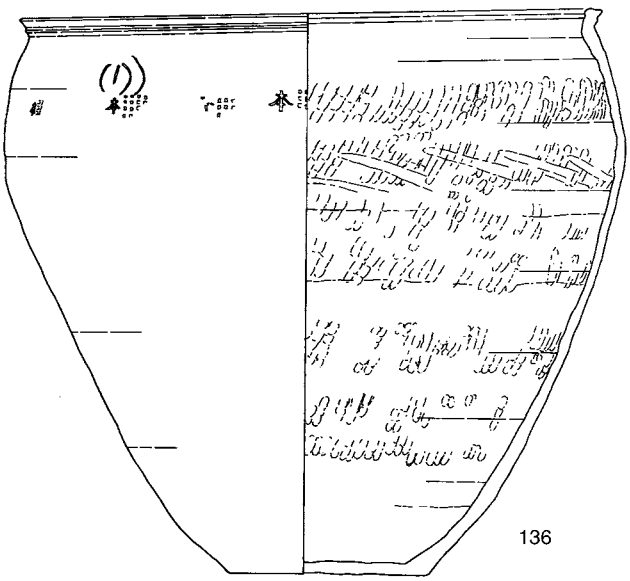
SX1388





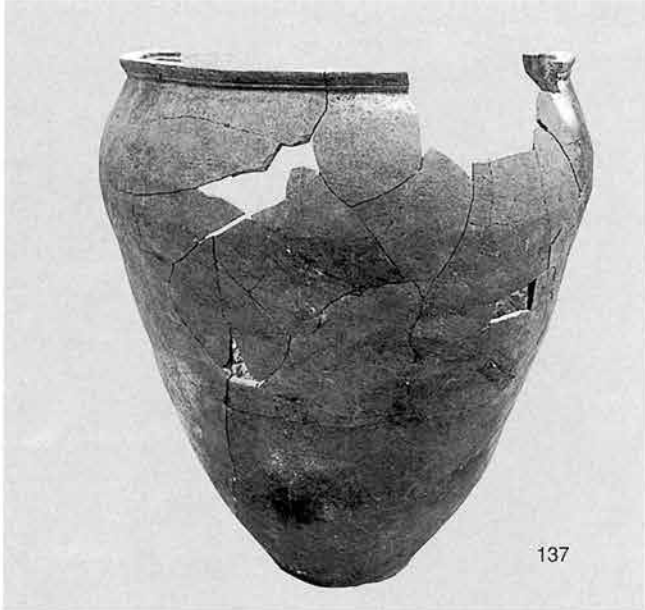


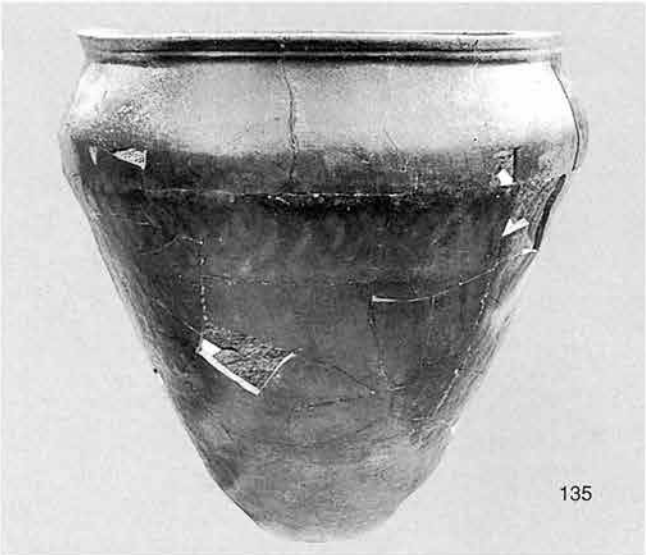


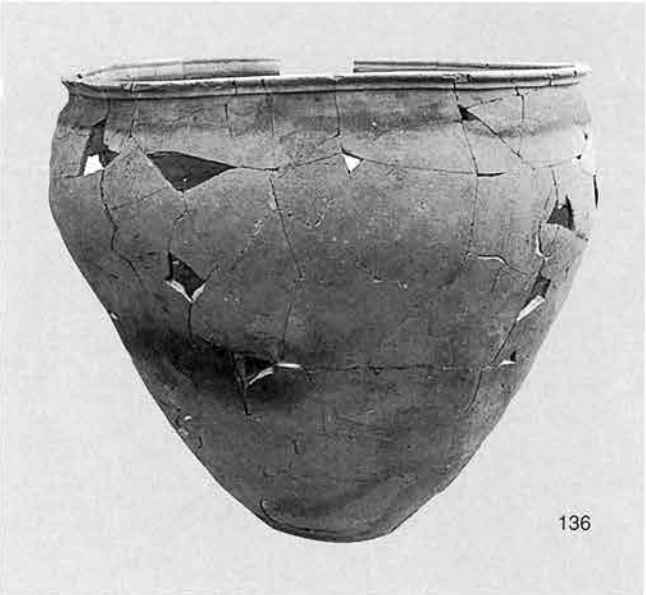


越前焼甕134～138

第35次調査出土遺物（7）

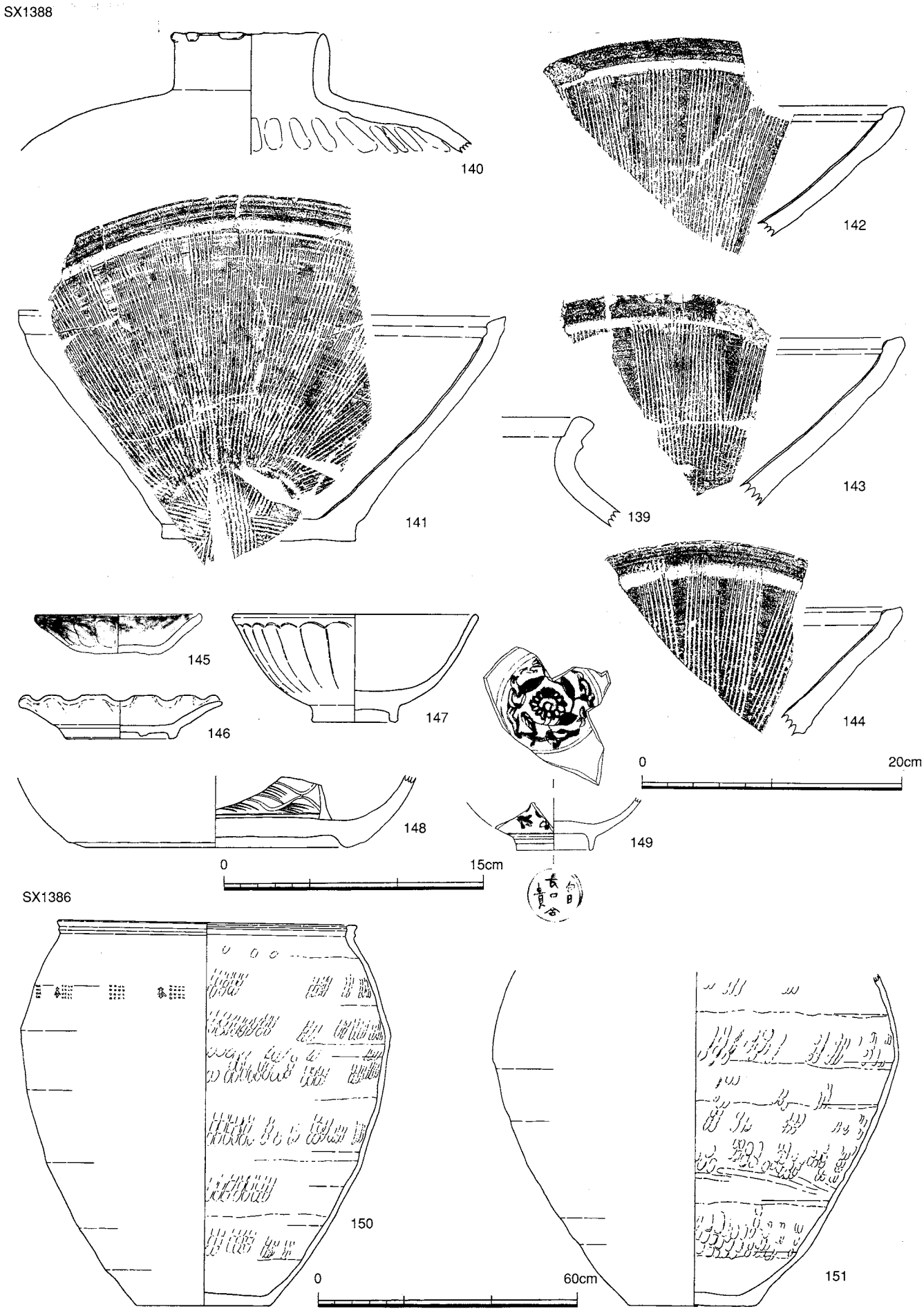






SX1388 越前焼甕134～138

第17図　第35次調査出土遺物（8）



越前焼甕139・150・151　壺140　擂鉢141～144　土師質皿145　灰釉皿146　青磁碗147　盤148　染付碗149

第35次調査出土遺物（8）

140

139

141

143

144

142

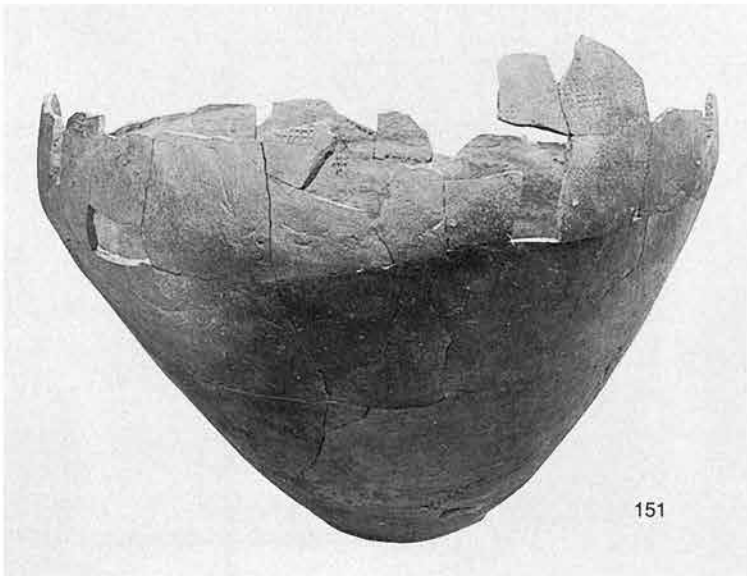
150

145

147

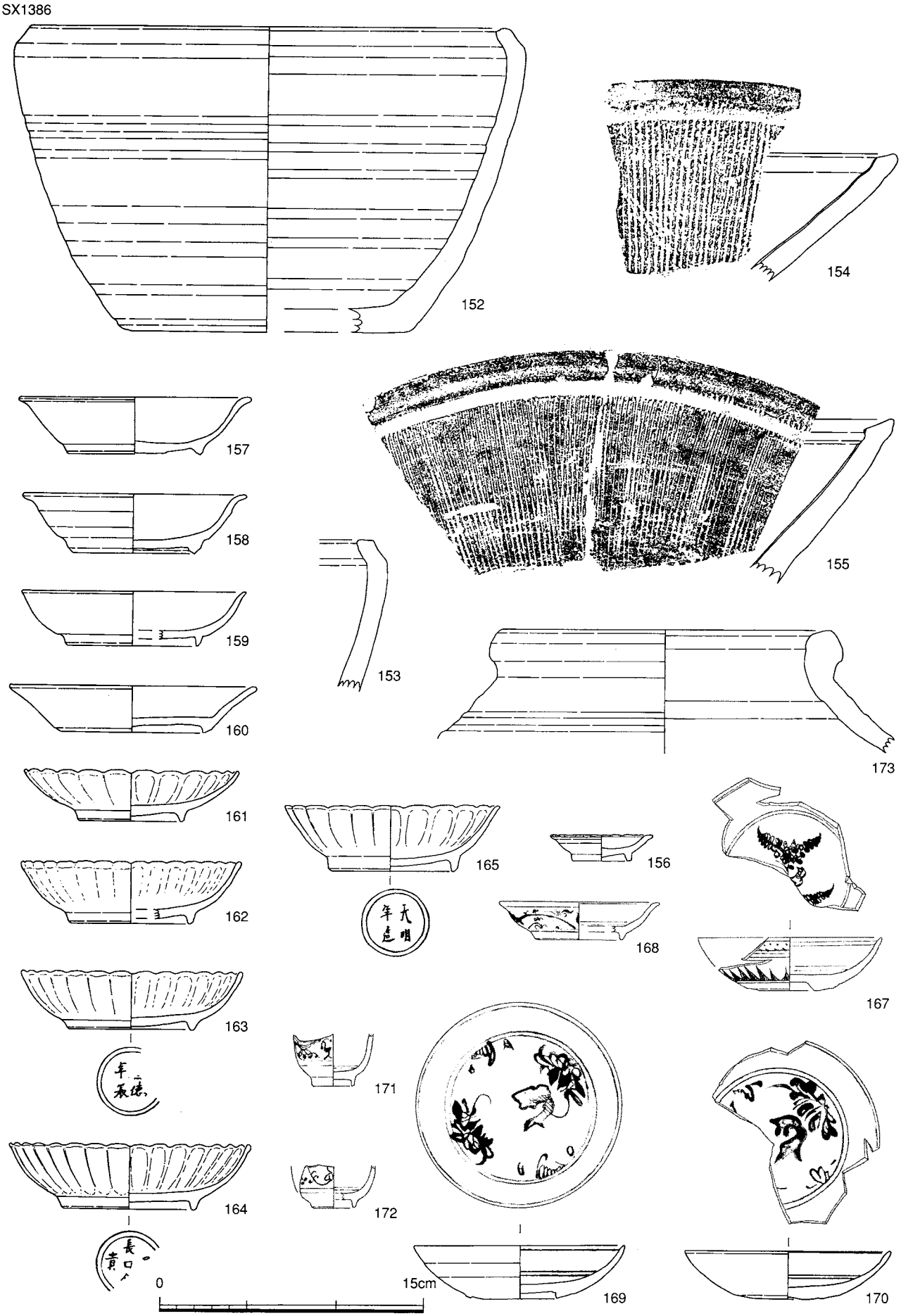
146

148


151

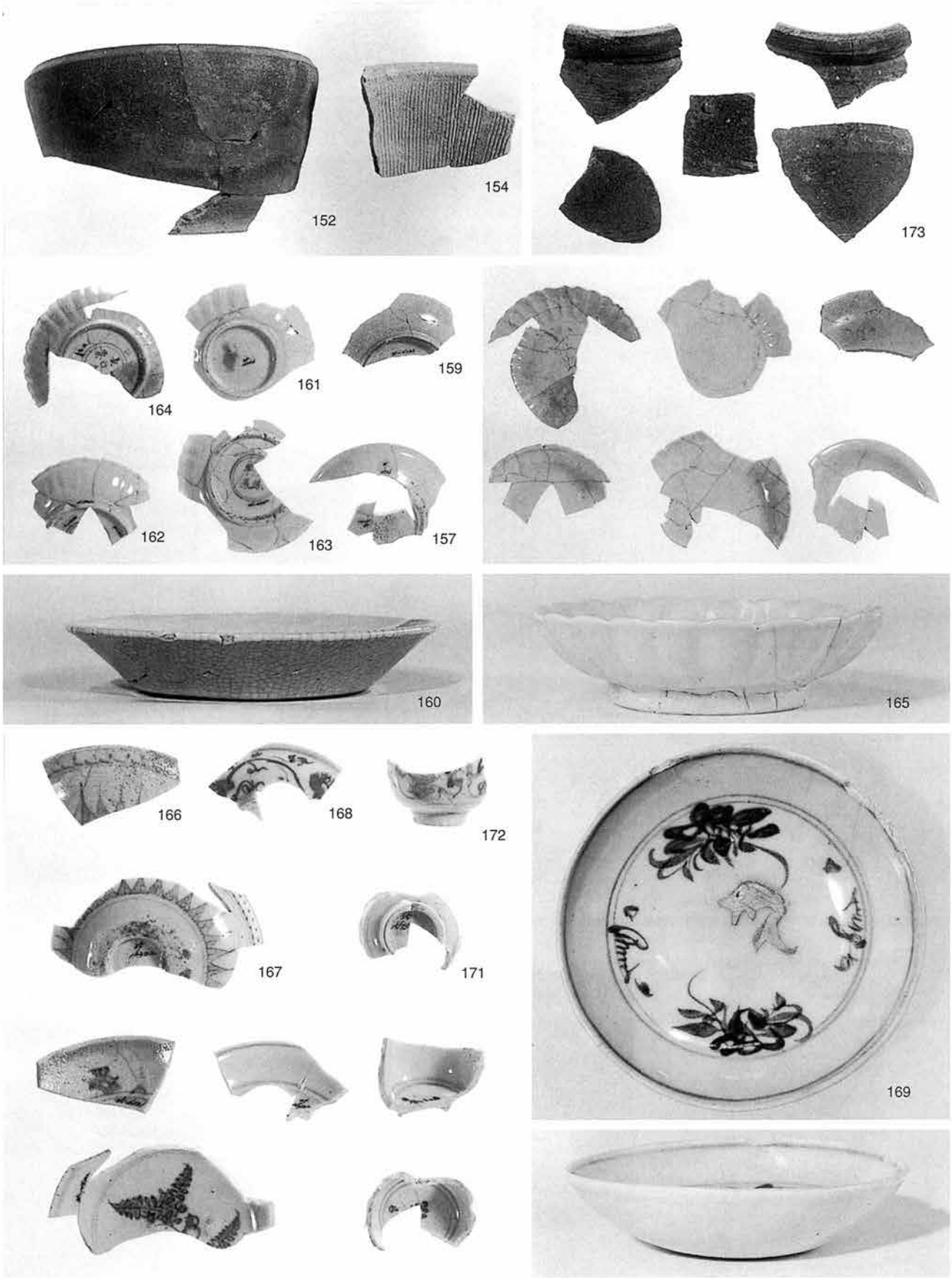
SX1388 越前焼甕139　壺140　擂鉢141～144　土師質皿145　灰釉皿146　青磁碗147　盤148
SX1386 越前焼甕150・151

第18図　第35次調査出土遺物（9）



越前焼鉢152・153　擂鉢154・155　青磁皿156　白磁皿157～165　染付皿167～170　坏171・172　タイ製陶器壺173

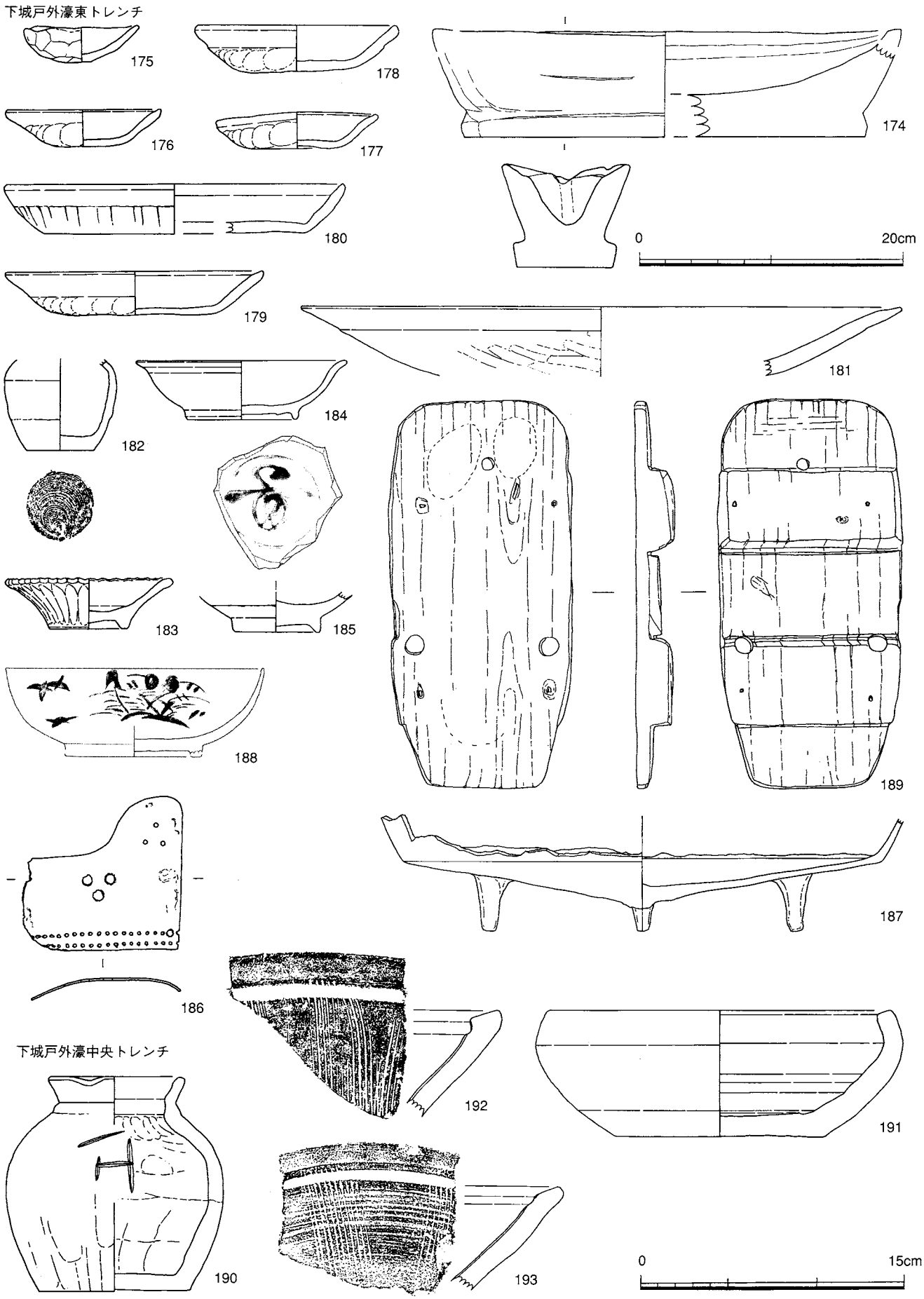
第35次調査出土遺物（9）



SX1386 越前焼鉢152　擂鉢154　白磁皿157・159～165　染付皿166～169　タイ製陶器壺173

第19図　第35次調査出土遺物（10）

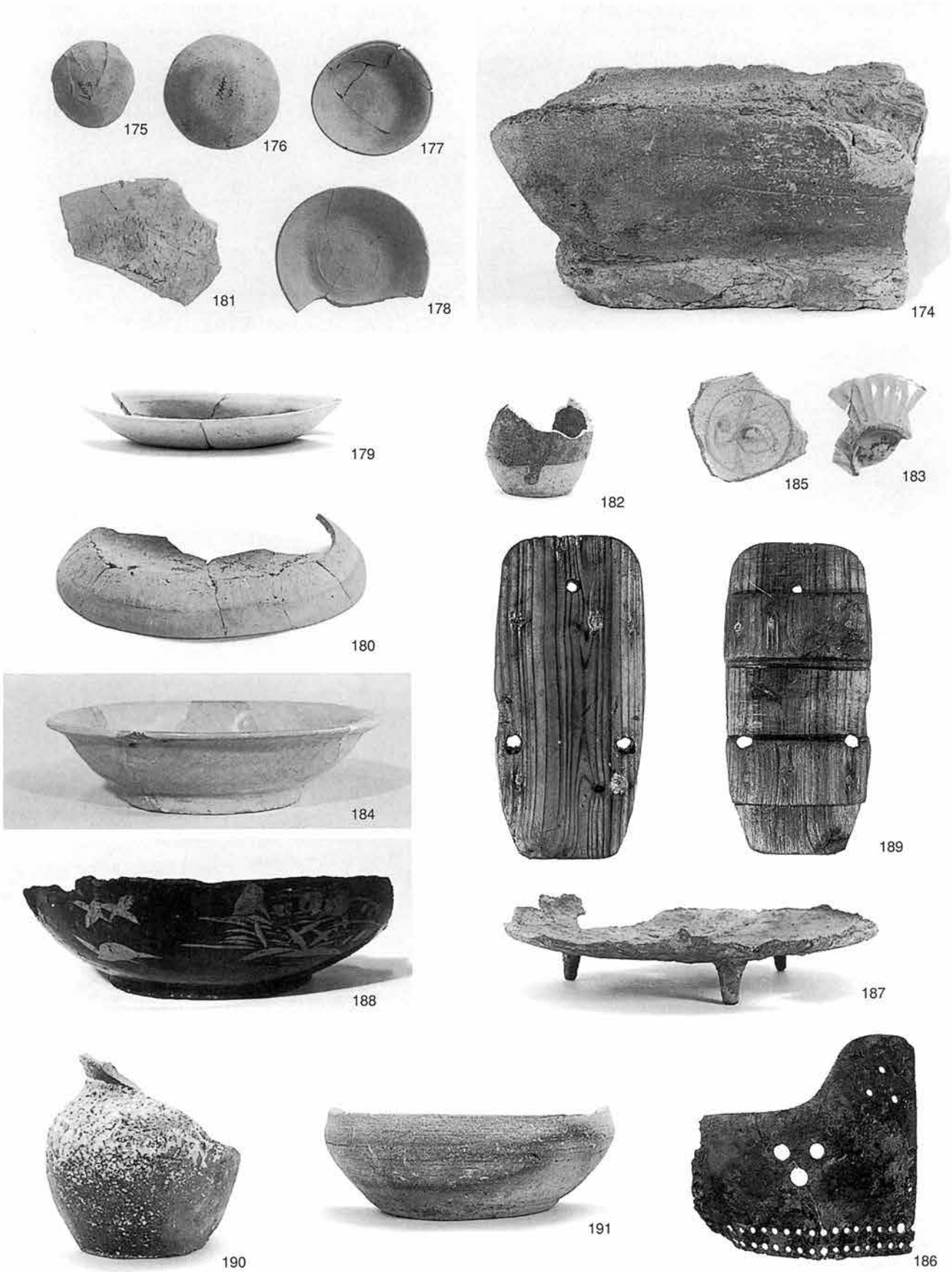
下城戸外濠東トレンチ



下城戸外濠中央トレンチ

越前焼壺190　鉢191　擂鉢192・193　薬研174　**土師質**Ⅲ175～181　**鉄釉**茶入181　**青磁**Ⅲ183　**白磁**Ⅲ184　**染付**碗185　**金属製品**胸板186　鉄鍋187
木製品椀188　下駄189

第35次調査出土遺物（10）

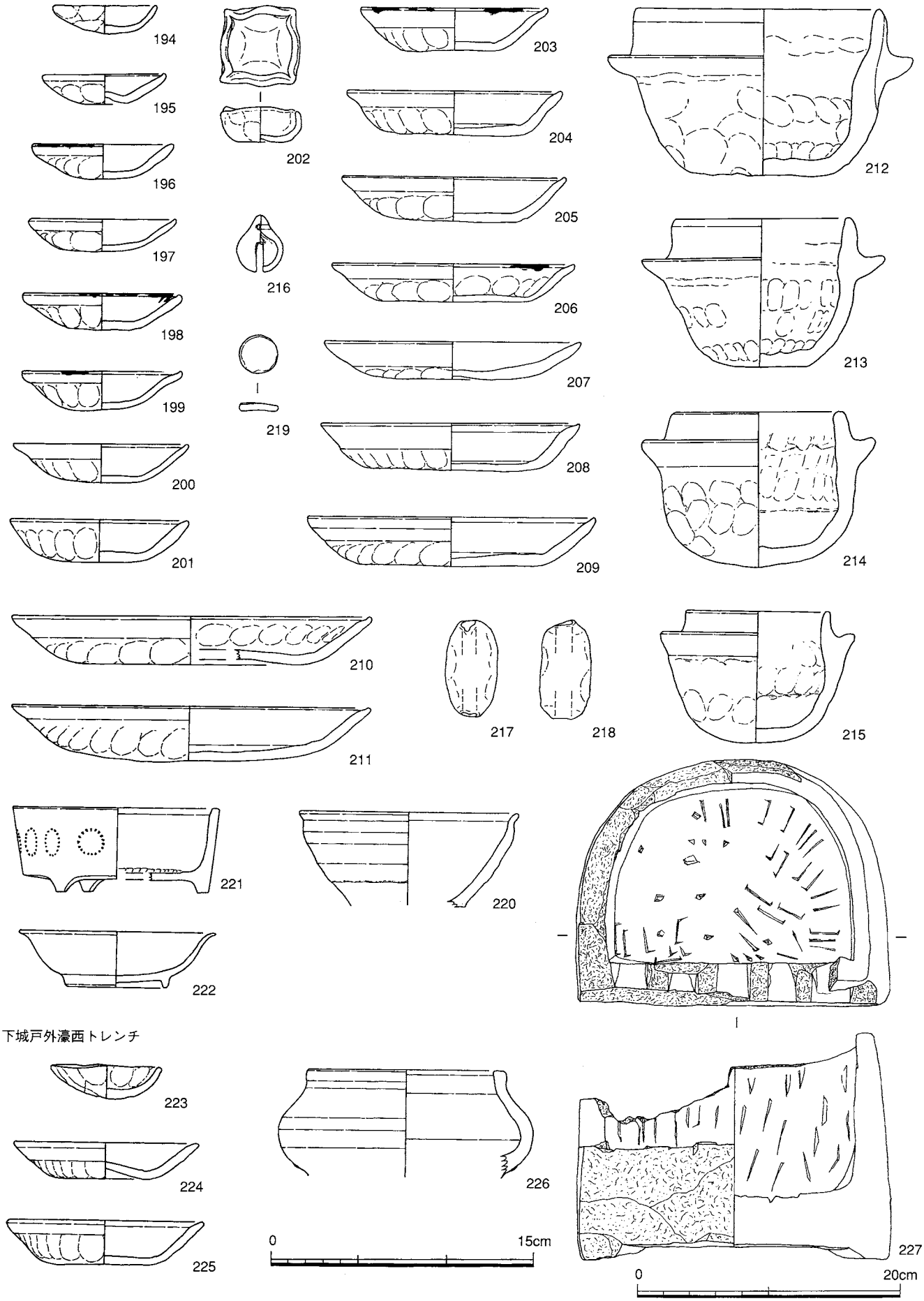


下城戸外濠東トレンチ 越前焼薬研174　土師質皿175～181　鉄釉茶入182　青磁皿183　白磁皿184　染付碗185　金属製品胸板186　鉄鍋187　木製品椀188　下駄189

下城戸外濠中央トレンチ 越前焼壺190　鉢191

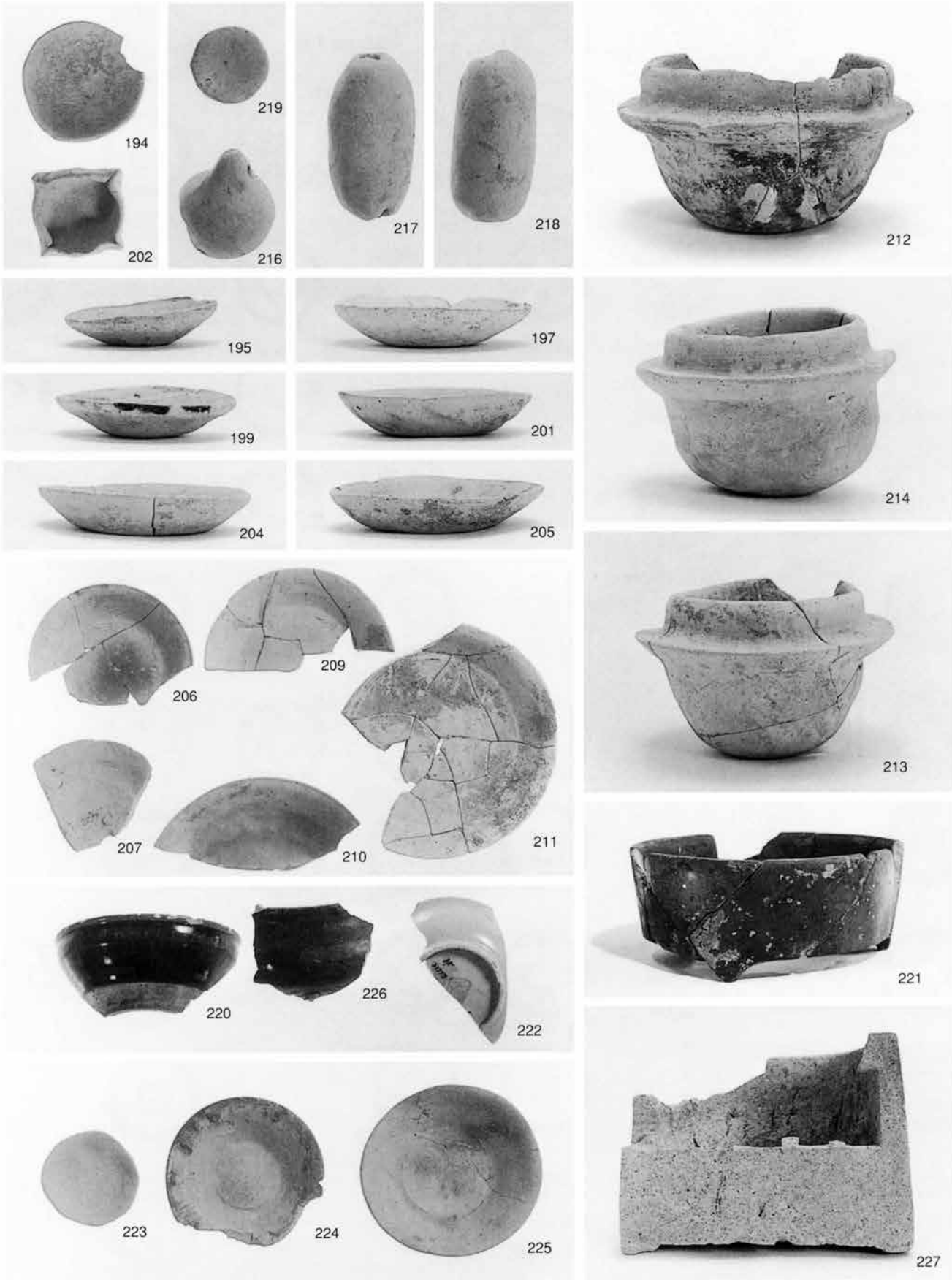
第20図　第35次調査出土遺物（11）

下城戸外濠中央トレンチ



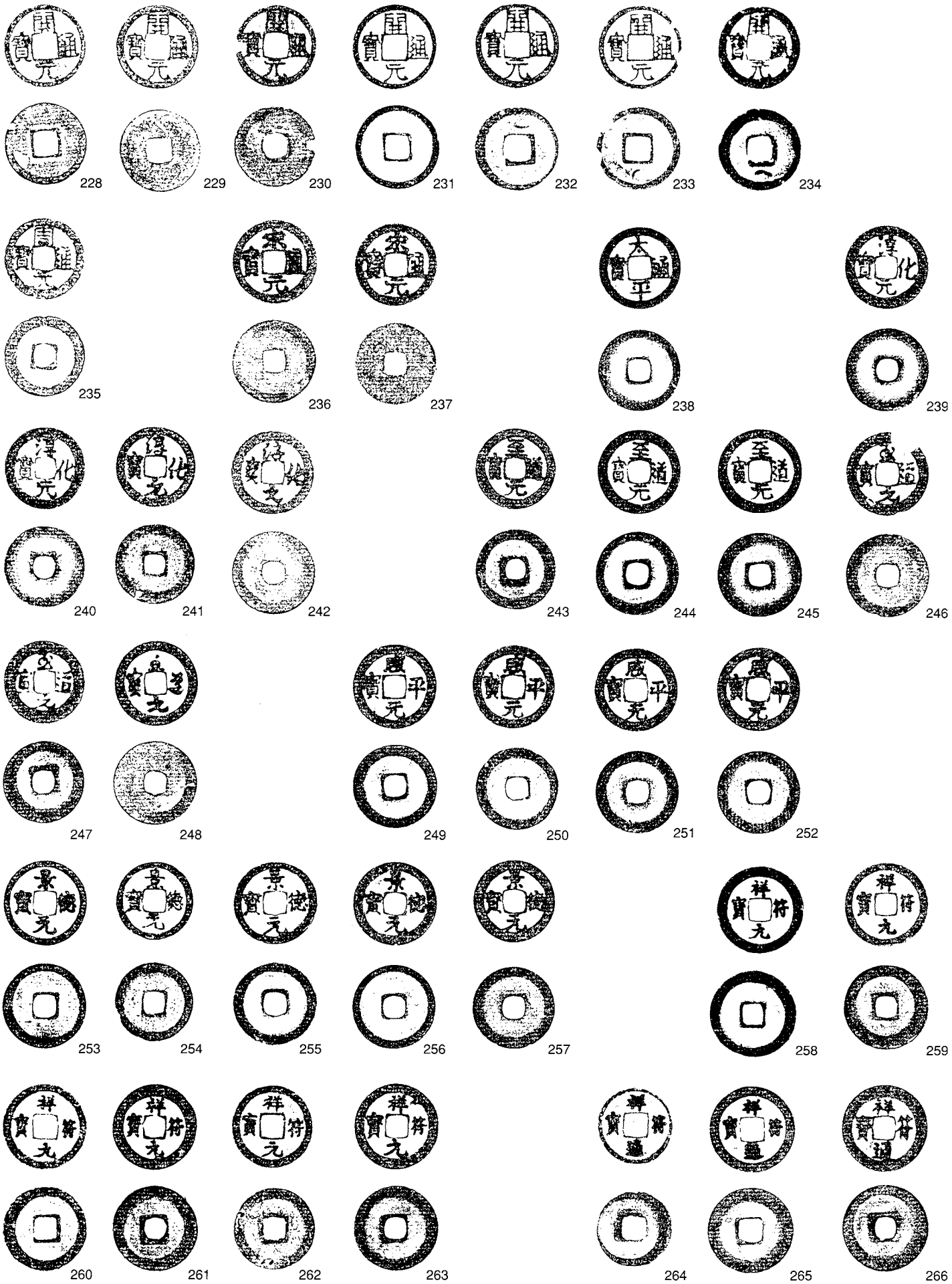
土師質皿194～211・223～225　羽釜212～215　土鈴216　土錘217・218　不明219　**鉄釉**碗220　香炉226　**瓦質**香炉221　**白磁**皿222　**石製品**バンドコ227

第35次調査出土遺物（11）



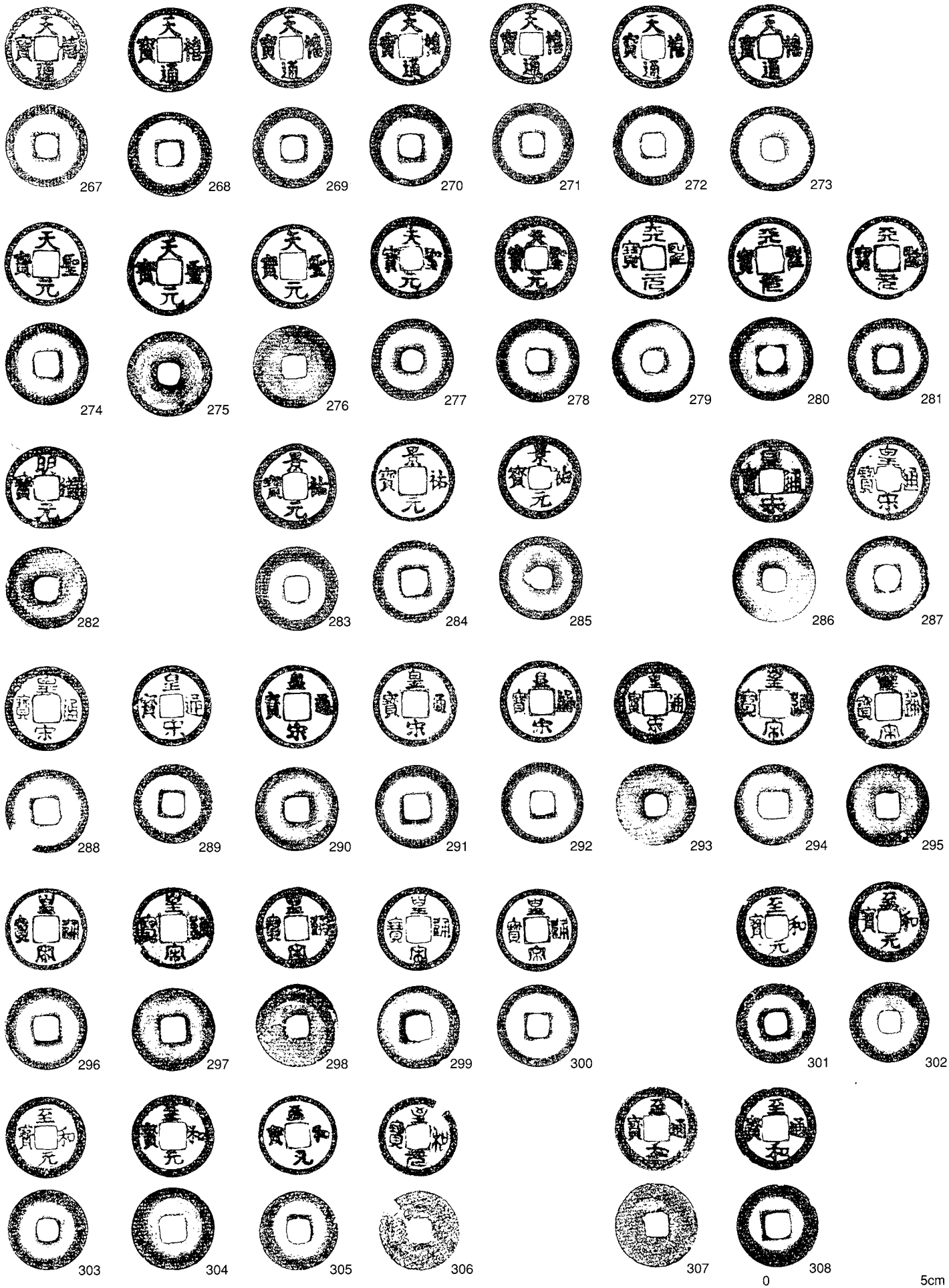
下城戸外濠中央トレンチ **土師質**Ⅲ194・195・197・199・201・202・204～207・209～211　羽釜212～213　土鈴216　土錘217・218　不明219
鉄釉碗220　**瓦質**香炉221　**白磁**Ⅲ222
下城戸外濠西トレンチ **土師質**Ⅲ223～225　**鉄釉**香炉226　**石製品**パンドコ227

第21図　第35次調査出土遺物（12）



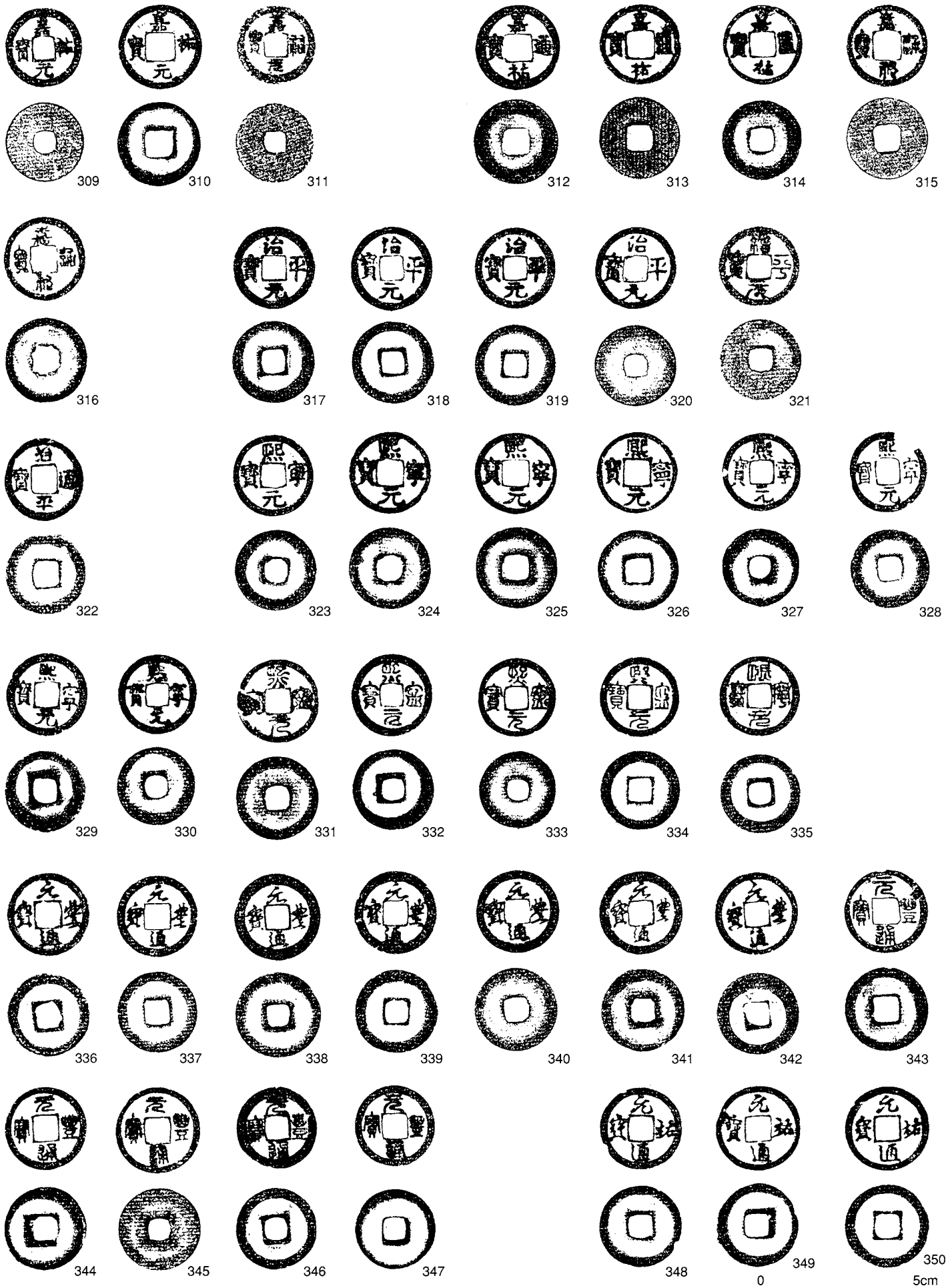
SE1353 出土銅銭（1）　228～266

第22図　第35次調査出土遺物（13）



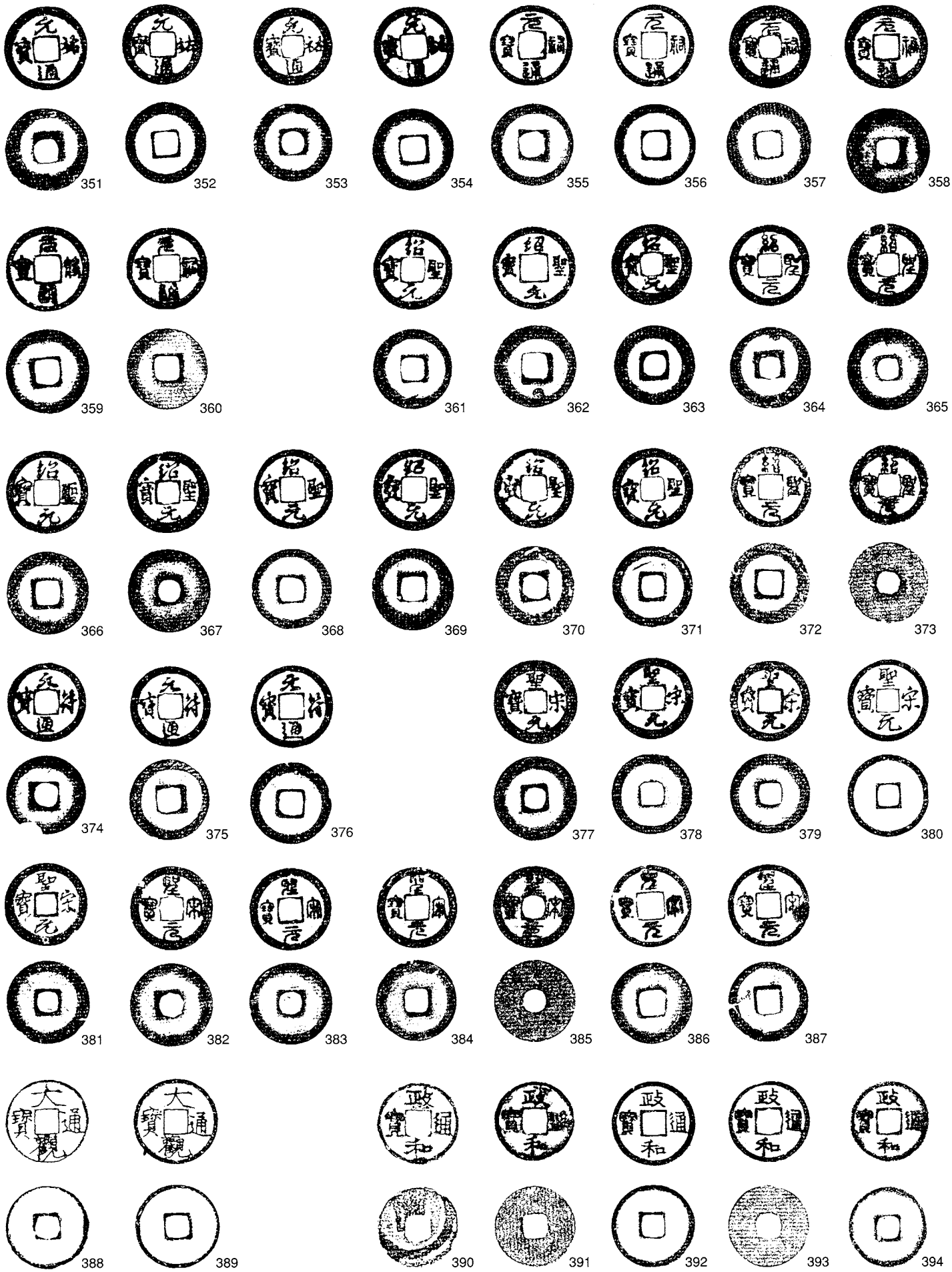
SE1353 出土銅銭（2）　267～308

第23図　第35次調査出土遺物（14）



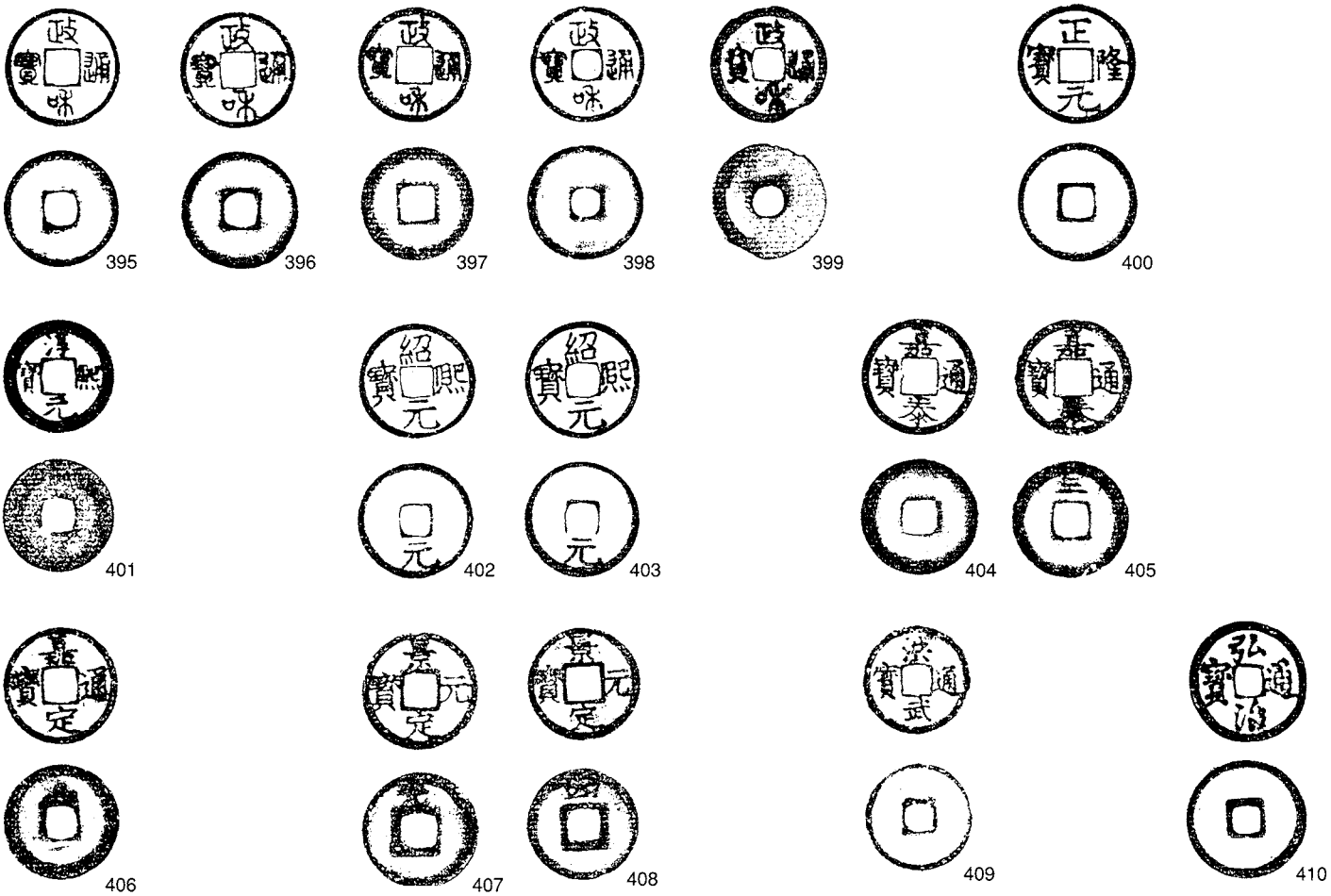
SE1353 出土銅銭（3）　309～350

第24図　第35次調査出土遺物（15）



SE1353 出土銅銭（4）　351～394

第25図　第35次調査出土遺物（16）



SE1353 出土銅銭（5）　395～410

0　5cm

Ⅲ 第 56・85 次 調 査

Ⅲ　第56・85次調査（下城戸）

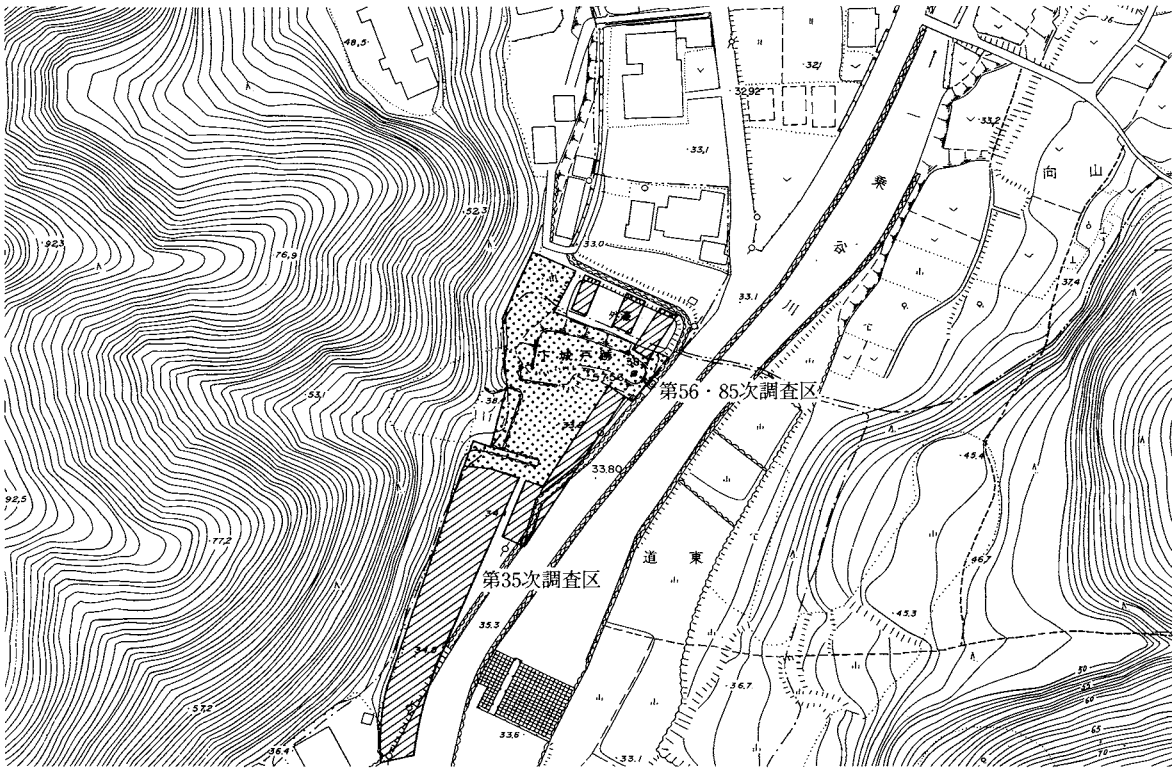
1．調査の経過と概要

第56・85次調査の対象とした下城戸地区は、前章で扱った第35次調査区の北隣に隣接しており、特別史跡の指定範囲の北端に位置している。また、下城戸の北方270mには遺跡内を縦断する一乗谷川が合流する足羽川が流れており、足羽川は下流にて九頭竜川と合流し三国にて日本海へ流れ出ている。下城戸と足羽川に挟まれる位置は安波賀と呼ばれており、足羽川の水運を利用した港、さらには商業地としての市町であったと想定されている。

下城戸東側は県道により大きく削平を受けていることから、旧一乗谷川と下城戸との関係については不明である。県道西側には一乗谷川が流れており、一乗谷川の西岸山際には土塁の続きを確認することができることから、一乗谷川の河川内を除いて土塁が存在していたものと考えられる。下城戸西側については、一乗谷と福井平野を画する御茸山の東斜面に接しており、斜面上には削り出しの平坦部が確認されている。

第56次調査は昭和61年度事業として、下城戸南半部分を発掘調査した。この調査区には用水があり、民家、製材所等による攪乱が予想された。しかし、巨石を積み上げた食い違い土塁SA3380、SA8881、及び枡形の空間地を南端で区切る東西方向の小土塁SA3382をはじめ門と見られるSI3387や、土塁に伴う石垣SV3388～3390を検出し、所期の目的をほぼ達成することができた。

平成6年度の第85次調査では下城戸の北半部分を発掘し、安波賀町以北へ続く道路にどのようにして接続するのか、という点に発掘調査の主たる目的が置かれた。調査の結果、外濠SD1409は山際に延びず、通路SS4400は土橋状に安波賀町側に連続していることが明らかとなった。



挿図9　第56・85次調査区周辺地形図

調査日誌抄

昭和61年　**第56次調査**

10／ 1　本日より調査開始。表土除去より始める。

10／24　西側土塁の崩落石を除去。城戸内側の掘り下げを継続するが、後世の撹乱が大きいことが判明。

10／25　西側土塁斜面部の遺構検出。

10／28　西側土塁前庭部の遺構確認。南側で石列（南側土塁）を確認する。

11／ 1　南側土塁の検出作業を継続する。下城戸出入り口の検出を開始し、砂利面を確認する。砂利面は３～４面を確認することができ、その比高差は約50cmである。

11／ 5　南側土塁の検出作業を継続する。土塁の西端が山斜面部に取り付いているのを確認。

11／ 7　城戸内側広場の遺構検出。下城戸前で、石列および柱穴列を確認する。

11／14　空中写真撮影のため清掃作業を開始する。

11／19　空中写真撮影をおこなう。

11/27~12/2　遺構写真撮影に伴う清掃作業。

12／ 2　写真撮影。

12／ 3　本日よりトレンチによる下層確認を開始する。下城戸土塁頂部、城戸内側広場にトレンチを設定する。

12／19　作業終了。

第85次調査

4／ 1　本日より調査開始。５日まで器材の搬入。

4／6~11　調査区の草刈、樹木の伐採。

4／13　下城戸通路部北側より掘削を開始するが、崩落石が通路を塞いでいるため作業が難攻する。

4／18　土塁石垣の根元まで掘り下げるが、石敷き等の施設は確認できない。

4／22　通路部分の掘削終了。

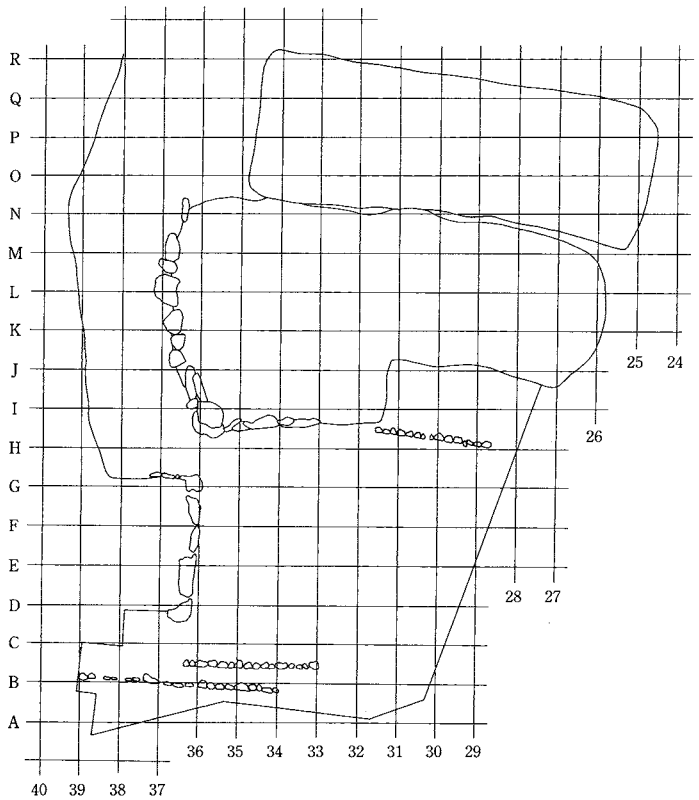
4/28~5/10　崩落石の搬出。

5／11　外濠にトレンチを設定し掘削を開始する。

5／13　外濠トレンチの調査を継続する。その結果、濠は西側の山までは達していないことが判明し、城戸からの通路が土橋となっていたことが確認された。

5／17　写真撮影のため清掃。

5／18　写真撮影ののち、器材撤収。



挿図10　第56・85次調査区グリッド設定図

２．遺構（第26～33図、ＰＬ30～38）

本調査区は現在の集落に近いということから、後世の改変が随所に認められ、遺構の残存状況は決して良好と言えるものではなかった。本地区において検出された遺構の内訳は、土塁4、建物３、溝１、門１、道路１、石垣４、その他７であった。

SX3400　調査区南端で検出した石列であり、延長3.4mを測る。

SA3382　前述の遺構SX3400に平行する形で検出された土塁であり、延長約16m、幅約1.6m前後を測る。後述する土塁SA3381の南側に位置し、西側の山斜面部より、東に向かって直線的に伸びる。東端については撹乱を受けているため不明である。本土塁は35次調査区で検出された町屋地区と下城戸地区を区画する土塁であると想定される。

SX3398　先に述べたSA3382にほぼ平行する石列であり、全長12mに渡って検出された。石列西端においてSA3382に接していることから、これに先行する一時期古い石列であると考えられる。

SA3381　西側の山斜面より突出するように構築された土塁であり、全長約10m、幅約11m、高さ4.5mを測る。幅については土塁南側が大きく削平を受けているため不明であるが、土塁端部に構築された石垣SV3390の全長より推定した。本土塁は後述するSA3380とほぼ平行かたちをとっており、この２本の土塁に挟まれた部分が城戸口となっている。本土塁の東面には先に述べたSV3390の石垣が、北面にはSV3389の石垣を有する。

SV3389　土塁SA3381の北面石垣である。崩落した石が大きすぎたため移動できなかったことから、充分な発掘調査ができなかった。原位置を保っていたのは東コーナーおよび、その西隣の２石にすぎない。崩落していた巨石より推定復原すると、高さ4.5m前後を測る石垣であったと想定される。

SV3390　土塁SA3381の東面石垣であり、全長14m、高さは最大4.5mを測る。石垣前面は砂利敷きを施されており、上層面と下層面の比高差は約0.5mを測る。その間に３～４面の砂利面を確認することができた。SV3389に接続する北コーナー石の所見によると、コーナー石は砂利面の最下層には達しておらず、この石を支える根石が上層付近に配列されていたことから、途中で積み直しされたものと考えられる。この積み直しが石垣全体にわたるものかどうかは不明であるが、一番南端とその北隣の２石についてはその痕跡が認められないため、部分的な修復であったと考えられる。

SI3387　先に述べたSA3381と、後に述べるSA3380に挟まれる形で作られた門であり、幅約３mを測る。後世の用水路が縦断していたことから撹乱がはげしく施設等の検出にはいたらなかった。

SA3380　いわゆる下城戸の土塁である。基底部では最大幅約18.5m、最小幅11m、長さ約36mを測り、上坦部では最大幅約14m、最小幅約5.5m、長さ28mを測る。高さは約4.5mを測る。土塁西側にはSV4401の石垣、南側にはSV3388の石垣を有する。土塁内側の西より中腹には平坦部を設けてをり、平坦部は基底部より高さ2.5mに位置する。幅４m、長さ９mを測る。この平坦部と上坦部の間には一部に石垣状の遺構SX3391とSX3392が検出されている。

SV3388　SA3380の南側石垣であり、全長10.7m、最大高4.8mを測る。西側コーナー基底部の石がもっとも大きく幅４m、高さ２m、厚さ1.5mを測る。コーナー部については上部の石も残存していたが、石垣前面にも崩落石が認められたことから、下段と上段の２石より構成されていたものと考えられる。また、石の周囲には鑿によると考えられる調整痕が多く認められることから、石垣を築く際には積みやすく、かつ安定をともなわせるために調整をおこなっていたものと考えられる。

SV4401　SA3380の西側石垣であり、城戸外と城戸内を結ぶ通路SS4400に面した石垣である。調査以前には周辺から持ち込まれたゴミ置き場や農業用水路による改変が大きかったものの、基底部の石が揃っていたため全長約18mであることが確認された。基底部の上に乗る２段目以上の石については接続するSA3380と接する南コーナー部において完存していた以外は前面に崩落していた。このコーナー部分と隣接する石垣の観察によれば、1段目にもっとも大型の石材を、2段目にはやや小さめ、3段目にはかなり小型の石材を用いている。残存している石材で計測すると1段目で最大の石材は幅約３m、高さ約1.7mを測り、2段目では幅約1.7m、高さ約２mを測る。また、最上段では幅0.8m、高さ0.9mを測る石材を使用している。発掘調査中に出土した崩落石材のうち大型のものは２～３石程しか検出されず、他の10点は最大でも縦・横１m、厚さ0.5m程度のものであったことから、その割合から石垣全体が３段積みであったとは想定し難いものと考えられるが、後世において大型の石材を他の用材として搬出された可能性も否定できるものではない。石材の積み方については基本的には自然石をそのまま積み上げる方法であるものの、石組みを安定させるため一部の石材については石の上面を鑿で削り水平に加工している。石垣の基礎構造については石材が前面に傾いていたため充分な調査は不能であったが、根石で固めたり地盤を突き固めたような痕跡は認められず、道路面より0.2～0.3m程掘りこんで設置している。

SX3391　SA3380の土塁内側西部に位置する中段部から上段部へ続く斜面に配置された石列である。直径20～30cm程度の石を組合わせて構築している。

SX3392　SA3380の土塁内側中央で中段部の東端に位置する。基底部から中段部への斜面に一つのまとまりが認められ、中段部および中段部から上段部への斜面にもう一つのまとまりが認められる。これら2ヶ所に別れて検出された石列ではあるものの、検出状況や石の規格性などから考えて当初は一つの石列であったものと想定される。

SX3393　SA3380の土塁内側基底部で検出された石列である。人頭大の石を用いて構築されており、SA3392に類似している。土塁内側全面に検出されているものではないが、土塁斜面部を保護する目的で構築されていた可能性も考えられる。

SX3394　SA3380の土塁内側基底部で検出された石列であり、全長2.9mを測る。

SX3397　城戸内広場で検出された柱穴列であり、全長約4.5mを測る。1ヶ所のみ直径0.6m前後の礎石が確認されたが、他の11ヶ所については直系0.2m弱の柱穴のみであった。

SA3383　SX3397の北側において検出された柵列であり、全長14mに渡って検出された。柱穴は直径0.3～0.4mを測るが、柱穴間は0.8～２mを測り一定していない。

SB3384　土塁SA3380の南側において検出された礎石建物であり、東西９mを測る。南北方向については礎石が残存していなかったため不明であるが、土塁裾までは約５mを測るため、それ以内の規模であったものと想定される。

SB3385　先に述べたSB3384のすぐ北側において検出された礎石建物であるが、２石のみしか確認できなかったため規模等は不明である。SB3384と同一の建物の可能性を想定することもできる。

SB3386　城戸内広場において検出された東西方向の建物であり、規模は東西3.8m（２間）・南北2.1（１間）mを測る。柱穴は直径0.3～0.5mを測り、柱穴内には柱の固定に使用したものと考えられる拳大の石が多数用いられていた。

SS4400　下城戸土塁SA3380と西側の山に挟まれた幅５m前後を測る道路であるが、西山裾が後世の用水路により削平を受けていたため、残存していた幅は約3.5m程であった。本道路は第17・36・42次

調査により確認された南北主要道であるSS495と下城戸広場を挟んで接続するものと想定される。道路構造としては土面が露出する構造であり、SS495で見られるような小砂利を敷詰めた構造を持つものではないことが確認された。

SD1409　第35次調査時に設定されたトレンチにより確認された下城戸外濠である。幅は約11mを測るが、深さについては完掘していないため不明である。第85次調査では西側山裾付近の構造を重点的に調査した。SS4400の下層調査では西側の山裾付近では地山を確認することができ、東側の濠寄りでは砂利の堆積層であることを確認することができた。また、濠内に堆積していた青灰色土が道路部分で途切れていることも確認することができた。これらの結果から、SS4400とSD1409の接続部分は土橋であったことを確認することができた。

3．遺　物（第34図～第37図　PL.27～PL.29）

ここで取り扱う遺物は、第56・85次調査区から出土した遺物群である。まず第56次調査区は第35次調査区に北接しており、面積は約1,200㎡である。遺物の総点数は5,426点と非常に少なく、1㎡あたりの密度は4.52点／㎡となる。これは本遺跡における出土傾向のうち最低の密度に属する。これは、城戸という軍事的施設のあった場所であるため、日常生活の場に比べると遺物の数がもともと少ないのと、調査区内に後世の用水路が通っており、また、かつて製材所が存在していたため遺構の攪乱が激しかったことも一因と考えられる。第85次調査区は第56次調査のときには未買収だった城戸の通路にあたる部分で、面積が400㎡と狭く、56次同様遺物が極端に少なかった。総点数は450点であり、面積1㎡あたりの密度は1.13点／㎡となる。

第56・85次調査区については以上のような状況から、整理の方法としては、56次調査区は表土・遺構攪乱層とトレンチ出土のものとに分けて報告し、85次調査区については遺構攪乱層出土ということで層位の分類等はせず報告する。出土遺物の内訳については表４・５のとおりである。遺物の分類については既刊の報告書を踏襲し、越前焼大甕・擂鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質皿は『朝倉氏遺跡発掘調査報告』1979年、染付は「15，16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　1982年、による。

器種			破片数	%
日本製陶器	越前焼	甕	445	8.2
		壺	108	2.0
		擂鉢	205	3.8
		鉢	26	0.5
		その他	2	0.04
		計	786	14.5
	鉄釉	碗	35	0.7
		皿	2	0.04
		壷	4	0.07
		その他	9	0.2
		計	50	0.9
	灰釉	碗	7	0.1
		皿	46	0.8
		香炉	1	0.02
		その他	5	0.09
		計	59	1
	土師質	皿	4070	75.0
		羽釜	71	1.3
		その他	5	0.09
		計	4146	76.4
	瓦質	その他	10	
		計	10	0.2
	国産	その他	4	
		計	4	0.07
小計			5,055	93.1

器種			破片数	%
中国製陶器	青磁	碗	47	0.9
		皿	11	0.2
		鉢	1	0.02
		香炉	4	0.07
		その他	2	0.04
		計	65	1.2
	白磁	碗	7	0.1
		皿	68	1.2
		坏	5	0.09
		計	80	1.5
	染付	碗	31	0.6
		皿	35	0.7
		鉢	1	0.02
		坏	2	0.04
		計	69	1.2
	その他		2	
	計		2	0.04
朝鮮製	その他		13	
	計		13	0.2
輸入陶磁器計			229	4.2
陶磁器計			5289	97.4

器種			破片数	%
金属		釘	52	0.95
		銭	14	0.23
		その他	6	0.1
	計		72	1.3
石製品		砥石	4	0.07
		硯	9	0.2
		その他	48	0.88
	計		61	1.1
近世	陶磁器類		9	
計			9	0.17
合計			5426	100

表４　第56次調査出土遺物一覧表

表土・遺構攪乱層出土遺物（第34・35図）

表土・遺構攪乱層からの遺物は、越前焼・土師質土器・国産陶器・輸入陶磁器などがあった。越前焼・土師質土器の割合が高かったが、破片が細かく、接合できるものも少ないため、図示できる遺物はわずかであった。

越前焼　越前焼は破片の半分以上が甕であったが、接合するものは少なく個体数は不明であった。（411）・（413）はⅣ群ｂに属する大甕の破片である。（412）の大甕は口縁部が三角形に肥大したⅣ群ｃに属する。（414）は口縁のみであるがⅢ群ｂに属する大甕とわかる。（415）は口径30.2cmを測る小型の甕で、口頸が真っすぐ立ち上がり、口縁が少し肥厚している。胎土は赤く焼き上がり、内面には粘土帯の継ぎ目と指頭圧痕が残り、口縁には2.5cm間隔で放射線状に工具で押した痕ある。（416）は口縁が三角形に肥大した壺で、焼成は赤く粗い。（417）は口径6.1cmの小型の壺で、内面の口頸部には指頭圧痕が残る。（418）は口径15.0cmの壺で、口縁部は垂直に立ち上がる。（419）は口径13.6cmの内湾する鉢で胎土は灰黒色で堅く焼き締まっており、口縁部は内側に押さえ込まれている。（420）は口径27.8cmの鉢で、焼成は赤褐色でやや粗い。擂鉢はⅣ群のものが多い。（421）・（422）は口径25.0cm以下の小型の擂鉢で、擂目は詰まって、見込みにも入っている。底部から粘土を積み上げる際に指で強く押さえてナデ調整をしている。（423）はⅢ群ｂの擂鉢で口径31.2cm、11条1単位の擂目が入り、よく使い込まれていて摩耗している。（424）はⅢ群ａで8条1単位の擂目を有し、焼成は良好である。（425）～（427）・（430）・（431）はⅣ群である。（428）は口径28.4cmでやや焼成があまく、下部1/2は摩耗が激しく擂目が消えかかっている。（429）はⅢ群ｂのもので胎土は白く焼成不良で擂目はほとんど消えている。（432）は薬研で焼成は良好で胎土は灰黒色に焼き締まっている。しっかりとした台部に厚い体部がつけられ、内面はよく使用されて釉が摩耗して剥げている。越前焼の薬研は46次出土の完形のもののほか破片も含めて10点以上出土しているが金属製のものは出土していない。第35次調査区の下城戸外濠トレンチからも越前焼の薬研が出土したが別の個体であった。薬研車は出土しなかった。

土師質土器　土師質皿が破片数では75.0％と高い割合を示している。羽釜も破片が71点あり、1.3％と他地区に比べると高い割合を示しているが、小破片のため図示しなかった。（433）はＢ類の皿で口径6.4cm、器高1.7cmを測る。（434）～（440）はＣ類で、（437）は口縁にまんべんなくタールが付着しているが、それ以外は灯明皿として使用した痕跡はない。（440）は口径10.7cmを測り、口縁部下のナデ調整が強く残る。

瀬戸・美濃焼　（441）は口径12.0cmを測る鉄釉碗である。胎土は赤っぽく焼けており腰部下にはシブ鉄が塗布されている。（442）も鉄釉碗だが口径は7.0cmと小型で、口縁下の屈曲もなく、腰部以下は露胎になっている。（443）は鉄釉茶入で口径6.6cmで胎土は灰色で焼き締まっている。口縁部は断面が三角形で特徴的である。腰部より底部にかけてはシブ鉄が塗布されている。（444）は同じく茶入の底部である。底部ぎりぎりまで釉がかけられ、その下にはシブ鉄が塗られている。底には回転糸切りの痕が残る。（445）・（447）は端反の灰釉皿である。（447）は口縁部が内湾するタイプで口径11.0cm、器高2.9cmを測り、釉が全面にかかる。付け高台で高台裏には輪トチンの痕が残り、見込みには菊の印花文がある。

中国製陶磁器　（448）は無文の青磁碗の底部で、見込みには「顧氏」銘が入る。第15・25次調査区からも同様の青磁碗が出土している。厚い高台には碗が割れた後で打ち欠いた痕があるが、その用途は不明である。（450）は口径6.6cmの青磁香炉で、胴部がやや脹らみ丸みを帯びて、口縁部は内側に折れる。体部外面に3本の沈線がめぐる。小型で掌に乗せて香を楽しむ聞香用の香炉であるが、このような

口縁の形のものは少ない。(451) は端反タイプの白磁皿で、口径10.0cm、器高3.0cmを測る。(452) は口径12.4cm、器高2.3cmを測る白磁の皿で、削りだした高台脇から外反気味に大きく開き、胎土は緻密で完全に磁器化している。白みの強い釉がかかるが内外面とも下部は露胎になっている。(453) は口径11.8cmを測る端反りタイプの染付皿である。口縁内面に四方襷、見込みには蓮池文が描かれる。(454) も口径11.2cmを測る黒釉の碗で、口縁は細く尖っていて露胎となっているので覆輪が付いていたと思われる。胎土は黒く堅く、釉は口縁部では茶色で体部へと禾目状にかかり、内面は線がはっきりと浮かび上がるが、外面はほとんど出ていない。二次的に火を受けたため、釉が火膨れを起こしている。

石製品　石製品としては砥石・硯・石仏・石塔が出土したが、砥石・硯は小破片のため図示しなかった。石仏・石塔は地蔵菩薩像が3体・五輪塔5体・石龕6個・不明1体が出土した。挿図10のaの地蔵菩薩像は像はほぼ残存しており、像高約41cmを測る。周囲が欠けているため法名や年月日は不明である。bは上部のみ残るもので法名は「盛」の1文字がわかり、永禄年間の造立であることがわかる。光背や銘文の線刻や錫杖の部分には朱が残り微量の金箔も残っていることから、これらの部分には金箔が貼られていたことがわかる。もう1体は頭部のみで高さ18.5cmを測る大型石仏である。

五輪塔は一石五輪塔の空輪・風輪が4体と浮彫の五輪塔が1体出土した。板石に五輪塔を浮彫したものは、割れているが中央に石仏が1体、左右に五輪塔が1体づつ彫られたものと推測できる。このほか大型石仏の光背部分と思われるものは正面に「弘治貳年丙辰」とあり、挿図cのように側面には2行にわたって法名と思われる文字が線刻してある。盛源寺の不動明王像も同じ弘治2年に造立されたのだが同じく複数の法名が線刻されている。このように複数の名前がある場合、一族の供養をまとめて行っているものと、何人かで出資しあって1つの石仏を建立する場合と2通り考えられる。銘文が1部分だけなので確定はできないが子供の法名がないことや、側面に彫られていることから、自らの供養のために複数で出資して建てた石仏ではないかと考えられる。

挿図10　第56次調査出土石仏と拓本

第56次トレンチ出土遺物（第36図）

第56次調査のトレンチから出土した遺物は越前焼・土師質土器・中国陶磁器等があったが、土塁築造以前の下層のため数が少なかった。

越前焼　（455）はⅢ群ｂの擂鉢で、胎土は灰黒色で焼成良好で、10条1単位の擂目を持つ。

土師質土器　（456）～（460）は口径10.0cm以下のＣ類のⅢである。（456）は口径6.5cm、器高1.6cmを測り、胎土は白く、底部は丸く口縁部はナデ調整されている。（457）も同様の器形で、口縁部にタール痕がある。（458）は口縁部器壁が厚く、返しも弱い。（461）はＢ類のⅢで口径8.8cm、器高2.2cmを測り、外面は全体に指頭圧痕が残る。（462）～（464）は口径が10cmを超えるＣ類のⅢで、（462）は口縁部のナデ調整が強く残る。器高2.0cmを測る。

中国製陶磁器　（465）は線刻の蓮弁文青磁碗で、口径13.8cmを測り、胎土は灰色で完全には磁器化していない。青灰色の釉には細かい貫入が走る。同じく（466）も蓮弁文青磁碗で、割れ口に漆の被膜が残っており、接着して再使用されたことがわかる。（467）は青磁碗の底部で、胎土は黄色みを帯びて粗く、完全には磁器化していない。（468）は染付碗で口径11.8cmを測り、口縁部に波涛文帯がめぐる。（469）は口径6.0cm、器高4.0cmを測る碁笥底の染付坏で、口縁に1本、体部下に2本界線あり、その間に飛馬文と如意雲文が描かれる。

朝鮮製陶磁器　（470）は朝鮮製の白磁碗で、乳白色の釉がかかり、胎土は堅緻で磁器化している。高台径は5.8cmを測り、大形の碗であることがわかる。高台は断面三角に削り出され、底部中央は厚くなっており、高台内は露胎になっている。

第85次遺構攪乱層出土遺物（第36図）

第85次調査区は下城戸の通路部分であるため、もともと遺物が少ない場所であったと考えられ、さらに農業用水も流れていたので、遺物は非常に少なく、わずかに450点が出土した。また遺構攪乱のため近世の遺物も多く混入しており、1/4は後世の生活用品であった。越前焼・瀬戸美濃焼・土師質土器・中国製陶磁器などが出土した。瓦質風炉も出土したが小破片のため図示できなかった。

器種			破片数	%
日本製陶器	越前焼	甕	52	
		壺	4	
		擂鉢	7	
		桶	1	
		計	64	14.2
	鉄釉	碗	4	
		Ⅲ	1	
		計	5	1.1
	灰釉	Ⅲ	2	
		計	2	0.4
	土師質	Ⅲ	215	
		計	215	47.8
	瓦質	風炉	2	
		計	2	0.4
	小計		288	63.9

器種			破片数	%
中国製陶器	青磁	碗	2	
		Ⅲ	7	
		計	9	2
	白磁	碗	1	
		Ⅲ	7	
		計	8	1.8
	染付	Ⅲ	1	
		計	1	0.2
輸入陶磁器計			18	4.0
陶磁器計			306	68

器種			破片数	%
金属		銅銭	4	
		釘	3	
		キセル	2	
		その他	15	
		計	24	5.4
石製品		バンドコ	3	
		硯	2	
		盤	1	
		鉢	1	
		石仏	2	
		玉石	1	
		その他	5	
		計	15	3.3
木製品		その他	2	
		計	2	0.4
近世	陶磁器類		103	
計			103	23
合計			450	100

表５　第85次調査出土遺物一覧表

越前焼　越前焼の破片は8割が甕の破片であった。(471) はⅣ群ｃに属する大甕で、胎土は赤褐色で外面肩部にヘラ描きとスタンプを持つ。(472) ・ (473) は中甕で口縁の肥厚が少なく、真っすぐ高く立ち上がる。(474) ・ (477) は中甕だが口縁帯を持ち古い形態で、胎土は灰黒色で焼成は良好である。(475) ・ (456) は小型の甕である。(478) はⅣ群に属する擂鉢で、8条1単位の擂目を持つ。

瀬戸・美濃焼　(479) は鉄釉壺である。胎土は灰色で焼き締まっている。(480) は碁笥底の内湾する灰釉皿で、口径9.5cm、器高1.5cmを測る。底部にトチン痕が残る。

中国製陶磁器　(481) は端反の青磁の皿で口径13.8cmを測る。胎土は完全には磁器化しておらず、青灰色の釉が厚くかかり外面に釉垂れが見られる。(482) はＣ群Ⅲ類の染付皿で、碁笥底で見込みに人形化した「喜」の文字が描かれる

下城戸出土遺物（第36・37図）

下城戸出土銅銭　下城戸横の川底から出土した銅銭で、バラのものと緡銭の状態のものを寄贈された。緡銭は藁紐の通った状態で出土し、腐食して錆でくっついている。布に包まれていたか袋に入っていたらしく、表面にわずかに繊維が残り付着している。紐の残った状態の緡銭は第57次調査区の井戸からも出土しているが、この緡銭は枚数が69枚確認でき、1緡に近い。個々の銭種については接着しているためバラして調査はしなかった。バラの銅銭については状態も良く、錆や腐食はほとんどなかった。銭種の内訳については表６のとおりである。

挿図12　下城戸出土緡銭

金貨名	初鋳造年	枚数	図版番号	タイプ数	金貨名	初鋳造年	枚数	図版番号	タイプ数
中国					皇宋通宝	1039宋	4	500～502	3
開元通宝	621唐	3	483·484	2	嘉祐通宝	1056〃	1	503	1
乾元重宝	758〃	1	485	1	治平元宝	1064〃	4	504～506	3
宋通元宝	960宋	1	486	1	治平通宝	1064〃	2	507·508	2
太平通宝	976宋	3	487	1	熙寧元宝	1068〃	3	509～511	3
淳化元宝	990〃	2	488	1	元豊通宝	1078〃	2	512·513	2
至道元宝	995〃	3	489·490	2	元祐通宝	1086〃	1	514	1
咸平元宝	998〃	2	491	1	紹聖元宝	1194〃	1	515	1
景徳元宝	1004〃	2	492·493	2	大観通宝	1007〃	1	516	1
祥符元宝	1008〃	1	494	1	政和通宝	1111〃	1	517	1
天禧元宝	1017〃	3	495·496	2	正隆元宝	1167～78金	1	518	1
天聖元宝	1023〃	6	497～499	3	合計		48		36

表６　下城戸出土銅銭一覧表

4．小結

遺構

後章で述べる上城戸との関連で、下城戸の全体的な概観把握のために若干の補足を行いたい。

現状では発掘調査が行われていないこともあり、確かなことは不明とせざるを得ないが、川東部分にも城戸の一部分が遺存していることは、現地踏査によって明らかである。ただ、後世に重なる河川の氾濫によって相当規模の崩落が過去にあったことは十分に考えられる。しかし、出雲谷の北側から踏査していくと、下城戸西側の土塁SA3381に相対するかのように土塁状高まりが今も残っているのが確認され、基部と見られる部分には石垣も残っている。また外濠SI1409に対応する掘跡もはっきりと確認できる。この点については、『朝倉氏遺跡発掘調査報告書』（1976年発行）でも若干触れているところであり、将来的には指定部分の拡大、公有地化が実現した段階で改めて追加の発掘調査が必要な場所と考えられる。

川東側の土塁状高まりは杉林となっており、現状では2段階確認され、いずれも基底部分に石垣を残す。幅は西側土塁SA3381とほぼ同規模であり、同時期に構築されたか、との観を抱かせる。この土塁に隣接して南側は平坦地となっており、この状況も西側の枡形空間地の在り方と共通している。ただ、旧河川敷と見られる西端部分は玉石による護岸石垣が並んでおり、この部分は旧状を留めない。

土塁の北側の濠と見られる落ち込みは、やはり西側の外濠と相対して、幅も殆ど同規模である。川側は葦や蔓性の雑草が茂り、現状ではあまり見通しが利かない。しかし、山側は約30mほど落ち込みが続き、そのまま急斜面となって這い上がっている。（第Ⅳ章小結、挿図25参照）。西側で見られる通路のような道は見当たらない。従って現状観察での推測が許されるならば、東側では土塁、外濠を川側から突っ切っていく以外、北へ抜け出ることは困難で、出雲谷は閉塞された空間地区を呈していると見られる。西側の第35次調査で確認された、町屋に面する道路が大きくカーブして、真正寺へ向かう地点辺りで、出雲谷へ繋がる橋が架けられていたことが想定される。

下城戸東側は第20次調査における出雲谷の発掘調査以外に調査例がなく、町割の様相も憶測の域を出ないのが実情である。美山町三万谷を背後に控えた出雲谷の防衛的な役割や、一乗谷内での位置付けについては課題も多く、今後の調査事例の増加を待って検討を進めたい。

遺物

本調査区において出土した遺物について、若干のまとめと展望を試みる。

第56次調査区は遺物総点数が5,426点と少なく、遺構の撹乱が激しかったことと、城戸という軍事的施設のあった場所であるという2点がその理由と考えられる。

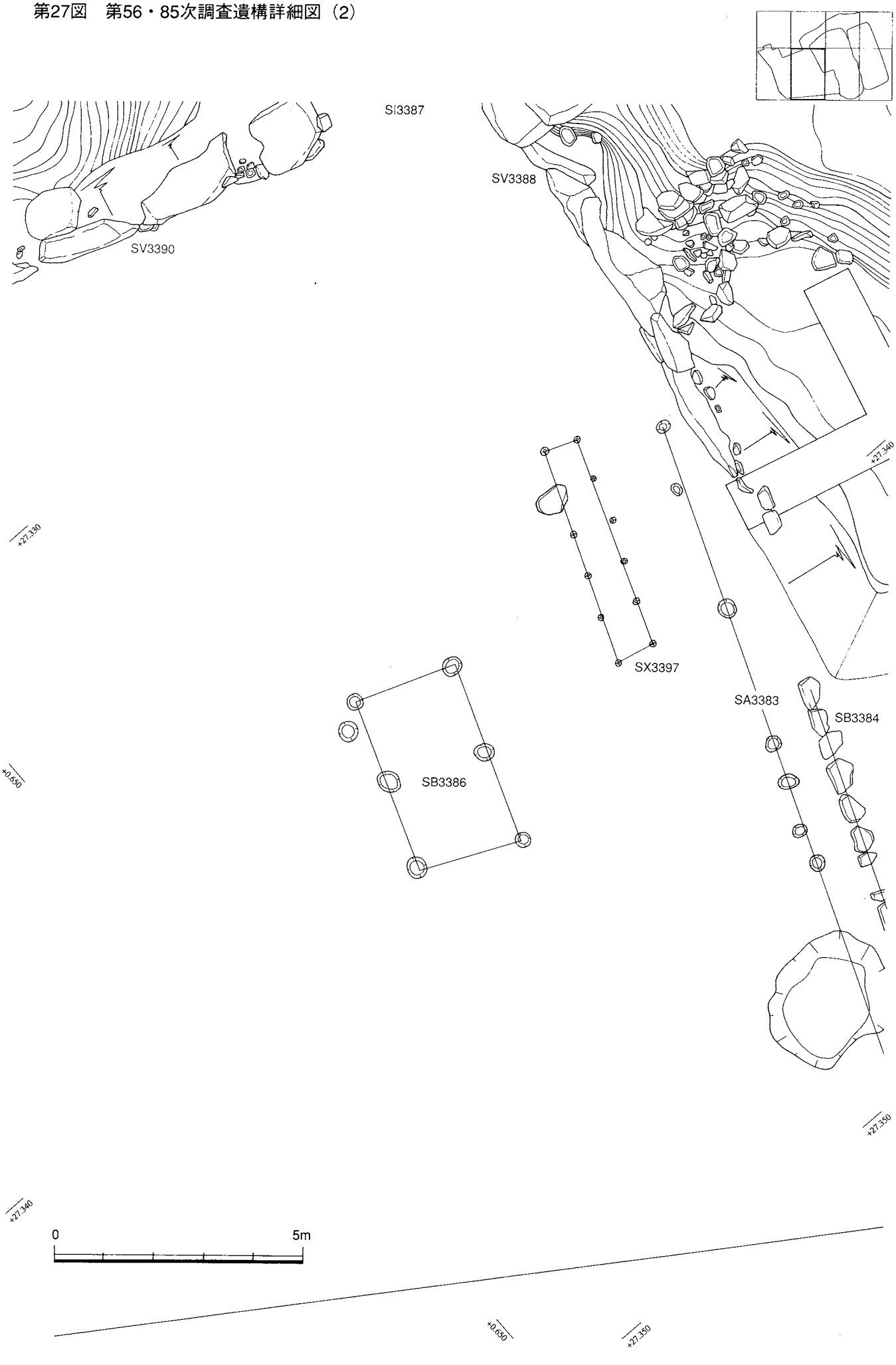
遺物の割合をみると、日本製陶器93.1％、中国製陶磁器4.2％であった。第52次などと比較すると中国製陶磁器の割合が低いといえるが、第35次や平井地区の武家屋敷等の割合と比較しても特別低いとはいえず、遺物の割合から施設を特徴づける点は見られない。ただ、土師質土器の羽釜の割合は他と比較して高い。

第85次調査区は城戸の通路部分ということで、遺物総点数が極端に少なく、特記する点はみられなかった。

本調査区は後項で述べる第61・62次調査区の上城戸と同様、軍事的施設の性格をもつ地区である。しかし、前者の上城戸においては、堀の部分と、城戸に沿って東西に延びる道路があり、また屋敷が隣接して確認されたことなどにより、相応の遺物の出土が確認されている。この点と比較しても本調査区における遺物の出土状況は量的にも種別の内容等からしても貧弱と思われる。食い違い土塁によって囲われた枡形を呈する空間地を中心に、通路部分や土塁の頂上など遺構の多くが後世の削平、撹乱が行われていることは、既に前節で触れてきたとおりであり、如何ともし難い。

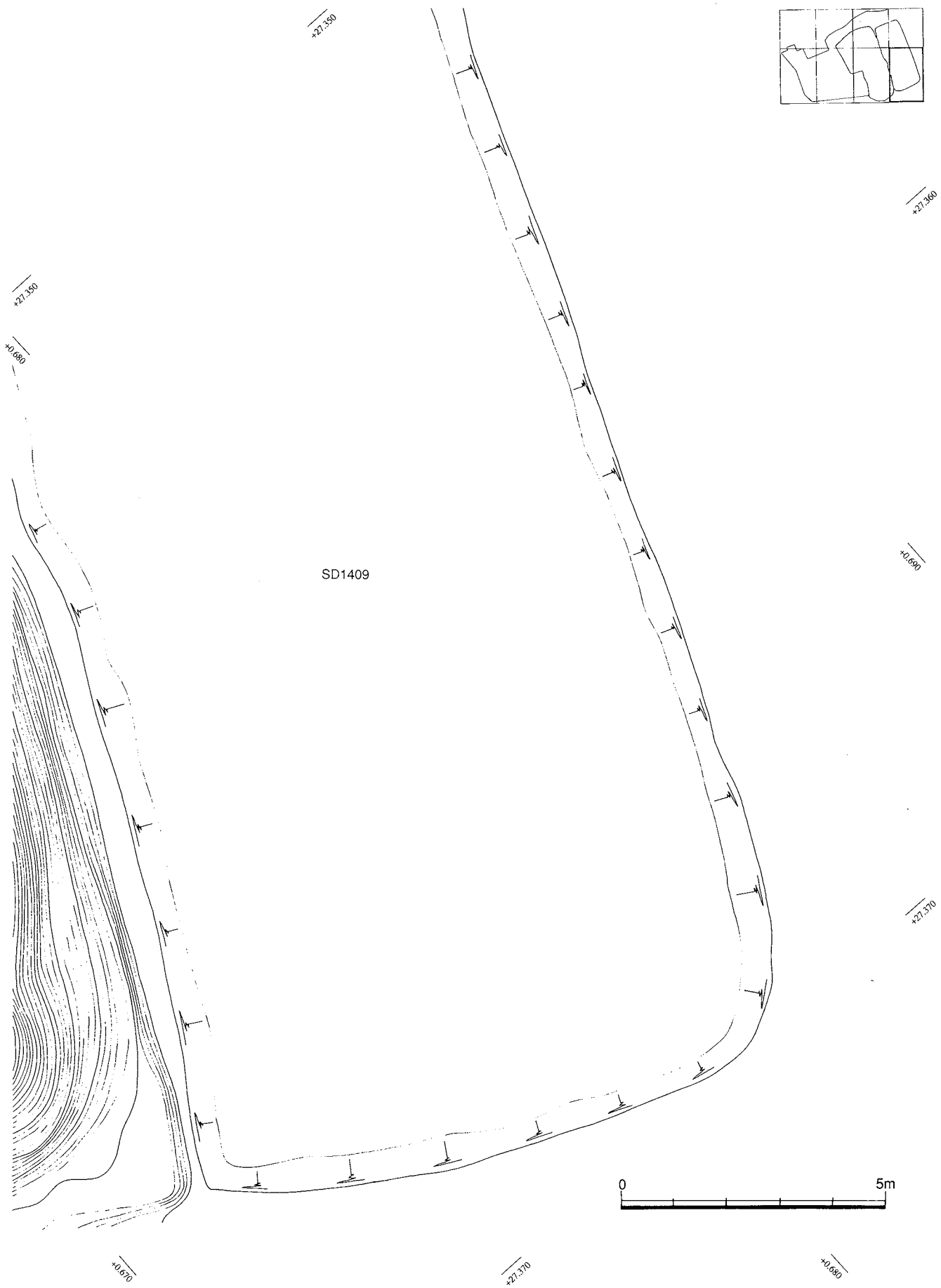
第26図　第56・85次調査遺構詳細図（1）

第27図　第56・85次調査遺構詳細図（2）

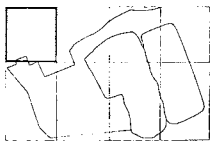


第28図　第56・85次調査遺構詳細図（3）

第29図　56・85次調査遺構詳細図（4）



第30図　第56・85次調査遺構詳細図（5）



+0.660

+27.410

+0.650

+27.310

+0.650

0　5m

第31図　56・85次調査遺構詳細図（6）

第32図　第56・85次調査遺構詳細図（7）

第33図　56・85次調査遺構詳細図（8）

第56・85調査
空中写真

第56次調査
調査区全景

（南から）

（西から）

（東から）

第56次調査
主要遺構

SA3380
SV3390
SI3387
（東から）

SA3380
SA3381
SX3398
SV3390
（東から）

SA3381
SV3390
（東から）

第56次調査
主要遺構

ＳＡ３３８０
ＳＶ３３８８
（南から）

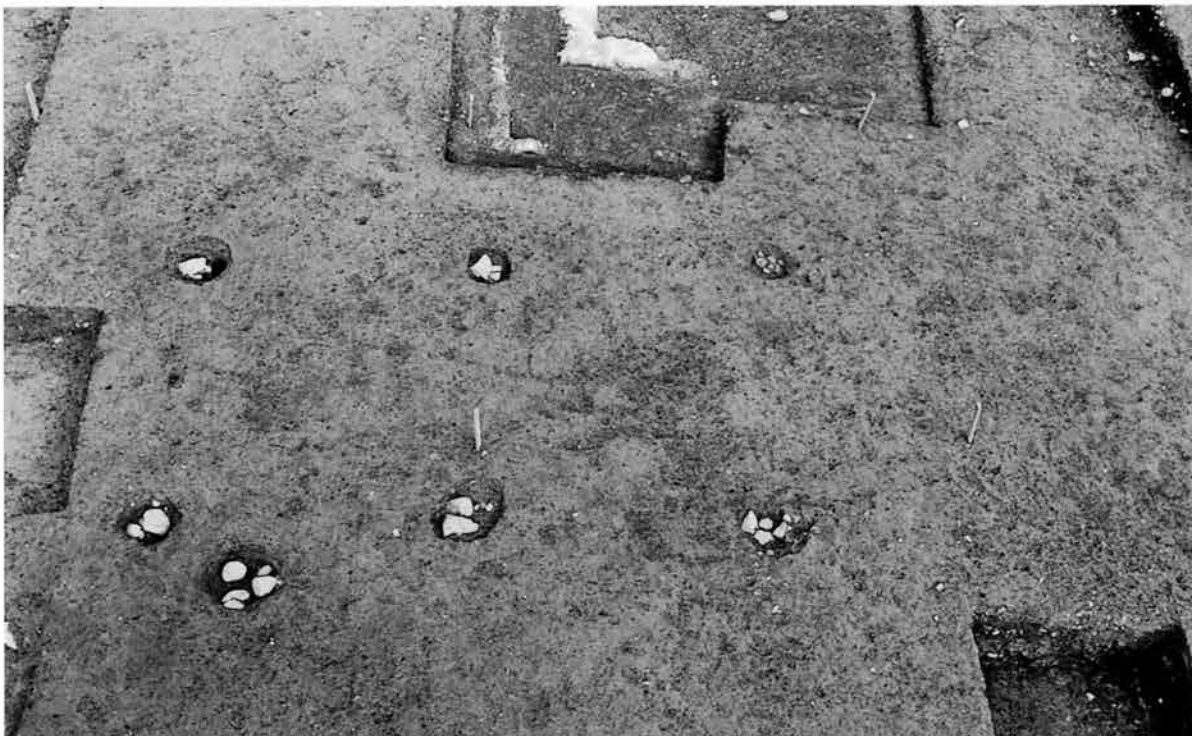
ＳＡ３３８０
ＳＡ３３８３
ＳＢ３３８４
（南から）

ＳＡ３３８０
（東から）

第56次調査
主要遺構

ＳＡ３３８０
（東から）

ＳＢ３３８４
ＳＢ３３８５
ＳＸ３３９３
ＳＸ３３９４
（南から）



ＳＢ３３８６
（南から）

第85次調査全景

（北から）

（南から）

第85次調査
主要遺構

ＳＳ４４００
（北から）

ＳＶ３３８８
ＳＶ４４０１
（西から）

ＳＩ３３８７
（東から）

第85次調査

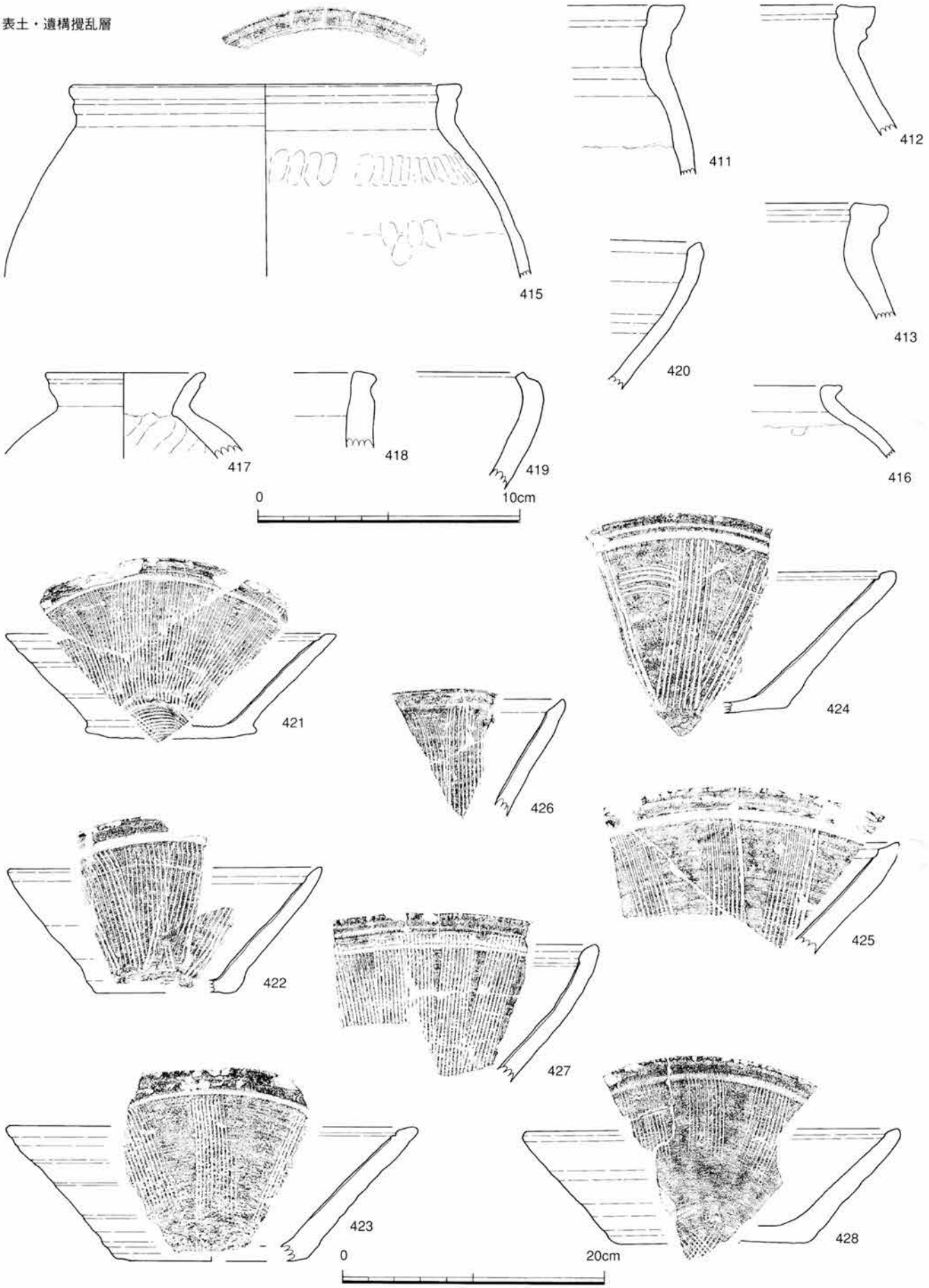
ＳＶ４４０１
（西から）

同上

同上

第34図　第56・85次調査出土遺物（1）

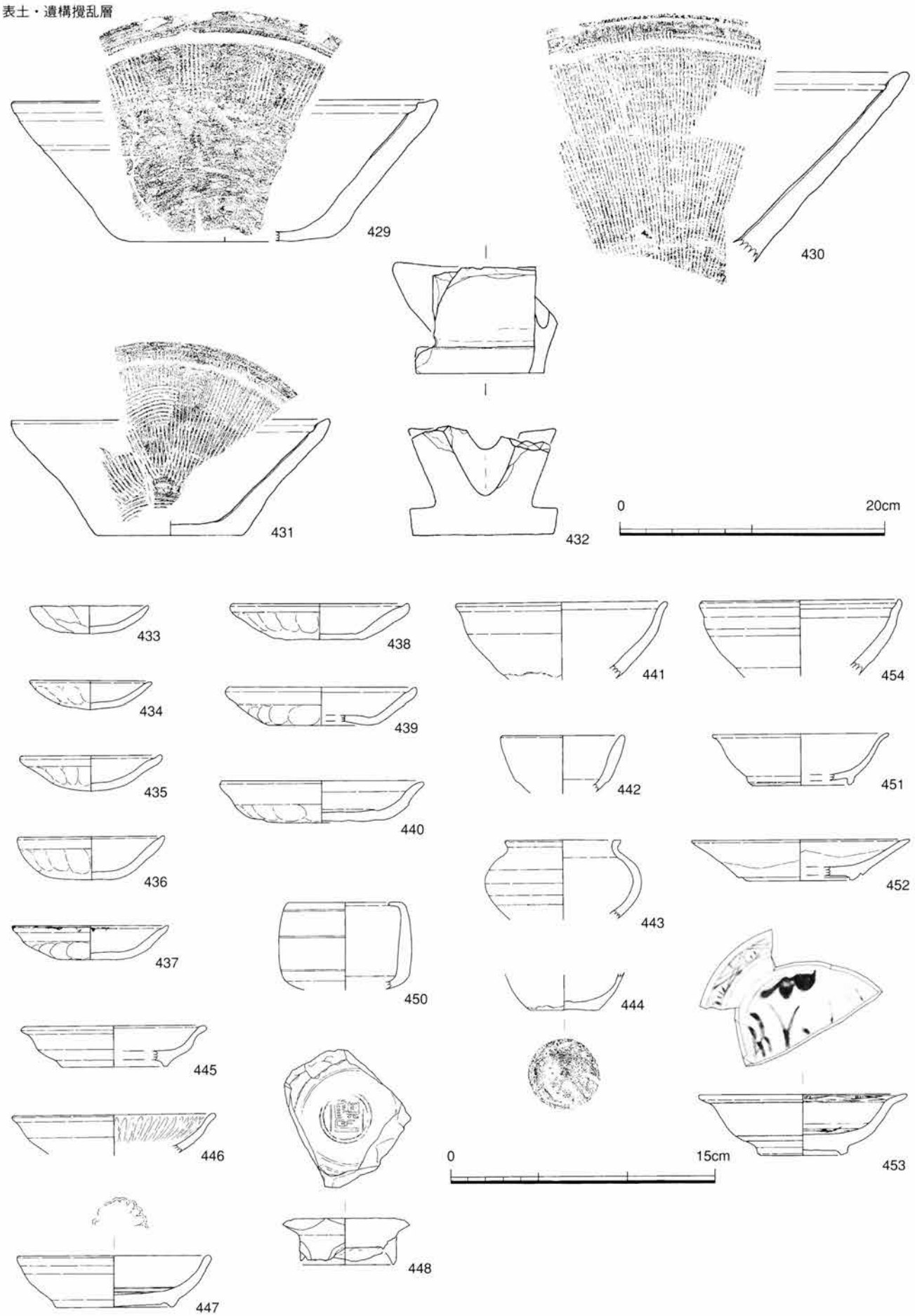
表土・遺構攪乱層



越前焼甕411～413・415　壺416～418　鉢419・420　擂鉢421～428

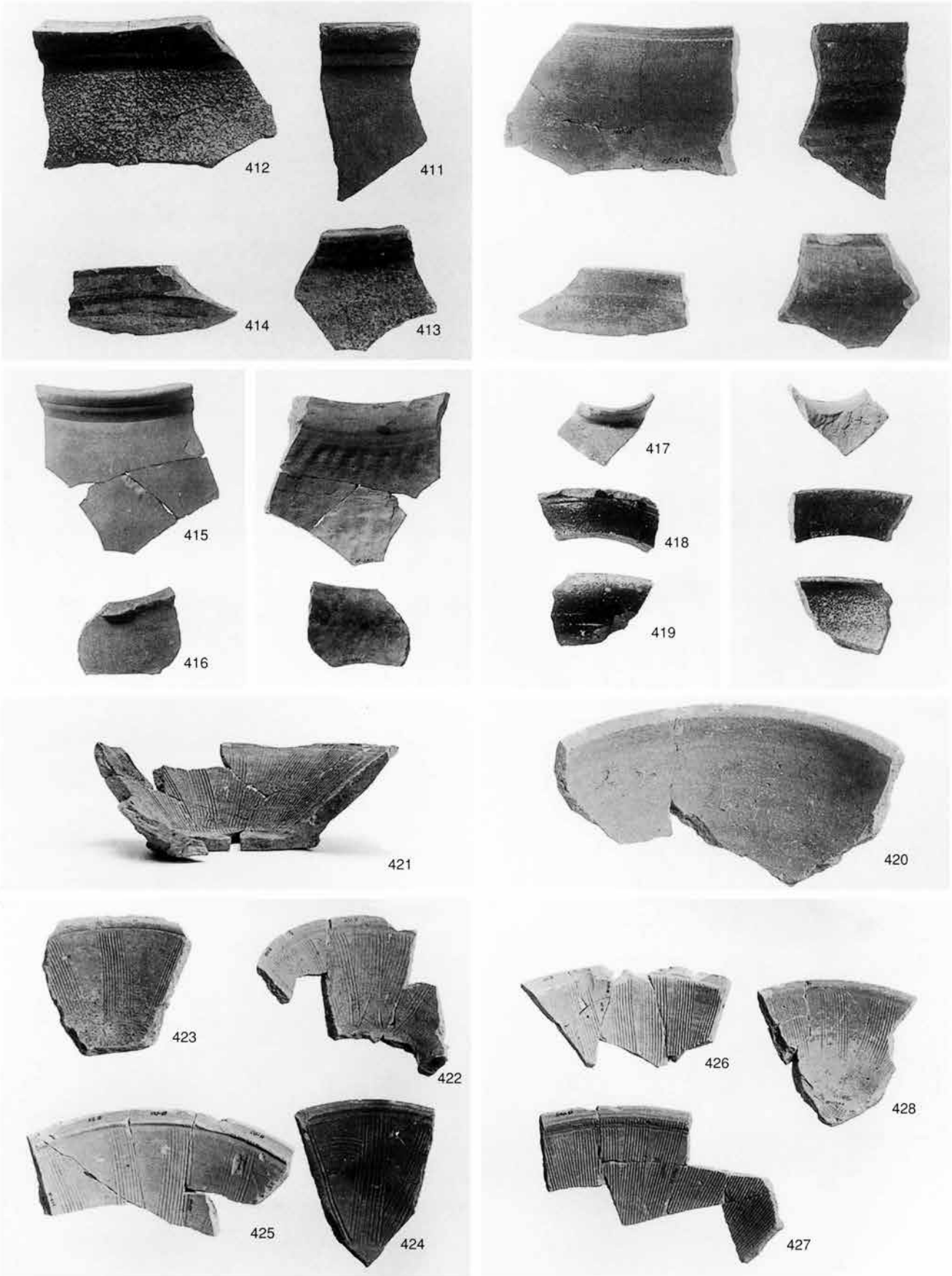
第35図　第56・85次調査出土遺物（2）

表土・遺構攪乱層



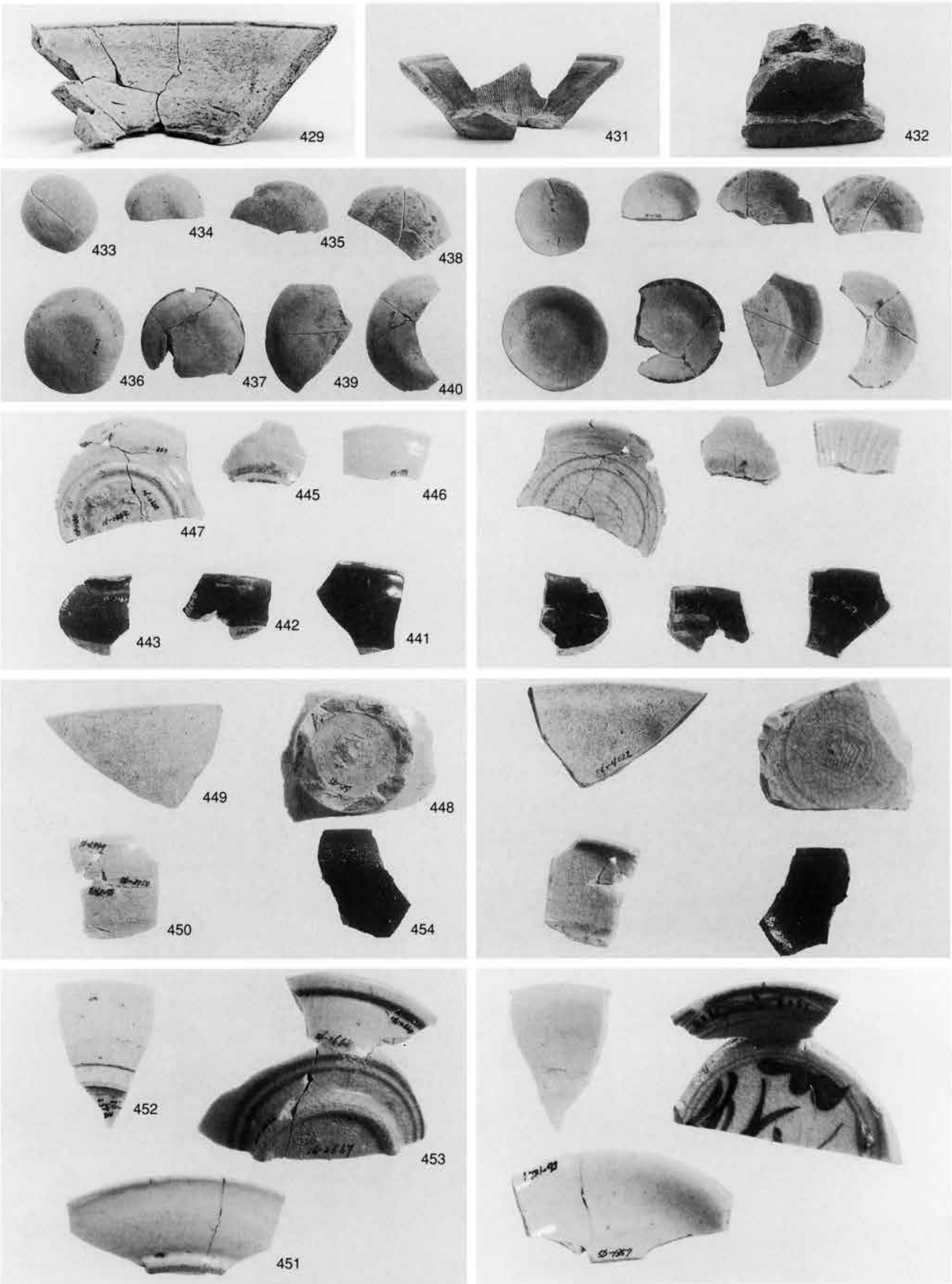
越前焼擂鉢429～431　薬研432　**土師質**皿433～440　**鉄釉**碗441・442　茶入443・444　**灰釉**皿445～447　**青磁**碗448　香炉450　白磁皿451・452　**染付**皿453　**黒釉**碗454

第56・85次調査出土遺物（1）



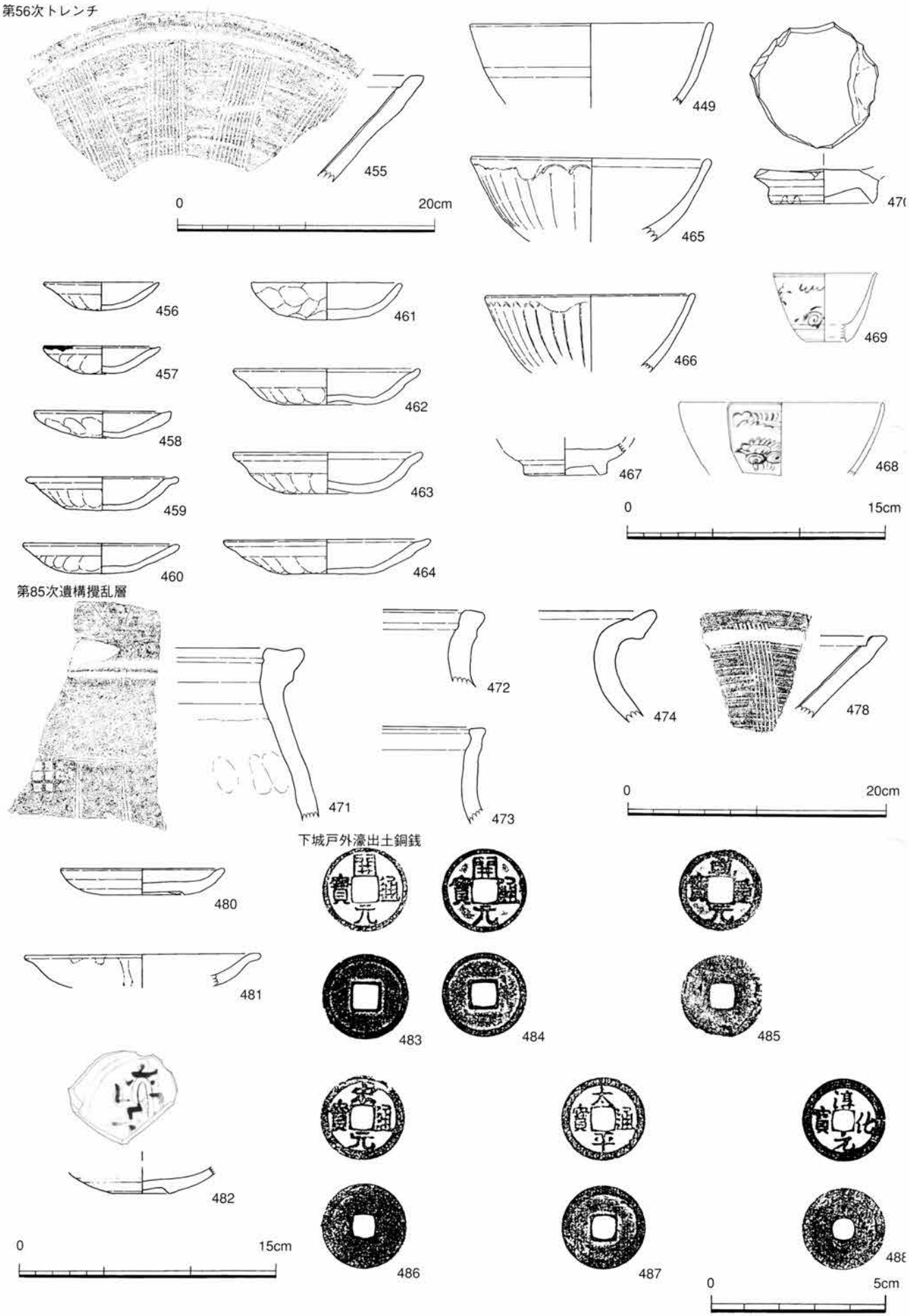
表土・遺構撹乱層 **越前焼**甕411～415　壺416～418　鉢419・420　擂鉢421～428

第56・85次調査出土遺物（2）



表土・遺構撹乱層 **越前焼**擂鉢429・431　薬研432　**土師質**皿433～440　**鉄釉**碗441・442　茶入443　**灰釉**皿445～447　**青磁**碗448　香炉450
白磁皿451・452　**染付**皿453　**黒釉**碗454
56次トレンチ **青磁**碗449

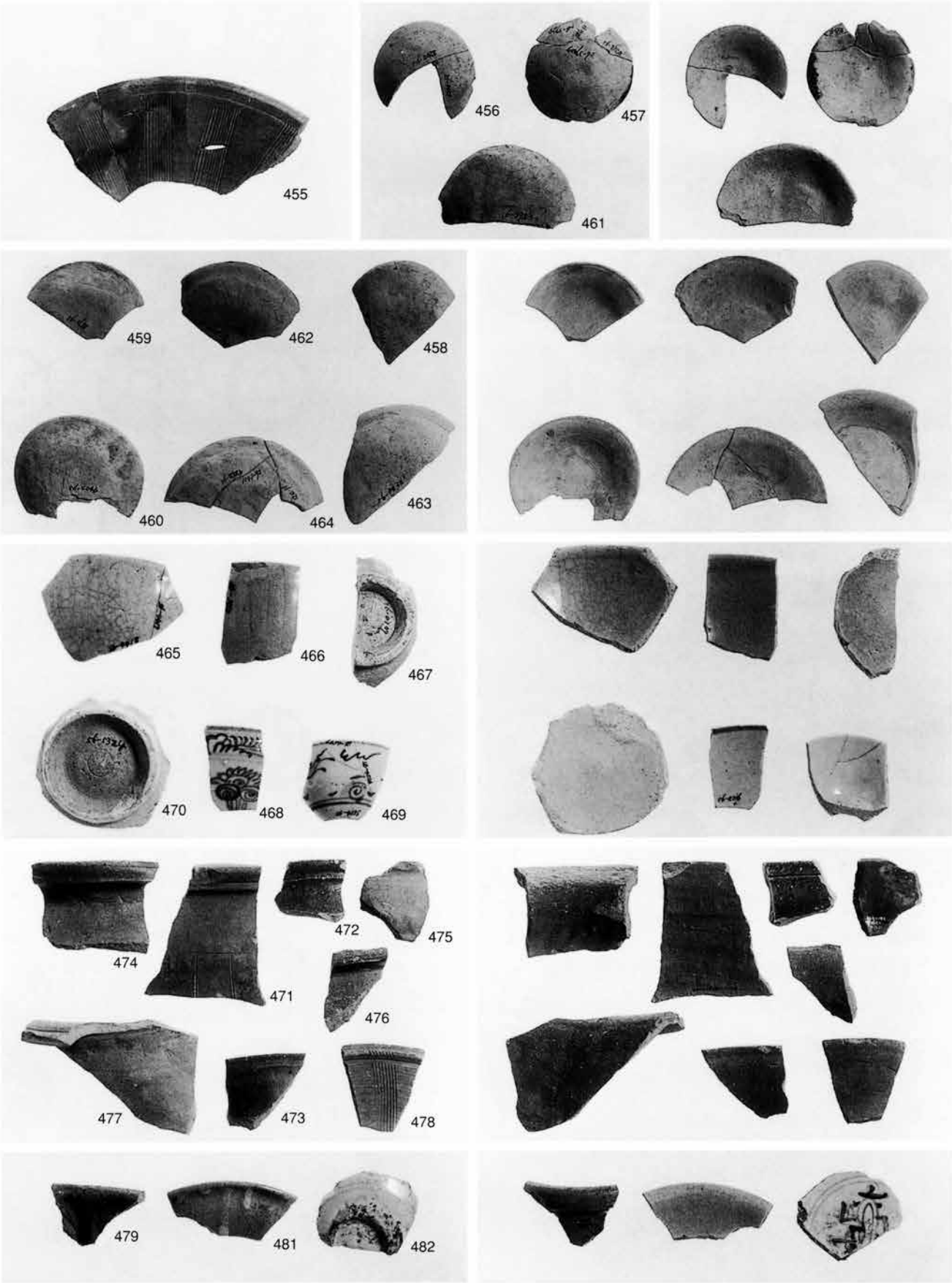
第36図　第56・85次調査出土遺物（3）



越前焼甕471～474　擂鉢455・478　**土師質**皿456～464　**灰釉**皿480　**青磁**碗449・465～467　皿481　**染付**皿482　碗468　坏469　**朝鮮製白磁**碗470

下城戸外濠　出土銅銭483～488

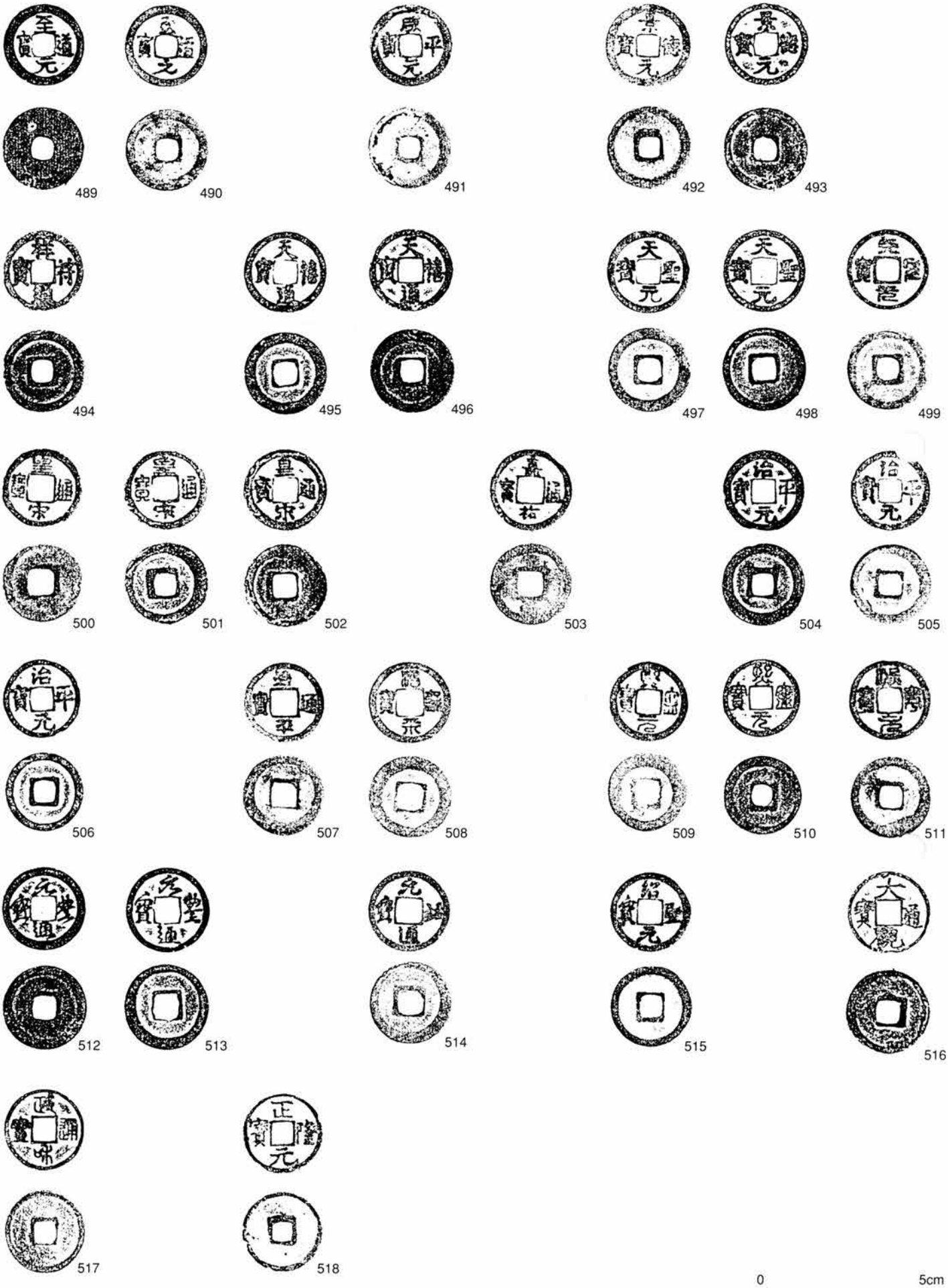
第56・85次調査出土遺物（3）



第56次トレンチ 越前焼擂鉢455　土師質皿456～464　青磁碗465～467　染付碗468　坏469　朝鮮製白磁碗470

第85次遺構撹乱層 越前焼甕471～477　擂鉢478　鉄釉壺479　青磁皿481　染付皿482

第37図　第56・85次調査出土遺物（4）



下城戸外濠 出土銅銭489～518

Ⅳ 第 61・62 次 調 査

Ⅳ　第６１・６２次調査（上城戸）

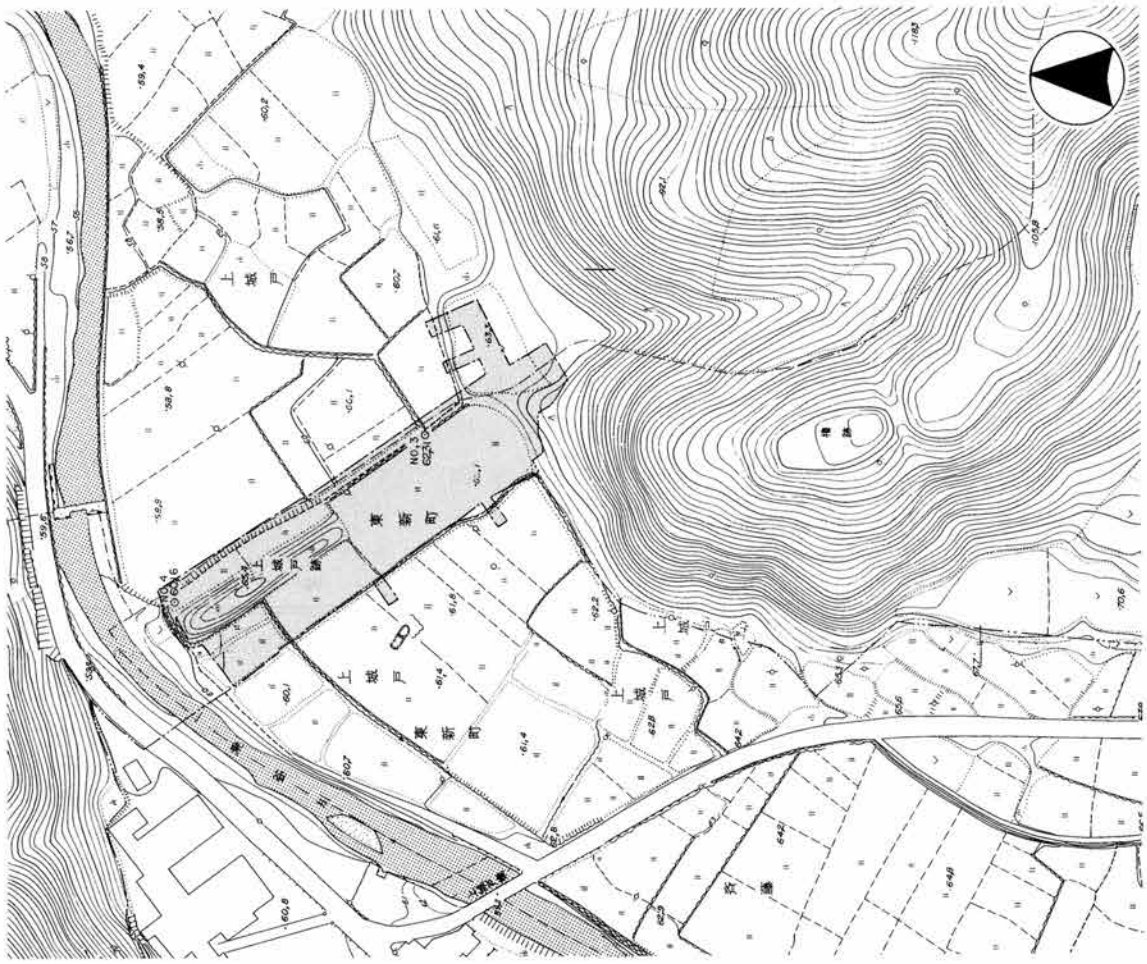
１．調査の経過と概要

１）位置（挿図13）

上城戸は東西に延びる土塁の尾根線を境界として、北側を福井市城戸ノ内町字上城戸、南側を同東新町字上ノ木戸に折半した状態で位置する。朝倉館からは直線距離にして500m南にある。一乗谷川が蛇行しながら西端を北流している。過去、幾度かの洪水、土砂流失の自然災害があったものと見られ、西端土塁石垣の南半分では崩壊・散逸が認められる。また、土塁自体も濠側の開田の土盛りに使用されたものか、東側半分が削り取られ、更には昭和45年前後の一乗地区土地改良工事の際の削平に会っている。

２）歴史的・地理的環境

上城戸については、『朝倉始末記』（「日本思想史大系17」岩波書店刊所収）巻三「永禄十一年五月十七日朝倉屋形へ御成御門役辻固ノ事」において、５代当主義景が足利義昭を館に招いて歓待した折の城下町の警固の様子を記した一節のなかで、「木戸ノ本ニ福岡聟千代」が配置されたと記されている。この「木戸」は前後の文脈の流れから推測して上城戸を指しているものと考えられている。



挿図13　第61・62次調査区周辺地形図（1/2．000）

また同『朝倉始末記』巻六「富田弥六桂田ヲ退治之事」においては、朝倉義景亡き後の越前守護代桂田長俊を討つために天正二年正月富田弥六が一揆勢力と共に一乗谷を攻撃し、「上ノ木戸口」で桂田を攻め滅ぼしたことが見える。(詳細はV－1「上・下城戸に関する歴史的考察」参照)

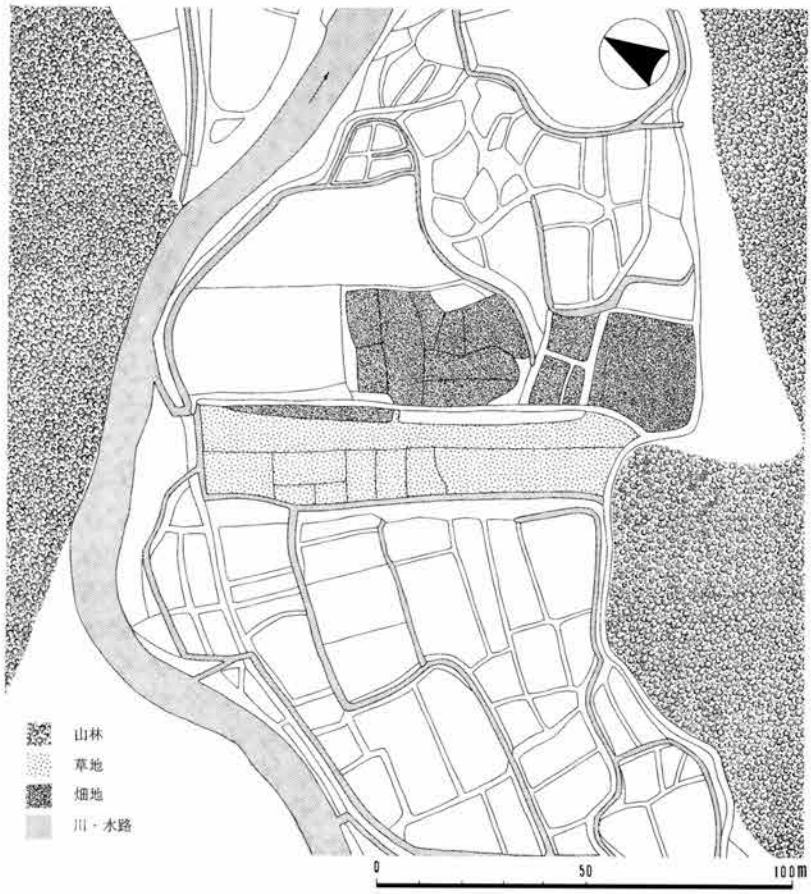
周知のように上城戸南方には朝倉氏重臣小林権頭、青木隼人正、或は斉藤などの屋敷跡が推定されており、また「辻固ノ事」の中にも上城戸の近くに「詫美前」が記され、譜代の重臣詫美氏の存在が想定されている。上城戸は、地形的には城下町を区切る南側の、東西に山塊が迫った最も狭溢な場所に位置しており、巧みに自然地形を取り込んだ構築方法であることは旧来より定説となっている。

3）発掘調査の経過

上城戸の調査・整備については、『朝倉氏史跡公園基本構想』を受けて昭和49年に上程された「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画案」のなかで、平面復原地区として「下城戸」と共に計画のなかに含められ、上城戸跡及びその周辺の発掘、整備が予定されていた。調査の主目的は上城戸の主要遺構である土塁跡と外側に並行する濠跡を検出し、それらの規模、構造を解明することとされた。特に下城戸との対比において、上城戸では東西のどちら側に城戸口が存在するのか、そのことを考古学的に究明することができるかどうかに注目点が置かれた。

調査はグリッド配置図にも見られるように、30ラインを境界として西半と東半に分け、西半より発掘を開始した。外濠については、その幅、深さを測るため予め30ラインにトレンチを入れた。その結果、後世の意図的な埋土によってかなりの土量が外濠に堆積していることが判明し、重機によって表土をすき取ることとした。

土塁は、西半部分の南斜面が大きく撹乱、削平を受け一乗谷川に近い外濠の埋土に使用されていた。これらの埋土、撹乱土を除去しながら土塁、外濠の発掘を進めた結果、土塁の構築技法は、基本的に外濠の砂利混じりの砂質土を掻き上げ、原形を作った後、黄色山土を主に盛土を行い成形をしていることが判明した。また、それらの盛土に際しては、一時期に盛り上げるのではなく、ある一定の単位で横割にブロックを設け、石垣を積み上げていることも判明した。これらの傾向は後節でも触れるが、31ラインセクショントレンチ付近で顕著な様相を示し、19・20ラインまでくると掻き上げの砂利混じり砂質土層が希薄となっている。

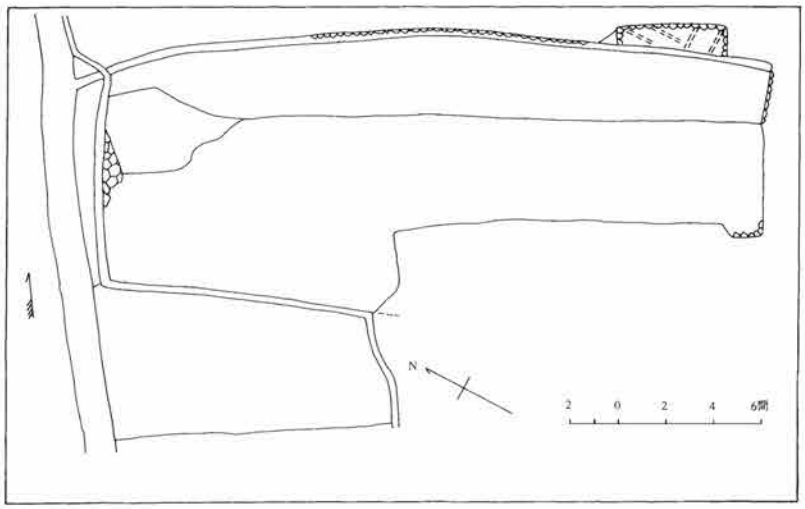


挿図14　上城戸・周辺地籍図（明治年間のものから再トレース）

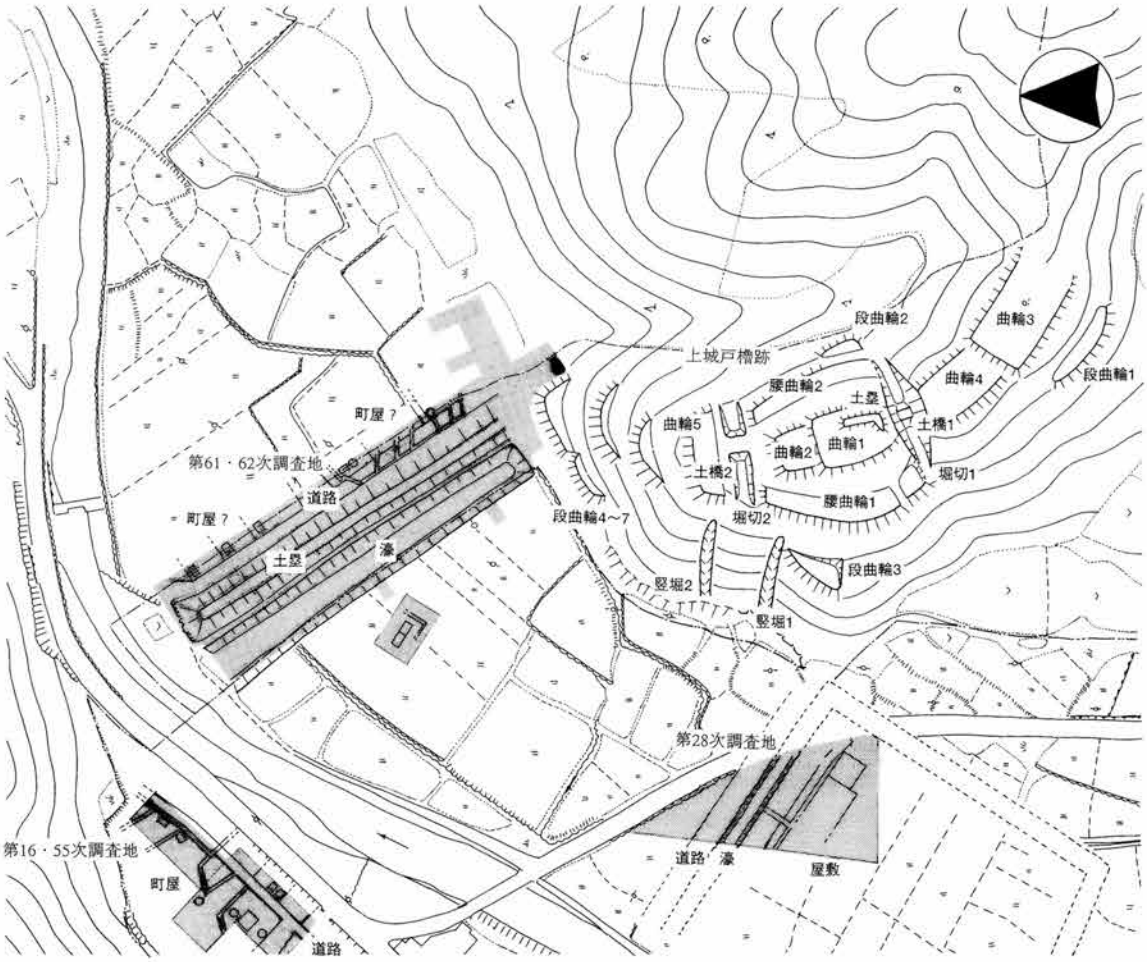
西半の川側に面した石垣は、後世の洪水や護岸によって南半分が失われており、原形を止どめない。この石垣部分が城戸口であるかどうかは、考古学的には確認できなかった。東半部分の山際については、戦後の時期に土塁そのものが削平されて、耕作地となっていた。しかしながら、地籍図（挿図14）や、上田による略測図（挿図15）では、まだ土塁原形が残されており、斜面に連結していたかの観を呈している。発掘の結果は、土地改良事業による削平もあり、城戸口の痕跡を伺い得る遺構は検出できなかった。

4）周辺の調査（挿図16）

第16・55次調査　特別史跡指定地外であるが、一乗小学校の校舎改築に伴う事前調査として発掘が行われたもので、昭和50年（第16次）、昭和61年（第55次）の都合２回実施された。それらの調査成果は『一乗谷朝倉氏遺跡　一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書1986』に詳しい。



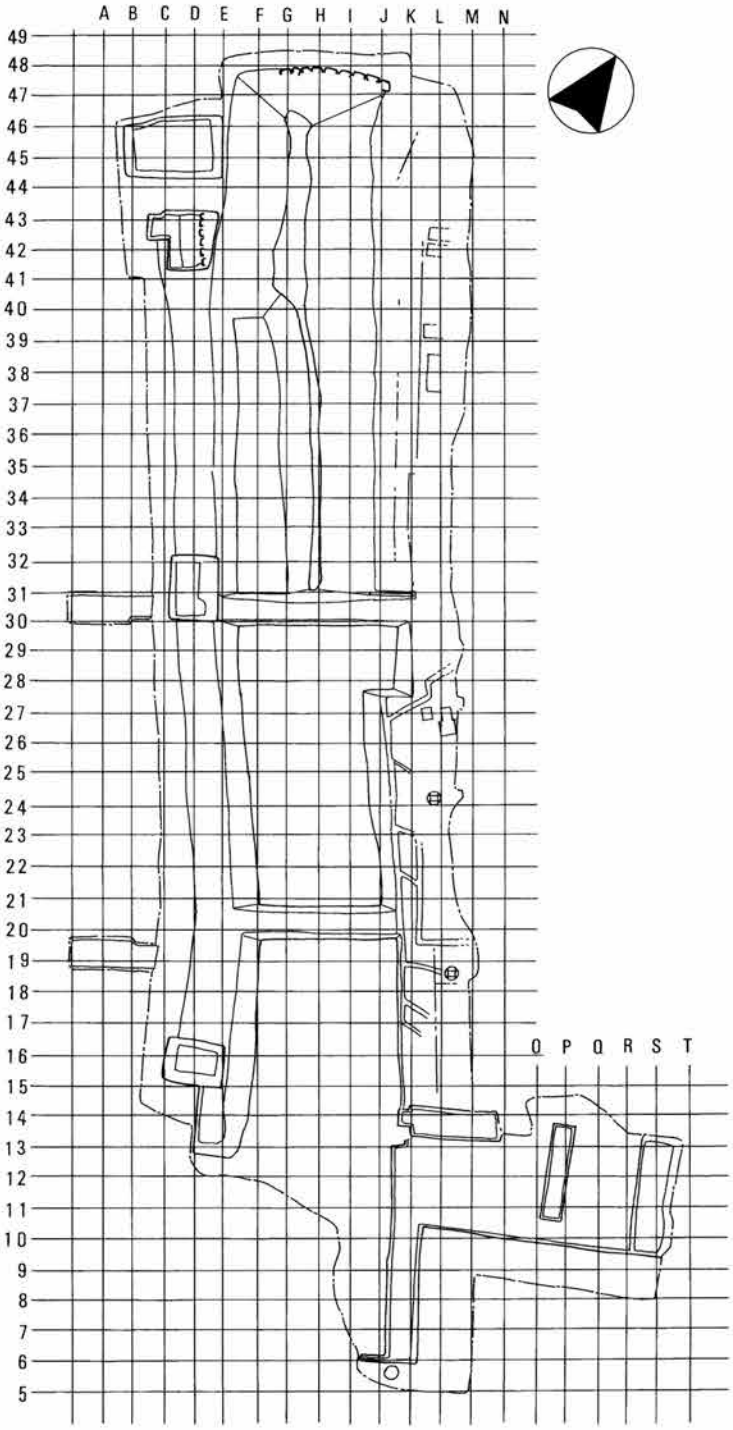
挿図15　上城戸土塁略測図（上田1921より）



挿図16　上城戸櫓遺構模式図及既調査区遺構配置図（S=1/2，000）

第28次調査　これも指定地外の調査で、一乗小学校プール建設に伴う事前調査として、昭和53年に発掘調査が実施された。

その他　特別史跡指定以前の昭和45年に実施されたもので、当時発足したばかりの福井県教育委員会文化課による事前調査として、御所・安養寺跡及び周辺の遺構確認調査が行われた。御所跡では池状の遺構、溝、礎石建物などが検出され、又中国銭がまとまって出土した。旧一乗郵便局敷地からはシャクダニ石を彫り込んだ「U字」溝（暗渠排水）や礎石建物を伴う屋敷跡の一部が検出された。上城戸のすぐ南側では、水田に任意にトレンチを入れ、遺構の有無とその遺存状況を把握するための調査が実施され、溝や石積施設等が検出されている。



挿図17　第61・62次調査区グリッド配置図

調査日誌抄

第６１次調査（西半部）

4／ 6　61次調査区表土剥ぎ開始。

4／ 7　地区杭打ち作業。基準測量ポイント３、４を結んだ線を東西のラインとして、グリッドを振り出す。40ラインをセクションベルトとする。

4／11　土塁北斜面表土剥ぎ。

4／19　土塁南斜面表土剥ぎ。

4／20　外濠部分の表土剥ぎ開始。C42、D42に土層確認のトレンチ設定。

4／25　20ライン南北トレンチ設定。掘り下げ。F列で南側に土塁裾線と見られる砂利層の落込み確認。D～F30に土層確認トレンチ設定。ここでも、F列で南裾線と見られる床土の段差確認。

4／26　20ライン南北トレンチで土塁北側裾線確認。

4／27　外濠埋土掘削のため、30ライン土層セクション図作成。

4／28　20ライン南北トレンチで、外濠の深さ約1.5mを確認。重機による外濠埋土の除去作業打ち合せ。

5／ 2　土塁北側平坦部の掘り下げ開始。土塁北側裾線と見られる石列検出。

5／ 9　土塁北側平坦部の遺構検出。東西方向に石列確認。K39～43で砂利面検出。外濠埋土の除去作業打ち合せ。

5／11　重機による外濠の埋土除去作業開始。

5／18　外濠埋土除去作業終了。

5／19　土塁北側平坦部の遺構掘り下げ再開。K41、42グリッドで石積施設を検出。

5／20　K39～43の砂利敷面について東側に範囲を拡大して追求。K35付近まで延びていることが判明。L列東西方向に石列が見られ、砂利敷面はこの石列で区切られるもよう。

5／25　文化庁安原主任調査官現地視察。調査指導受ける。外濠北側斜面の検出作業に入る。

5／26　外濠北側斜面の検出。葺石状の石垣を確認。

5／27　30ライントレンチを北に延長して土塁断ち割りを断行。土層観察から土塁の構築方法が種々観察される。基本的には砂利層の地山を掘り、この土を掻き挙げて基部を作り、更にその上に山土を盛り上げて土塁を構築したものと判断された。研究協議会近藤公夫氏、長岡京市長現地視察。

5／31　30ライントレンチ掘り下げ。外濠部分30～35ラインの掘り下げ。青灰色粘質土層検出。

6／13　外濠西端の掘り下げ、C、D42トレンチの掘り下げ。外濠C、D42トレンチの拡張。46ラインまで広げて、

6／14　土塁の裾線を追う。裾線に葺かれていた石垣が多量に外濠に落ち込んでおり、除去作業難航。
土塁北斜面の掘り下げ。43ラインで南北方向の石垣

6／15　検出。I39グリッドでも石垣の検出。外濠のトレンチを掘り下げ。床土より0.9～１m下位で木材出土。濠底に達したものと考えられた。

6/後半～7/前半　梅雨期のため、断続的に調査を続行。

7／26　一乗谷川付近のC～D44、45グリッド外濠埋土より木製品を中心に遺物が多く出土。

7／27　外濠の掘り下げ。

8／ 2　本日で上城戸土塁西半部の調査を概ね終了。

第６２次調査（東半部）

8／ 4　東半部の調査を開始する。土塁北側の畔石垣の撤去。

8／ 6　北側土塁裾線の検出作業。

8／ 8　土塁北側K22～27の畔石垣下より焼土層検出。

8／ 9　土塁北斜面の掘り下げ。

8／10　K20～27の土塁裾線検出。裾部に石列が連続して検出される。石列の北側は武者走り状の砂利敷の通路と見られる遺構面が確認された。

8／11　K16～20の裾線検出。わずかに焼土面確認される。砂利敷面検出。

8／22　20ラインに南北トレンチを設定。G、H列で葺石状の石垣を検出。前半の61次調査、30ライントレンチで確認した土塁南斜面の石垣に対応する遺構と判断された。

8／23　20ライントレンチの掘り下げ、及び北側斜面の精査を行う。

9／ 8　20ライントレンチ掘り下げ。土塁南側斜面の掘り下げ。

9／ 9　外濠の掘り下げ。区画整理段階の削平に伴う客土（明茶褐色土）を除去し、土塁斜面の検出。

9／10　外濠の掘り下げ。土塁南側斜面の検出。

9／14　外濠東端、山側付け根部分の濠底を検出。山側付け根で小トレンチを設定、旧畔石垣かと見られる石列が検出される。

9／21　土塁南側斜面の精査。裾部に見られる葺石状石垣は東端付近まで見られ、F14、15に達する。

9／22　土塁南側斜面の精査。重機による掘削面より、少し下位で外濠掘り方と見られる段が検出される。葺石状石垣はこの上から張り付けられている。

8／26　土塁南側斜面の外濠掘り方の検出、外濠埋土の除去作業。

9／27　土塁南側斜面の精査。土塁裾線は20ラインより東側に向かって幅を広げるように南に寄って延びているようである。

9／28　土塁南側斜面の精査をほぼ終了。土塁東半部掘削面の掘り下げと北側の遺構検出に入る。

9／29　土塁東半部の床土除去。北側トレンチの掘り下げ実施。

9／30　土塁東半部の掘り下げ。

10／ 4　土塁北側平坦部の遺構検出。通路状砂利敷面及びこれを横切る溝の精査を行う。

10／19　上城戸虎口、及び枡形の有無について確認することを目的として、土塁北側東端に向かって拡張トレンチを設定することとし、J列では東西方向に、更に８、９ラインで南北方向に入れることとした。

10／20　拡張トレンチの掘り下げほぼ終了、J４、５グリッドで井戸状遺構を検出。R列北端部では溝状石列を検出した。新たにH、I19グリッドとI27グリッドで石積施設を計３基検出した。

10／21　外濠の幅及び南側民有地にかかる濠の肩を検出するため、民有地に小トレンチを設定する。20、30ラインの２カ所に設定。また、調査区西半部の遺構精査を行う。

10／22　民有地側小トレンチの掘り下げ。及び土塁西端、川側の精査。基本測量ポイント４付近の石列について追求する。

10／25　外濠東端部トレンチの掘り下げ、濠底検出。遺物が比較的多く出土。特に木製品の出土が目立つ。土塁北側平坦部L36グリッドで新たに石積施設を確認。

10／下旬～
11／上旬　遺構の検出作業をほぼ終了して、空中写真測量のため清掃に入る。

11／ 8　アジア航空測量　による空中写真測量実施。

11／11　遺構の地上写真撮影実施。

11／12　上城戸調査区の現地説明会実施。

12／1～6　土層セクション実測、及び遺構の補足実測を実施。

12／中旬　１２／中旬　トレンチ及び深掘り部分の埋め戻し作業実施。

12／23　発掘作業の日程をほぼ終了。

２．遺構（第38～49図、ＰＬ.30～38）

発掘調査の結果、検出された遺構は土塁１、濠１、塀１、道路１、礎石建物２、井戸２、石積施設６、溝12（内５基はいわゆる暗渠）、石敷１、石垣11、その他８である（表７）。なお表及び文中で使用した方位については、磁北をそのまま使用せず、土塁がほぼ東西に延びていることから、慣例的に使用している。ちなみに土塁方向は直線にして、芯線の方位がN-38°-Wとなる。

土塁SA3631　土塁は、セクションベルトを設定した42ラインでは、道路面と土塁裾の接地部分から濠側の石垣部分まで幅15.5m、同じく道路との接地部分からの高さは６mを測る。土層トレンチを入れた31ラインでは、同じく道路接地部分から濠側石垣まで15.5m、高さ4.18mを測る。ここでは、土塁が削平されて上端部分が大部分失われている。20ラインでは、土塁盛土が殆ど失われており、土塁の基底幅しか確認できなかった。道路側溝から濠までで14.9mを測る。土塁全長は前述のとおり、山際から測って川側石垣まで直線にして105mである。

土塁北側斜面上で、表土除去後土塁内石垣を検出した。これは、43ラインでの南北方向石垣SV3652の検出がきっかけとなった。その後掘り下げを拡大し、東側へ延長した結果、SV3653～56、SX3672・3673が検出された。いずれの石垣も裏込めの礫などはなく、人頭大の河原石を直接積み上げる方法で、南北方向の石垣は川を背に山に面する部分をツラとしており、東西方向の石垣はあたかも階段のように、一定の間隔をもたせて北をツラにして積み上げていることが確認された。南面ではこのような石垣は構築されていない。しかし、南面裾では後述するように、葺石状の石垣が43ラインから26ライン辺りまで積み上げられているのが確認された。この石垣も裏込めがなく、河原石を直接積み上げていることが判明した。

濠SD3634　発掘前の現状や、地籍図などから判断して外濠は川に向かってラッパ状に少し開いた形態を有するものと考えられたが、46ラインで14m（推定）、31ラインで12m、19及び20ラインで13mというように各セクション図でバラツキが見られる。濠底は川側42ライン以西では、後世の護岸工事による撹乱によるものか、一段低くなっており、田面から測って3.5mで地山に達したが、31ラインでは3.2m、19・20ラインでは2.0mであった。地山は腐食土、有機質土を含まない固く締まった砂利層である。

セクション図からも確認されるように、濠の断面形状は概ね「箱堀」形式であるが、川側に向かって斜面傾斜が強くなり、「箱薬研」形式に近い。また、土塁の高さに比例して堀の幅や深さがさほどに大きくないのはどのような理由に基づくものであろうか、後節でも再度取り上げてみたい。

31ラインでは濠表土より1.7mまでは近年の区画整理時の土塁削平の黄色山土が堆積しており、その下位には6～70㎝程の礫層が見られる。この礫層は土塁石垣が崩落して堆積した土が主体であると考えられる。更に、その下位の堆積土は基本的に有機質の砂利混じり土層・砂質土層と、腐食質の粘土層との互層である。朝倉氏滅亡後の自然堆積であると考えられる。

濠底からは全体に遺物の集積が見られたが、特に川側に近い42ライン以西で集中度が高く、木製品の良好な検出が確認された。

塀SA3632　東西道路側溝SD3635にほぼ並行して構築された、土塀の基礎部分とみられる小土塁である。28m分を検出したが、発掘の所見からはもっと東西に延びているものと考えられたが、遺存状態が良くなく、確定できなかった。幅は約1.2mを測る。

道路SS3650　土塁の北側裾を並行に走る東西道路で、西半では北側に、東半では南側に側溝が付属

（記号；L.-長　W.-幅　Dep.-深さ　H.-高さ　φ-径　E-W　東西長　N-S　南北長　ab.約～　単位；m）

遺構		規模（寸法）	備考
土塁	SA3631	L.105、基底W.16、上端W3	上城戸東西土塁上・下層
濠	SD3634	L.105、上端W.12、Dep.3	上城戸外濠　上・下層
塀	SA3632	L.28、W.1.2	土塀基礎部?　上層
道路	SS3650	L.80、W.4～1.5	東西道路　上・下層
礎石建物	SB3633	規模不明	?　上層
	SB3694	E-W14、N-S不明	上層
井戸	SE3642	φ0.6、Dep.不明	上層
	SE3643	φ0.6、Dep.不明	下層
石積施設	SF3644	E-W.4、N-S1.2、Dep.0.44	SF3645を切って西側に構築　下層
	SF3645	〃1.3 〃0.5 〃0.41	北半削平　上層
	SF3646	〃1.0 〃 ? 〃0.56	〃　下層
	SF3647	〃1.3 〃 ? 〃0.74	〃　上層
	SF3648	〃2.4 〃1.3 〃0.65	東半部分が先に構築された?　上・下層
	SF3649	〃1.3 〃0.9 〃0.68	上層
溝	SD3635	L.6.2　W.0.2	上層
	SD3636	〃 5.1 〃 0.3	上・下層
	SD3637	〃23.5 〃 0.3	上・下層
	SD3638	〃12.0 〃 0.4	上・下層
	SD3639	〃 5.2 〃 0.3	上・下層
	SD3640	〃 1.5 〃 0.3	上層
	SD3641	〃 3.5 〃 0.5	下層?
暗渠	SZ3662	L.2.2　W.0.3	東西道路横断溝上層
	SZ3663	〃 1.8 〃0.25	〃　上層
	SZ3664	〃 2.0 〃 0.3	〃　上層
	SZ3665	〃 3.6 〃 0.3	〃　上層
	SZ3666	〃 3.0 〃 0.2	〃　上層
石敷	SX3667	規模不明	東西道路西端　上層

遺構		規模（寸法）	備考
石垣	SV3651	L.8.6　H.2.7	上城戸土塁西面裾 上・下層
	SV3657	〃18.0ab. 〃1.7ab.	上城戸土塁南面裾 上・下層
	SV3658	〃 7.5ab. 〃2.0ab.	〃 上・下層
	SV3652	不明	上城戸北面・土塁内 上・下層
	SV3653	〃2.7ab. 〃1.7ab.	〃 上・下層
	SV3654	〃2.7ab. 〃0.6ab.	〃 上・下層
	SV3655	不明	〃 上・下層
	SV3656	不明	〃 上・下層
	SV3659	不明	上城戸北面裾 下層
	SV3660	不明	拡張トレンチ内 下層
	SV3661	不明	〃 下層
その他	SX3668	L.4.0	東西道路西端石列 上層
	SX3675	〃6.5	上城戸北面裾石列 上層
	SX3676	〃4.5	〃 上層
	SX3677	〃1.7	〃 上層
	SX3680	E-WO.7 N-SO.8	土塀延長部? 上層
	SX3681	L.2.7	〃 上層
	SX3688	E-WO.7 N-SO.9 Dep0.17	円形石積施設? 上層
	SX3689	〃1.0 〃0.9 〃0.24	〃 上層

表7　第61・62次調査区遺構一覧表

している。また西半では道路中央に石列SX3676、3695が確認され、いわゆるセンターラインの機能を果していたと考えられる。同じ例は第17・40次、第49・50次の東西道路でも確認されている（朝倉氏遺跡資料館1976・1982・1985）。２～３回の地業面を有し、砂利敷である。土塁裾部に近いところ、特に30～35ライン付近では表土下で焼土層が確認され、天正元年の最終面であることがほぼ確認できる。この道路は山際（東側）に向かって上り勾配となり、16ラインより東では削平のため遺構検出ができなかったが、山裾付け根あたりまで延びていた可能性もある。幅員は西側で最大となり、４ｍを測る。溝SD3636以東では半減し、1.8ｍとなる。また、この道路は19ライン、溝SD3638で北に直角に折れ曲がり、Ｔ字交差（＝「辻」？）を形成していた可能性も考えられる。

土塁西面石垣SV3651　第39図エレベーションに示したとおり、この石垣は南側で約半分が崩落、もしくは後世の撹乱によって失われており、全容は不明である。下城戸土塁石垣に比べて比較的小振りな割石を使用して積み上げており、高さは現状で約2.7ｍを測る。

土塁南面裾石垣SV3657・3658　土塁南面裾部で確認された石垣で、SV3657はSV3658に比べて遺存状態は良好で、密に石垣が葺かれた状況が明瞭に観察される。しかし、その他は濠底に落ち込んでおり、概報（朝倉氏遺跡資料館1989）でも指摘したとおり、裏込めをもたない葺石状の石垣であることが了解される。この石垣は土塁西半では顕著に見られるが、東側では希薄で、付け根あたりでは全く見られない。従って、南面全体にわたって石垣が葺かれたのではなく、西半部に集中的に葺かれた石垣であることが指摘できる。

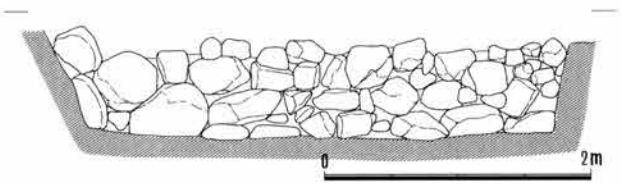
土塁北面石垣SV3652・3653・3654・3655・3656　今回前章で報告している下城戸でも同様な技法による石垣が検出されて注目されたが、特異な石垣である。

この石垣の構築は、土塁基底部の掻き上げ部分というより、更にその上位に積み上げた黄色土盛土層で見られる石垣であり、しかも、SV3655・3656を除けば、概ね同方向に平行に積み上げていることが観察され、アトランダムな積み方ではないことがわかる。そして、この石垣は土塁の北側でのみ見られ、下城戸が南側、即ち外濠と反対側に施されていることとやはり軌を一にしている。かつ、上城戸では東半部にのみ偏って構築されていることが伺えるが、やはりこの点も示唆的であると言わざるを得ない。

土塁北面裾石垣SV3659　第49図補足図のエレベーションで示したとおり、暗渠排水溝SZ3665より明らかに上位に構築された石垣であることが伺える。そして、基底部石のレベルを追うと、山際より川側に向かって約10°の上り勾配となっていることが観察される。上端は後世の削平があって確定できないがほぼ垂直に積み上げられており、高さは0.9ｍほどと考えられる。

拡張トレンチ内石垣SV3660・3661　いずれも拡張トレンチで検出した石垣で、整地面の段差を形成する石垣である（挿図18）。

礎石建物SB3633・3694　SB3633は拡張トレンチ東端で検出されたもので、南北方向に走る礎石列を２石確認している。SB3694はSD3638の東側で確認された礎石建物であるが北半は削平されていて、全体の規模は把握できない。東西幅は12.5ｍ（≒6.5間；１間＝6.25尺）を測る。井戸SE3643を伴う。



挿図18　SV3661エレベーション

井戸SE3642・3643　SE3642は石積施設SF3648の東側で検出されたもので、径約

0.6mの小井戸である。同石積施設の遺構精査の段階で検出されたもので、同石積施設の東半分と同時期と見られる。天端石がよく残っている。しかし、径が小さいため手掘りによる完掘は困難で、底の深さは不明である。SE3643は前述の礎石建物SB3694に敷設している井戸で、これも径約0.6mと小さい。底の深さは未完掘のため、不明である。

石積施設SF3644・3645・3646・3647・3648・3649　個々の規格、寸法は第３表に示した通りである。塀SA3632との層位関係や互いの切り合い関係から、時期別の新旧が確認される。概報XX（前出1989）でも指摘したように、SF3644はSF3645の西壁を切って構築しており、SF3647は表土下で最初に検出されたが、SF3646は塀SA3632の下層で確認されている。また、SF3648も羽子板状を呈する形状を有するが、西半の部分が後で拡張されたものと判断される。SF3649は最終面と考えられるが、天端石がかなり抜かれていた。

溝（東西道路側溝）SD3635・3636・3637・3638・3639・3640　いずれも東西道路に付属する側溝で、溝幅は0.2～0.4mを測る。側石はほとんどが１石積みで最終時期の構築と考えられるが、19ラインで直角に折れ曲がるSD3638だけは３石積みと深い。これは上城戸の早い段階に構築されていて、１・２回の嵩上げの後、現在のレベルでSZ3663・3664と接続させたものと考えるほうが自然である。

拡張トレンチ内溝SD3641　石垣SV3661に並行して作られた溝で、山際から一乗谷川の方角に向かって傾斜する溝である。トレンチ内での検出であることから性格については不明である。

暗渠（道路横断暗渠排水）SZ3662・3663・3664・3665・3666　計５本の暗渠排水溝はいずれも30ライン以東の道路に敷設されており、西半では全く見られないことがひとつの傾向となっている。これは当然、排水方法が西半と東半では異なり、また道路の北側に区画された屋敷が西半では、道路面と同レベルか、それより下位にあり、東半では道路面より明らかに高いレベルに屋敷が位置していたことを示唆している。敷桁すれば西半と東半では屋敷の地業、整地方法が異なっていることを指摘できる。この西と東の整地方法の差異が何を意味するのかは、後節「４．小結」で補足する。

道路北側の屋敷はいずれもが調査区外であって、かつ後世の削平によって一段分失われていることから、考古学的にも追求困難であったことは悔いが残る。

石敷SX3667　東西道路西端部の石敷で、道路はこの部分で「く」の字に折れ曲がる状態となり、川へと向かう。後世の撹乱が激しく、表土下では河原石や礫が散乱した状態であった。これを丁寧に取り除いた結果、道路面に敷設した状態で石敷が検出された。石列SX3668との関連で道路に伴う遺構と考えられる。

3．遺物（第50～62図，PL．39～58）

本調査で出土した遺物は、表4に示したとおりである（注1）。

器種			区画	濠 片数	濠 %	土塁以北 片数	土塁以北 %	合計 片数	合計 %
日本製陶器	越前焼		甕	58		1,440		1,498	
			壺	52		458		510	
			鉢	6		100		106	
			擂鉢	71		724		795	
			火桶	1		4		5	
			他	0		1		1	
			計	188	6.35	2,727	15.7	2,915	14.4
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	23		81		104	
			皿	2		15		17	
			鉢	1		1		2	
			壺	9		16		25	
			香炉	0		1		1	
			水注	0		3		3	
			茶入	0		1		1	
			他	2		6		8	
			計	37	1.25	124	0.71	161	0.79
		灰釉	碗	7		24		31	
			皿	20		94		114	
			香炉	1		2		3	
			御皿	3		0		3	
			鉢	0		2		2	
			他	0		2		2	
			計	31	1.04	124	0.71	155	0.76
			瀬戸壺	0		2	0.01	2	0.01
			計	68	2.29	250	1.44	318	1.56
	土師質		皿	2,439		12,727		15,166	
			土鈴	1		4		5	
			土釜	4		44		48	
			壺	1		0		1	
			他	0		1		1	
			計	2,445	82.6	12,776	73.7	15,221	75.1
	瓦質		香炉	1		7		8	
			鉢	2		3		5	
			風炉	0		1		1	
			仏花瓶	0		2		2	
			他	0		5		5	
			計	3	0.10	18	0.10	21	0.10
	信楽壺			0		5	0.02	5	0.02
	国産地			1	0.03	3	0.01	4	0.02
	計			2,705	91.3	15,779	91.1	18,484	91.2
中国製陶磁器	青磁		碗	13		101		114	
			皿	2		58		60	
			壺	0		4		4	
			盤	1		3		4	
			鉢	0		2		2	
			香炉	0		3		3	
			他	0		9		9	
			計	16	0.54	180	1.03	196	0.97
	白磁		碗	0		3		3	
			皿	24		213		237	
			坏	1		14		15	
			他	0		5		5	
			計	25	0.84	235	1.35	260	1.28

器種			区画	濠 片数	濠 %	土塁以北 片数	土塁以北 %	合計 片数	合計 %
中国製陶磁器	染付		碗	8		43		51	
			皿	14		148		162	
			坏	0		4		4	
			他	0		3		3	
	計			22	0.74	198	1.14	220	1.09
	計			63	2.12	613	3.54	676	3.34
朝鮮製陶磁器			碗	0		3		3	
			壺	2		15		17	
			他	3		3		6	
	計			5	0.16	21	0.12	26	0.13
交趾三彩				0		1		1	
近世陶磁器・他				8	0.27	126	0.72	134	0.06
陶磁器計				2,781	93.9	16,540	95.5	19.321	95.3
金属			銅銭	18		36		54	
			釘	5		243		248	
			錘	1		0		1	
			カスガイ	1		0		1	
			刀子	0		3		3	
			他	1		21		22	
	計			26	0.87	303	1.74	329	1.62
石製品			バンドコ	3		187		190	
			盤	2		56		58	
			硯	0		18		18	
			臼・茶臼	0		17		17	
			砥石	2		12		14	
			風炉	0		9		9	
			玉石	0		7		7	
			コマ犬	0		2		2	
			鉢	0		6		6	
			他	10		142		152	
	計			17	0.57	456	2.63	473	2.33
木製品			櫛	1		0		1	
			漆碗	22		0		22	
			漆皿	2		0		2	
			下駄	4		0		4	
			曲物	8		0		8	
			コマ	1		0		1	
			柿経	2		0		2	
			墨書木製品	4		0		4	
			建築部材	13		0		13	
			他	63		6		69	
	計			120	4.05	6	0.03	126	0.62
その他			骨片	2		1		3	
			壁土	0		7		7	
			種子	4		0		4	
			貝	2		0		2	
			他	8		2		10	
	計			16	0.54	10	0.05	26	0.13
合計				2,960	100.0	17,315	100.0	20,275	100.0

表8　第61・62次調査区遺物一覧表

越前焼（第50～54図、PL.39～45）

概報において既に紹介したように、外濠での越前焼の出土は少なく、全体の6%ほどである。これに対して土塁以北での越前焼の出土は15%と、その割合は比較的に多くなっている。特に目立つのは器種別にみて擂鉢の出土が多く、外濠では37.7%、土塁以北では26.5%の割合となっている。形態による構成比から見ると甕、擂鉢ともにⅢ群、Ⅳ群が多数を占める。資料全体に擂鉢では完型に復せるものが見られるものの、甕にはほとんどなく、器型全体を伺える資料はみられない。土塁以北で確認された屋敷の区画南端部を一部発掘しただけで、甕埋設遺構も検出していないことから、今後の調査に委ねることとする。

甕・壺類

520はⅡ群の大甕で、口縁部に貼り付けられた鰭状の突帯はもはや形骸化している。Ⅱ群とⅢ群の中間形態としてもよいものである。525は肩部で「く」の字状に屈曲するものでⅢ群aタイプに属する。肩部に煤が付着している。521は体部を欠失しているが、口縁部の突帯の形状からⅢ群cタイプに属するものと考えられる。

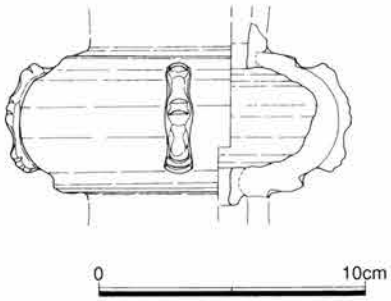
526、527はそれぞれⅣ群a、529は口縁部の肥厚化が進んでいる形態をもつものでⅣ群bとしてよい。これに対して533は一乗谷の大甕のなかで最末期形態のもので、いわゆるⅣ群cの大甕である。大甕はⅢ群cからⅣ群で占められるのが一乗谷の傾向でもあるが、ここでも概ねその傾向に添っているものと判断される。522～524、530はⅣ群の中甕タイプである。

528、534～537は壺、541、542は壺の体部破片、543、545～547はお羽黒壺である。547を除く３点には内側に薄く酸化鉄の膜状の付着が認められる。539、540は短頸壺で、539は肩部に突帯が巡る。また「大」字状のヘラ描きが見られる。

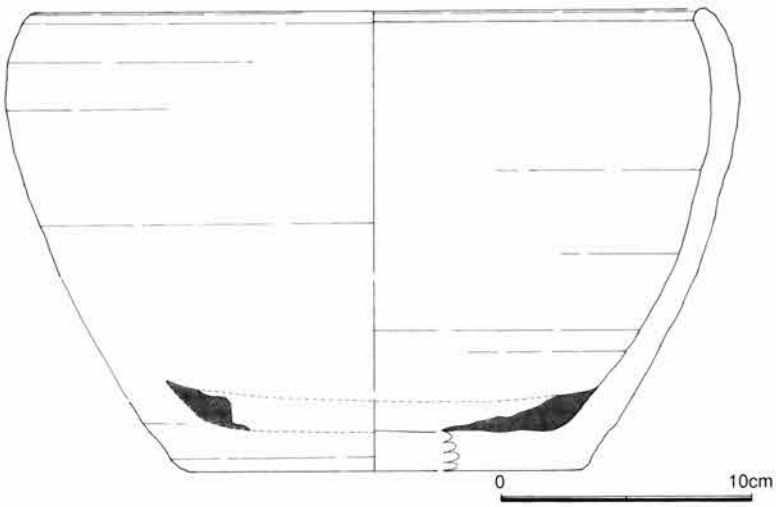
鉢・擂鉢類

538、544、549、550は内湾する鉢で、概して小型のものは焼成が良好で、固く焼き上がっているのに対して、大型のものは焼成が甘い傾向がある。特に544（挿図19）の鉢はほとんど生焼け状態で、黄灰褐色を呈する。概報でも触れたが、内底部に鉄錆状の沈澱物がみられる。

555～559、564～568、573はⅢ群bに属する擂鉢である。うち564はⅢ群aに近い形状を示すが、口唇部で三角状につまみ上げた形跡がみられ、Ⅲ群bに含めた。554、560、562、563、569～572、574～598は



挿図20　青磁花瓶



挿図19　越前焼鉢

Ⅳ群に属する擂鉢である。全体にⅡ群やⅢ群aなどの古相を示すものはほとんどなく、Ⅲ群b及びⅣ群で占められるのが擂鉢の傾向である。出土資料でみる限り、甕と擂鉢では形態分類上、若干のズレが見られ、擂鉢のほうが消耗率が高いことによる原因からか、新しい形態のものが多くなっている、と言える。

復元実測によって図示した資料による口径比率をみると、Ⅲ群b９点のうち50～55cmのものが６点、60cm以上のもの３点である。Ⅳ群では22点のうち、35～40cm４点、40～45cm６点、45～50cm６点、50～55cm３点、55～60cm２点、60cm～１点の内訳となる。もとより全破片から復元実測を試みたものではないので、断定的な傾向性と言えない。目安的にみることが許されるならば、Ⅲ群bは口径55cm前後のものが多く、Ⅳ群は全体に口径が広がってはいるが、なかでも40～50cm前後にピークがあるとみられる。

土師質土器・瓦質土器（第55・56図、PL.46～48）

土師質土器には土師質皿（カワラケ）、耳皿、丸皿、土釜、陶錘がある。このうち、皿形態（カワラケ、耳皿、丸皿を含めて）に属するものが大半を占め、外濠で80％強、土塁以北でも70％強、平均割合75.1％の割合を示す。しかし、単純に他の地区との土師質土器出土割合を比較しても（小野1984、岩田1991）90～80％での割合を示すものとは少ない比率となっている。

さて、カワラケを中心に復元実測可能な個体を抽出し（第55図）、それらの概略を述べる。B類は口径６cm（599）、７cm前後（600～605）、それ以上のもの（606）というように概ね３グループに分かれよう。手ずくねによる成形のみで回しナデを施さず、指頭痕をのこすのが特徴である。滅多に灯芯油痕が付着しないが、稀に残すものがある。本調査区でも601・602に灯芯油痕をのこす。607～627は口径６cm前後を示し、従来のC_1類に属す。このグループは概して灯芯油痕を残さないものが多い。612は口唇部に面取を施すタイプである。628～661は口径９cm前後を示し、従来のC_2類に属す。ただ、630～634は口径が９cmを若干下回り、８cm前後に収束する傾向を示すなどバラつきが多少見られる。個体差とみるべきか。C_2類では灯芯油痕をのこすものとないものとの割合は図示したものでみるかぎり半々の割合を示す。内面に「の」の字ナデを施し、口縁部は概ね１回ナデ回しを行う。このため、外面の腰部には指頭痕がのこる。また底部面積もD類に比して狭く、すわりはよくないのが通例である。

662～676は口径９～10cm前後に収束し、従来のD_1類に属す。図示したものでも大半が灯芯油痕を残し、灯明皿としての用途に使用されていたものと考えてよい。677～685は口径11cm前後に収束する。第54図686～694は口径12～14cm前後に収束する。677～694は従来のD_2類の範疇に加えられる一群であるが686～694では内面のナデ手法に差が看取され、見込み圏線が凹線を引く強いナデのもの（686・691）と、ナデが浅い（もしくは弱い）もの（687～689）とがある。また693のように底部からの立ち上がりが強く、結果として見込みが深くなるものがある。特に見込み圏線が明瞭な凹線となるものとそうでないものとの間には成形上の差、もしくは成形の段階的な隔たりを感じる。この違いはD類としての範疇を超えるものではないが、「の」の字ナデと「２」の字ナデの間の成形技法の関係を伺うものとして注目したい。凹線は口径が13cmを超えるものになると概して少なくなり、見分けがつかないという傾向がある。

695・696は土師質土器分類G類の丸皿である。697はH類の耳皿である。698・699は土釜で、底部外面に煤痕がある。前者には口縁部にヘラ描きによる「＃」記号がみられる。煮沸の際の蓋の位置合わせの記しであろうか、この手のものには概ねこのヘラ記号がみられる。しかし、いまのところ、蓋に使用された対のものは確認されていない。700は長7.5cm、径3.8cmの土錘である。一乗谷ではこの種の土

錘が大小の大きさの差はあるが、ときどき出土しており、やはり投網用の錘に使用されたものと判断したい。出土位置も町屋に限らず、武家屋敷の中からも出土しており、漁夫のものと考える根拠は薄い。

瓦質陶器には華瓶、香炉がある。701は瓦質華瓶の脚部を欠失したものである。中央部の膨らみに雷文帯が4段巡る。華瓶については香炉、燭台とともに三具足として一般に金属器のものが知られる。本資料は明らかにその模倣（写し）である。一乗谷ではあまり出土せず、稀少例といえる。702～704、705は香炉である。702は口径10.2cm、器高4.4cmを測る。口縁部が折れ曲がって外反する。横S字のスタンプ文が巡る。704は口径13.0cmでやや幅広いの香炉である。内外面に煤痕が残る。

瀬戸美濃焼（第57図、PL.49～51）

鉄釉　碗は法量比から見て大きく3グループに分類される。いずれも図上復元によるが、口径11cmを中心に12cmまでの寸法に収まるものと、それを一回り大きくしたタイプ、いわゆる「小天目」の口径約8cmの小型碗の3タイプである。いずれも黒ずんだ褐色の光沢をもつ飴釉が施され、見込みや外面腰部に釉溜りを呈する。腰部には鬼板を施す。口縁部水切は弱いくの字に屈曲し、高台の形態はPL.53に示したように輪高台のものとベタ高台に若干内側をえぐるタイプのものとに分かれ、後者が5点と数的には上回っている。706～713は口径約11～12cm、器高約6cmに収束する碗の一群で、711は2次加熱を受けたものか、かせており表面がザラつく。714～716は口径約13cm前後に収束する碗である。いずれも口縁部の小片である。717は口径8.2cm、器高4.1cmの小碗である。高台は削り出しによる内ぐりの浅い輪高台がつく。胎土、焼成はともに良好である。722、723は水滴である。前者は底部が糸切りであるのに対して、後者は低い輪高台を作りだしている。釉調も前者が黒褐色を呈するのに対して、後者は茶褐色の渋釉に近い色調を呈する。耳部は紐通しが貫通する。724は小型香炉である。胎土は灰褐色を呈し密度も粗い。釉はズブ掛けでタップリ施される。

719～721は皿である。前者は内湾するタイプで見込みにトチンが残る。使用痕跡の細かな擦痕が見られる。高台裏に砂目跡がある。後者は所々に釉禿がある明るい飴釉が施される端反りタイプの皿で、見込みに3ヵ所のトチン、高台内側に輪トチンが残る。削り出しによる低い高台が見られる。口径はいずれも10cm前後で、器高は2.5cmである。743も鉄釉の皿片である。

灰釉　碗器型が比較的にまとまって出土した。法量比をみると口径約12cmに収束するタイプと一回り大きいタイプの2者に分かれる。この傾向は小型碗を除いて鉄釉のバリエーションと合致する。胎土はいずれも粗いモグサ土で、灰褐色を呈する。725・726は線描連弁文を施している。727～729は無文の碗である。

皿には口径9cmのものと、11～12cmに収束するものとの2者がある。内面中央には菊、カタバミなどのスタンプ文が捺される。高台裏に輪トチン痕が残る。ズブ掛けで釉調は概して良好で明るい灰緑色を呈す。内湾気味に立ち上がって口唇部で若干外反する。これとはタイプの異なる、高台が露胎の腰折端反タイプが2点（741・742）見られる。復元径10.8、11.2cmとほぼ11cmに収束する。また、高台の形態からみると輪高台のタイプが大半であるのに対して、737のように碁笥底タイプのものもみられる。

また、749のような鉄釉碗を模したタイプ、750の平碗タイプの黄瀬戸も見られる。751は広口の小壺か香炉とみられる糸切底の瀬戸製品で、貼付による脚がつく。

中国製陶磁器（第58・59図、PL.52～54）

中国製陶磁器には青磁、白磁、青花白磁（染付）、その他がある。器種としては碗・皿類の供膳具が

目立ち、いわゆる「唐物荘厳」とされる青磁、白磁の優品は少ない。以下、個別に見てみよう。

青磁　碗には線描蓮弁文碗（763、764）がある。767の小碗は外面に８区画の区画文がみられ、内面は菊花状の沈線が充填される。見込みはヘラ描きによる８弁の花卉文がみられる。更に高台裏には墨書「八」字がのこる。皿には稜花皿（770）と菊花皿（771）がある。このうち、稜花皿770は内外面に２次加熱を受けたらしく白くかせておりザラつく。776は腰折タイプの外反する皿で釉調は明るいブルーである。高台裏は露胎である。774、775はいずれも復元口径８㎝の小型香炉で、前者は釉調は明るいブルーを呈し、後者は暗緑色を呈す。挿図20に示した華瓶は新安海底文物にも見られる樽形瓶に類する優品で、体部のみが残存する。縦位置の筍形の区画帯が４単位貼付される。遺存度は良好で釉調は鈍い灰緑色の青磁釉が施される。

白磁　出土品の大半は皿であり、端反タイプの景徳鎮磁で占められる。法量比による器型のバリエーションも豊富で、口径10～17㎝のものまでまんべんなくみられる（781～793、798）。朝倉館の分類ではこのタイプはⅠ類に含められ、11～12㎝、15～16㎝の２者に大別されている。しかし、カワラケや染付皿との対比から細分類の必要性も生じており、類別化が急がれる。794は乳白色を呈する内湾の皿で、底部は欠損する割高台に属する皿であろう。796は内面の釉を蛇の目風に掻き取るもので、色調も明るいブルーを呈する。この手のものは少量ではあるが一乗谷では定量出土しており、青白磁にも分類される腰折タイプの皿とともに類別化が必要な一群である。799は前述の景徳鎮タイプの端反皿であるが内面に型押しによる花卉文が見られ、注意を要する。777はいわゆる華南三彩釉の青釉が施された小型皿で、これまで交趾三彩皿と呼ばれていたものである。小片が１点出土している。

青花白磁（染付）　やはり青磁、白磁に比べて量的に豊富な出土をみる。碗タイプは口径12～15㎝のものがみられ、いずれも内湾する。小野分類（小野1982）の碗C群である。芭蕉文、牡丹唐草文、鳳凰文などが見られる。皿は端反りタイプ（807～809、813）と内湾するものと分かれる。端反りタイプでは口径９～13㎝のものまであり、牡丹唐草文、山水に唐子文などの文様の皿が多い。内湾するものには外面に蓮池文、唐草文をもち、内面を圏線のみで他は無文とするタイプ（810、811）と、器壁がやや厚手に成形され、外面に波濤文のデフォルメされた連続文をもつもの（812）や、外面や内面を無文とし、内面見込みに水魚文を貼付するもの（814）とがある。なお、皿812の底部には墨書による「二」の字が確認される。819は輪高台風に削り出した底部に砂目跡を残す内湾の皿で、見込みは蛇の目に釉を掻き取っている。小野分類の皿B・C群とは区別され、いわゆる漳州窯タイプに属する（注２）。

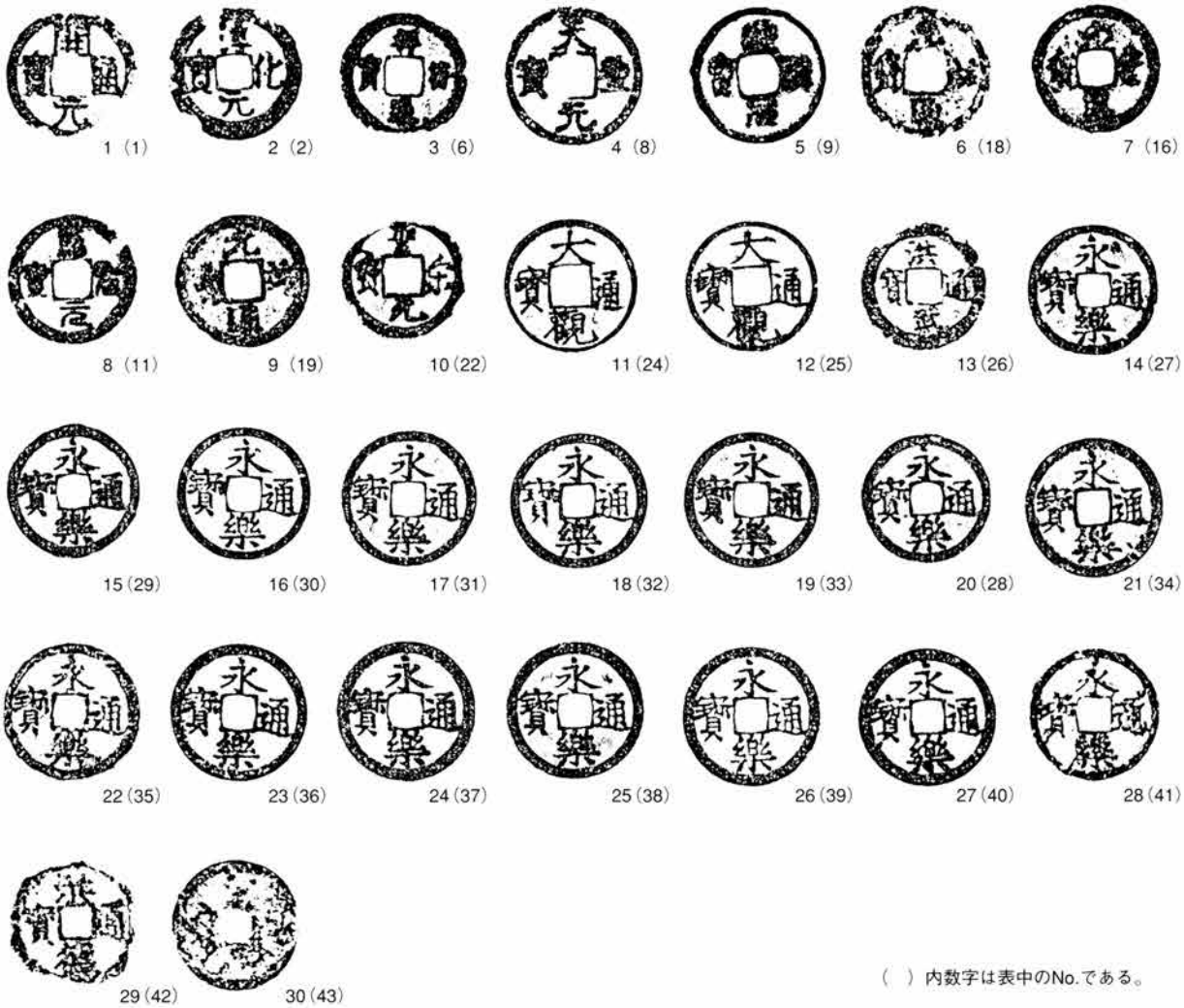
木製品・金属製品（第60図、PL.55）

木製品には、漆椀、曲物、下駄、墨書木札、櫛、独楽などがある。いずれも外濠トレンチからの出土で外濠以南の屋敷等からの廃棄、流れ込みによるものと推察される。かって朝倉館や中惣で屋敷を囲む外濠の調査を実施しているが、整備上での崩落の危険性を考え、遺構保存を優先しいずれも全体を発掘するには至らず、濠の規模を確認するトレンチ調査に留まっている。今回も濠の幅、深さ、遺構残存状況把握のための部分的な試掘に留めている。濠内の遺物堆積状況の全容把握は今後に機会を得て実施することとしたい。

820～822は内外面ともに黒漆塗の椀で820、821は失漆による開扇文（３単位）を内外面に配する。822は蓬莱文の椀である。これらのいずれも一乗谷ではよくみられる文様の椀で、当時の普及品であったことを伺わせる。821は高台径7.0㎝、高1.5㎝で、822は高台径8.0㎝、高2.4㎝を測る。高台の形状からみて組椀と考えて重なるとちょうど組み合うかたちとなり、当時３つ椀程度の組合せで組椀が普及していたことも推定しうる（南1997）。825の雪下駄は緒孔の回りに足指の痕跡がのこり、側面の擦り

No.	銭　種	口径(　)	書体	備　考	No.	銭　種	口径(　)	書体	備　考	No.	銭　種	口径(　)	書体	備　考
1	開元通寶	24.0			17	□豊通寶	24.0?		1／2欠	33	永楽通寶	24.5		
2	淳化元寶	24.0			18	元祐通寶	24.5			34	永楽通寶	25.0		
3	景德元寶	22.0			19	元祐通寶	24.0			35	永楽通寶	25.0		
4	□德元□	―――		1／2欠	20	紹聖元寶	23.5	隷書		36	永楽通寶	25.0		
5	祥符元寶	22.5			21	紹聖□□	―――		1／2欠	37	永楽通寶	25.0		
6	祥符通寶	23.5			22	聖宋元寶	21.5			38	永楽通寶	25.0		
7	天禧通寶	24.5			23	政□□寶	―――		1／4欠	39	永楽通寶	25.0		
8	天聖元寶	25.0			24	大観通寶	24.5			40	永楽通寶	25.0		
9	明道元寶	24.0			25	大観通寶	24.0			41	永楽通寶	25.0		
10	治平元寶	23.5	隷書		26	洪武通寶	23.0			42	洪德通寶	24.0		安南銭
11	熙寧元寶	23.0	隷書	1／2欠	27	永楽通寶	24.0			43	□□□寶	23.0		
12	熙寧元寶	24.5	隷書	1部欠	28	永楽通寶	24.0			44				
13	元豊通寶	22.0	草書		29	永楽通寶	24.0			：	不明銭種9			
14	元豊通寶	22.5	隷書		30	永楽通寶	24.0			53				
15	元豊通寶	23.0			31	永楽通寶	24.0							
16	元豊通寶	24.0			32	永楽通寶	24.5							

表9　銅銭一覧表



(　) 内数字は表中のNo.である。

挿図21　銅銭拓影 (4/5)

減り状態とも併せて考えると、右足の部分であることが判る。

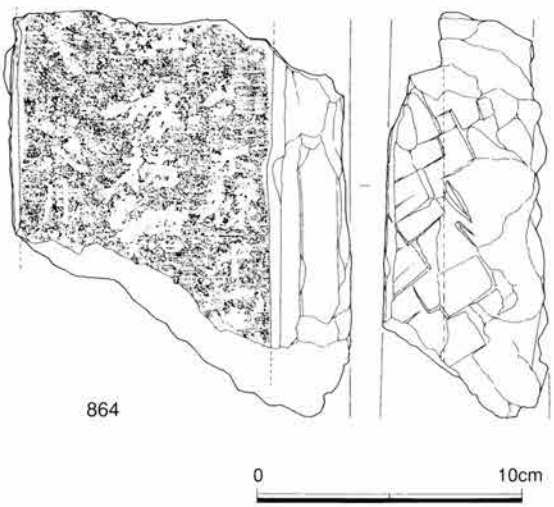
827は「貳丁たちまち」の墨書がのこる木札状の製品である。828は「たくみ殿まいる　宇左」と墨書された付け札である。概報では、この人名と考えられる「たちまち」、「たくみ殿」、「宇左」に関する考察があり、それぞれ千秋氏の一族で立町郷を名字の地とする立町氏、朝倉譜代の重臣詫美氏、宇野氏であろうとする見解が報告されている。そのなかでも詫美氏は上城戸外濠以南のどこかに屋敷が所在したことを傍証する有力な資料となっている（概報1989）。挿図22は柿経である。「無量寿経」下巻の部分である、との報告がある。

826は一乗谷初例の独楽（コマ）である。直径2.7cm、高2.1cmを測る小型のこまで、芯棒の部分までロクロで挽あげたものである。『慕帰絵詞』に描かれたものと同じ形態であり、もともと「胡魔」を打ち払う呪具であった、との指摘がある（水野1990）。830は折敷の底板とみられるもので、「ひつなへにや」の墨書がある。824、829、831は用途不明の加工品である。

金属製品には釘、火箸、刀装具、用途不明の金具がある。釘は834～836ともに幅0.5cm、長約5.5cmを測る。837は長約９cmである。第29次調査SE1047出土の一括出土の釘（概報1979）では14・10・４cmの強い集中と、７・5.5・３cmに収束する別の傾向があるとの計測結果が得られた。

火箸は形状の分かるものが４点出土しており、839、840は両端が欠失しており、838、841はともに長16.5cmを測る。第49次調査でも同様の火箸が出土しており、先端部の鎖つなぎの金具が見られる（概報1985）が本資料ではこの金具が失われている。833は概報で銅製鎹（ハバキ）として紹介しているが、刀の鞘に組み合わせる口金物の可能性もある。遺存度は良好である。

銅銭は表９に示すとおり、計53点出土している。うち18点は外濠より出土している。挿図20には図示可能な資料について拓影を示した。No.２淳化元寳よりNo.25大観通寳までは北宋銭で、No.26洪武通寳、No.27以下の永楽通寳については明銭、また特殊なものとしてNo.42の安南銭「洪德通寳」がある。



挿図23　板碑

挿図22　柿経

石製品（第61・62図、PL.56～58）

石製品には、茶臼、粉挽臼、盤、石製火炉（バンドコ）、硯、火鉢などがある。

茶臼は身部と台部とがある。身部（847）は笏谷石製で取っ手部分が遺存している。台座（845）は石材が異なり、別物と考えられる。漆などの塗布された痕跡はない。粉挽臼は計５点見られ、848の上臼が花崗岩であるのを除いて他の４点はいずれも笏谷石製である。

石製火炉については、既に笏谷石製のもので、O型、D型の２者があり、稀に長方形のものや、ミニチュア形のものが出土することは指摘されている。今回は一乗谷で一般的なO型、D型のそれぞれ身部、蓋が出土している（853～855、862、863）。このうちの853はO型、いわゆる楕円形のバンドコであるが、全面の窓部分と背面を欠失している他は概ね原形を留めている。長径20.5㎝、器高13.5㎝を測る。窓のある前面は煤を吸って黒灰色を呈し、上半は熱変化によって赤色化している。内面の火床にあたる部分は灰青色を呈し、笏谷石の元の色調を保っている。外面は底部付近で灰青色、中央で帯状に黒灰色、上面は赤色と縞状に色変化が確認され、使用による状態変化が顕著に伺える好例である。また蓋855などは図の右半分が表裏ともに煤を吸って黒色化しており、火が起きるまでの間かなりくすぶりがでていたことを示している。

856は阿形の狛犬である。頭部と脚部（台座）が出土した。笏谷石製で、特に漆塗や朱などの顔料を塗布した形跡はみられない。この種の石製品は珍しく一乗谷では今回が初出の例である。近世以降の民俗例では神社に子供の無病息災を祈願して奉納するものが知られる。挿図23に示した板碑864は概報で報告しているが、線刻による五輪塔を２列２体または３体刻み、中に法名や供養の年月日を入れた板碑であり、『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ―銘文集成―』では道福谷や西新町で確認されている。近年の平成６・７年度に実施した西山光照寺跡の発掘調査でも新たに追加資料が確認され、やはり五輪塔板碑が２基見られる。

858～861は硯である。いずれも破片であり２次加熱を受けて一部に赤変した部分が見られる。860は中央部に細い穴を穿った痕跡が認められ、２次使用が考えられる。857は概報で人面を刻む石製品と報告したが４つ脚の台座を有する容器もしくは祭壇具の獣足型の脚部と考えられる。材質は笏谷石である。

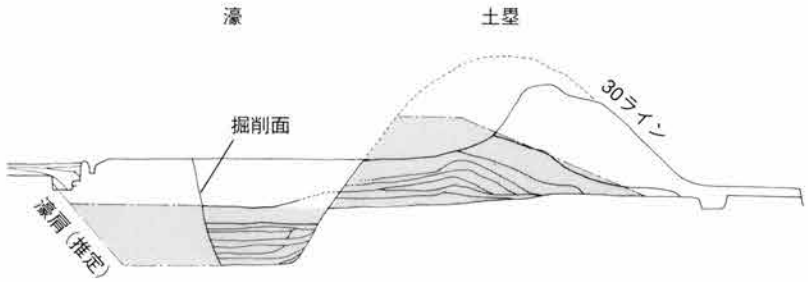
4．小結

a.上城戸土塁の構造に関する一考察

発掘の結果得られた土塁の規模は、直線にして川際石垣面より山際までの延長は105m、幅は平均して16m、濠幅は12mである（前出概報1989）。斜面の傾斜角は濠側（いわゆる外法）で約55°、道路側（内法）で約40°と若干の差があり、濠側の外法がより急角度となっている。

濠と土塁の土量に関する関係はどうであろうか。後世の軍学書にいう「土積りドヅモリ」である（北垣1981）。一般には濠幅10間、深さ５間で濠を掘って掻き上げる場合、土塁は基底部幅８間、高さ３間とする。その際、多少土が余るが、これは季節により、乾燥度の違いで土量に差が出ることを考慮に入れての計算らしい。挿図24に示したように、31ラインの土層図をもとに濠、土塁を復原すると濠底（土居敷）約6.2m、濠上端幅約10.4m、深さ2.3m、土塁上端（＝馬踏マブミ）2.8m、土塁裾（敷）幅約11.2m、高さ3.2mとなる。前述したように、土塁部分の砂利混じり砂質土を主とする土層は、概ね濠の掻き上げによる土である。しかし、挿図24の土層断面面積は濠19㎡、土塁で22㎡となり、若干分土塁側が多くなっている。実際に上城戸では、これに更に黄色山土を盛って高さ6mとしている。通常の館を取り囲む土居とは違って、「惣構」における城戸土塁の性格から、このように高く盛り上げる必要があったのだろうか、軍学書の基準からは外れた規格となっている。ちなみに朝倉館外濠の概報（朝倉氏遺跡調査研究所1974）によれば、表土、及び後世の堆積土とされる「Ⅰ層」を除いて、土塁・濠断面面積を計算すると、こちらはおよそ１：1.5の割合で濠の面積が大きくなっていて、軍学書の基準の範疇に入っている。

ここで、下城戸との対比を見てみよう。挿図25に示したように、下城戸は発掘・整備共に一乗谷川以西の部分のみであって、下城戸自体の規模は、実は川東にも見られるのであり、濠、土塁、石垣共に、現在もその原形を概ね止どめている。西側ほどはっきりした土塁が川に突き出ていたかどうかは、後世の削平による地形の改変が著しいため、憶測の域を出ない。しかし、濠部分については現在も約25m分が遺存しており、これから推測し得る限り、同じ長さ分の土塁が、川に向かって突き出ていた可能性は十分考えられる。現状で濠の遺存度の良好な川東山付き部分から、整備の完了した西側山付きまでの濠の長さは約100mで、土橋の部分を加えると、上城戸と同じ105mとなる。幅は山付きの飛び出し土塁は15.5m、独立した北側の土塁は18mで、川東の土塁幅はほぼ独立した北側土塁と同規模と見られる。



挿図24　土層断面図

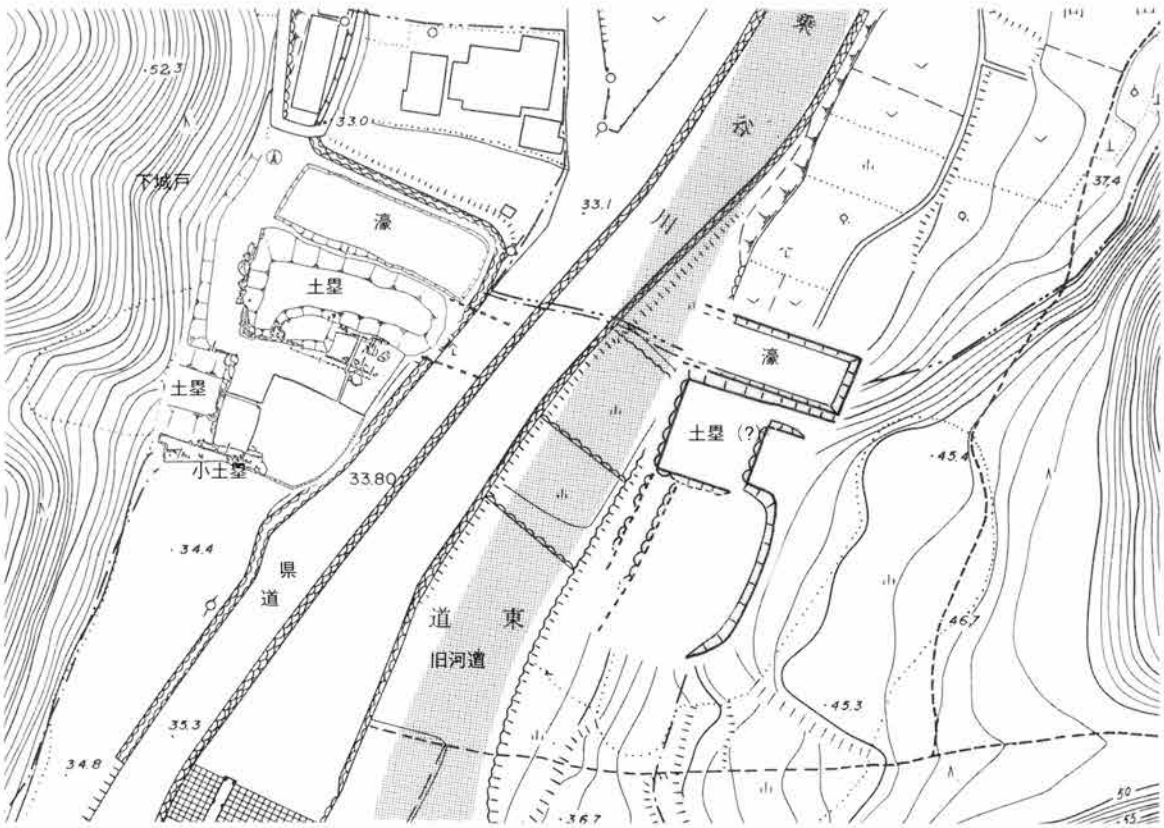
これまで、下城戸との対比においては、既に報告書Ⅰ（福井県教育委員会1979）に指摘があるが、それ以後はあまり言及されてこなかった。しかし、実際には川東部分のこうした遺構の遺存部分が確認されるのは事実であり、下城戸の全容は川東を含めて捉えるべきことは当然であろう。

下城戸と上城戸は同規模、同延長で計画された「城戸」であった、ということである。唯、上城戸は一乗谷川が西に寄っており、下城戸は中を流れているという点が違うだけである。上城戸と下城戸は両端の長さが偶然一致したのではなく、周到に計画し、同じ規模に相当する場所を選択して構築されたものと考えられる。

ところで、土塁の全体図を観察すると、遺存する西半の土塁斜面のコンターは概ねN-30°-Wを示す。そして、このコンターラインに平行して道路SS3650、溝SE3635、石列SX3676・3677が延びている。しかし、この方向はグリッドライン32で変位する。SX3680の軸は土塁コンターに平行してしるのに対して、SX3681は軸がズレて約4°西に触れている。この軸方向はグリッド32ライン以東の土塁裾のコンターラインの方向やSD3637の方向に一致する。更にこの方向はグリッド19ライン辺りでもう一度変位して、約3°分、今度は東に触れた方位を示す。SD3638やSV3659の示す方向と19ライン以東の土塁裾コンターがその方向に沿ったかたちをとる。土塁西端川側の石垣面を基点Aとするなら、最初の変位が見られる32ラインをB、次いで２度目に変位が見られる19ラインをCと設定しよう。これらのA～B、B～Cはそれぞれほぼ等間隔の43m（≒140尺）を示す。若干の方向差ではあるが、微細に見ると土塁全体の軸線は一直線ではなく、ある間隔のところで少し折れていることがわかる。

この事実は、上城戸だけではなく、下城戸にも当てはまり、互いに食い違う北側土塁と、西側山裾から突き出るかたちの南側土塁は、全く平行には構築されておらず、軸方位がズレているのである。こうした縄張り上の軸方位のズレはどう解釈したらよいのであろうか。土塁構築時点での計画と言うにはあまりにも奇妙な構築方法であり、わざわざ土塁の軸を折れ線にする意味が理解できない。

これは大胆に憶測するなら、川側A～B間、あるいは山際のC以東がそれぞれに当初の構築段階とは時期がズレて修復もしくは追加造成された結果であると解釈できないだろうか。そのような理解で眺



挿図25　下城戸遺構模式図

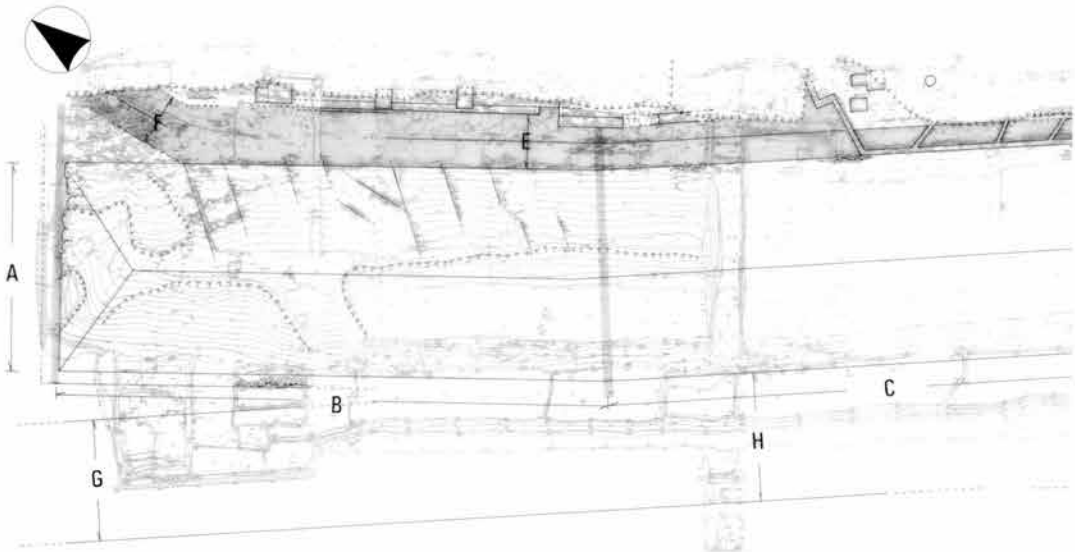
めれば、土塁構築における西半部と東半部の形態上の違い、特徴の差、また道路以北の屋敷の整地、溝の敷設などの違いが意味をもってくるのではないだろうか。そして、この理解を更に一歩進めれば、土塁に使用された盛土が掻き上げの砂質土層を主とする土層と、黄色山土とで２度に分けて積み上げられたという点にも及び、「第１節調査の経過と概要」でも触れたように、濠の砂利混じり砂質土の掻き上げが31ライン辺りでは顕著な傾向であるが、19ライン付近では濠の掻き上げ土層が稀薄になっていることに着目し、当初の掻き上げによる盛土と黄色山土の２回に及ぶ土塁盛土は一時期の所産ではなく、一旦、濠内の砂利混じり砂質土のみで盛土成形された土塁が、朝倉氏時代のある時期に何かの理由で西半部、即ち川側の土塁盛土が崩壊、もしくは大きな改変の事情が生じて、新たに黄色山土で盛り直した、という推測が可能となるのである。この時点で川側の部分（A～B）の軸方位を若干北に振ったのではないだろうか。山際C以東も同時点で川側の方位に合わせたものと解釈できる。またA、B、Cの間隔については道路以北の屋敷割に規制されていた、ということになるだろう。

以上、仮定の上に仮定を積み重ねた推論となり、甚だ根拠の怪しい結論となった。また城戸口の位置がはっきりしない段階で、軽はずみな憶測を加えるべきではないかも知れないが、土塁軸線の問題に端を発して小論をものした次第である。以後の「上・下城戸成立論」の踏台にでもなればと考えている。

b.上城戸櫓の構造について（挿図26）

上城戸土塁の東側に接して櫓跡が存在することは「一乗谷古絵図」等にも描かれ、調査開始当初から知られていたが、詳しい遺構の配置や遺存状況については触れられていなかった。しかし、1991年に筆者が一乗谷城の研究史について触れた論稿（南1992）のなかで、上城戸櫓の遺構模式図を掲載して簡単に触れた経緯がある。本報告を機会に、改めて筆者の実地踏査による見解を加えて補足を行う。

櫓跡は、標高約105m付近の尾根線までを範囲として曲輪５、土塁１、腰曲輪２、段曲輪７、堀切２、土橋２、竪堀２で構成され、総延長約150mにわたって展開する。最奥部、最高所の曲輪１からは、上城戸土塁を眼下に南北の地形が見渡せ、鹿俣口、西新町を睨む位置にある。主郭は堀切１、２に挟まれた曲輪３、４と見られ曲輪３にはL字形の土塁が見られる。虎口は西側と考えられ、上城戸へ接続する急斜面には段曲輪４～７及び竪堀１、２が見られる。背後の東側には深く、鋭く掘り込まれた堀切



挿図26　上城戸遺構復元図

1を挟んで長方形を呈する曲輪1、2が連続する。ここから尾根線を辿ると一乗谷の詰めの城である城山の「三の丸」に至る。後世においても人為的改変は加えられておらず、遺存度は極めて良好である。

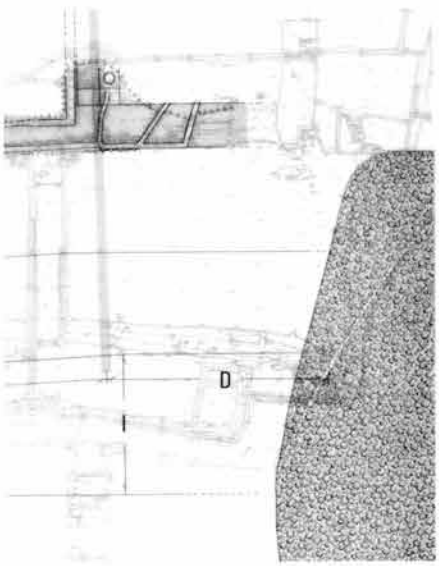
この櫓跡は小規模ながら完結性の強い山城で、上城戸土塁に併設された単純な砦、或いは見張り台とは性格を異にするものと考えられる。これに関連して、『朝倉始末記』（前出）巻六の「上ノ木戸口ノ幻城表へ懸出テ・・・」の一節に見られる「上ノ木戸口ノ幻城」に着目したい。従来より詳細は未詳とされてきた「幻城」が、実はこの櫓に該当するのではないかと推察される。これによく似た規模と構造をもつものに、馬出の「小見放城」がある。築城の時期も大きくは隔たりが無いと考えられる。上城戸の櫓では、周辺に小林権頭、青木隼人正、斉藤、詫美など重臣の屋敷が並び、これと軌を一にするかのように馬出の小見放城には、眼下周辺に朝倉右兵衛佐、朝倉権頭、朝倉兵庫助などの重臣の屋敷が並ぶ。更に八地谷の「月見櫓」でも斉藤兵部大輔、福岡三郎兵衛尉、九里、山崎長門守などが並ぶ。

こうした配置関係の共通性は到底無関係とは考えられず、城下町の「防御体制の重層構造」、言い換えれば、外に向かっての城下町の防御施設であると同時に、「辻固ノ事」に見られるように個々に屋敷割された各重臣達が、城下町内のブロック単位、または各エリアの防備を担う役割を負っていたのではないかと考えられるのである。

c.上城戸出土の遺物について

分布　第61・62次調査（上城戸）によって出土した遺物は、前項でも述べたとおり、約2万点を数える。その内訳は外濠トレンチで約15％（2,900点余）、土塁以北で約85％（17,300点余）の割合を示す。挿図27～29は調査区の各グリッド毎に出土した遺物の分布密度を示すもので、前項で述べたとおり、土塁自体からの出土は見られず、外濠と東西道路、屋敷区画での出土状況が大半であることが再確認されたかたちとなっている。段階毎に見ると1グリッド当り750点、あるいは1,000点以上の出土を示すグリッドが土塁以北の区画、特に溝3638、3636や石積施設SF3645等の遺構や外濠西端トレンチのところで見られ、それ以外は1グリッドでの出土点数は250点未満となっている。

これを、一乗谷の最もポピュラーな遺物であり、量的にも出土遺物全体の8割以上を示している越前焼と土師質土器（カワラケ）の出土状況で見てみると、全体の出土分布状況（挿図27）とほぼ重なっていることが確認され、土塁以北の屋敷からの出土で占められていることがわかる。このことは、上城戸土塁の周りの遺物が後世の開田等による攪乱で大きく拡散することなく、概ね原位置を保っていることを示すものであり、遺物の廃棄された状況が一乗谷の他の調査区とほぼ同じ状況を示している証左と言えるものである。

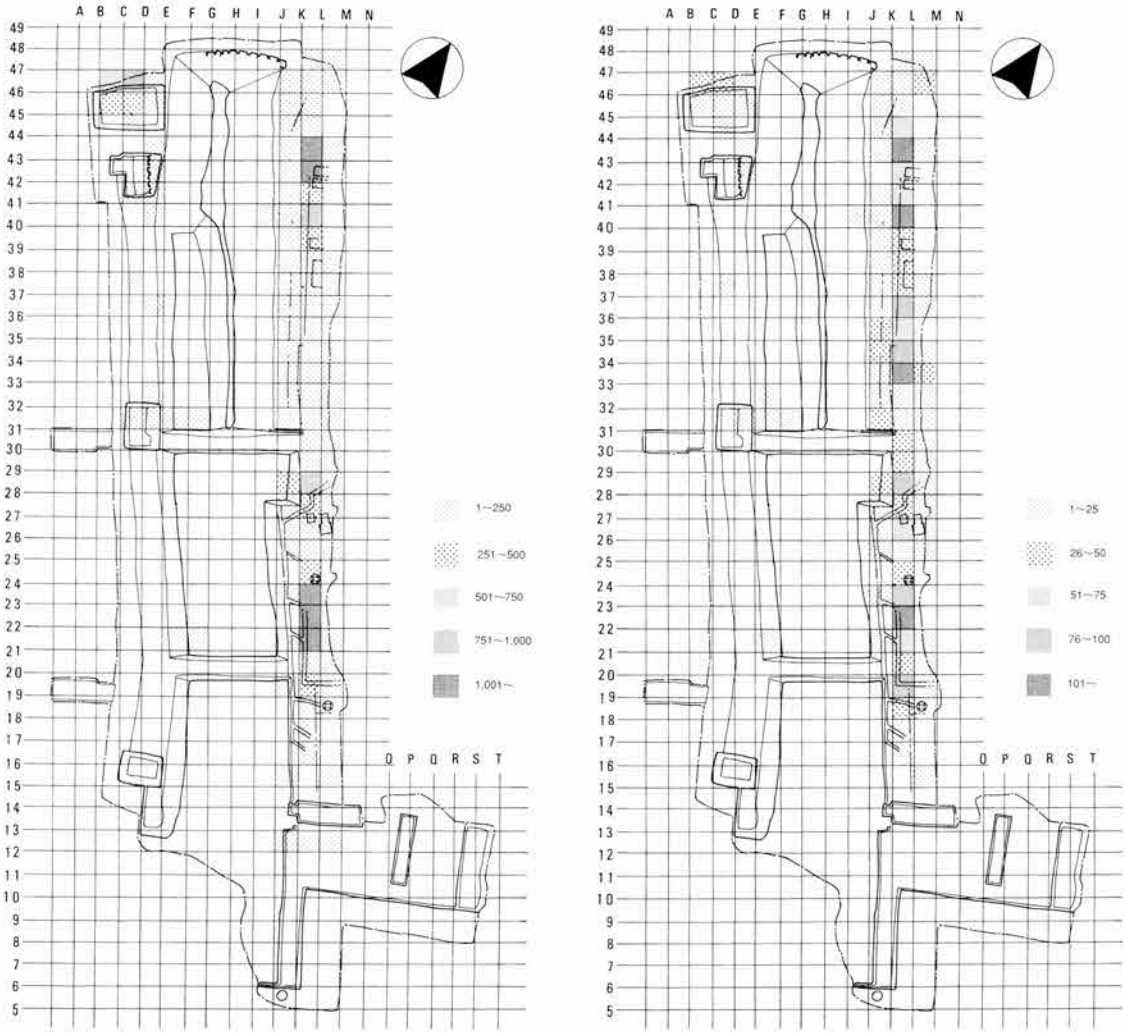


量比　遺物の出土総点数は第4表のとおり20,275点であり、発掘面積（4,000㎡）1㎡当りの出土割合比を見ると5.07点／㎡となる。この数字は朝倉館の9.86点／㎡、第15次調査区8.5点／㎡よりも低く、第20次調査区（出雲谷）での5.3点／㎡に近い。単純比較であり、屋敷の区画を広範囲に発掘した箇所とは条件も違うので、一概には言えないが、本調査区の場合、土塁自体

では遺物の出土が殆どないことを加味する必要がある。

次に各器種毎に割合比をだしてみると、第６表のようになる（注３）。越前焼については、他のどの調査区よりも擂鉢の出土比率が高くなっているのが注意される。瀬戸・美濃焼では、灰釉皿の比率が他に対して高く、鉄釉では碗の比率が高い。その傾向は町屋の第29次、第35次、第36次調査区に近い数字となっている。また、青磁、白磁、染付を見ると、これもやはり町屋での出土傾向に近くなっており、白磁皿の優位性、染付皿の割合比、青磁碗・皿の割合比はいずれも町屋の数字にほぼ重なる。

本調査区の出土遺物は、上城戸という城下町の一方の入口である、長大な土塁と外濠をもつ地区の調査区からのものであり、ある意味では特殊な地区でもある。にも拘らず、その出土傾向や分布傾向はおくにしても、各器種別の割合比には城下町各地区での出土傾向、特に寺院・町屋地区に近い出土傾向が伺え、土塁に並行して検出された東西方向の道路状遺構、恐らく上城戸土塁のすぐ近くまで区画割された屋敷の出入口に通じる道路と見られるが、こうした道路と屋敷からの遺物の割合比が示す傾向とみてよいと思われ、上城戸以北の屋敷群の性格を考える上で興味ある構成比となっている。



挿図27・28　グリッド別遺物出土分布図（全体・越前焼）

	武家屋敷 第15次	武家屋敷 第25次	町　屋 第29次	町　屋 第35次	町　屋 第36次	町屋寺院 第46次	寺　院 第17次	当主の館 朝倉館	上城戸 第60,61次
越前焼									
甕	79.9	61.5	61.8	77.2	66.2	56.1	35.1	53.7	51.4
壺	5.1	16.4	20.5	17.2	18.3	20.3	48.0	21.3	17.5
鉢	2.7	4.5	2.4	1.0		3.9	4.7	6.1	3.6
擂鉢	11.9	17.3	14.9	4.5	15.2	19.0	11.4	18.6	27.2
他	0.4	0.2	0.4	0.03	0.3	0.7	0.8	0.3	0.3
瀬戸美濃焼									
鉄釉									
天目碗	41.3	45.8	27.3	26.5	29.9	37.0	47.7	61.5	32.7
皿	--	--	1.2	2.5	1.6	3.5	2.0	--	5.3
他	12.6	14.4	14.7	29.0	18.1	27.0	17.4	9.7	12.6
灰釉									
碗	--	5.1	7.1	3.4	5.8	5.8	2.4	3.7	9.7
皿	44.6	22.9	44.8	36.4	41.1	23.7	27.8	11.5	35.8
他	1.5	11.9	5.1	2.1	3.5	2.9	2.8	6.0	3.9
青　磁									
碗		39.2	53.4	54.9	48.6	29.7	26.7	24.6	58.2
皿		34.3	21.2	33.1	36.2	37.4	30.9	28.7	30.6
鉢・盤		13.8	10.1	4.3		7.5		15.6	3.1
他		12.7	15.3	7.7	15.2	25.4	42.4	25.7	8.1
白　磁									
碗		--	0.7	0.5	2.0	1.9	--	--	1.1
皿		89.3	91.3	92.9	94.9	90.5	95.6	81.2	91.1
他		10.7	8.0	6.6	3.1	7.6	4.4	18.8	7.8
染付(青花)									
碗		24.7	23.2	35.6	24.8	28.3	34.0	52.9	23.2
皿		74.4	74.5	58.3	73.1	61.1	61.6	33.5	73.6
他		0.9	2.2	6.1	2.1	10.6	4.4	6.5	3.2

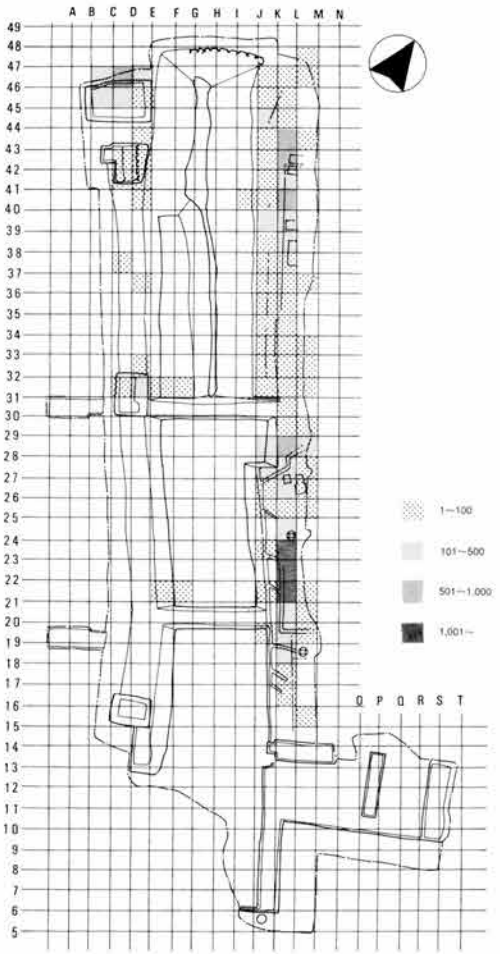
表10　各器種別割合比

注1　本調査区は遺構別に大きく土塁、外濠、道路、屋敷区画に分けられ、昭和63年度の概報では外濠と土塁より北側（道路、屋敷区画部分）に2区分した取り扱いを行った。しかし、外濠より出土した遺物は、かつて外濠内へ流れ込んだものと考えられるトレンチ深掘りによって検出したものと、それ以外にも後世の水田耕作段階での流れ込み、あるいは東半部分の大規模な削平に伴う埋設土からの遺物があり、これらを一括して扱うには難がある。

また、外濠の遺物として限定して取り扱い可能な深掘りトレンチ内の遺物は、土塁北半での遺物の出土状況とパラレルには扱えない。よって、今回は昭和63年度の概報での出土傾向の分析以上の操作は行わないこととする。

注2　この点については、一乗谷出土の青花白磁のなかから種々散見されるものであり、第100次調査区他からの出土遺物でも指摘が既になされていた。

また、堺市教育委員会森村健一氏からも有益なご教示を得ている。

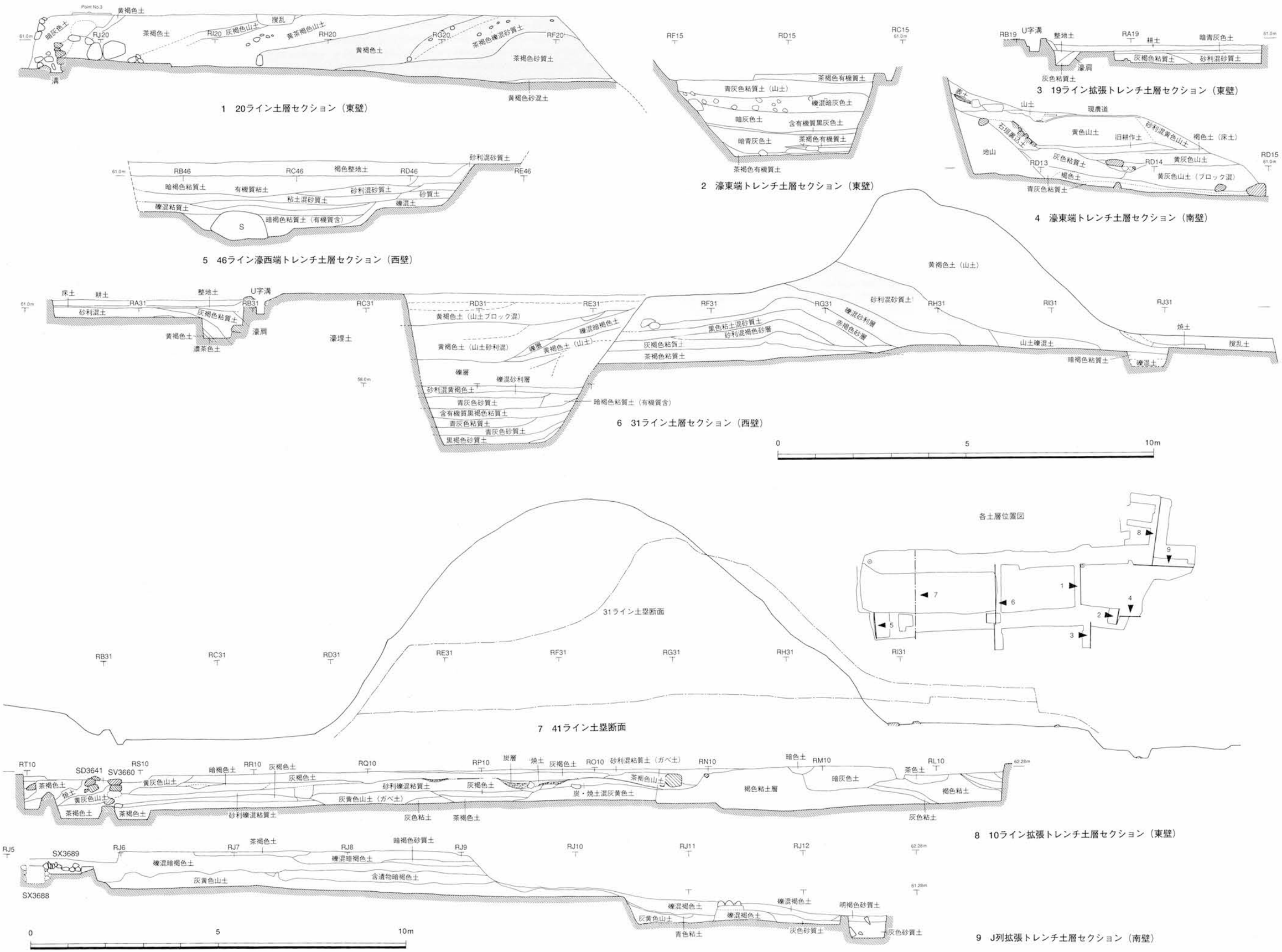


挿図29　グリッド別遺物出土分布図（土師質）

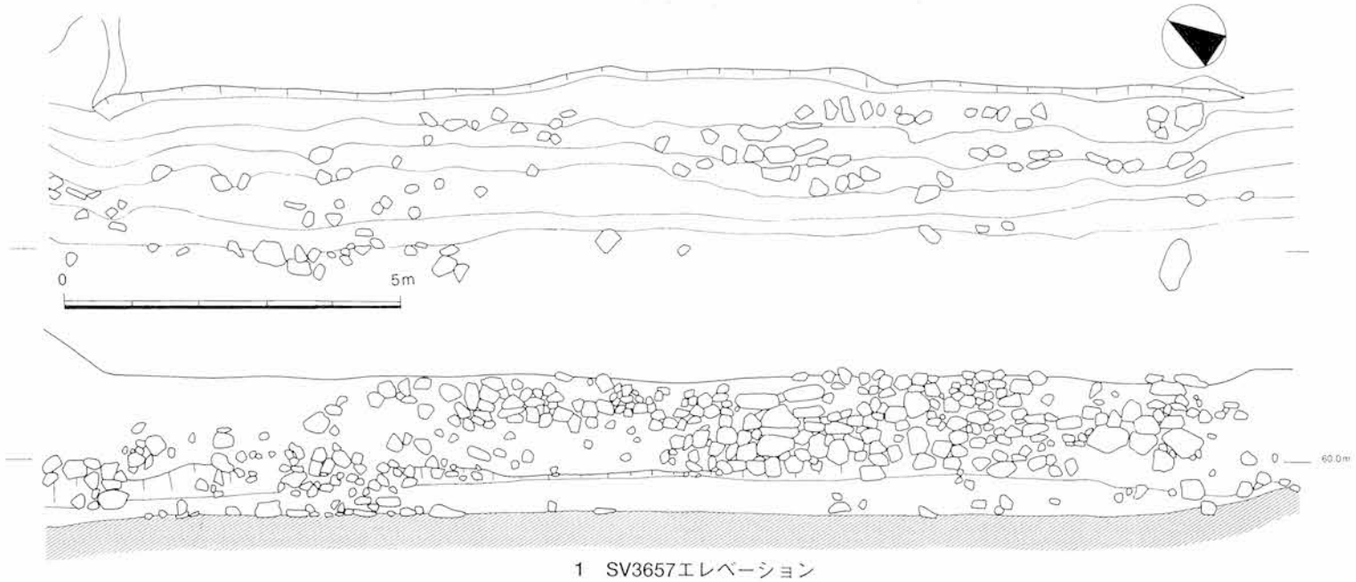
注３　小野正敏1984文献中の表-２（P77）に第60・61次調査の数字を加えて作成したものである。

[引用・参考文献]
朝倉氏遺跡調査研究所1975『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ銘文集成』
笠原・井上編1978『蓮如一向一揆　日本思想史大系17』岩波書店刊（第５刷）
朝倉氏遺跡調査研究所1979『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ　朝倉館の調査』
朝倉氏遺跡調査研究所1974『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　S48年度発掘調査整備事業概報Ⅴ』
〃　1976『〃　S50　〃　Ⅶ』
〃　1979『〃　S53　〃　Ⅹ』
〃　1987『一乗谷朝倉氏遺跡　一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書1986』
〃　1982『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　S56年度発掘調査概報ⅩⅢ』
〃　1985『〃　S59　〃　ⅩⅥ』
朝倉氏遺跡資料館1988『〃　S62　〃　ⅩⅨ』
〃　1989『〃　S63　〃　ⅩⅩ』
北垣聡一郎1981「土居」『日本城郭大系別巻Ⅱ城郭研究便覧』新人物往来社
小野正敏1982『貿易陶磁研究No.２』
〃　1984『〃　No.４』
水野和雄1990「子どものあそび」『よみがえる中世６　実像の戦国城下町一乗谷』平凡社P116-120
岩田　隆1991『城館遺跡出土の土器・陶磁器』北陸中世土器研究会
南洋一郎1992「一乗谷城研究史抄」『朝倉氏遺跡資料館紀要1991』
〃　1997『北陸の漆器考古学』北陸中世土器研究会

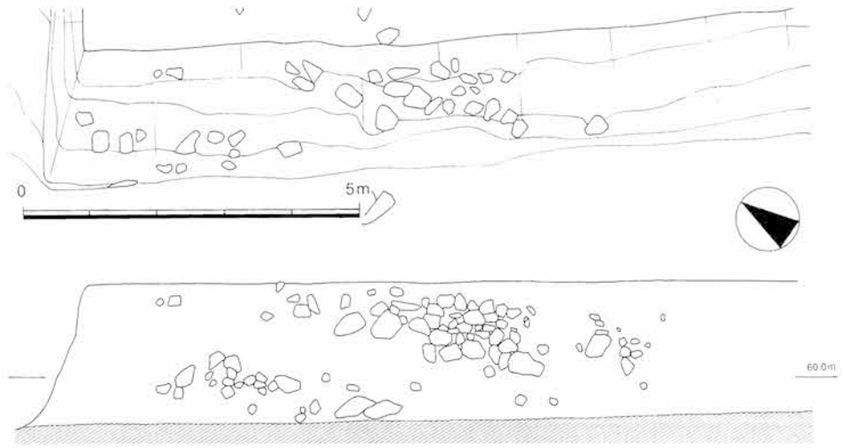
第38図　第61・62次調査土層図



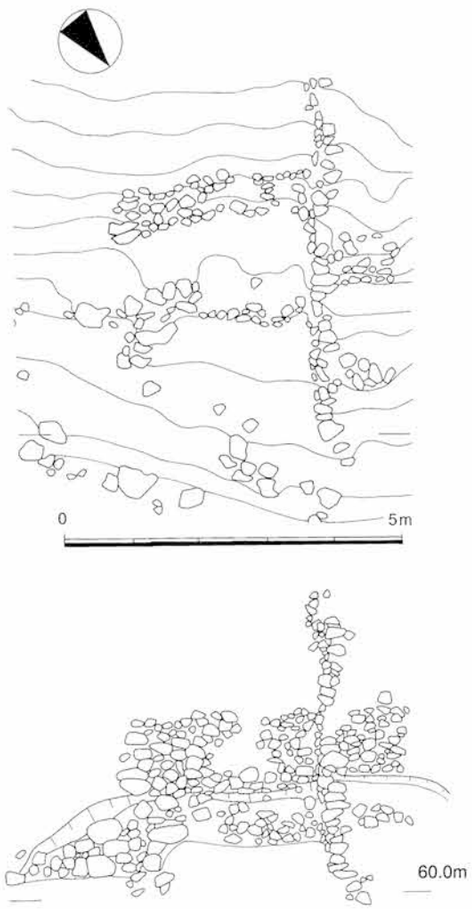
第39図　第61・62次調査各石垣立面図



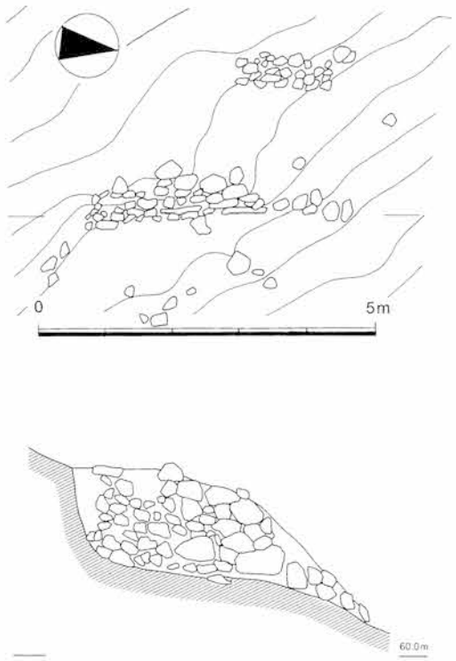
1　SV3657エレベーション



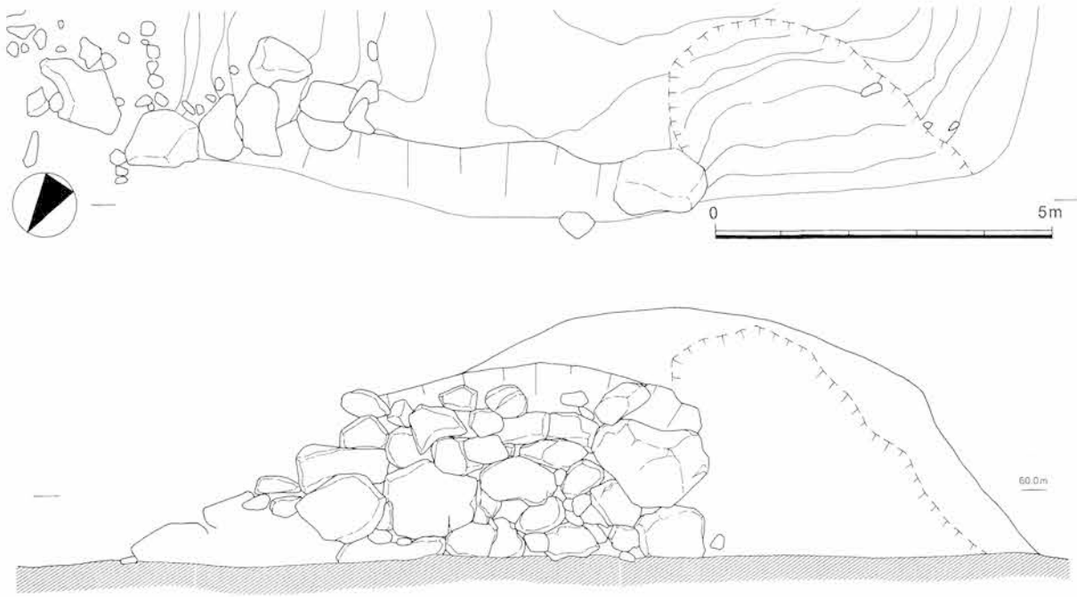
2　SV3658エレベーション



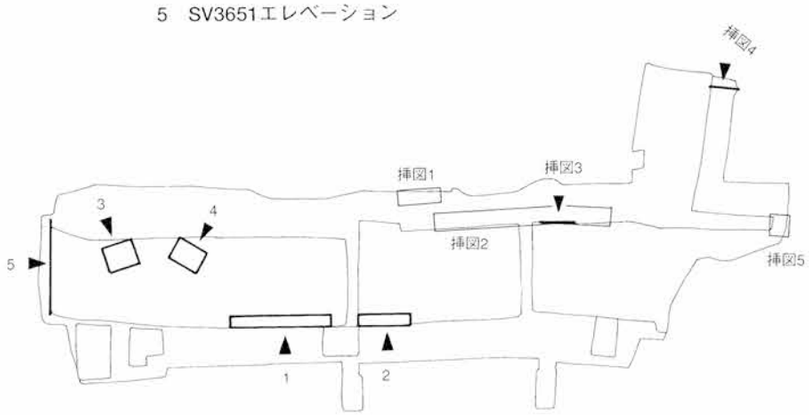
3　SV3652～3654・SX3669エレベーション



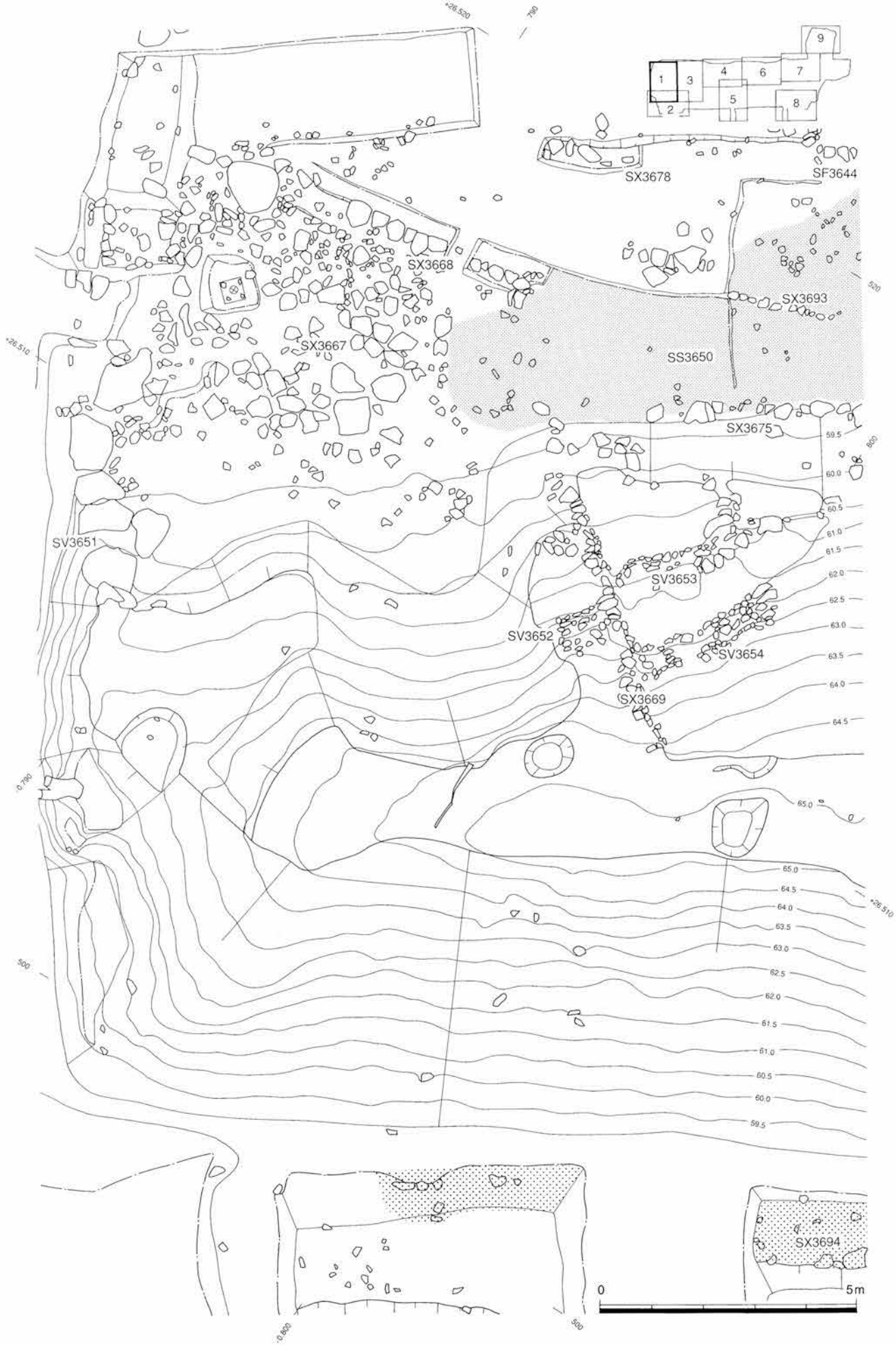
4　SV3655・3656エレベーション



5　SV3651エレベーション

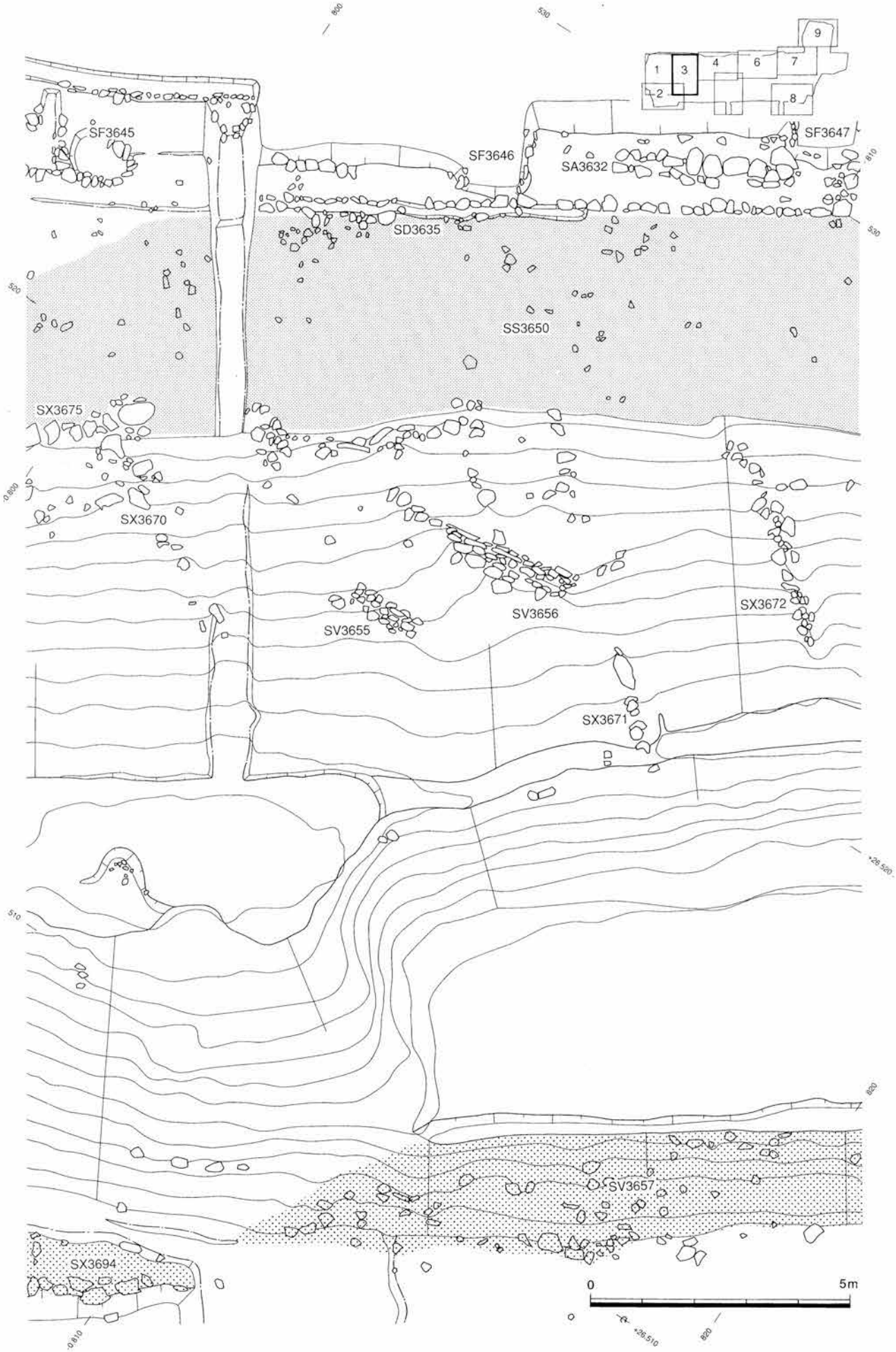


第40図　第61・62次調査遺構詳細図（1）



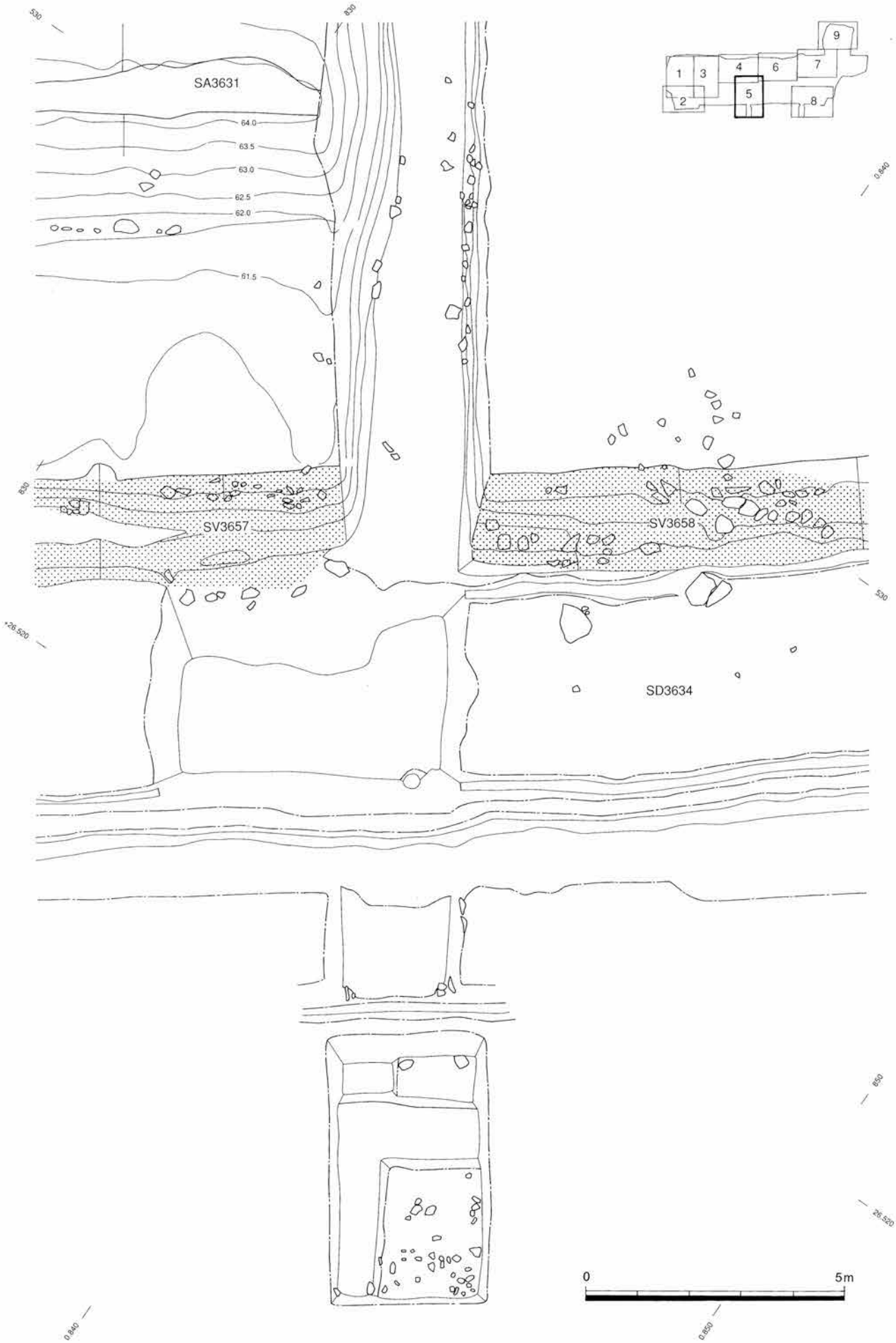
第41図　第61・62次調査遺構詳細図（2）

第42図　第61・62次調査遺構詳細図（3）



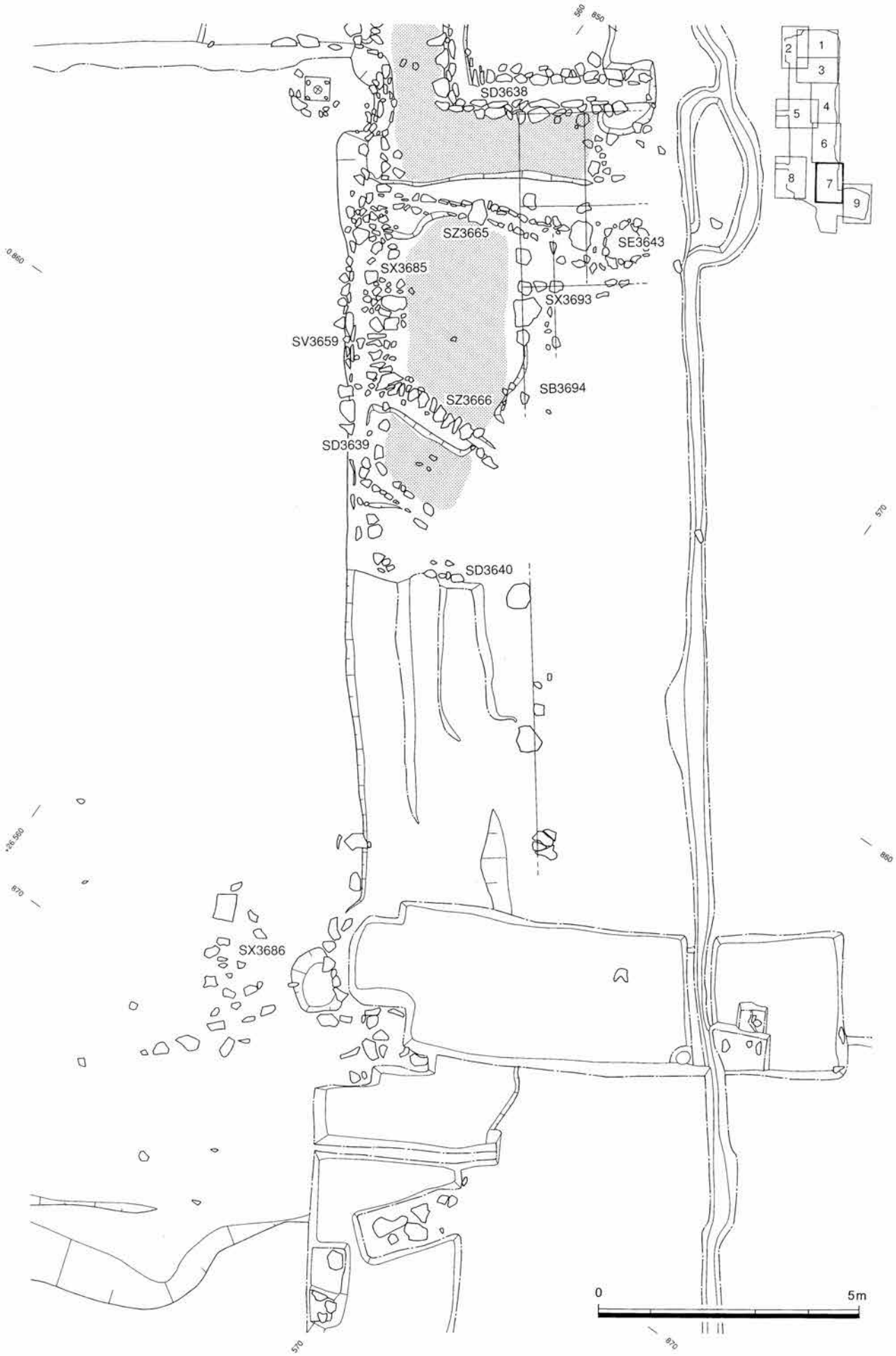
第43図　第61・62次調査遺構詳細図（4）

第44図　第61・62次調査遺構詳細図（5）

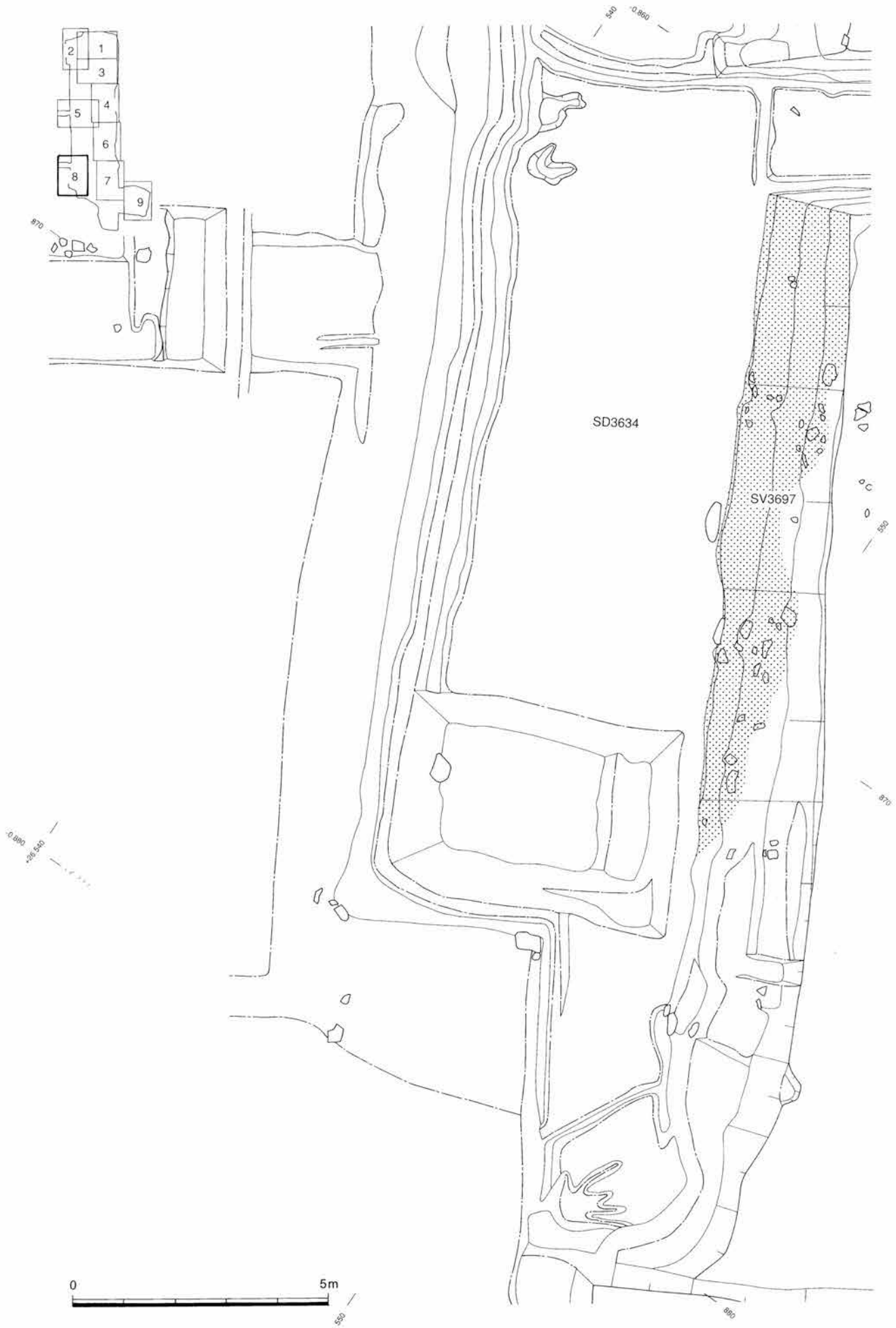


第45図　第61・62次調査遺構詳細図（6）

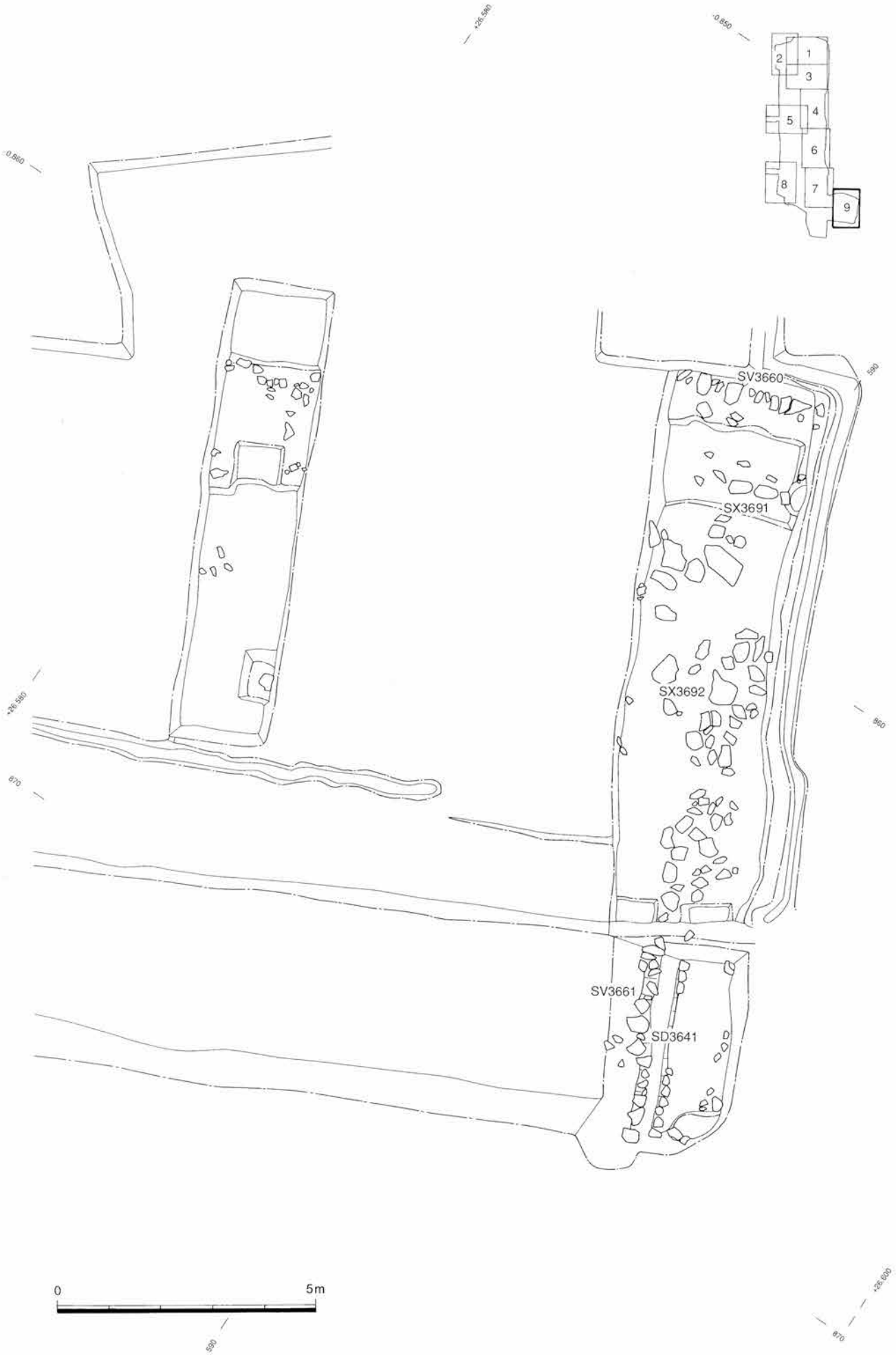
第46図　第61・62次調査遺構詳細図（7）



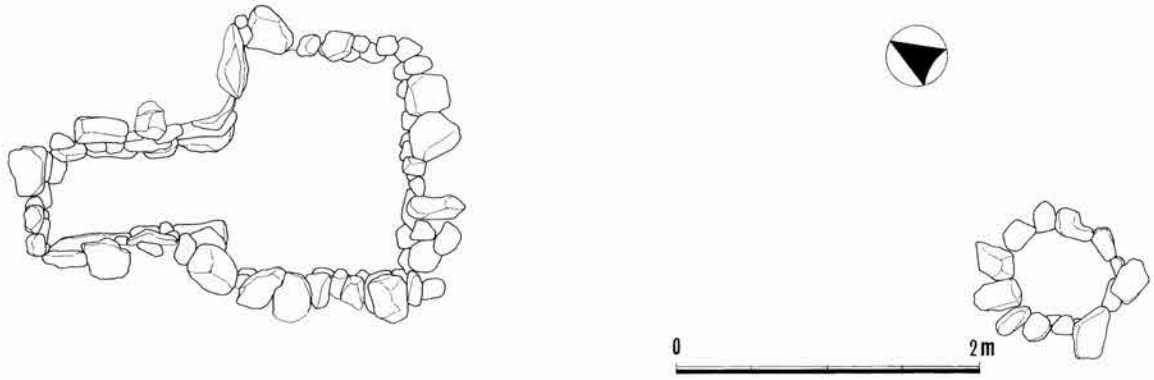
第47図　第61・62次調査遺構詳細図（8）



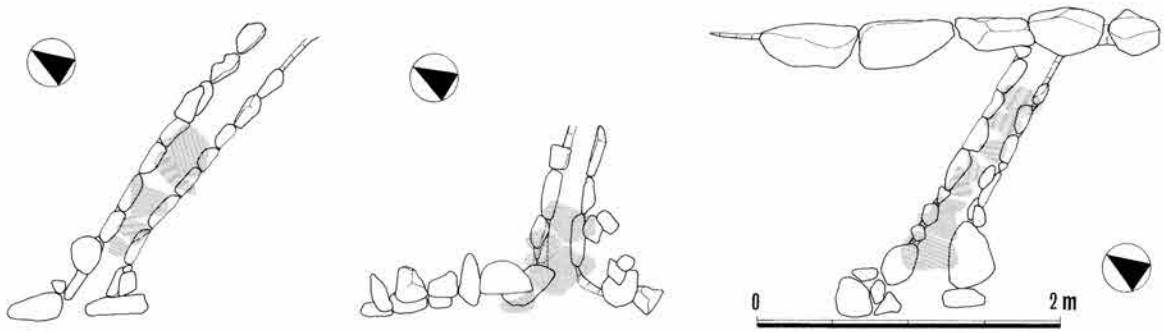
第48図　第61・62次調査遺構詳細図（9）



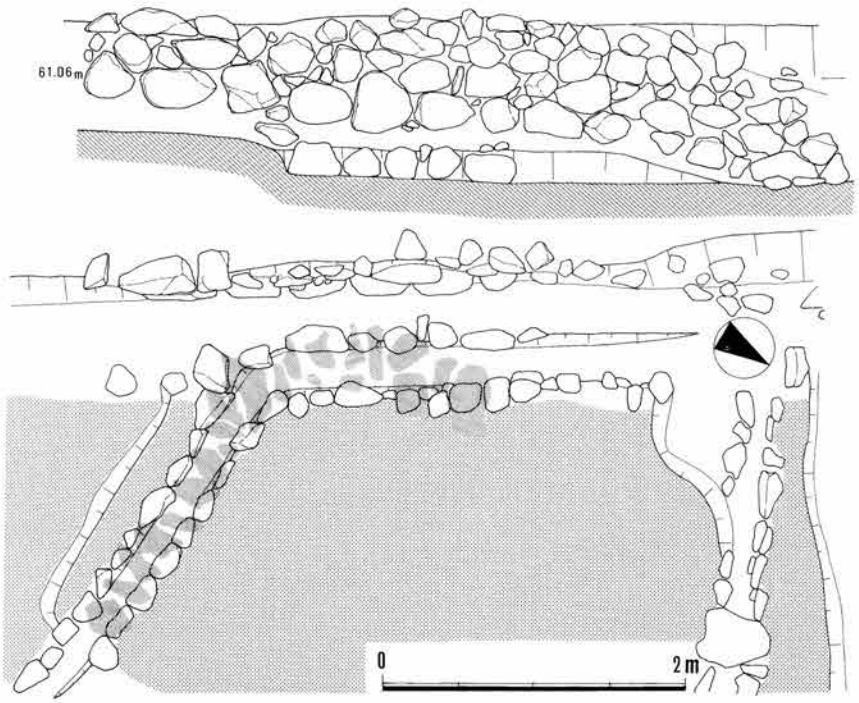
第49図　補足図（部分図）



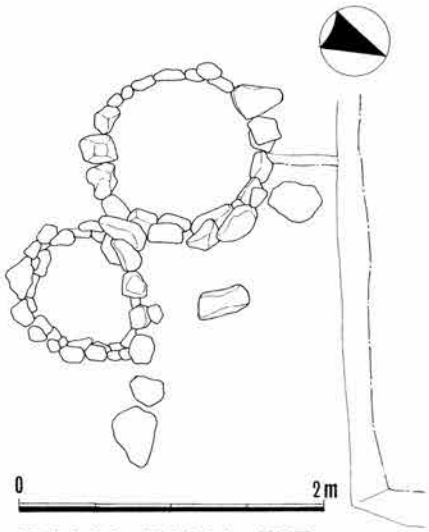
SF３６４８・SE３６４２　平面図



SZ３６６２・SZ３６６３・SZ３６６４
蓋石除去後の状況



SZ３６６５　蓋石除去
SV３６５９　エレベーション



SX３６８８・SE３６８９　平面図

第61・62次調査
調査区全景

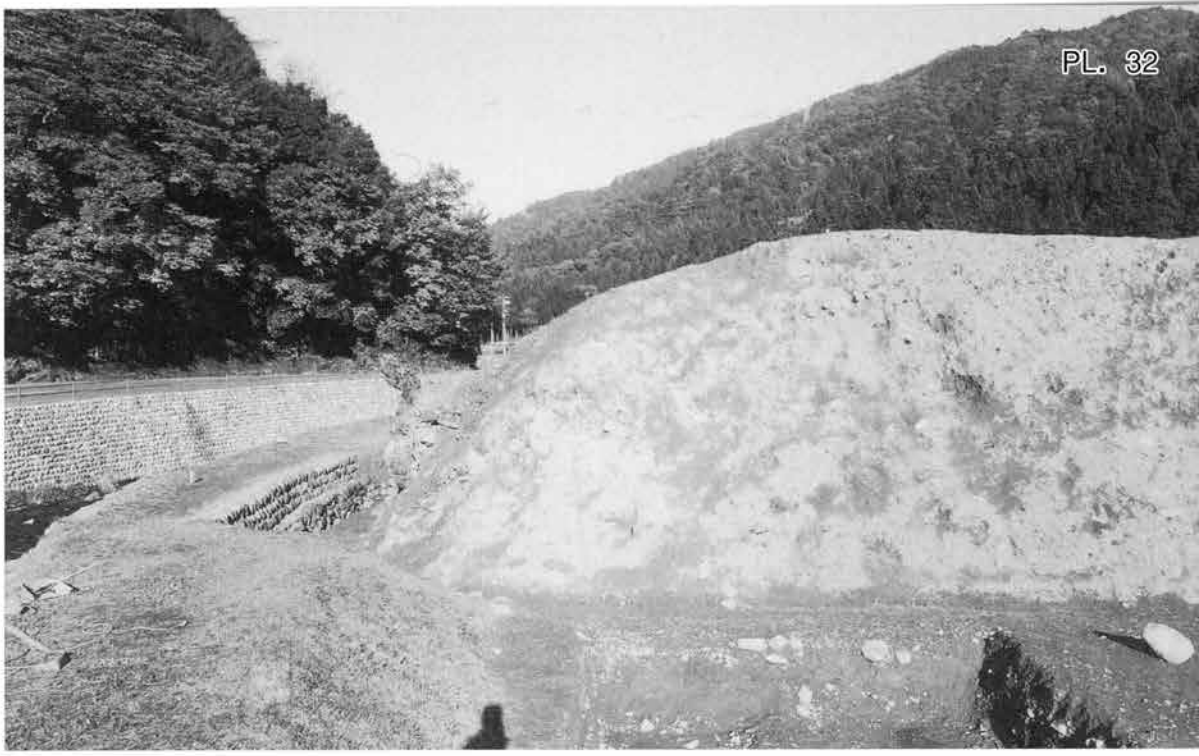
（西から）

（南から）

ＳＡ３６３１
（南から）

同　（北から）

同　（東から）



ＳＡ３６３１
ＳＶ３６５１
（南から）

ＳＡ３６３１
西半部
（北から）

ＳＶ３６５２
～３６５４
ＳＶ３６５５
・３６５６
ＳＸ３６６９
～３６７１
（北から）

ＳＡ３６３１
ＳＳ３６５０他
（東から）

ＳＳ３６５０
ＳＺ３６６２～３６６４他
（西から）

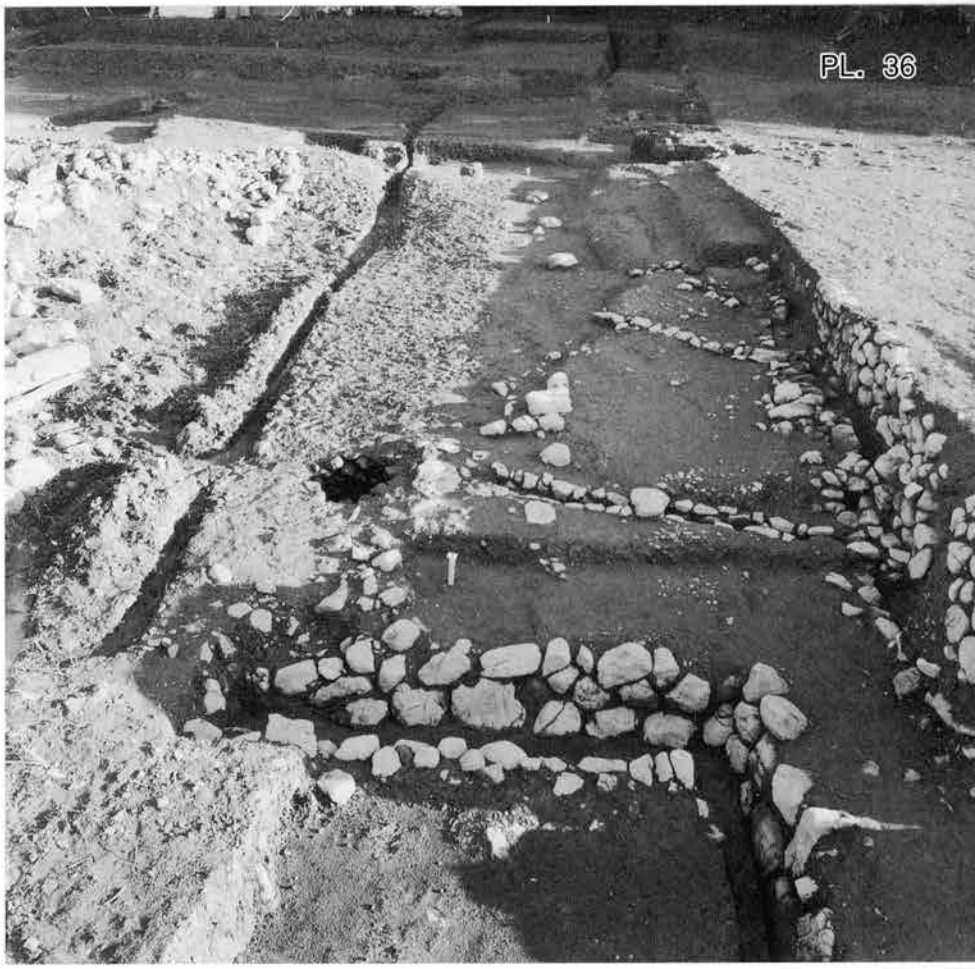
ＳＤ３６３４
（西から）

同（東から）

ＳＶ３６５５
ＳＶ３６５６
ＳＸ３６７１
（北から）

ＳＶ３６５９
（北から）

ＳＶ３６５７
（南から）



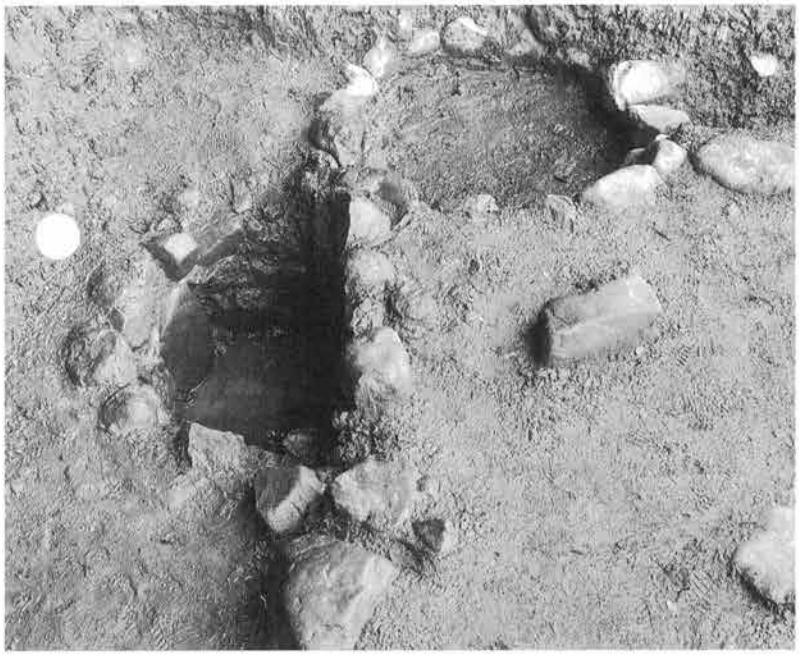
ＳＳ３６５０
東半部
（西から）

10ライン拡張
トレンチ
（東から）

ＳＦ３６４７（左）
（北から）
ＳＦ３６４４・４５
（右）
（北から）

SD3636
（上・左）
（北から）
SF3644
（上・右）
（西から）
SF3648
・3649
（下・左）
（東から）
SF3648
・3649
（下・右）
（北から）

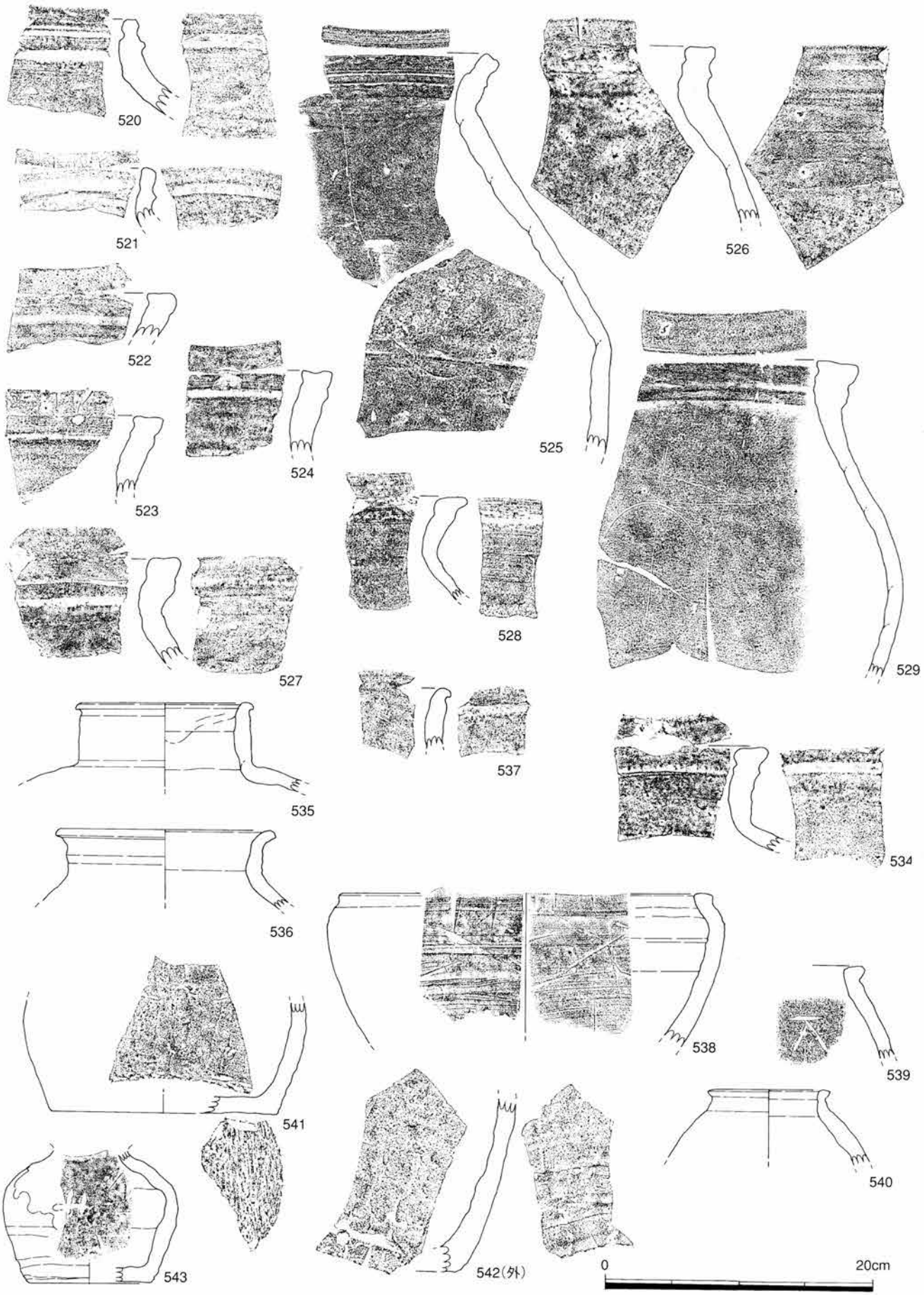
SV3651
（西から）



ＳＥ３６４３・ＳＺ３６６５（上・左）
ＳＥ３６４２（上・右）
ＳＸ３６８８・３６８９（下・左）
ＳＦ３６４８最終確認プラン（下・右）

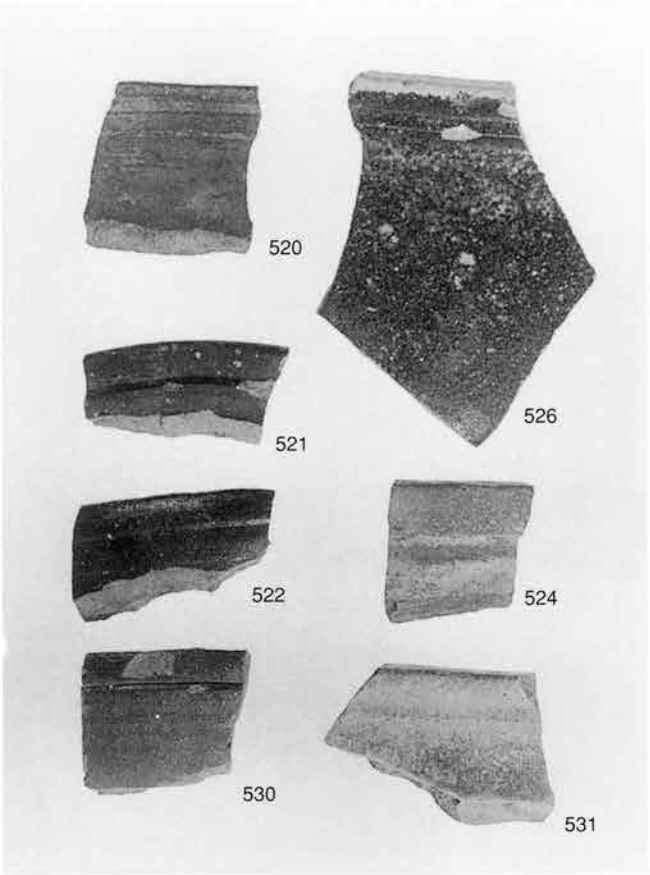
ＳＶ３６６０
（北から）

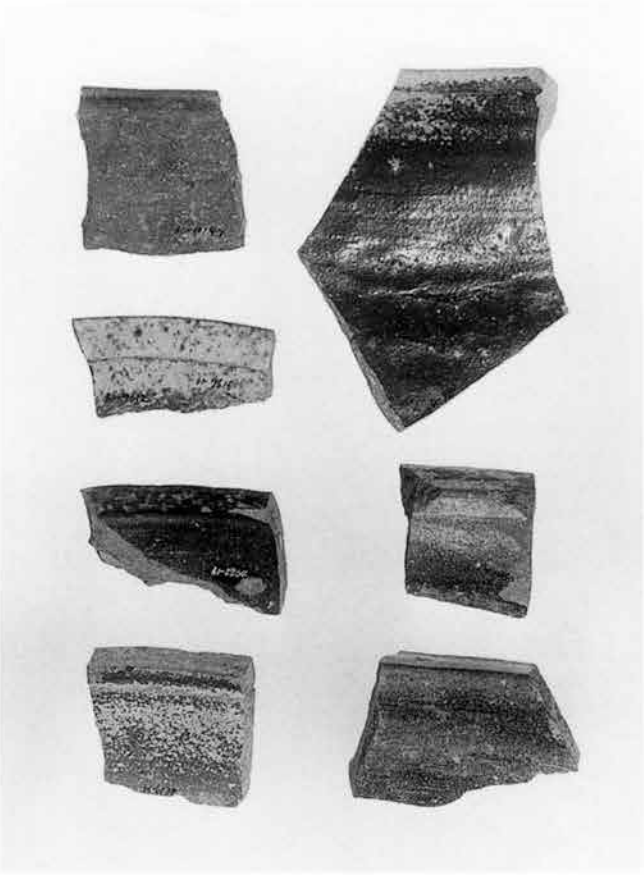
第50図　第61・62次調査出土遺物（1）

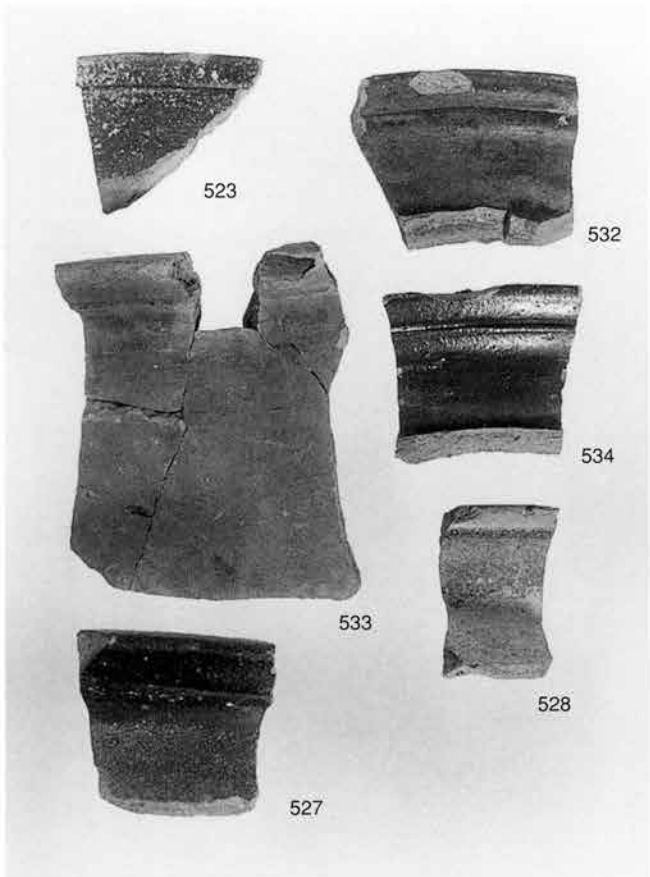


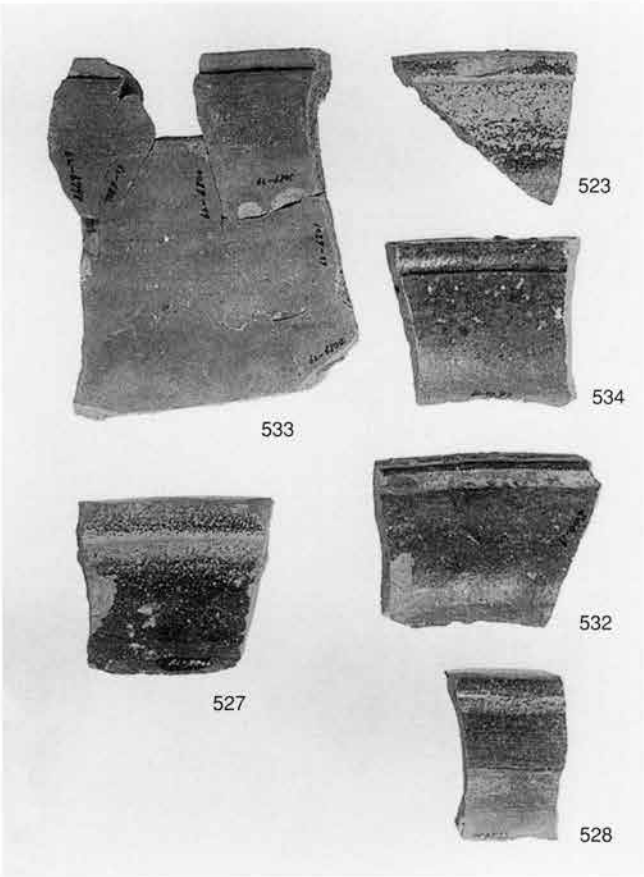
越前焼 甕520～529，534　同壺535～537・539～543　同鉢538　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（1）



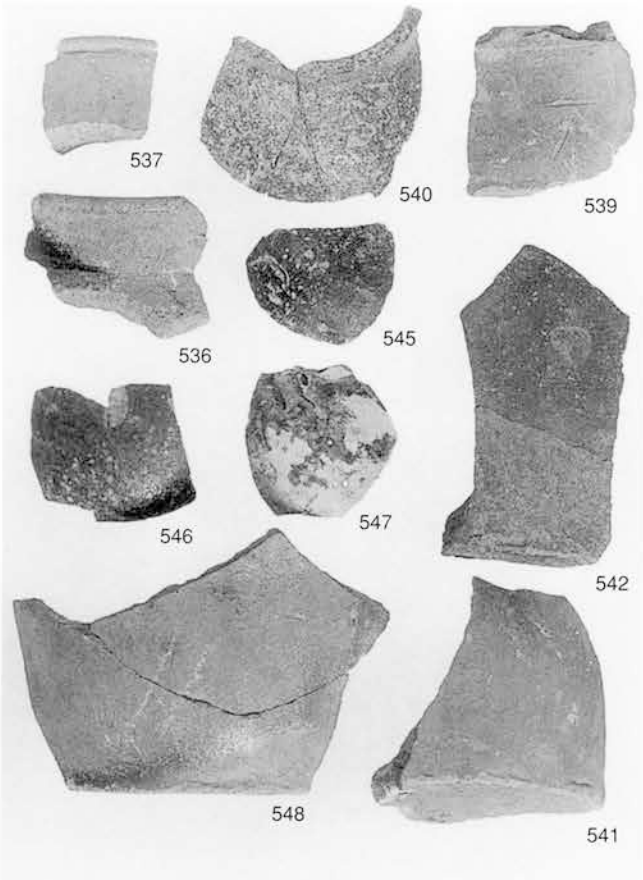


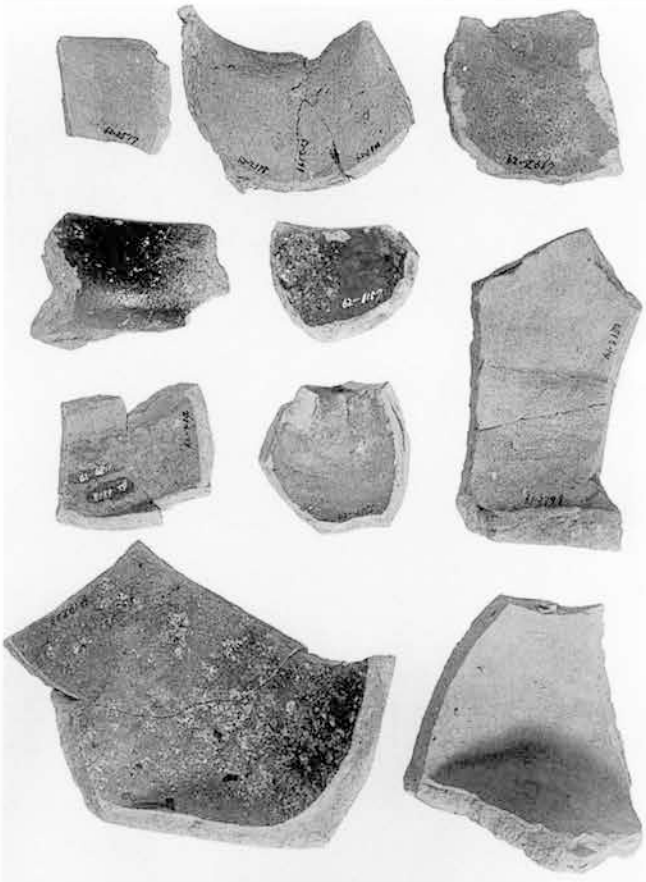




越前焼甕520～534

第61・62次調査出土遺物（2）



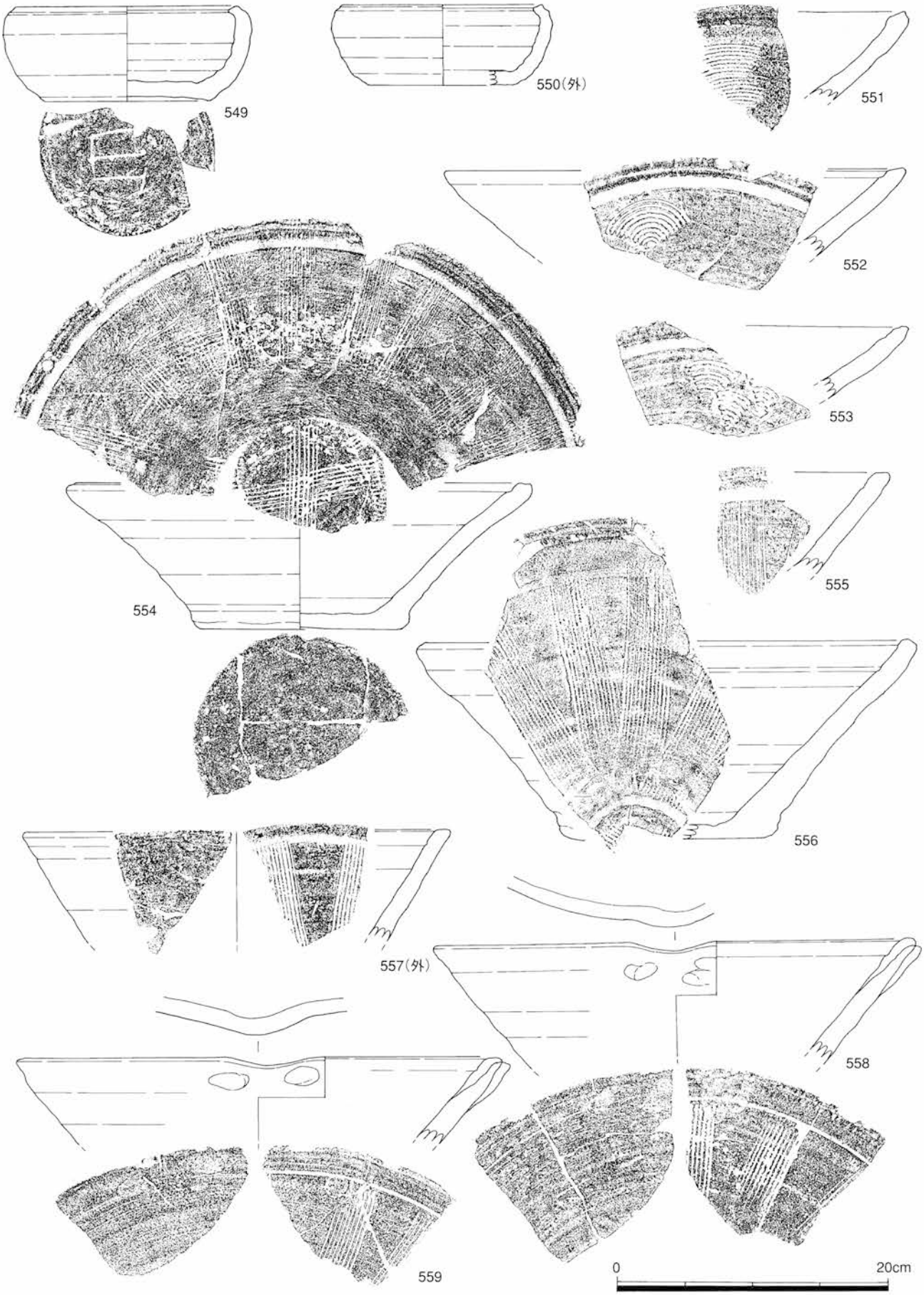


越前焼甕525　同壺536～548

第61・62次調査出土遺物（3）

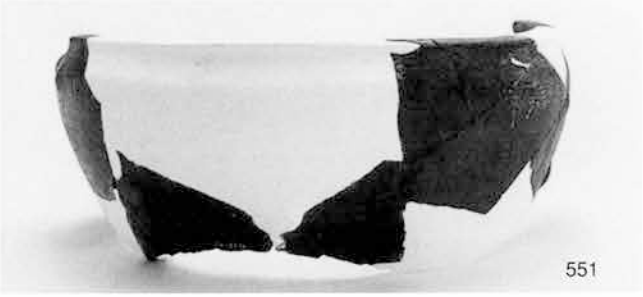
越前焼 甕529　同壺535・543　同鉢544

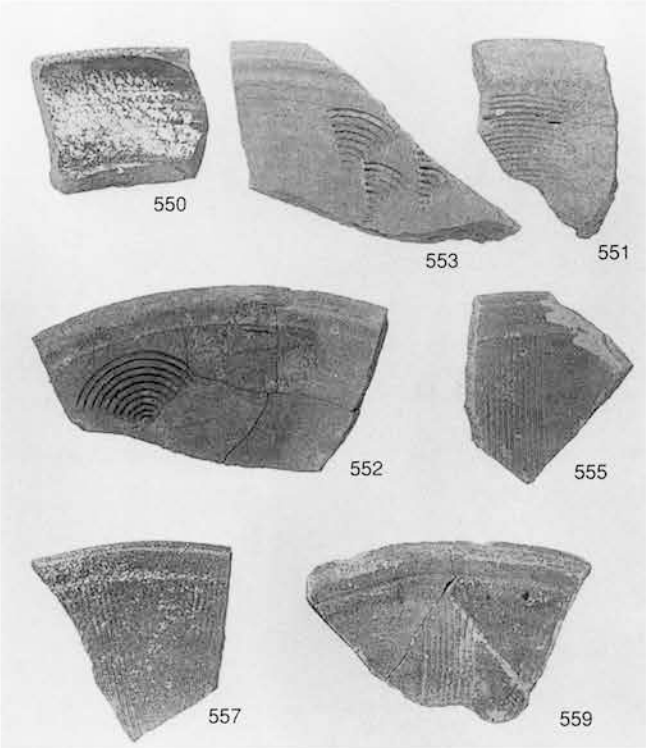
第51図　第61・62次調査出土遺物（2）

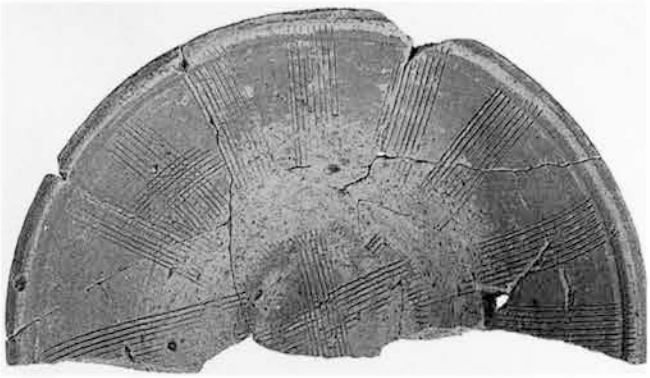


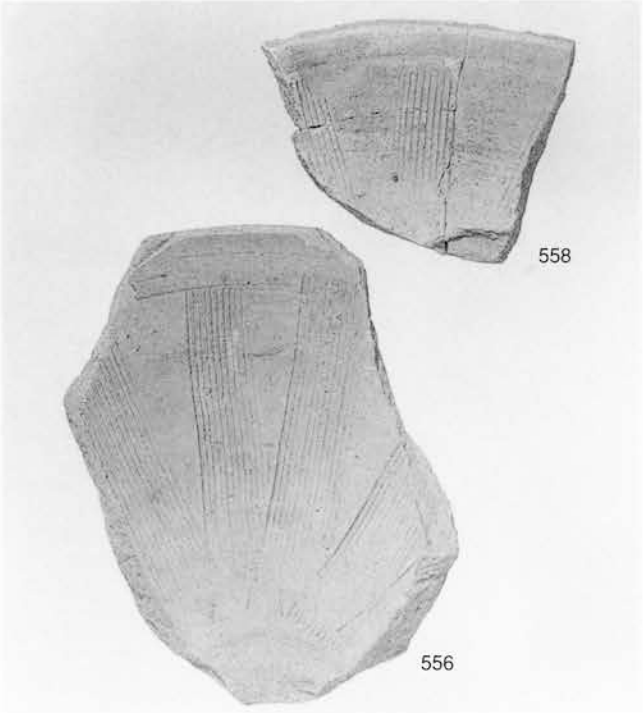
越前焼鉢549～553　同擂鉢554～559　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（4）



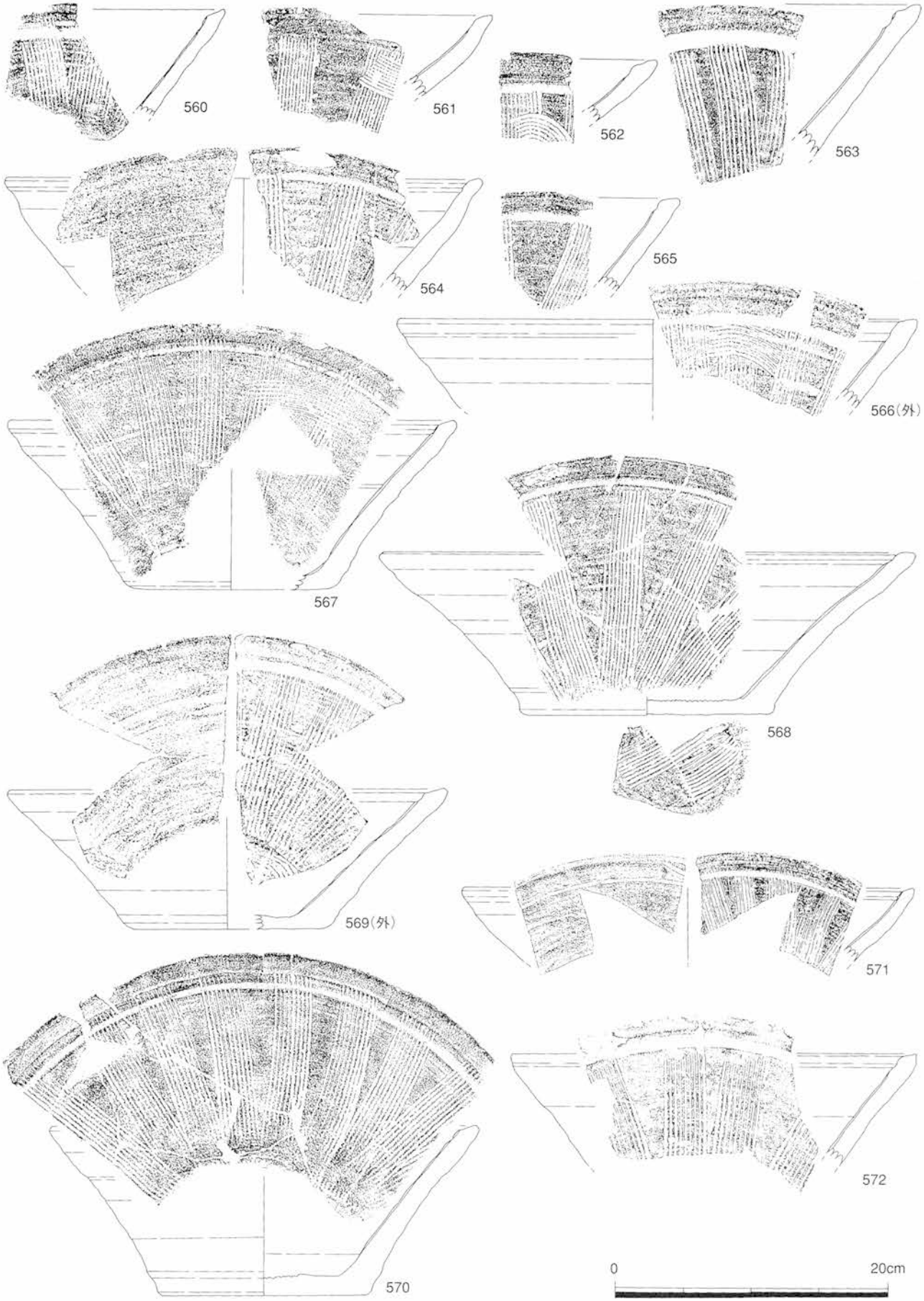






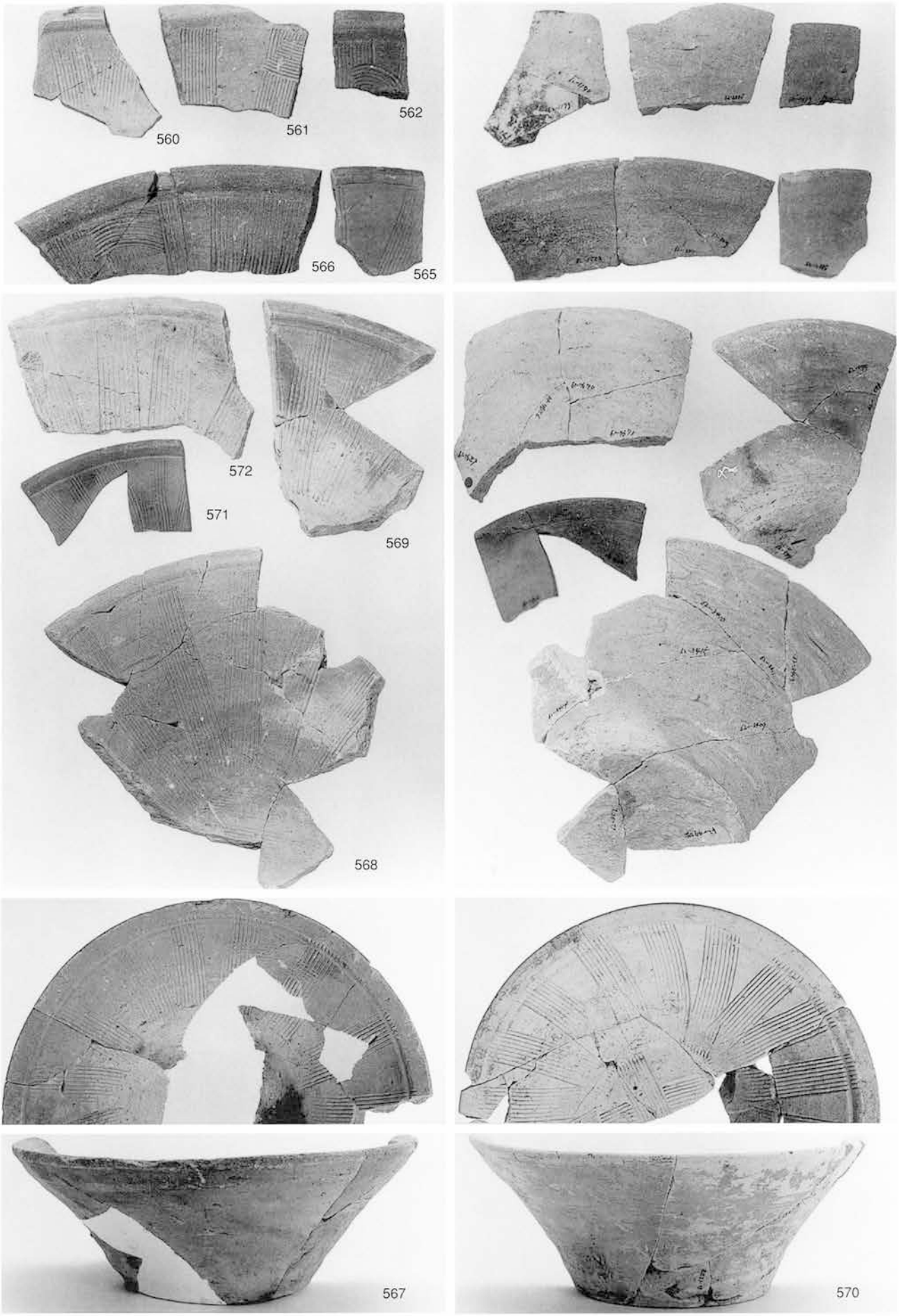
越前焼鉢549～553　同擂鉢554～559

第52図　第61・62次調査出土遺物（3）



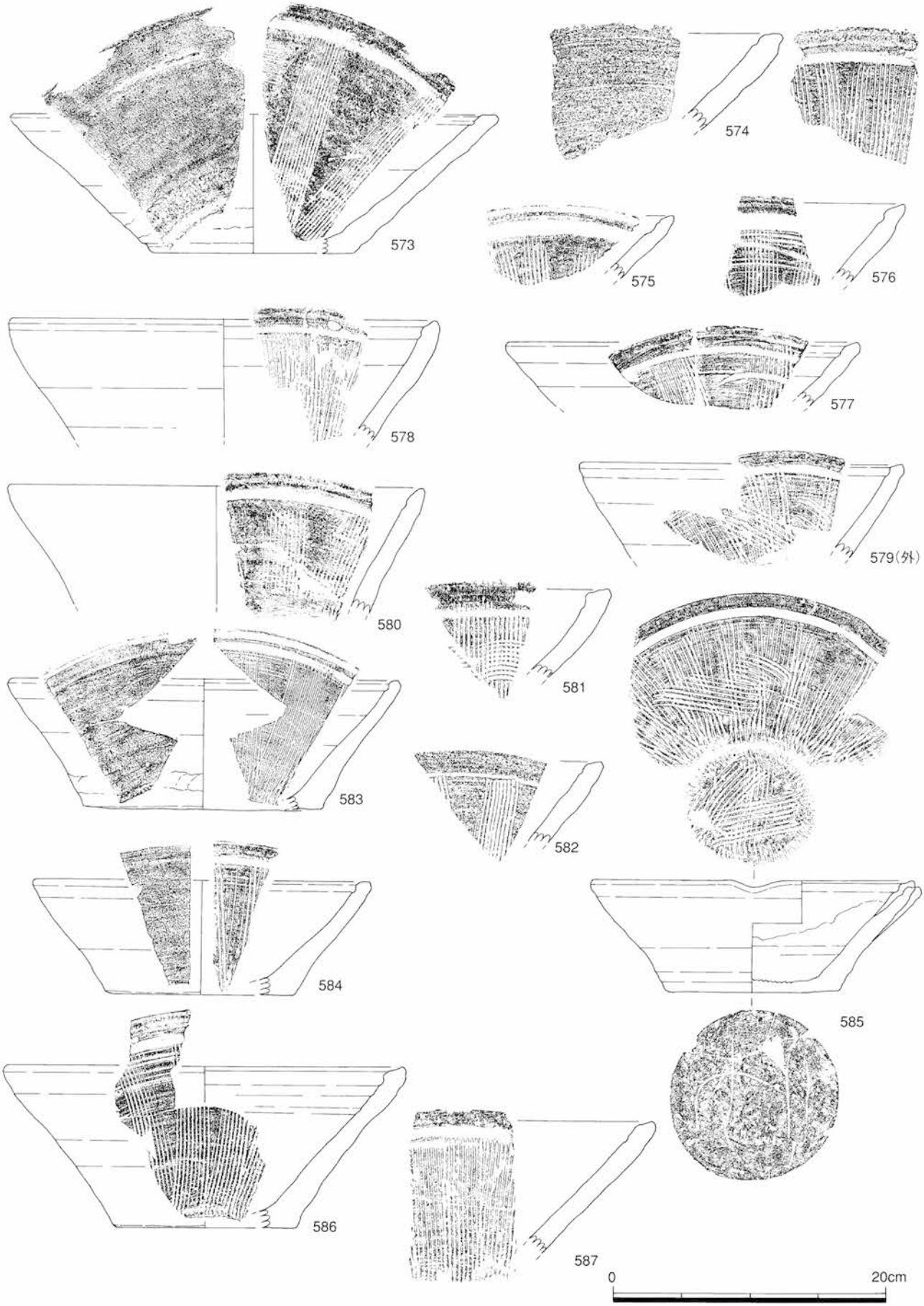
越前焼擂鉢560～572　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（5）



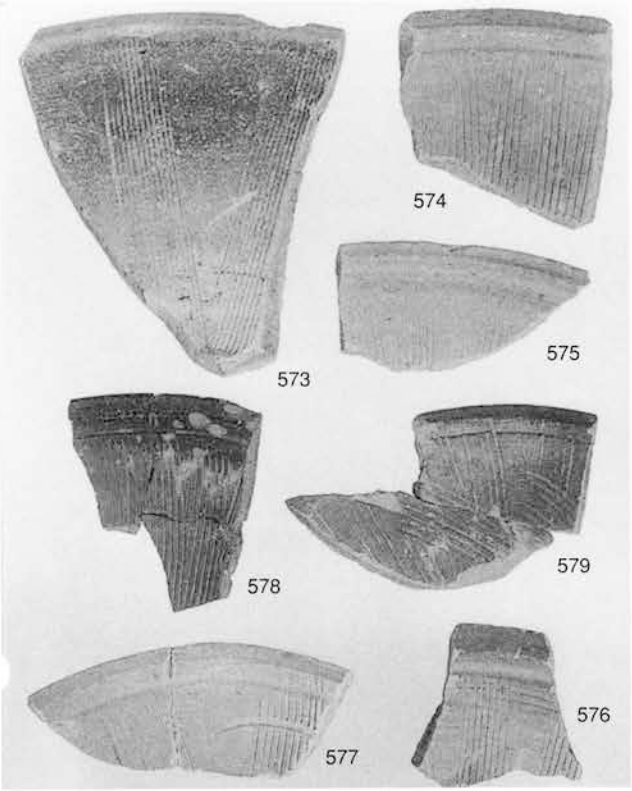
越前焼擂鉢560～562，565～572

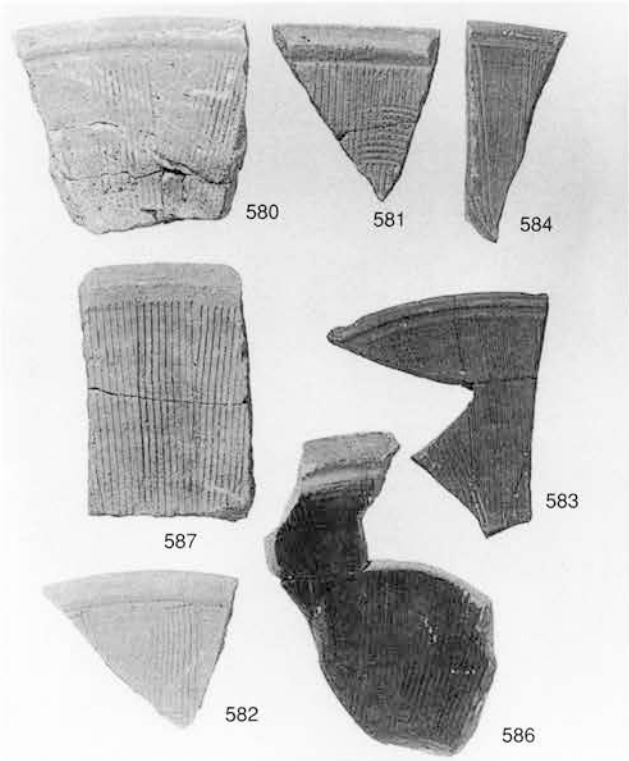
第53図　第61・62次調査出土遺物（4）

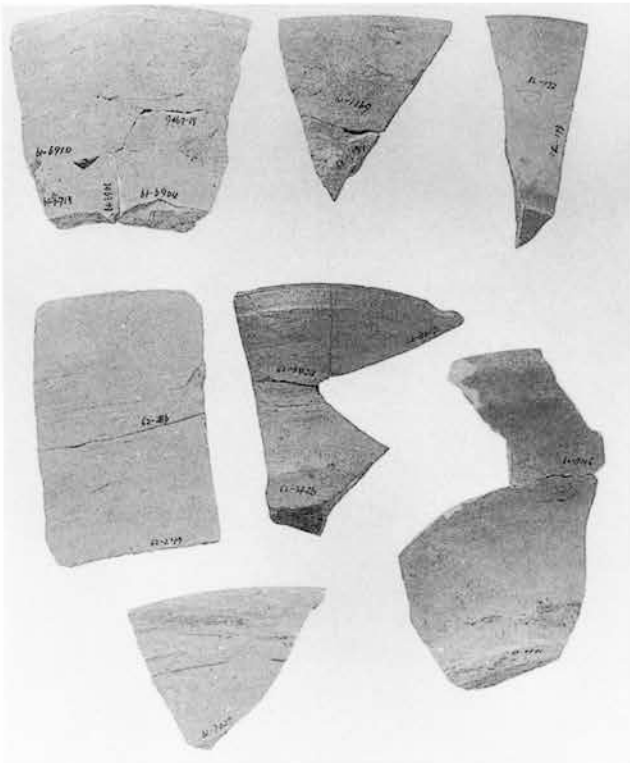


越前焼擂鉢573～587　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（6）

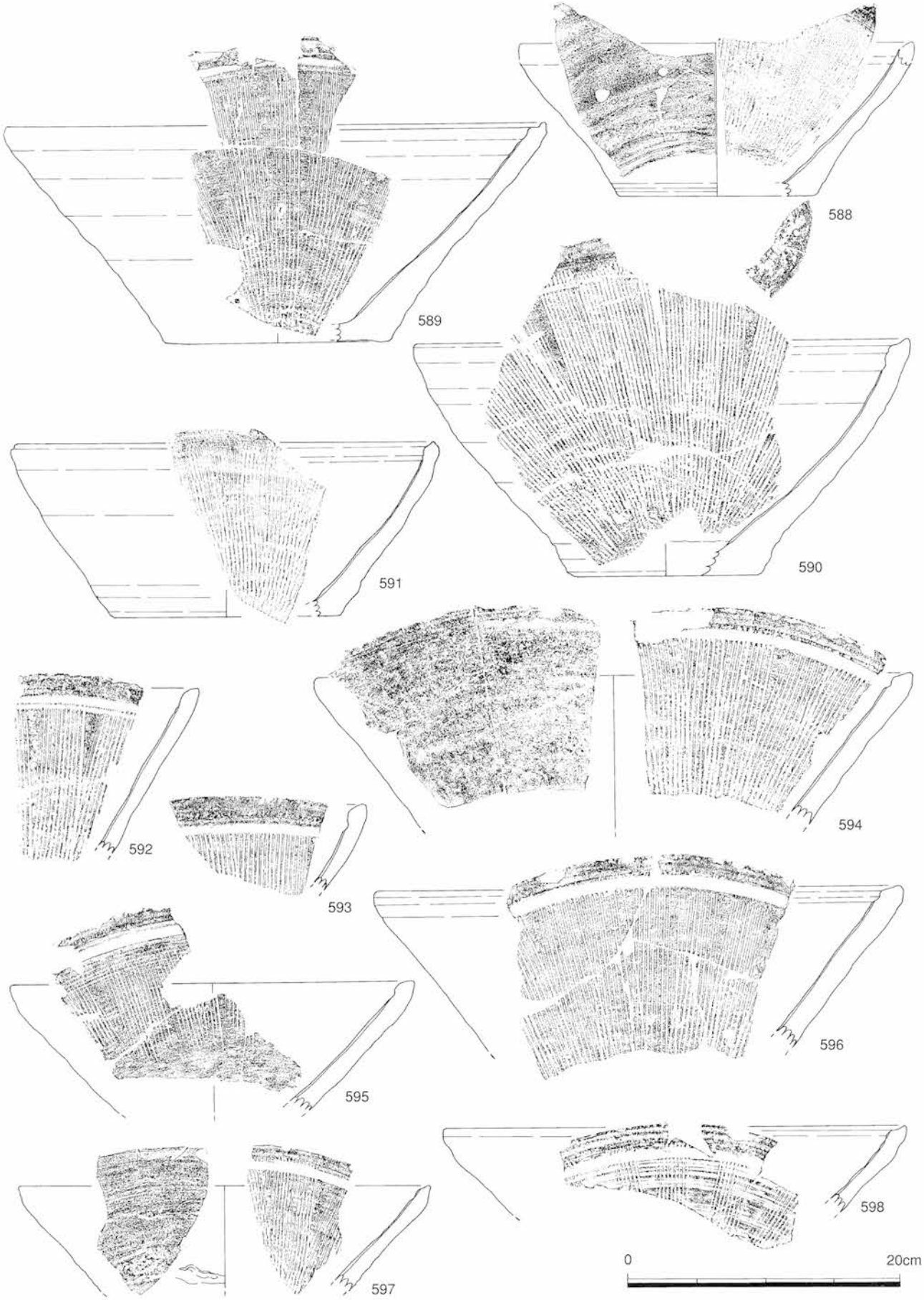






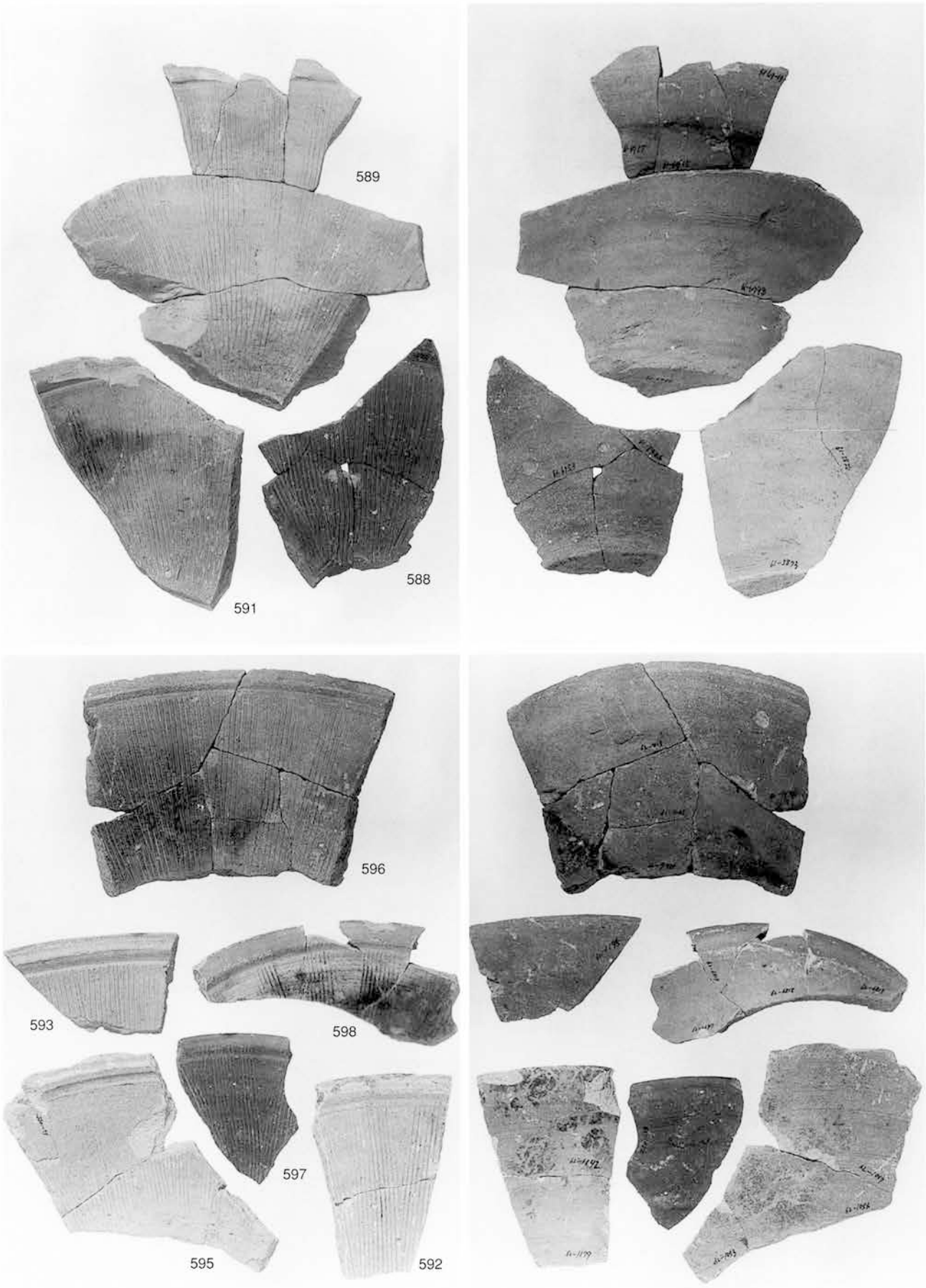
越前焼擂鉢573～587

第54図　第61・62次調査出土遺物（5）



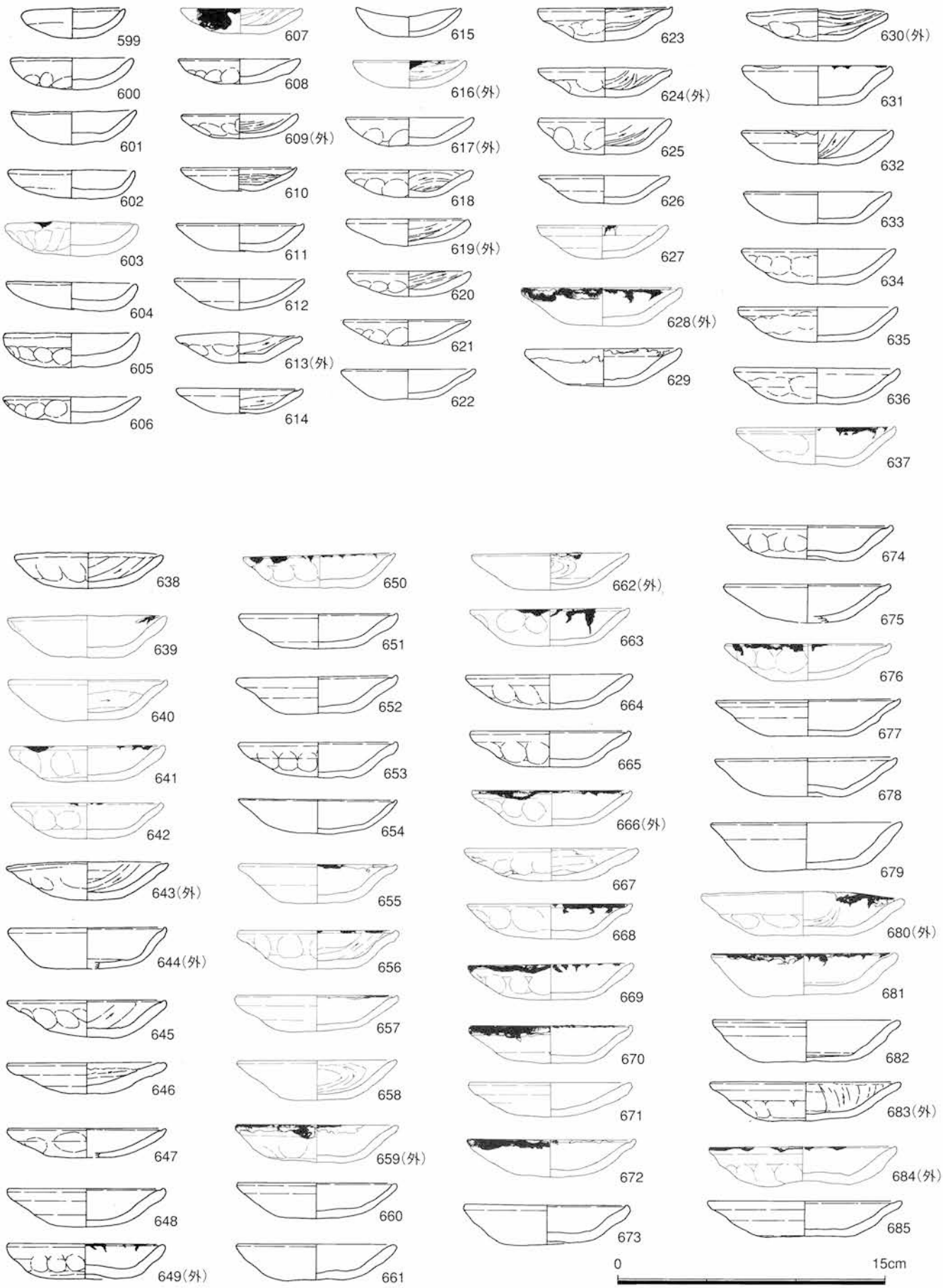
越前焼擂鉢588～598

第61・62次調査出土遺物（7）



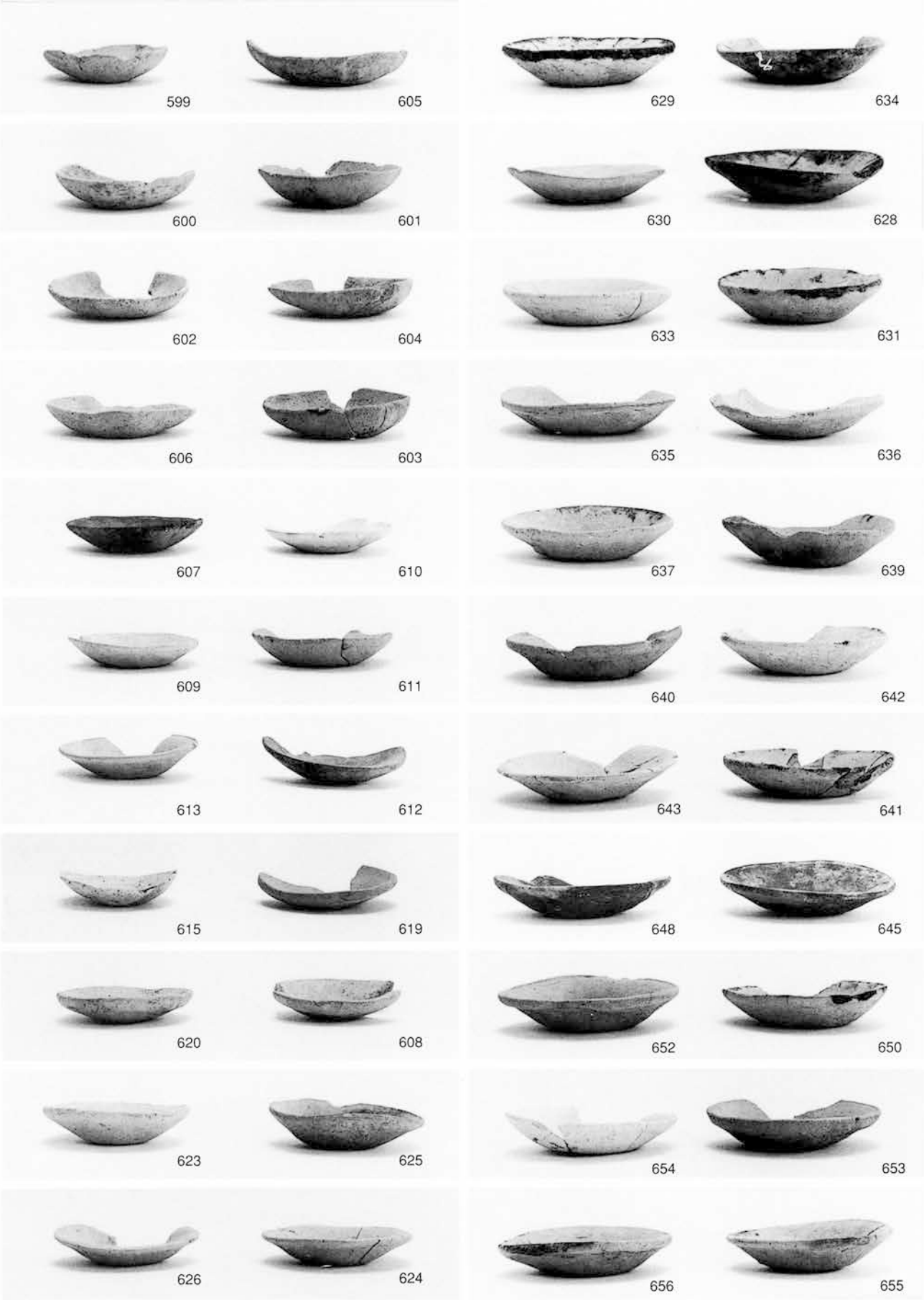
越前焼擂鉢588～589，591～593，595～598

第55図　第61・62次調査出土遺物（6）



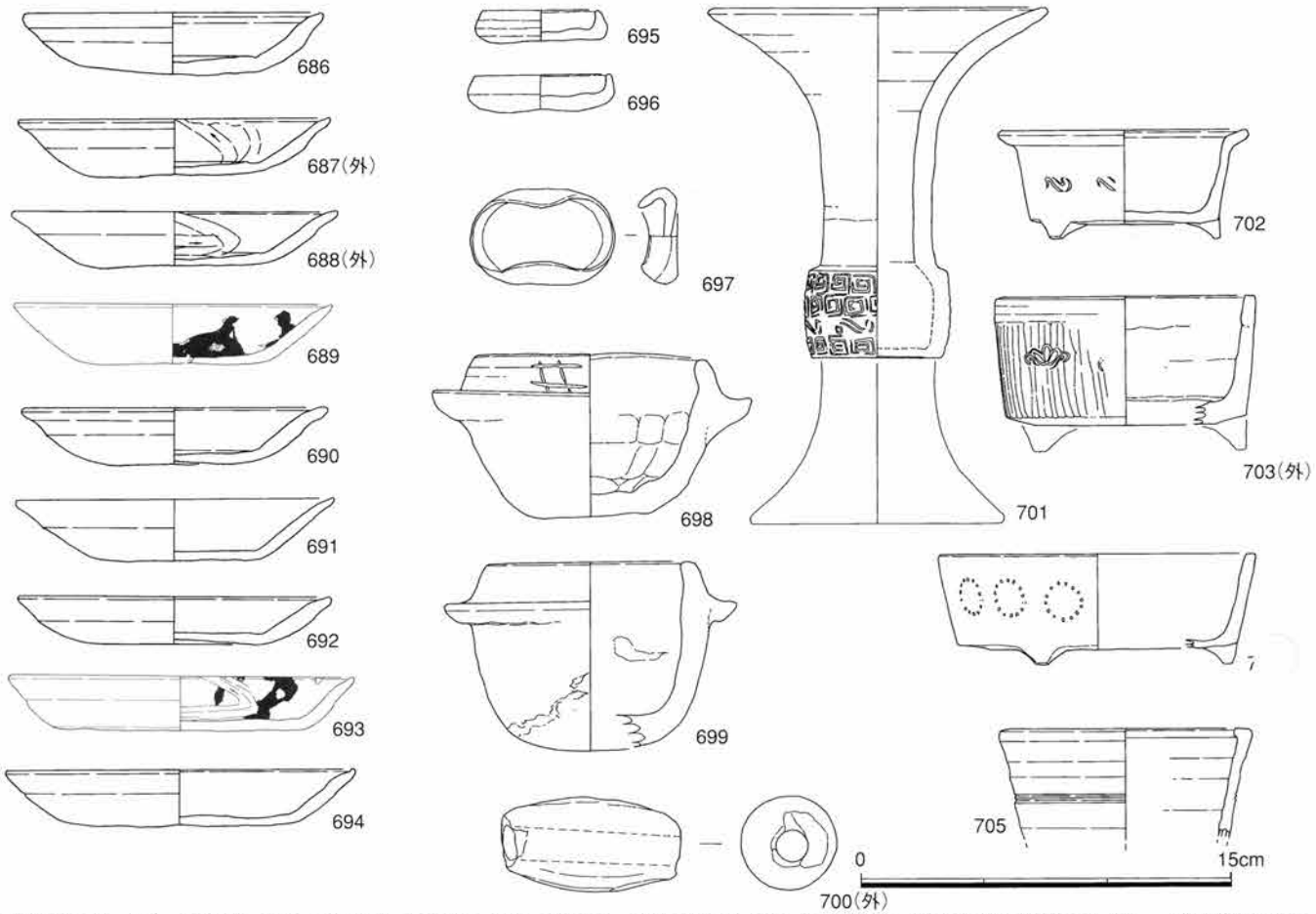
土師質皿599～685　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（8）



土師質皿599～656

第56図　第61・62次調査出土遺物（7）



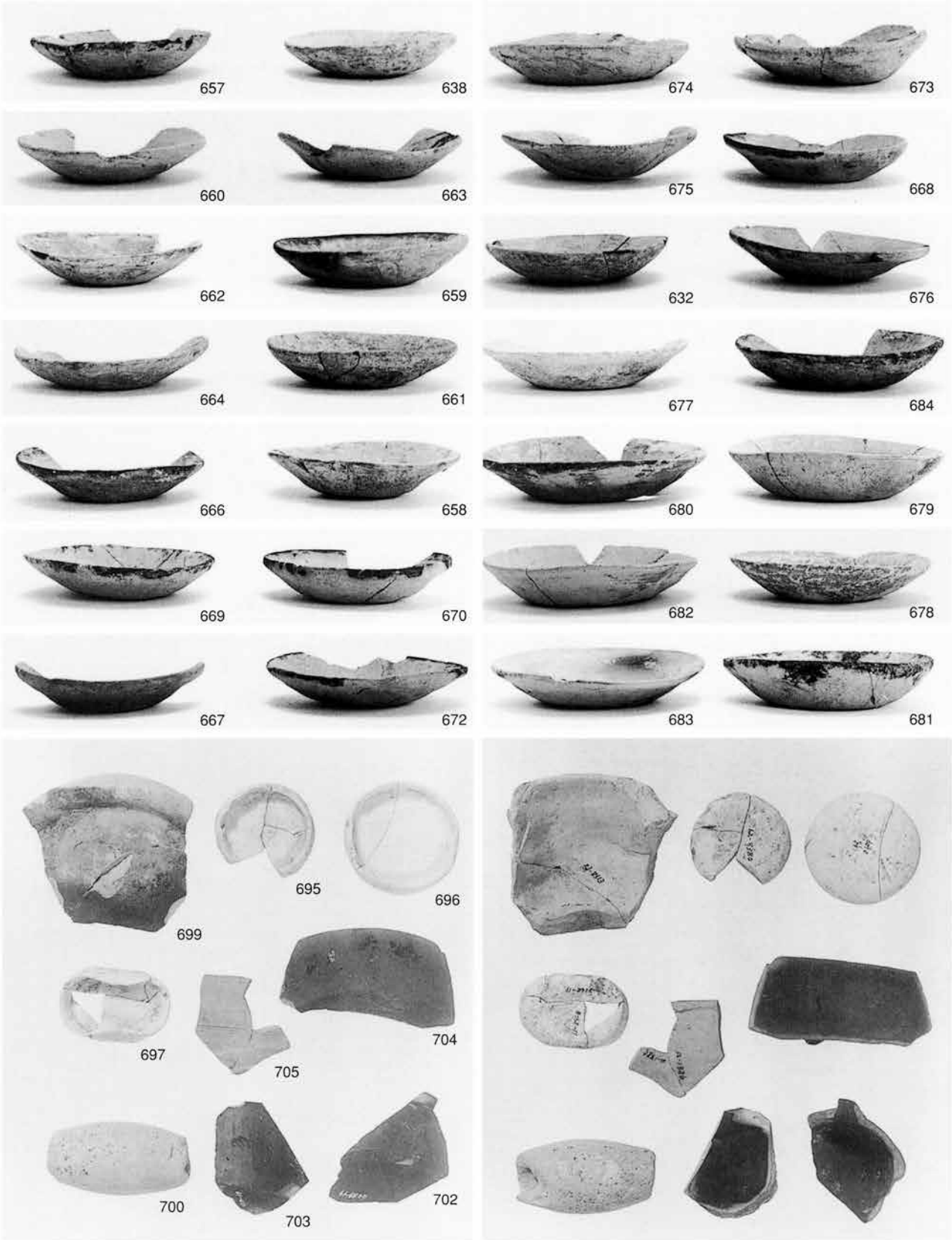
土師質皿686～694　丸皿695・696　耳皿697　土釜698・699　土錘700　瓦質香炉702～704　同華瓶701　須恵質香炉（珠洲？）705　（外）は外濠出土

PL.48　第61・62次調査出土遺物（10）

土釜698　瓦質華瓶701

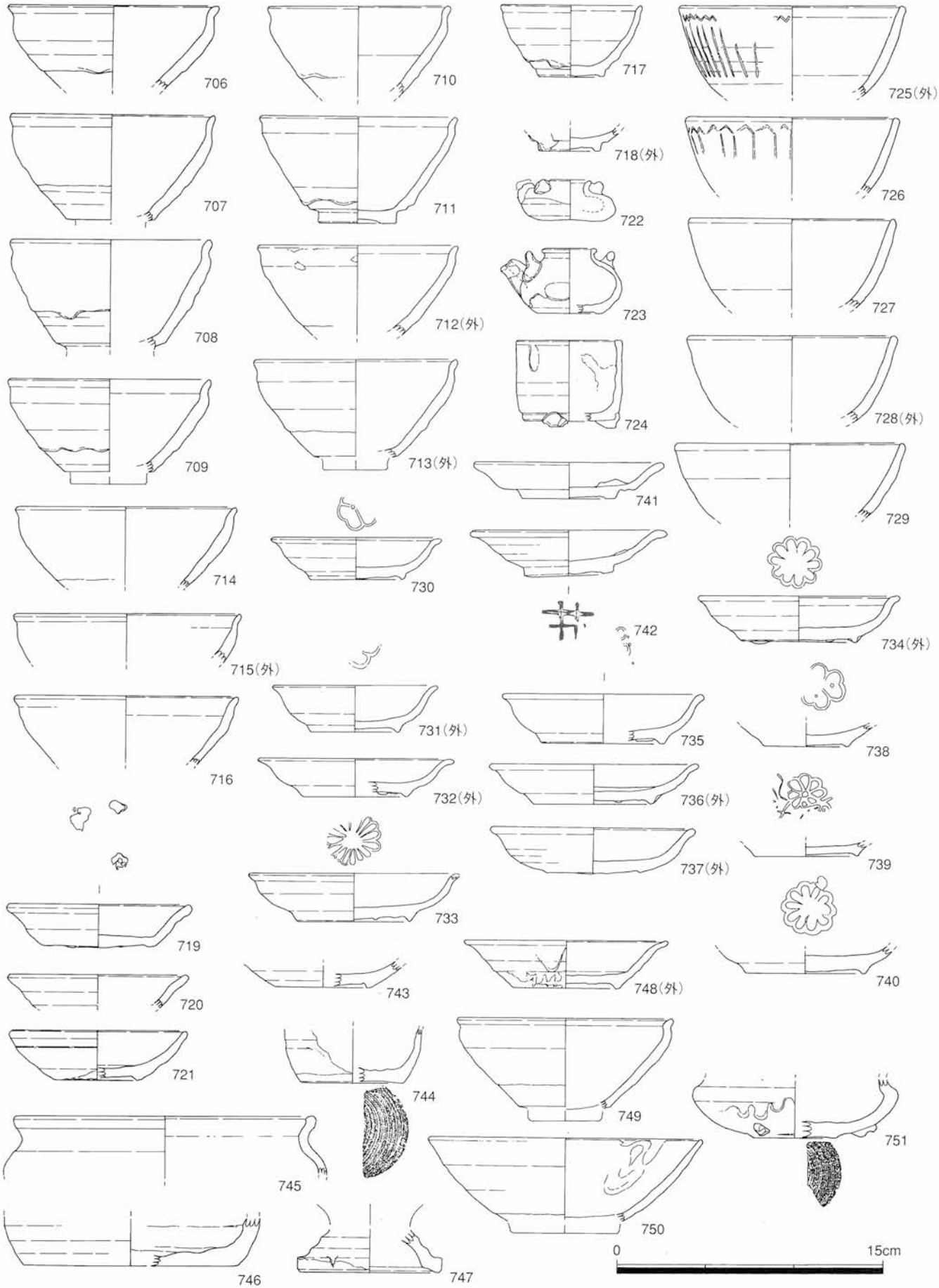
土師質皿686～694

第61・62次調査出土遺物（9）



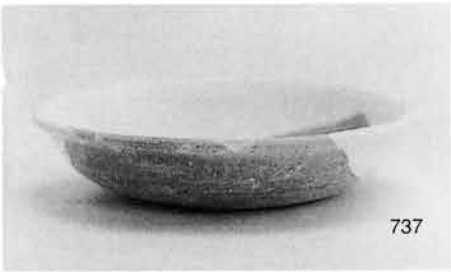
土師質皿657～681　土釜699　耳皿697　丸皿695・696　土錘700　瓦質香炉702～704　須恵質香炉（珠洲？）705

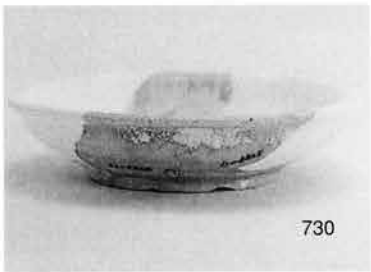
第57図　第61・62次調査出土遺物（8）

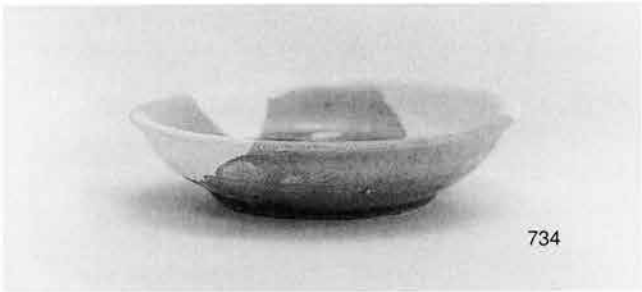


鉄釉碗706～718　同皿719～721　同水滴722・723　同香炉724　**灰釉**碗725～729　同皿730～742　**鉄釉**壺743～746　**灰釉**壺751　同台付壺747
黄瀬戸皿748　同碗749・750　（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（11）

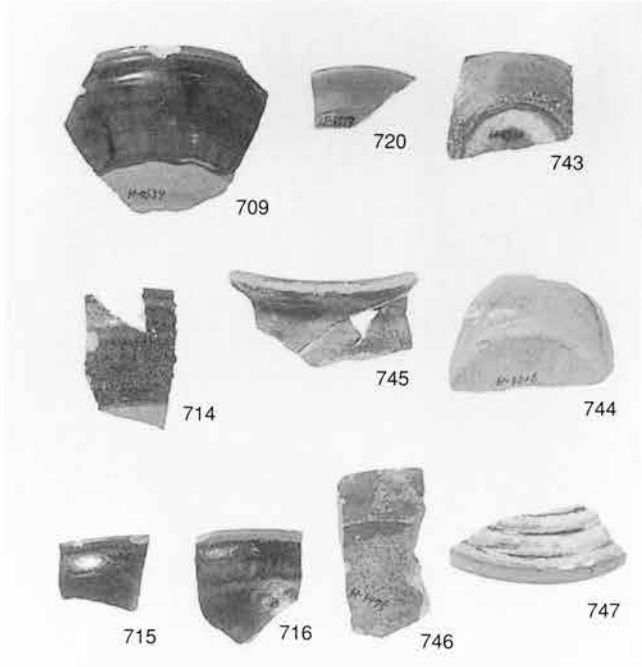


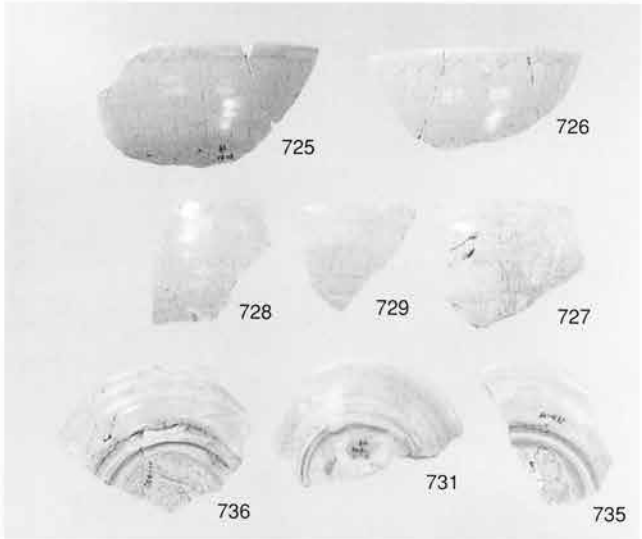


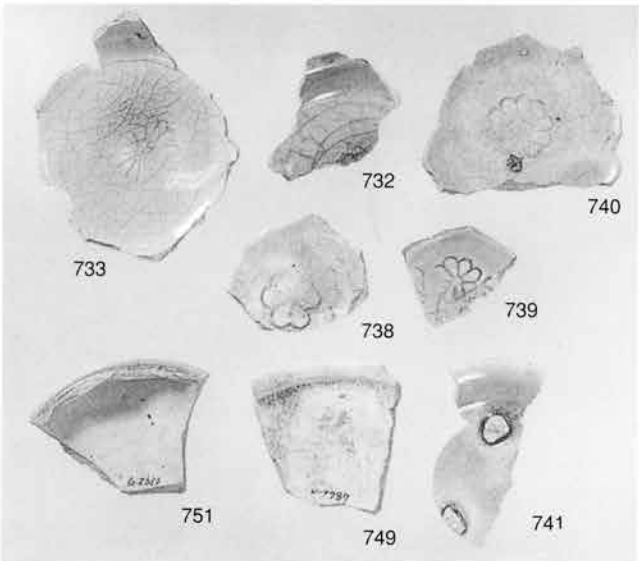


鉄釉碗706～708・710～713・717・718　同皿719・721　同水滴722・723　同香炉724　**灰釉**皿730・734・737・742　**黄瀬戸**皿748　同碗750

第61・62次調査出土遺物（12）

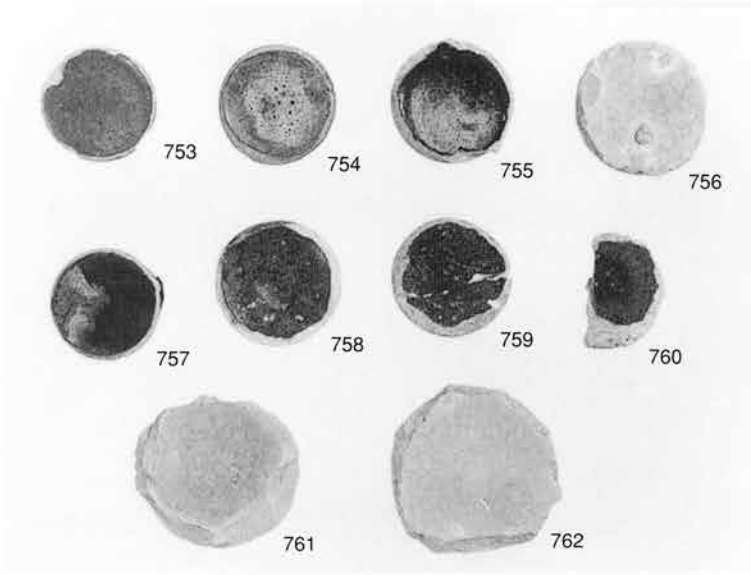


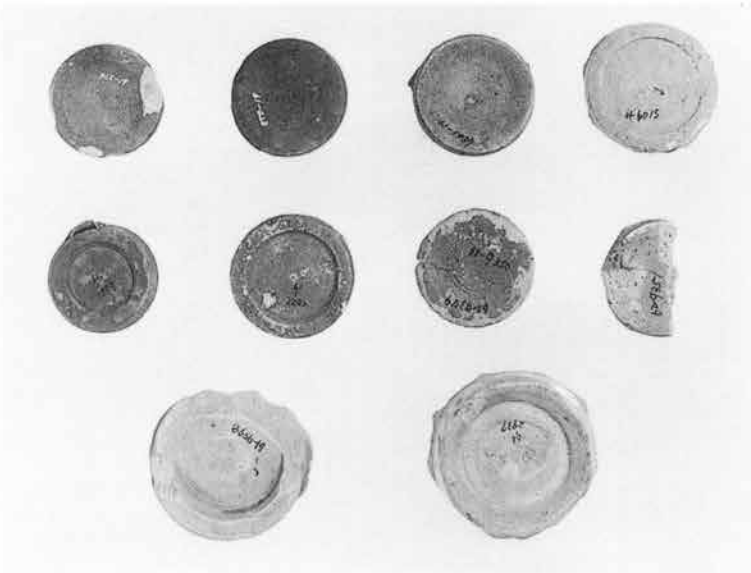




鉄釉碗709・714～716　同皿720　同壺743～746　**灰釉**台付壺747　**灰釉**碗725～729　同皿731～733・735・736・738～741　**黄瀬戸**碗749
灰釉壺751

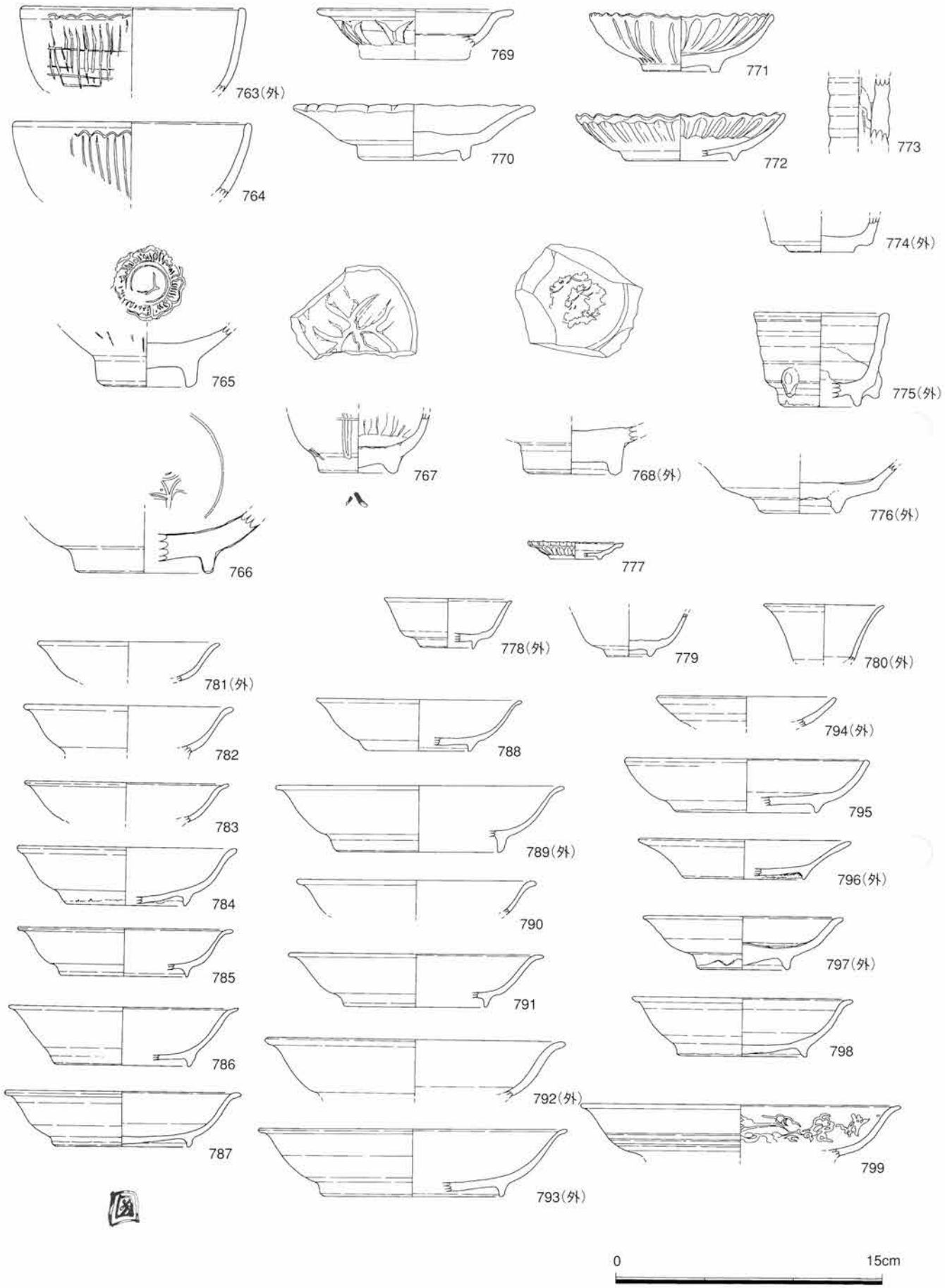
第61・62次調査出土遺物（13）





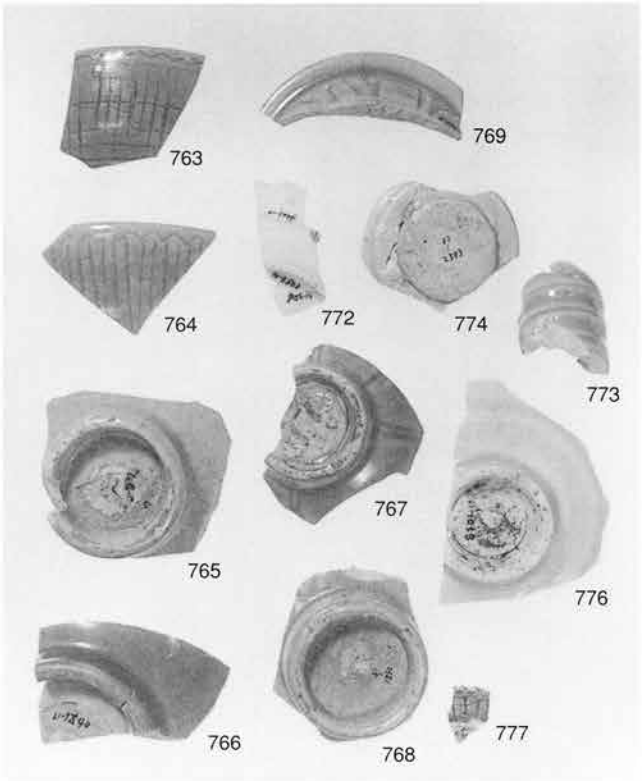
陶製円盤753～762　青磁壺752

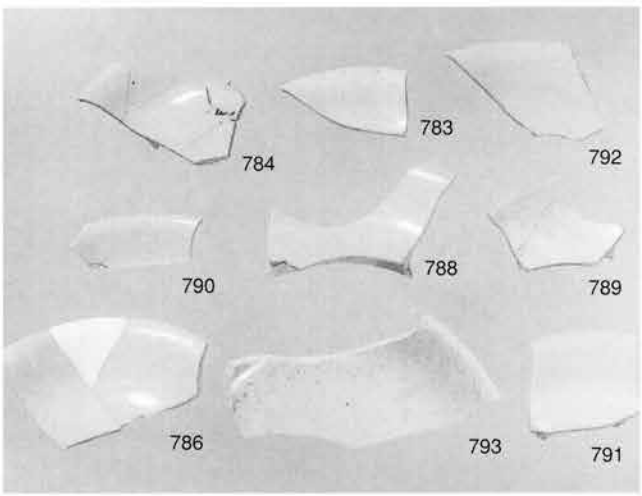
第58図　第61・62次調査出土遺物（9）

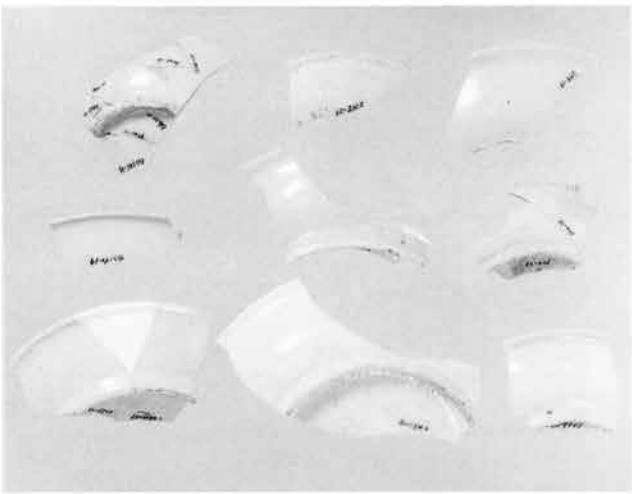


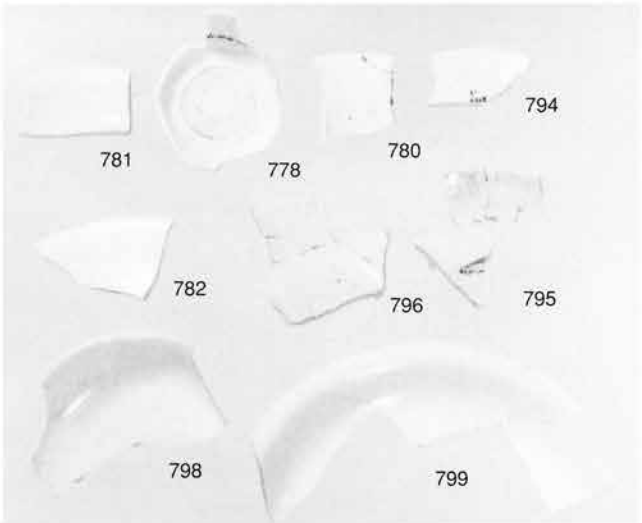
中国製陶磁器・青磁碗763～768　同Ⅲ769～771　同花瓶773　同香炉774・775　**青白磁**Ⅲ776　**華南三彩**Ⅲ777　白磁坏778～780　同Ⅲ781～799・772（外）は外濠出土

第61・62次調査出土遺物（14）



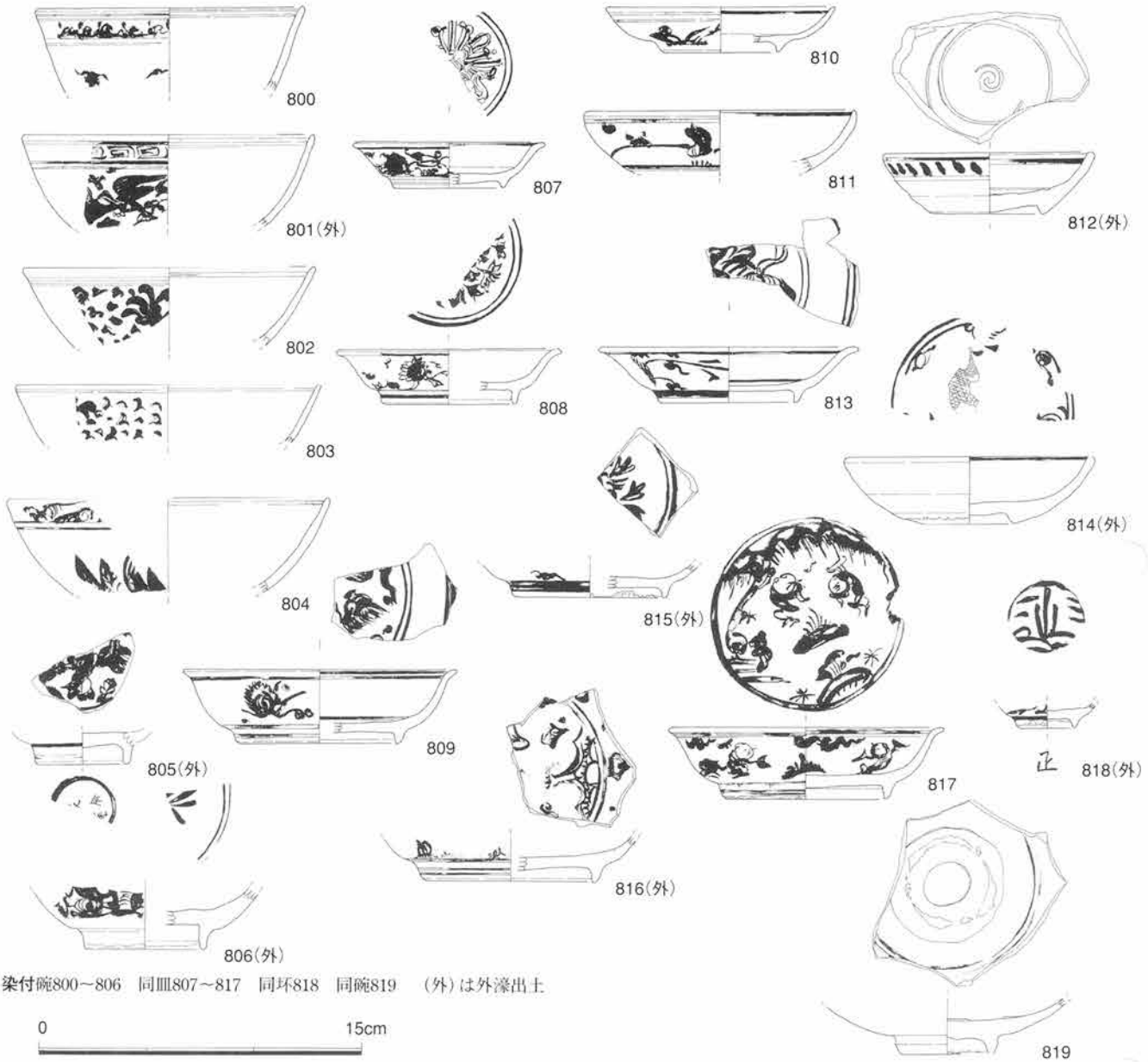






中国製陶磁器・青磁碗763～768　同皿769～772　同花瓶773　同香炉774・775　**青白磁**皿776　**華南三彩**皿777　**白磁**坏778～780　同皿781～799

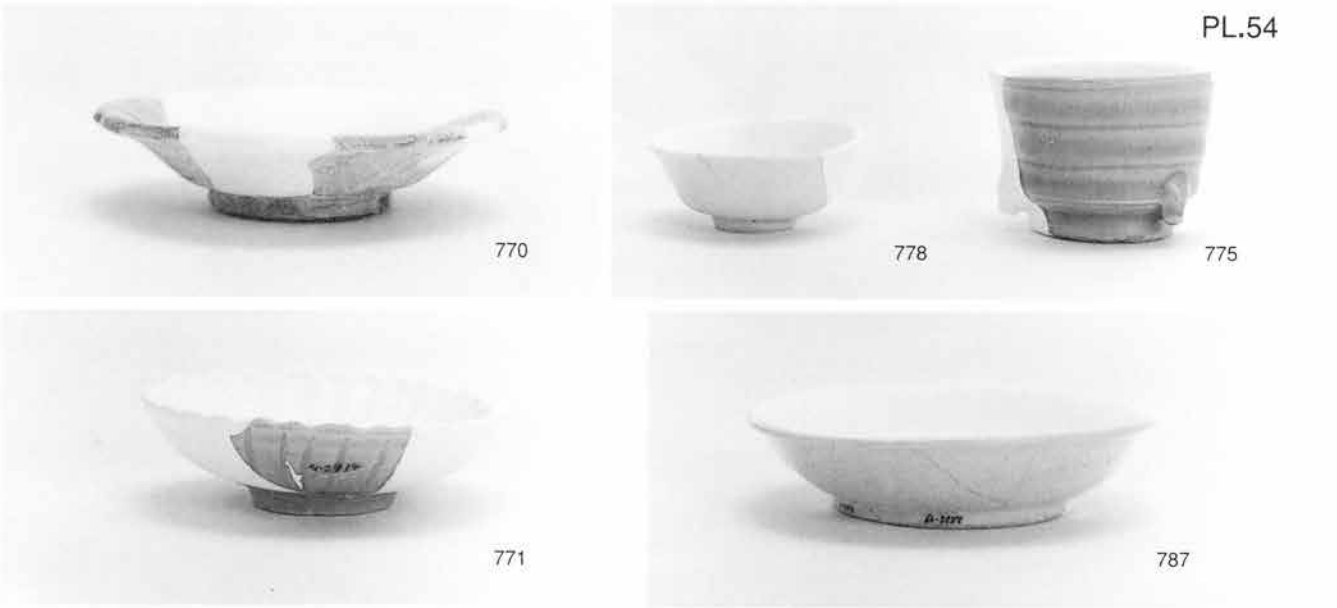
第59図　第61・62次調査出土遺物（10）



染付碗800～806　同皿807～817　同坏818　同碗819　（外）は外濠出土

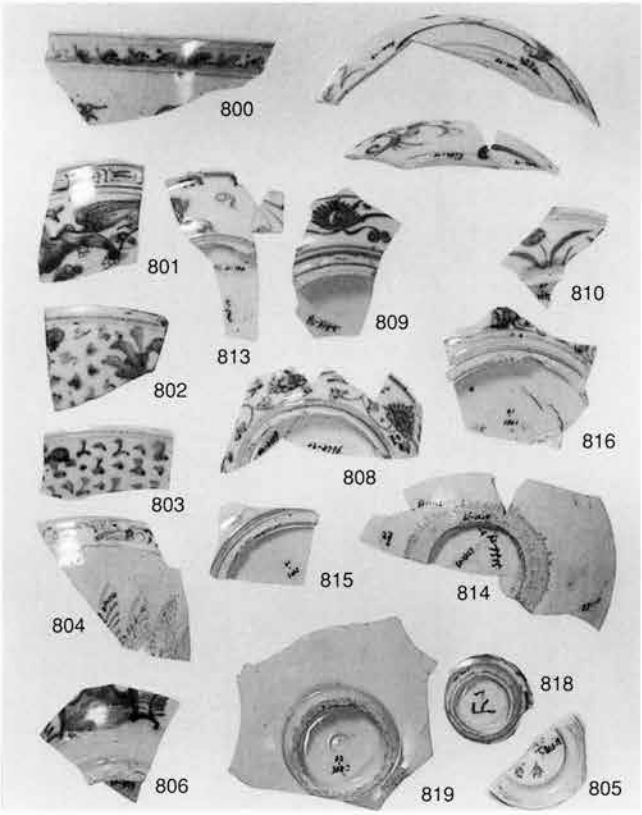
第61・62次調査出土遺物（16）

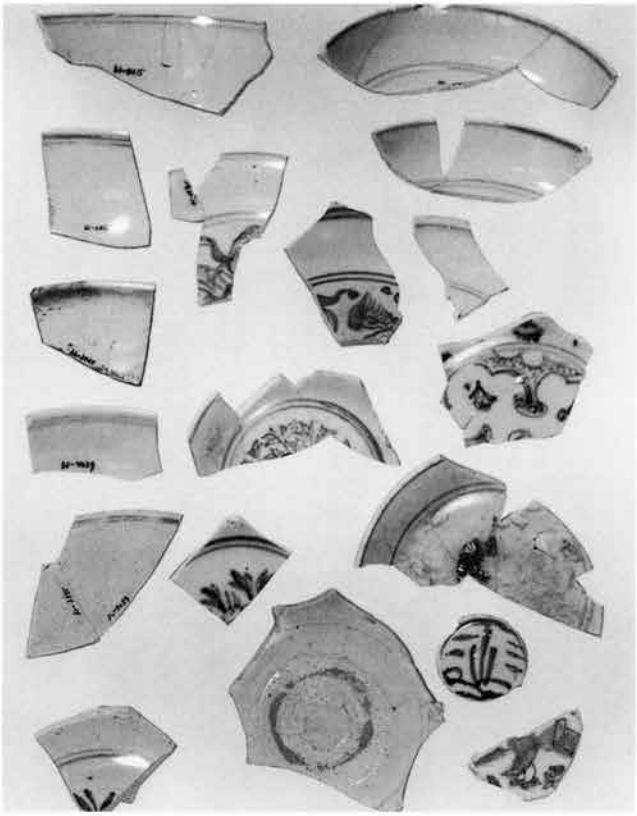
PL.54

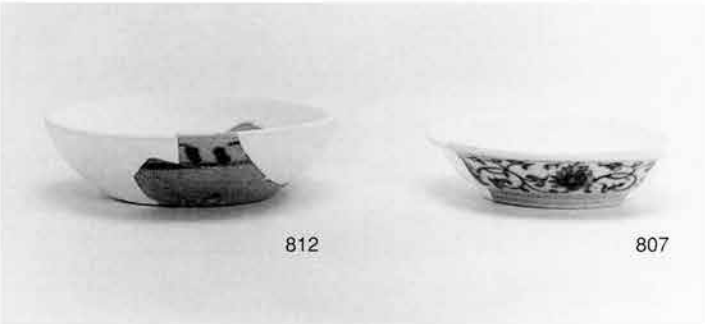


青磁皿770・771　同香炉775　白磁坏778　同皿787

第61・62次調査出土遺物（15）





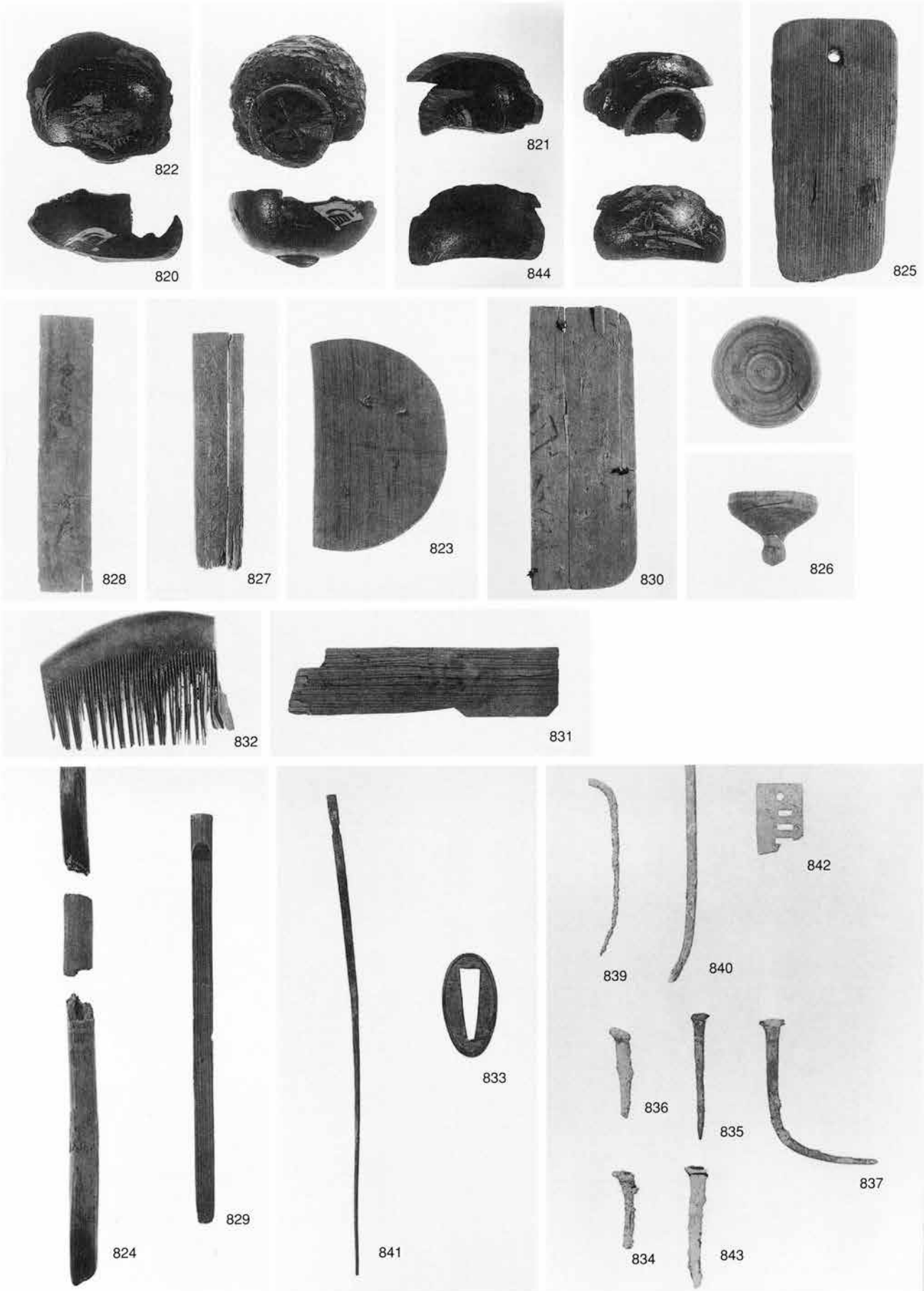


染付碗800～806　同皿807～817　同坏818　同碗819

第60図　第61・62次調査出土遺物（11）（外濠出土820～833・841）

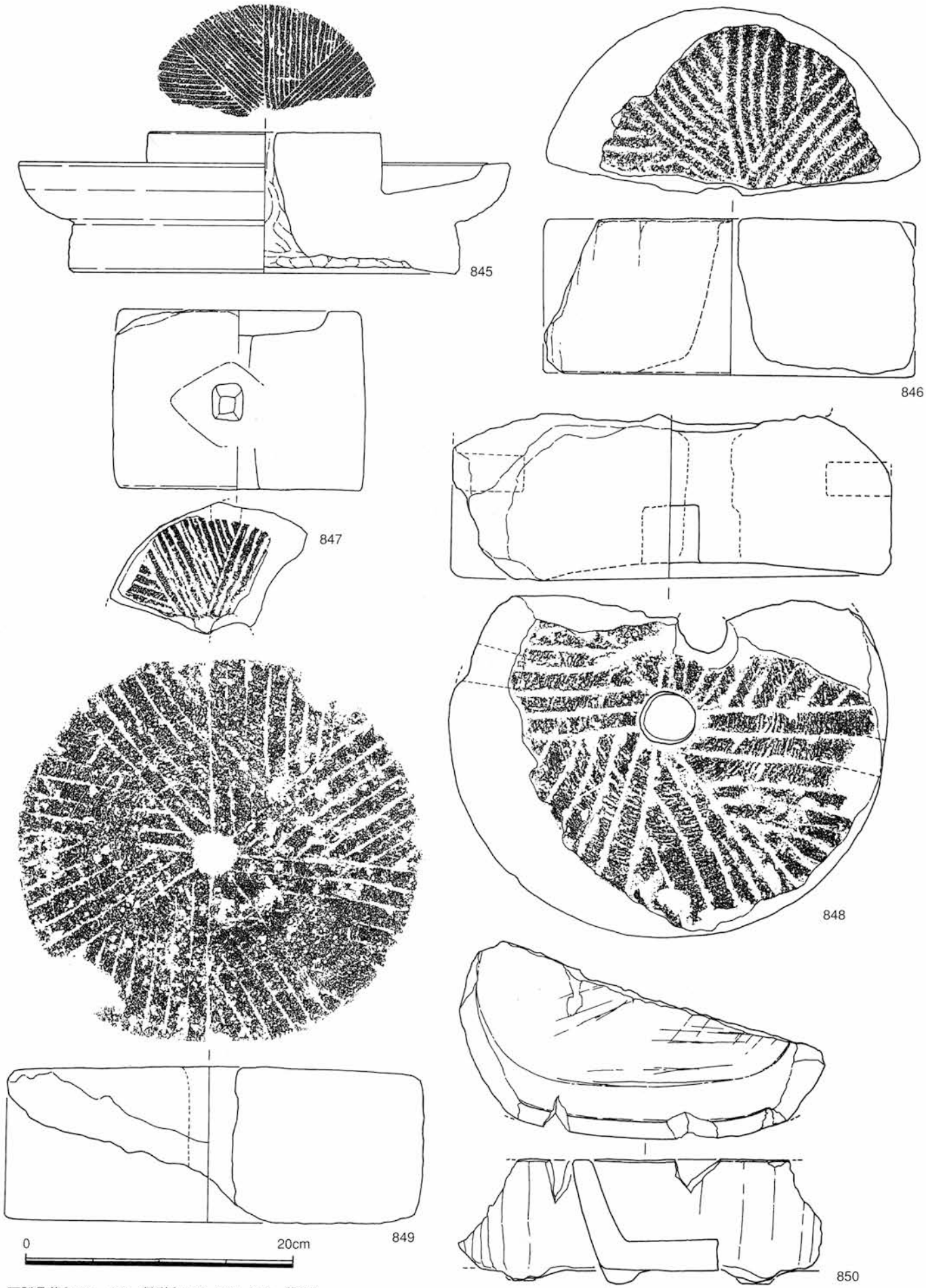
漆器椀820～822　曲物底板823　家具材824　独楽826　付札828　雪下駄825　墨書木製品827　折敷830　加工木製品829・831　櫛832
金属製品刀装具（鎺）833　**銅製**火箸838～841　鉄釘834～837　金具842

第61・62次調査出土遺物（17）



漆器椀820～822・844　曲物底板823　家具材824　独楽826　付札828　雪下駄825　墨書木製品827　折敷830　加工木製品829・831　櫛832
金属製品刀装具（口金物）833　銅製火箸839～841　鉄釘834～837　金具842

第61図　第61・62次調査出土遺物（12）



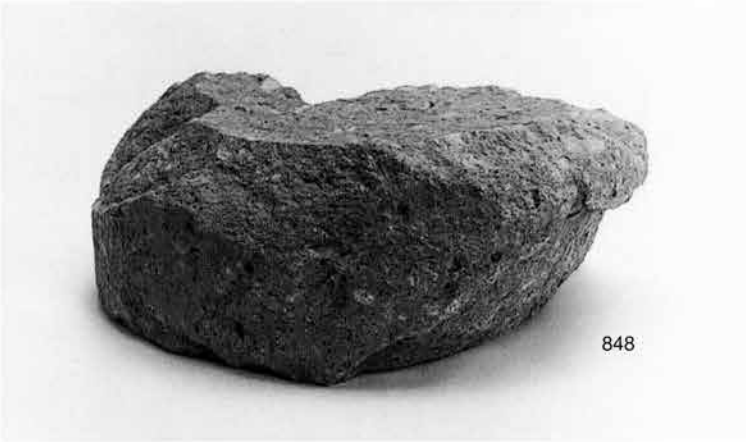
石製品茶臼845・847　粉引臼846・848・849　盤850

第61・62次調査出土遺物（18）

845

852

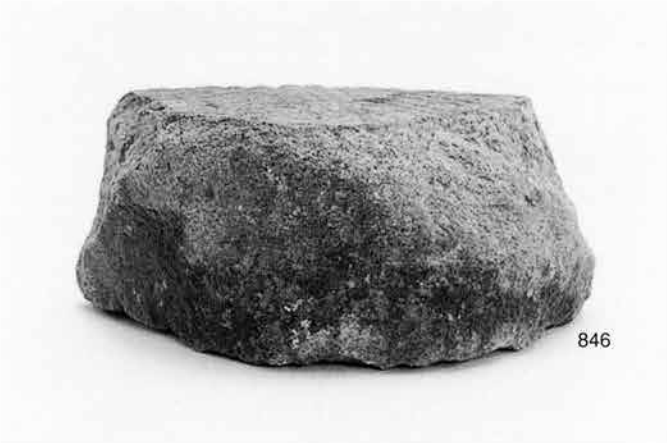
847


848

849

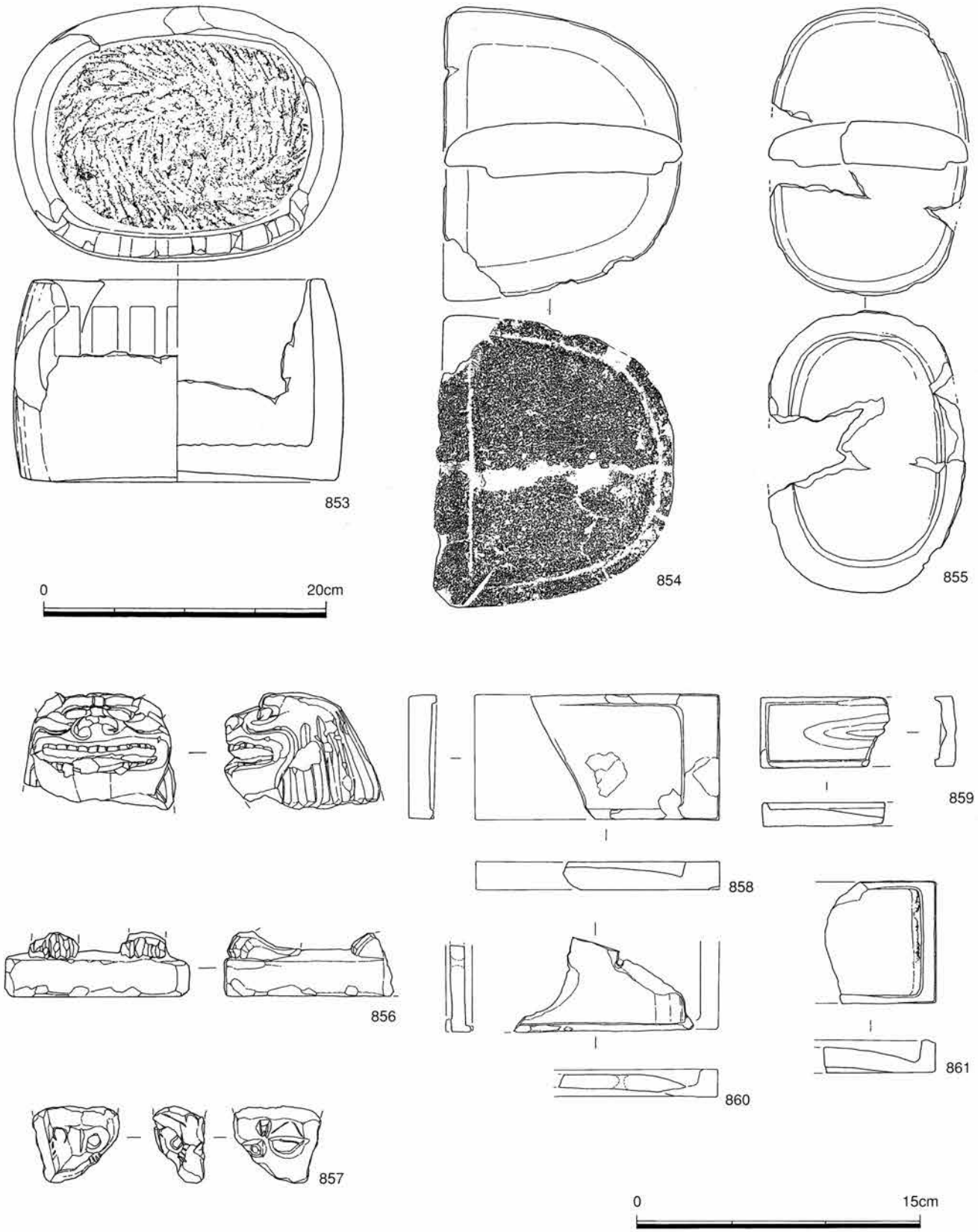
851

850


846

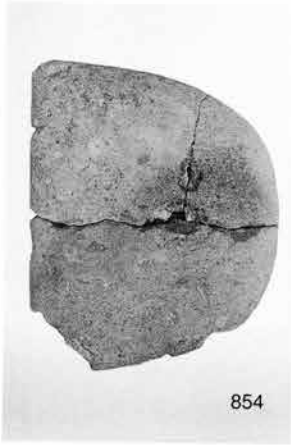
石製品茶臼845・847　粉引臼846・848・849・851・852　盤850

第62図　第61・62次調査出土遺物（13）

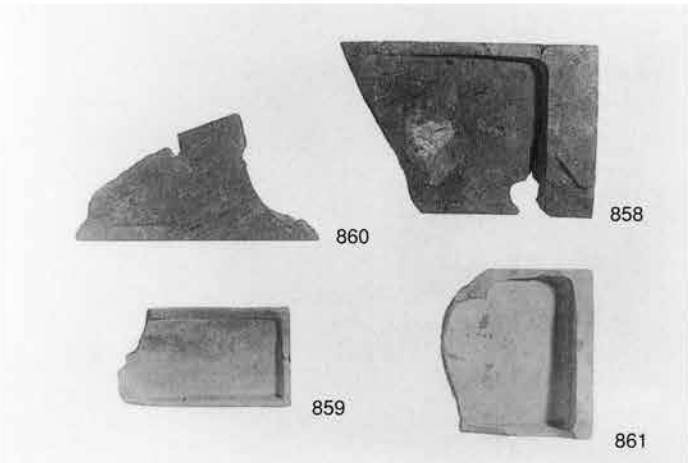


バンドコ(身) 853　同蓋854・855　狛犬856　獣脚(？) 857　硯858～861

第61・62次調査出土遺物（19）



パンドコ（身）853・862・863　同蓋854・855



狛犬856　獣脚（？）857　硯858～861　板碑864

V　考　察

Ⅴ 考　　察

1．上・下城戸に関する歴史的考察

はじめに

本報告書において考察というかたちで一乗谷朝倉氏遺跡の歴史的な検討がなされるのは今回が初めてである。この『報告書Ⅶ』は一乗谷朝倉氏遺跡の根幹を構成する巨大な遺構である上城戸・下城戸を中心とするいくつかの調査区について報告されている。したがってこの考察では、今後の一乗谷朝倉氏遺跡調査の総括にむけて、上城戸・下城戸を中心とする一乗谷の歴史の概説を試み、いくつかの史料について検討を加える。

1．一乗谷の歴史的環境

一乗谷朝倉氏遺跡は近衛家領宇坂庄一乗谷に展開した朝倉氏の城下町遺跡である。宇坂庄の初見は古く仁平3年（１１５３）正月２９日付の高陽院百種供養料送状に見え、近衛家領の母体のひとつである高陽院領として見える。承久3年（１２２１）の承久の乱の時宇坂庄の預所は後鳥羽上皇の御乳母藤原兼子であった。乱後宇坂庄の地頭某は幕府の命により荘務を行った。その後近衛基通は幕府による宇坂庄の没収を阻止して預所の荘務権を幕府に認めさせ、寛喜3年（１２３１）裁許を得た。翌貞永元年（１２３２）京都で預所方・地頭方の対決が行われ、その後寛元4年（１２４６）以前には在地で狼藉事件が起こり、その結果百姓が遠流に処されている。幕府は宇坂庄の検注を命じ、その後田数・年貢・負担等が確定して宇坂庄は地頭請となっていく。(1)

宇坂庄は東は境寺で大野郡に接し、西は高尾・前波・安波賀に至る足羽川沿いの地とその支流の谷々を含む大きな山間荘園でこの中には三万谷・宇坂大谷・一乗谷といった奥行き数キロメートルの細長い谷々が含まれる。宇坂庄の地頭館がどこに設けられたのか詳らかでないが、最も平野部に近い大きな谷である一乗谷か、もしくはその周辺が有力な比定候補地となるであろう。鎌倉期以降には一乗谷の隣に安原庄・東郷庄などがあり、前者は後伏見院領、後者は一条家領になった。なお東郷庄には承久3年5月１３日島津忠久が地頭に補任されている。

朝倉氏に伝えられた伝説によれば、貞治5年（１３６６）８月９日朝倉高景・氏景父子は斯波高経誅伐の御内書を足利義詮から下され、高景は宅良越で氏景は海道から下り、父子は一乗で行き合って高経攻略について内談したという。その後同年１１月６日朝倉高景は宇坂庄・棗庄・東郷庄・坂南本郷・河南下郷・木部島・中野郷計７ケ所の荘郷地頭職を勲功の賞として宛行われている。その下文の文面も伝わっているので、このことについては歴史的事実と認められる。これが朝倉氏が一乗谷に関与した始めであり、一乗谷が朝倉氏の根拠地となる法的な権原もこの地頭職の領有に基づくものと考えられる。

当時の朝倉氏のあり方を示す確実な材料には乏しいものの、朝倉氏景が一乗に熊野社を建立したと伝えられること、また氏景の弟の世代から阿波賀・向・三段崎氏が分流し、氏景の子の世代から東郷・中島氏が分流していること、氏景の室天心清祐が南陽寺を建立していることなどからみて、応永１１年（１４０４）に没した氏景の代には一乗谷から東郷・中島に及ぶ足羽南郡の東部の地域が朝倉氏の主な根拠地となっていたものと判断される。

2．一乗城の初見と成立

一乗城の確実な史料的初見は東沼周巖の『流水集』に収められた「固山居士拈香」である。[2] 固山は前述の朝倉氏景の曽孫にあたる家景の道号で応永９年（１４０２）に生まれ、宝徳２年（１４５０）１２月２０日没した。この香語はいつのものであるのか明記されていないが、周巖の没年の寛正３年（１４２６）以前に限定される。この中で家景について述べられている部分を便宜上①から③の３段に分けて下に引用する。

①是故、居士在玉堂天上、自菩提心内流出無量阿僧祇琴瑟・無量阿僧祇箜篌・無量阿僧祇琵琶・無量阿僧祇楽器、君臣道契、娯楽遊戯、是則文武之道深、一張一弛者也、

②在越之前州一乗城畔、自菩提心内流出無量阿僧祇金剛楯・無量阿僧祇忍辰（辱）鎧・無量阿僧祇精進弓・無量阿僧祇智恵矢、折千里衝、奪三軍師、是則射透三有垣墻、削乎四魔陣塁者也、

③在東山下左辺、流出無量阿僧祇楼台・無量阿僧祇宝坊・無量阿僧祇宝地、夜誦晨禅、儀範肅爾、是則建寺度僧、仰慕古有仏心天子者也、

この叙述は全体として禅僧独特の寓意であり、事実を記した性格のものではない。しかしながら②の「越之前州一乗城畔」や③の「東山下左辺」は実在する場所を指し示したものであり、前者は一乗城、後者は建仁寺（洞春庵）を指していっていることが明らかである（「畔」と「辺」はいずれも「ホトリ」と訓む『易林本節用集』）。この②の寓意の解釈であるが、家景の信仰心を一乗城の堅固さと武勇にたとえて述べたものであろう。もし一乗城そのものが成立していないとすれば、こうした寓意は全く意味を成さなくなるので、朝倉家景の晩年までに一乗城が築かれており、そこが家景の根拠地だったことが同時代人によって認識されていたことがわかる。ここに一乗城が宝徳２年に没した家景の代にすでに成立していたことが確認される。

3．阿波賀城戸口合戦

次に一乗谷における城戸の初見については、「阿波賀城戸口合戦」という戦いが行われていることが『日下部氏朝倉系図略』の朝倉敏景の項やそれをもとにして記された『朝倉始末記』などの史料にみえる。前者は系図史料であり検討が必要であるから便宜上記事に番号を付けて以下引用して検討する。

①正長元年戊申卯月十九日誕生、②幼少之時普光院殿於路次一見而真英物也云々、此時被召助平御太刀被下、③長禄二年戊寅十一月朔日打立京都、④同三年己卯五月十三日迄於敦賀郡合戦廿一ヶ度、⑤同六月朔日北庄下着、⑥寛正元年二月廿一日阿波賀城戸口合戦、⑦同八月十一日和田合戦、⑧同三年八月廿四日鯖江并新庄合戦之時御感状二通、此内一通氏景、⑨同五年八月八日桧山・蓮浦合戦、⑩同六年正月十八日杣山合戦、⑪五月十六日殿下・桶田合戦之時御感状二通、内一通氏景、⑫閏五月十五日波着・岡保合戦、千福中務少輔・増沢甲斐守・同舎弟討死、⑬文正元年七月廿三日大野、井野合戦、二宮左近将監・同駿河守討捕、⑭応仁元年十一月朔日斯波義廉依出張当国、⑮同二年七月十六日本郷合戦、⑯翌日十七日清水山合戦、⑰八月廿八日志原合戦、何御感状在之、此外都鄙忠節不知其数、⑱因茲文明三年五月廿一日慈照院殿感敏景勲功、御内書被成下、越前一国之守護被仰付、⑲始而一乗谷築城、⑳心月寺・固山寺建立、㉑文明十三年辛丑七月廿六日卒逝、享年五十四歳、法名英林宗雄大居士、一乗寺殿、

この記事はいくつかの異なった材料から作られたものとみられるが、③～⑪は朝倉孝景の戦功を順に記したものでひとまとまりのかなり良質の史料をもとにしたらしく、内容については概ね適切なものと認められる。[3] ただ年号の記載を誤ったものみられる。正確な史料によって確認される年号は③長禄２、④⑤⑦長禄３、⑧文明３、⑨文明５、⑩～⑫文明６、⑬文明７、⑭文明１１、⑮～⑰文明１２で

ある。月日の記載はいずれも正しいので編集の際に年号の比定を誤ったものとみられる。すなわち③～⑰の記載については恐らく感状のような正確な史料をもとにして作られたものと考えられ、系図史料だからといって無視することはできないような史料性を持っているのである。

この⑥の「阿波賀城戸口合戦」であるが、年代については前後の④⑤と⑦の記事がいずれも長禄３年（1459）であることから長禄３年に比定される。この前掲史料の③～⑦で述べられている「長禄の合戦」は越前戦国史を理解する上で最も重要な合戦のひとつであり、朝倉氏の越前支配にとっても重要な意義を持つ戦いであった。[4] 長禄２年（１４５８）７月ころから越前の在地で合戦が始まり、朝倉孝景は同年１１月１日京都を発ち（③）、同年５月１３日まで敦賀郡で21度合戦し（④）、６月１日に北庄に下着した（⑤）。この「長禄の合戦」は坂井郡の有力国人堀江利真を盟主とする在地勢力が守護斯波義敏を奉じて斯波氏被官の守護代甲斐氏や朝倉氏と対決した大規模な内乱である。その結末は長禄３年８月１１日現在の福井市和田付近で行われた堀江利実と朝倉孝景の決戦によって決着が付けられた（⑦）。その和田合戦について報じているのが、以下引用する『大乗院寺社雑事記』長禄３年８月１８日条である。

河口庄ヨリ徳市法師注進状到来、去十一日暮ホトニ、屋形方ト甲斐方ト及合戦、屋形方ニ打死輩、堀江石見兄弟父子五人・朝倉豊後守父子・同新蔵人・同掃部（傍注、遠江入道子）・平泉寺大性院・豊原寺成舜坊、其外雑兵不知其数云々、甲斐方ニハ本庄・細呂宜・朝倉孫衛門皆以薄手云々、

この和田合戦において堀江一族の他に朝倉氏の一部も屋形方として殺されていることに注目される。すなわち「朝倉豊後守」は朝倉孝景の舅鳥羽将景であり、「同新蔵人」とは阿波賀良景であり、また「同掃部」とは北庄遠江守頼景の孫とされている景契のこととみられる。すなわちこの和田合戦は朝倉孝景父子が鳥羽・北庄・阿波賀などの朝倉氏の有力な庶家を討ち殺して朝倉氏一族および越前北部における主導権を確立したものと意義付けられる。

一方「阿波賀城戸口合戦」については、確実な記録にはみえないが、状況から判断して恐らく堀江氏を中心とする国人勢力と阿波賀氏等の朝倉氏庶流の反主流派が結んで一乗城を囲み、その城戸口で合戦がなされたものとみられる。安波賀春日神社の天和３年（１６８３）の縁起によればこの時春日神社と阿波賀の集落が放火されたことが伝えられており、そのこと自体は事実と考えられる。阿波賀は現在の下城戸を出たすぐ外側に位置する集落であり、その方面から攻勢がかけられ、この城戸の存在により一乗城は落されることなく持ちこたえたのではなかろうか。この「阿波賀城戸口合戦」の年代は系図に記される寛正元年（１４６０）ではなく、朝倉孝景が敦賀郡で戦っていた最中の長禄３年（１４５９）のことと考えられる。当時の当主は孝景の祖父にあたる教景であり、孝景の父家景の没後１０年にあたる。

以上のようにこの「阿波賀城戸口合戦」は一乗城の攻防戦であることはほぼ誤りなく、それ以前に一乗城に城戸が構築されていたことがわかる。その位置は不詳であるが、阿波賀の近隣であり、現在の下城戸付近に比定することをさまたげない。城戸はかなり強固な構造と考えられ、一乗城はこの城戸の存在により落城をまぬがれている。つまりこの城戸は臨時の工作物ではなく、一乗城の守備の一環として以前から築かれていたものと考えられる。

４．孝景・氏景時代の一乗谷

長禄の合戦の後の寛正年間（１４６０～６５）の一乗谷の状況については史料が少ないが、寛正４年（１４６３）７月１９日孝景の祖父教景が没した。８４歳だったという。この教景（心月）の本宅は朝倉景垙の本宅だという。景垙は宗滴の養子景紀の長男である。宗滴の居宅は下城戸や春日神社の

北隣の「金吾谷」付近と伝えられる。また景紀の屋敷跡はそれとは別の城戸ノ内にあったと伝えられる。そうすると景垙が宗滴の屋敷地を相伝していた可能性もあるが、詳らかでない。いずれにせよ教景（心月）の時代と景垙の時代とでは百年以上隔たっているから、彼らの屋敷地は非常に安定した場所にあったといえる。その後寛正６年（１４６５）７月には孝景の弟の光玖が一乗に在国していたことがわかる。

また花押の形状から寛正年間以前に推定される朝倉孝景自筆書状が２点残っており、そのうちの２月28日付の笠松宛のものには「与太郎家を売候者、下殿ニあり候をハ一乗ニ可置候」と当時在京している孝景が与太郎から没収した家財を一乗に置くことを被官の笠松に指示していることがみえ、一乗が朝倉孝景の越前における根拠地だったことがうかがえる。

応仁の乱の当初西軍方として奮戦した朝倉孝景は応仁２年（１４６８）９月３日東軍方の誘いをうけ、これに応じて閏１０月１４日越前に下向した。以後孝景は在国して領国支配の基礎を固め、文明３年（１４７１）５月２１日越前国守護職に関する申請を幕府から認められた。同年６月１０日孝景は出陣し、以後越前の平定が進められた。その後の戦乱の中で一乗谷は戦場になった事実が確認されず、朝倉氏の根拠地として安泰だった。文明４年（１４７２）９月１２日安位寺経覚は大乗院尋尊に書状を送り「又越前事被聞食及候哉、甲斐八郎三郎大将にて、豊原より朝倉本城一乗へ打入候、城衆二百人計生涯と申候、実否ハ不存知候へ共、及沙汰事間、以次申候」と報じているが、[5]後に経覚自身「文明四年九月歟、越前事、朝倉方打勝、於甲斐者悉出国逃亡云々、希代事也、仍朝倉為守護分、先代未聞事歟」と記しているように前掲の経覚の書状にみられる甲斐方の一乗攻勢は全くの誤報だった可能性が強い。しかしながら「朝倉本城一乗」と明記されており、朝倉氏の根拠地（本城）が一乗だったことは共通の認識として確認される。

朝倉孝景の一乗谷に対する政策を示すものとして嫡子氏景に与えた家訓『朝倉孝景条々』の条文をあげることができる。原本が確認されず諸本の本文に異同があるが、今のところ『朝倉英林壁書』の本文が内容上原形に最も近いとみられる。その１４条と１５条は以下の通りである。

一朝倉か館之外、国内□(に)城郭を為構ましく候、惣別分限あらん者、一乗谷へ引越、江(郷)村には代官計可被置事、

一伽藍仏閣并町屋等巡検之時ハ、少々馬を留、見悪をは見にくきと云、善をハ吉といはれ候者、不到者も御詞に掛たるなとゝて、あしきをハ直し、よきをハ弥可嗜候、造作も不入、国を見事ニ持成も国主の心つかひに寄へく候事、

１４条は国内の城郭構築の禁止と重臣の一乗谷集住、１５条は伽藍仏閣、町屋巡検の心構を述べたもので主として一乗谷のことをいっていると考えられる。家訓史料という性格や本文が確定しないことなど検討の余地はあるが、一乗谷の整備が孝景の代に意図的に進められたことがうかがえ、孝景はその教訓を氏景に伝えている。一乗城は朝倉家景の居城として初見史料があらわれてからすでに３０年を経過しており、この間に「阿波賀城戸口合戦」や斯波・甲斐方との越前国内での合戦を経験して相当の再整備も進んだのであろう。

この一乗谷の文明14年（１４８２）の状況を示す確実な史料が『大乗院寺社雑事記』閏７月１２日条に載せられている次の記事である。

一去三日昼八時より朝倉館一乗大焼亡、自火也云々、随分者共焼死云々、但屋形并朝倉城ハ無為云々、甲斐方屋形以下牢人、自加州又可打入之由近日支度云々、

この記事は一乗谷の火事の結果を伝聞により記したものである。ただし伝聞とはいっても越前から

の正確な報告をもとにしてそれを抄出したものとみられるから、記事の信頼度はきわめて高い。この記事にみえる「朝倉館一乗」が一乗谷の総称である。前掲の経覚書状の「朝倉本城一乗」や『朝倉孝景条々』にいわれる「朝倉か館」と通じる表現である。一方「屋形」と「朝倉城」はそれぞれ氏景が奉じた屋形と氏景の居所を指してその人物をいったものであろう。その場合の屋形とは、続いて「甲斐方屋形」とみえるように朝倉氏景と甲斐方がそれぞれ別の斯波氏を屋形として奉じているので居所あるいは建物のことではなく、当時の一般例の通りひとつの身分呼称であろう。また「朝倉城」も一見山城を指しているようにみえるが、屋形と並列になっているところをみるとそうではなく、朝倉氏景の居所を指しているものと考えられる。次に「随分者共」については『日葡辞書』に「随分の人」という語があげられ「すぐれていて、人々の間できわだった人」と説明されている。この「随分」には現代語の随分から想像される「かなり多くの」といったニュアンスはうかがえない。当時の記録の用語としては「随分」とは家中に重要な地位を占める重臣の意味として使われるのが普通であろう。したがって前掲記事の「随分者共焼死」とは焼死者の数が多かったことをいっているのではなく、朝倉氏景の家中の重臣たちが焼死したことをいっているものと解釈される。

以上の考察によれば文明１４年（１４８２）７月段階で一乗谷には当主朝倉氏景と氏景が奉じたところの斯波氏屋形の居所があり、それらとは恐らく別区画のところに氏景の重臣たちの居所が密集してありそれが「大焼亡」といわれるほどの火災を起こしたことがわかる。この時期は朝倉孝景の没後わずかに１年であり、孝景から氏景の代にかけて朝倉氏の重臣の一乗谷集住と整備はかなり進んでいたとみなくてはならない。

なお孝景・氏景・貞景三代の本宅の場所については伝承地がなくはっきりしない。ただ初代孝景はその本宅のほとりに心月寺を創建したといわれているので、現在の上城戸の外の西新町字心月寺がその伝承地であるから孝景の本宅もその付近にあったものとみられる。このことは現在の上城戸の構築年代の認識にも関係してくる。つまり字心月寺付近に孝景の居所があったとすると現在の上城戸が存在する必然性が理解できなくなる訳で恐らく初代孝景の時にはまだ上城戸は築かれていなかった可能性が高い。

以上孝景・氏景時代の一乗谷について所見をまとめたが、これまでいわれているよりかなり早くから一乗谷の築城・整備・都市化が進んでいたことは確実であろう。孝景の晩年には重臣の集住や町屋・寺院の建設がかなり進んでいたものとみられる。

５．義景時代と前波氏の一乗谷

三代貞景・四代孝景時代の一乗谷の様子を具体的に知ることのできる文献史料は遺憾ながら少なく、今後の古文書調査の課題となっている。最後の五代義景時代の永禄１１年（１５６８）５月１７日に一乗谷の安養寺に滞在していた足利義昭が朝倉館に御成りした『越州軍記』の辻固の記事は谷全体の様子、とりわけ上城戸周辺の状況を考えるのに重要な史料である。『越州軍記』によれば辻固の場所は大橋ノ通・柳馬場・坂野ガ小路・上殿ノ橋ノ通・遊楽寺ノ前・三輪小路・笠間小路・魚住彦四郎前・魚住前・河原前・木戸ノ本・詫美前・斎藤前・小林前・クラカリ谷・森前の１６ケ所である。「斉藤」「小林谷」の地名は上城戸の南方に今も伝えられており、辻固の「木戸ノ本」が上城戸の城戸口を指すことは明らかである。また今回の調査で上城戸外濠西端トレンチから出土した木簡の中に「たくみ殿まいる　宇左」と記されたものがあることは特別注意されるべきことである。この木簡はすでに概報で述べられているように戦国時代の木簡の中でも古文書との関係を持つ貴重な資料である。[(6)] すなわちその記載内容は宛名・脇付・差出であり、「宇左」（朝倉氏の家臣宇野氏に比定され、「左」の官途を持つも

ののことであろう）から詫美氏に宛てられたものであることが確認される。したがって上城戸の近隣に詫美氏の屋敷があったことが確認される重要な資料である。つまり前掲の辻固の次第の記事のうち小林前・斎藤前・詫美前・木戸ノ本は安養寺の御所から上城戸に向かう途中の屋敷地を順に記したものであることが確認される。

天正元年（１５７３）８月朝倉義景は近江・越前の間で織田信長勢に敗れ、１５日一旦一乗谷に帰った。義景は豊原寺に退却して抵抗しようとしたが、結局朝倉景鏡の勧めにより、加賀方面には向かわずに大野郡に逃れた。主を失なった一乗谷は信長方の軍勢により１８日から２０日まで谷中放火されたという。この時に一乗谷で攻防戦がなされたかどうか明らかでない。上城戸・下城戸で大規模な攻防戦がなされるのは、その翌年のことで、土塁や濠などの基本的な施設は天正元年８月に破壊されることなく機能は残されたと考えられる（城戸口の施設については信長方の軍勢が侵入した際に当然壊されたであろうが、その後修復可能であろう）。

朝倉義景の滅亡後、前波長俊が信長政権から越前の守護代に補任され、長俊は朝倉館に居を構えた。しかし長俊は治国の政を誤まり国人の反発を買い、翌天正２年（１４７４）正月富田長繁の指導する国中の一揆によってその居城一乗を攻められる。正月１９日大野郡・志伊庄・坂北・本郷・棗三郷の軍勢３万３千人は下口から「下ノ木戸口」に攻め寄せ、富田長繁と府中表近郷の一揆１０万８千人は上口から「上ノ木戸口」を攻めた。長俊は上城戸の守りの指示を与え、次に下城戸に向ったところで富田勢が上城戸の木戸を破却して落城したといわれる。その後一乗谷は一向一揆の支配するところとなり天正３年（１５７５）織田信長はその鎮圧のため再度越前に進攻し、８月２３日一乗谷に陣を移し、２８日に豊原寺へ陣替した。この時一乗谷は織田信長の本陣となっており、これが記録にみえる城としての一乗谷の最後の所見である。

以上きわめて大雑把であるが、一乗谷の沿革について概説した。なお城戸の構造等については朝倉氏に相伝された『築城記』に記述があるが、ここでは紙数の関係により省略した。

注

（1）佐藤 圭 「越前国足羽郡の荘園について」『福井県立博物館紀要』３、１９８９年。

（2）松原信之「一乗城移城以前の朝倉氏について」『福井県地域史研究』６、１９７６年。

（3）小泉義博「浅羽本『日下部系図』の朝倉孝景の事蹟について」『若越郷土研究』２０ノ３、１９７５年。

（4）河村昭一「畿内近国における大名領国制の形成――越前守護代甲斐氏の動向を中心に――」『史学研究五十周年記念論叢 日本』１９８０年 福武書店。

（5）『大乗院寺社雑事記』裏文書

（6）「上城戸出土の木簡の内容」『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡』ＸＸ、１９８９年

参考文献

『第五回企画展 戦国大名越前朝倉氏の誕生』１９９２年 当館企画展図録

『第八回企画展 朝倉氏と織田信長』１９９５年 当館企画展図録

Ⅴ 考　　察

2.一乗谷出土のカワラケ分類基準の検討

はじめに

一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査によって大量の土師質土器が出土しているが、なかでもカワラケの皿が圧倒的に多い。これは当時一乗谷の城下町でカワラケが大量消費されたことを物語っている。口縁部に煤が付着していないものは未使用品か、もしくは酒杯など饗宴に使用されたものと考えられている。これらの皿については、既に一乗谷朝倉館の「報告書Ⅰ」において、形態的な特徴から８タイプの分類が行われている（福井県教委1979）。

また、今回報告の第61・62次調査をはじめとしたその後の調査で、朝倉氏が本格的町割を実施したと考えられる永正年間以降、即ち16世紀代の遺構面よりは古い時期と考えられる包含層が調査される機会があり、いわゆる８タイプ分類には属さない特徴をもつカワラケが出土した。この下層カワラケの出土をきっかけとして分類の見直しが行われ、特徴の把握と意義付けの試みが行われた（南1992）。

しかし、一乗谷のカワラケの形態分類、及び編年はまだ確定的な内容には至らず、層位的位置付けも明確ではない。およそ150万点にも達する出土遺物のうちの約６割を占める土師質土器、とりわけカワラケの内容把握にはそれなりの時間が必要である。

今回の考察では、本報告書において取り上げた第61・62次調査上城戸外濠及び土塁北側の道路面や各遺構より出土したカワラケの検討に端を発して、こうしたカワラケ研究のワンステップと考え、形態分類基準の再検討を行おうとするものである。

Ⅰ　分類で使用した資料について

既に明らかにされている８タイプの基本分類、即ちＡ類のへそかわらけ、Ｂ類のナデ未調整の皿、一乗谷の最も基本的なスタイルで、数量も多いＣ・Ｄ類、一乗谷より時期的に後出のもので、型あてによる成形のＥ類、見込み中央からコンパスで円を描くようにナデる、類例の少ないＦ類、耳かわらけの元のかたちと考えられる、通称丸皿とされているＧ類、そして耳かわらけのＨ類、計８分類は今も有効である。基本的な枠組みの変更はない。ただカワラケ資料の増加に伴い、個々の分類基準には不足が生じている。新たな資料の増加に見合った細分類を試みる。

その際に採用する資料は、なるべく遺構から一括で出土したカワラケで、内容的にも豊富な量であることを条件に選んだ。第59次調査区の井戸及び溝出土の遺物、中惣地区のカワラケ溜り土壙の遺物、これに下層カワラケとして第24次調査区の遺物と、第77次調査区下層深掘りトレンチの遺物である。基本分類は周知のとおり朝倉館のカワラケが対象となっており、これと今列記した地区との比較によって形態・法量などの差異を検討する。そして最後に今回の上城戸出土のカワラケ群について検討を加える。各調査区の遺構・遺物に関する詳細については、それぞれの報告書によられたい。

第59次調査

本調査区は朝倉館の北側に位置しており、古絵図では朝倉氏重臣三段崎備中守屋敷跡とされると

＊＊法量は手づくねによる成形のため、一定しない。これまでの朝倉館・新馬場などのカワラケ法量分布図や、その後の各調査区での概報作成段階での実測図からの計測値をもとに大体の数値を充てた。

単位；cm

大分類	小分類	法　量 (口径×器高)	摘　　要 (胎土・色調・成形技法・調整法など)	備　　考
A類	A_1類	6-7×1.5-6	いわゆる「へそ皿」で、口径が7cm前後に収束するもの。 白色を呈するものもあるが、概して褐色が多い。 ナデ成形はC類と同じ。	出土傾向にバラツキあり。
	A_2類	9×2	C_3類に近い法量で、「へそ」を作り出すもの。褐色を呈する。 「へそ」は概して浅い。	C類の皿の変形?とも見えて 区別困難なものもあり。
B類	B_1類	7×1.5-6	手づくね形成痕をそのまま残す1群。口縁部は不揃いで波を打つ。 布目痕のこす。従来のB類のうち、口径が7cm前後に収束するもの。	例外的にミニチュア含む。
	B_2類	8-9×2	従来のB類のうち、口径が7cmを超えるもの。	
	B_2'類	8-9×2	法量はB_2類だが、口唇部をつまみナデした、うすい作り。	中惣(75～78)で分離可能。
C類	C_1類	6-7×1.5-6	口唇部をつまみナデ、あるいは面取成形するもの。	24次、中惣、59次で分離可能。
	C_2類	7×1.5-7	従来のC_1類。内面は「の」の字のナデ成形。 器型のバリエーション多い。	
	C_2'類	7×1.5-7	従来のC類の範疇に属さない一群で「の」の字ナデ成形にならない。 腰折れタイプも含む。	24次・77次下層で分離可能。
	C_3類	9×2	従来のC_2類。量的にも最もポピュラーなもの。 口唇部をつまみナデするものあり。	
	C_3'類	9-10×2	法量はB_2'類に近い。口唇部横ナデ顕著。いわゆるボテタイプ。 色調は白色が多い。	「興行寺遺跡」炭化層(第2面) 出土のものと同タイプ
	C_3''類	15×3	C_3'類の大皿。いわゆるボテタイプ。色調は白色が多い。	〃
D類	D_1類	9×2	見込みに圏線をもつ、従来のD1類で、口径が九寸に集中する一群。 多くは口縁部に油痕もつ。	一乗谷の通有タイプ
	D_2類	10-12 ×2.4-5	従来のD_2類で、ポピュラーなタイプ。口径が四寸前後に 集中する一群見込み圏線の浅いものとはっきりしたものとに分かれる。	〃
	D_3類	14-16 ×2.4-5	従来のD類で、五度入(五寸前後)のもの。見込み圏線が浅いものと はっきりしたものとの2者あり。色調は白色と褐色と半々か。 ナデ成形は一般に丁寧。歪みなし。器壁が1-2mm前後の薄いタイプあり	
	D_3'類	14-16 ×2.4-5	従来のD類の範疇に属さない一群。 底部からの立ち上がりが屈曲するタイプと丸くゆるやかに 立ち上がるものと2者あり。	24次下層、77次下層で出土。 形態にバラツキ多く、 検討の余地多い。
	D_4類	20×3.2-3	D類のなかでも、最も口径が大きくなるもの。 量的には少ない。油痕をもつものも殆どない。 ナデ成形は丁寧。歪み少ない。	
E類		10×1.8	形あてによる成形。つまみを有する受け皿とセットで用いられる。	「松雲院」以降のカワラケ。
F類		6-7×1.4-5	本来C_1類に含めるべきもの。類例は御所・安養寺跡以外に殆どなし。 特異なナデ成形。サザエの蓋のような形態	
G類		5-6×1.4-5	いわゆる丸皿。概して成形は丁寧。どの地区でも、ごく少量出土する。	
H類		長径6.5-7.0 短径4.5-5.0	いわゆる耳皿。特に出土傾向に偏りは見られず、 少量ずつ出土する。G類の皿を両側から折り曲げたもの。	

表11　カワラケの分類基準

ころである。城戸ノ内集落と県道をつなぐ取付道路建設に伴う事前調査によって、土塁で区画された武家屋敷と見られる屋敷跡、町屋かとも見られる小区画の屋敷跡などを検出した（福井市教委・朝倉氏遺跡資料館1987）。比較検討に供した資料は、遺構・遺物が良好に遺存していた町屋区画の井戸、及び溝からのカワラケを採用した。

中惣

本調査区は、朝倉式部大輔景鏡の屋敷跡と目されている区画である。発掘は県道改良工事の事前調査として実施された第43次と、国庫補助事業の計画調査として実施された第68次調査との２次にわたっている。このうち後者の調査では屋敷全体の東側約半分近くにもなる、約3,800㎡を発掘し北と南の境界線では濠跡も確認した。区画は方１町にも及び、朝倉館跡に次いで２番目に大きな面積を有することが分かった（朝倉氏遺跡資料館1990）。この屋敷内において、朝倉氏滅亡の時期より１、２時期古いと見られる下層の面で数個所のカワラケ溜りと考えられる土壙が検出され、この土壙から一括で出土したカワラケを採用した。

第24次調査

平井地区一帯で「町並立体復原地区」として門・土塀が立体復原整備された武家屋敷のひとつで、かって、昭和53年度概報で下層カワラケの存在が指摘、報告されているところである。その後各々の時期別遺構面の検討によって、最盛期段階と見られるⅢ期、それより時期が遡る下層Ⅱ・Ⅰ期毎に分けた報告がなされている（朝倉氏遺跡資料館1993）。今回はこの中のカワラケについて再度チエック、検討することとする。

第77次調査

同じく「町並立体復元地区」の武家屋敷のひとつで、南端に寄った区画である。地区は川合殿にあたり、門、土塁、礎石建物、石敷を有する土蔵などが良好に検出されている。この区画の下層トレンチ整地土層より、第24次調査で出土したいわゆる８分類に属さないカワラケと同様のカワラケの一群が出土し、一乗谷のカワラケ分類の見直しへのきっかけを与えた（朝倉氏遺跡資料館1992）。

Ⅱ　基本分類に対する細分化作業（表11　分類基準、挿図27～29）

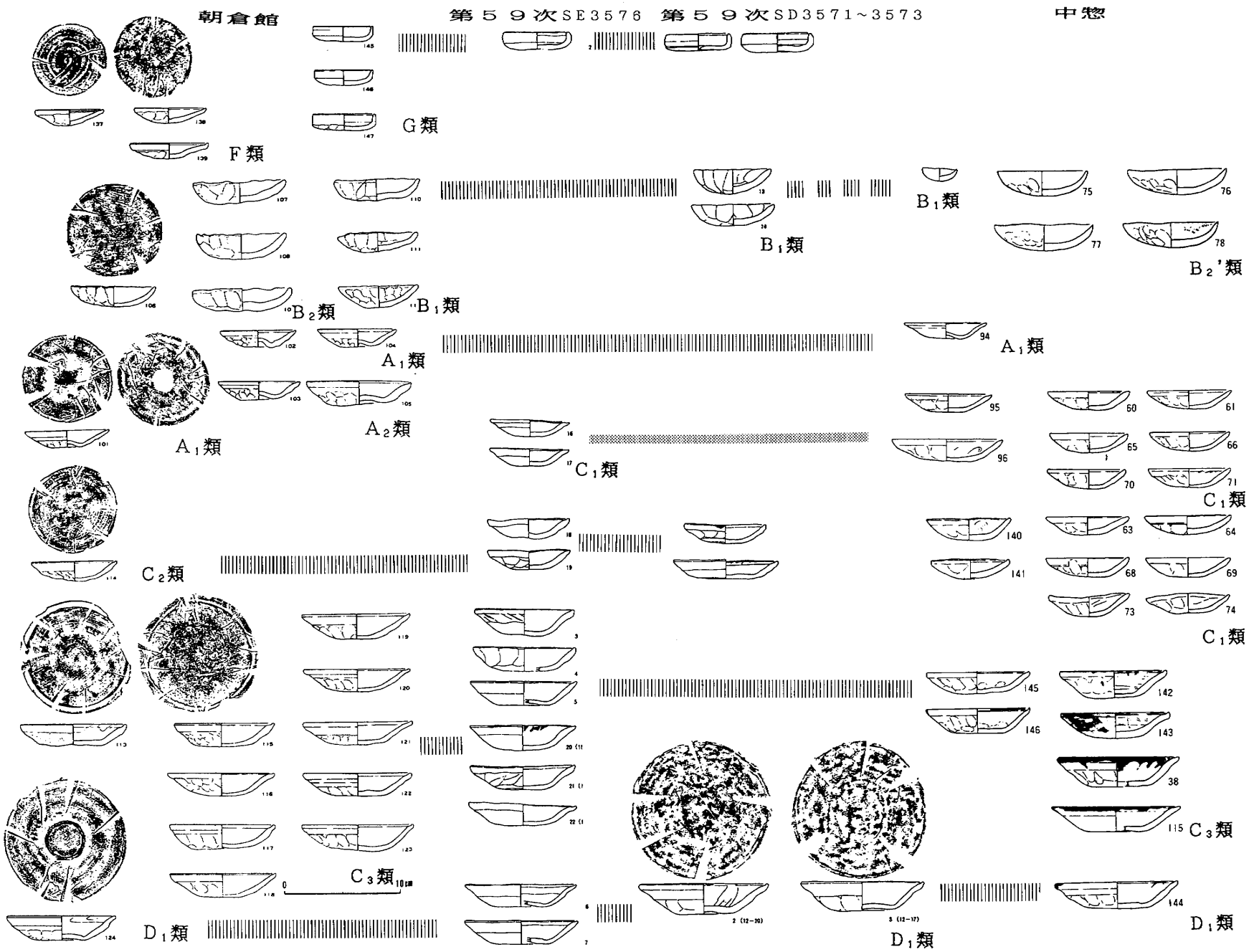
Ｅ類は胎土、成形技法、形態の特徴からみて、近世の所産であることが判明している。またＨ類の、いわゆる耳かわらけは、出土傾向からみて比較的少ない形態と言え、形態上のバラエテイも殆ど見られないことから、ここでは分類の検討対象から一旦除外する。更にＦ類は今のところ、御所・安養寺跡の調査で出土したのみで、以後の調査例には殆ど見当らないことから、これも今回の分類検討対象からは除外することとする。

Ａ類の検討

Ａ類（へそかわらけ）は、当初の基本分類においても口径に差のある２種類（７㎝前後、９㎝）が提示されていたが、今回検討の対象とした中惣、及び第24次調査区出土のＡ類に口径約７㎝前後のものがあり、図示しなかったが第77次出土のＡ類に９㎝のものがあり、２種類が定量存在することは明らかである。よって、Ａ類は口径の差から７㎝前後に中心をもつＡ1類と９㎝前後に中心をもつＡ2類に２分する。この分け方は後に検討するＣ1類、Ｃ2類の口径差と対応関係にある。

Ｂ類の検討

Ｂ類は手づくね成形痕をそのまま残す、不成型な一群の皿をさし、口縁部は不揃いで波うつよう


朝倉館
第５９次SE3576
第５９次SD3571~3573
中惣
F類
G類
B₁類
B₂類
B₂'類
A₁類
A₂類
C₁類
C₂類
C₃類
D₁類
0
10cm

な形状を呈する。口縁部の横ナデも見られず、一見特徴ある一群と見なされていた。しかし、以後の多くの出土例から形態にバラエテイが見られることが分かり、その内容も一様ではないことが明らかとなってきた。挿図27に示した中惣のB類にはミニチュア製品とも思える口径3㎝前後のものが見られる。また同じB類に手づくねによる成形には変わりないが、口縁部を薄く仕上げ、かつ平行に仕上げているものが見られることである。B類は手で丸く粘土板を形づくるもので、場合によっては肘で型どりをすることもある、と指摘されていたが、そのどれにも当てはまらない成形、調整技法によるものである。

よって、B類は資料の増加に見合った細分を行い、先のミニチュアも含めた7㎝前後のものをB1類、8～9㎝前後に中心をもつものをB2類とする。また口径は8～9㎝であるが、成形技法に差があり丁寧な仕上げで、口縁部の薄いつくりのものをB2'類とする。

C類の検討

朝倉館の「報告書Ⅰ」においてカワラケの分類を行った小野正敏は、基本的なカワラケの分類を提示したが、第10・11次調査（新馬場）で出土したカワラケにおいて、内容の再検討を行い、補足を加えた（朝倉氏遺跡調査研究所1975）。

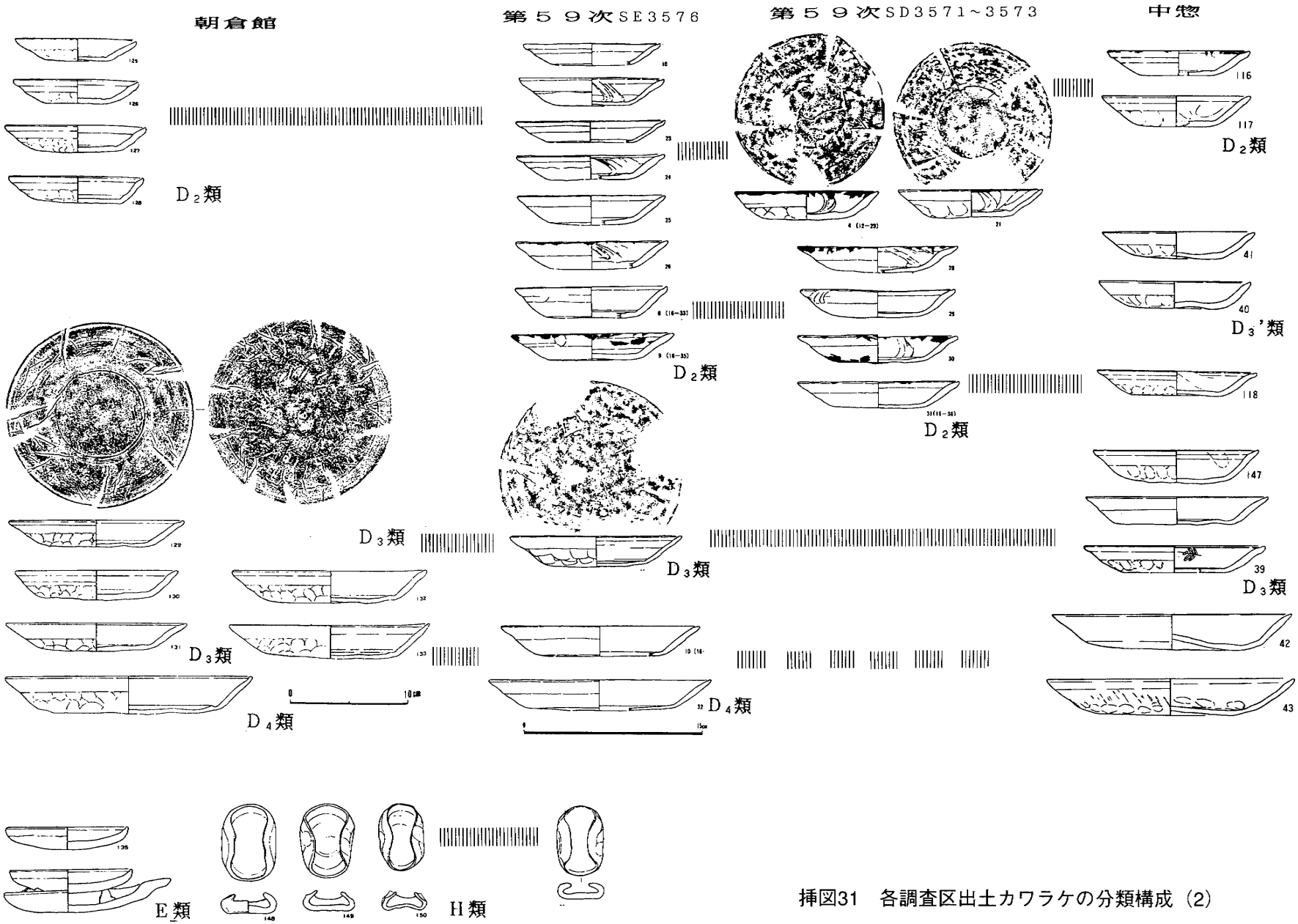
C類は6㎝を中心とするC1類と、9㎝を中心とするC2類とに分かれ、C2類はタール痕を有するものが多く、また数の上からも6割を占めているとした。14㎝以上のD2類は圧倒的に少なく、原則としてタール痕はない。14㎝未満のD1類は約半数がタール痕をもち、使用度も激しい。口径比率も3.5寸と4寸に集中すると言う。D類は成形技法、調整法は変わらないが、法量の差からみて、14㎝未満、即ち3.5寸（12～13㎝）に口径が集中する一群と4寸（13㎝前後）に集中する一群、そして14㎝以上の一群との3分類を想定している。A・B・E・F類は灯明皿として、C類は酒杯、灯明皿として、D1類は灯明皿、酒杯、盛皿として、D2類は酒杯、盛皿に使われたらしい、としている。

内面に顕著な「の」字のナデ手法をもつC類は、その後の調査によって最もバリエーションが多くなった器種形態である。6㎝前後に収束する小皿タイプのものとして分離されたC1類は24次、中惣、59次調査によって、ナデ手法は「の」字にナデ上げることは同じでありながら、口唇部をつまみナデしたり、面取によって角張る形態をもつ一群が存在することが判明し、器種構成の一角を占めることがほぼ確実となった（挿図27）。よって、この一群の皿を改めてC1類とし、いわゆる「の」字ナデ成形をもつ、従来の6～7㎝前後に収束するタイプをC1類の中から分離し、C2類とする。

また従来の9㎝前後の皿であったC2類はC3類と変更する。この皿はどの地区においても普遍的に出土し、最もポピュラーな形態である。しかし、この形態にも若干の形態差が見られ、口唇部幅5㎜ほどを先につまみナデし、仕上げのナデ成形段階に口端を強くナデ回すことによって生じるものか、水切部分に盛り上がりが見られるものがある。こうした形態差は工人による個人差・個体差とも受け取れ、今少しの検討が必要である。

更に口径が7㎝前後でありながら、C2類に属さない一群が24次、77次下層で見られることが判明した（挿図29）。これらの皿は概して白色を呈し、薄い作りである。口縁部は腰折気味に立ち上り、口縁部内外を横ナデ成形している。内面も「の」字のナデにはならない。しかし、いわゆるG類（丸皿）ほど極端な折れ曲がりでもない。ナデも異なる。よってこの一群を分離してC2'類とする。

今回、新たに分類基準を設定するものに24次下層で出土した「ボッテリ」タイプ（以後通称を用いて「ボテタイプ」と呼ぶ）の皿がある。ナデ成形が粗いことを強調するとB類に含めるべきであるが、形態的にはC類に近い一群の皿で、これは大小いくつかの口径をもつものと判断される。24



挿図31　各調査区出土カワラケの分類構成（2）

次下層では口径９㎝前後と、15㎝前後との２タイプが見られる。今仮に口径が９㎝前後のものをＣ3’類とし、15㎝前後のものをＣ3’’類とする。これらセット関係を有する一群の皿はまとまる傾向が強く、中惣で分離が可能となったＢ2’類との形態的な関連性も考えられ、独立させて別グループとすることも可能である。ちなみにこの一群は一乗谷以外の永平寺町興行寺遺跡「炭化層」でも確認され、15世紀前半～中頃に位置付けられる（富山1997）。この点については後項でも触れる。

Ｄ類の検討

Ｄ1類は見込みに圏線をもつ、従来のＤ1類で基準に変更はない。口径が９㎝前後に集中する一群である。出土する資料に油痕をもつものが目立つのもこのタイプである。色調はほとんどが褐色を呈し、器壁も５㎜前後で一定するようである。

Ｄ2類も従来のＤ2類で、この法量として最もポピュラーな形態である。口径が12㎝（四寸）前後に集中し、見込み圏線が浅くなっているものと、強くナデ回したものか、圏線が深く、はっきりしているものとの２タイプが見られる。そして、圏線の浅いものはナデが圏線の内側にまで入り込んで施されている傾向があり、Ｄ類の横ナデは１度ではなく、複数回施されている可能性がある。

この傾向は口径が15㎝（五寸）前後に収束するＤ3類にも指摘し得る。見込みの圏線が浅いものと強くはっきりしたものとの２タイプに分かれる。ちなみに京都での中世カワラケ編年や、近年の関東、東海、近畿地方での都市遺跡、城下町遺跡出土のカワラケ編年でも、16世紀以降この種の圏線の明確なカワラケの出土が報告されている。特に圏線のはっきりしたタイプのものは後出的なものと見られ、京都では16世紀後半以降に位置付けられる（注１）。

Ｄ4類はＤ類の中でも口径が最も大きくなる一群を一括して分離したもので、概ね20㎝前後に達する。数量としては少量しか出土せず、主体的な形態ではない。ナデ成形は概して丁寧であり、胎土も安定している。

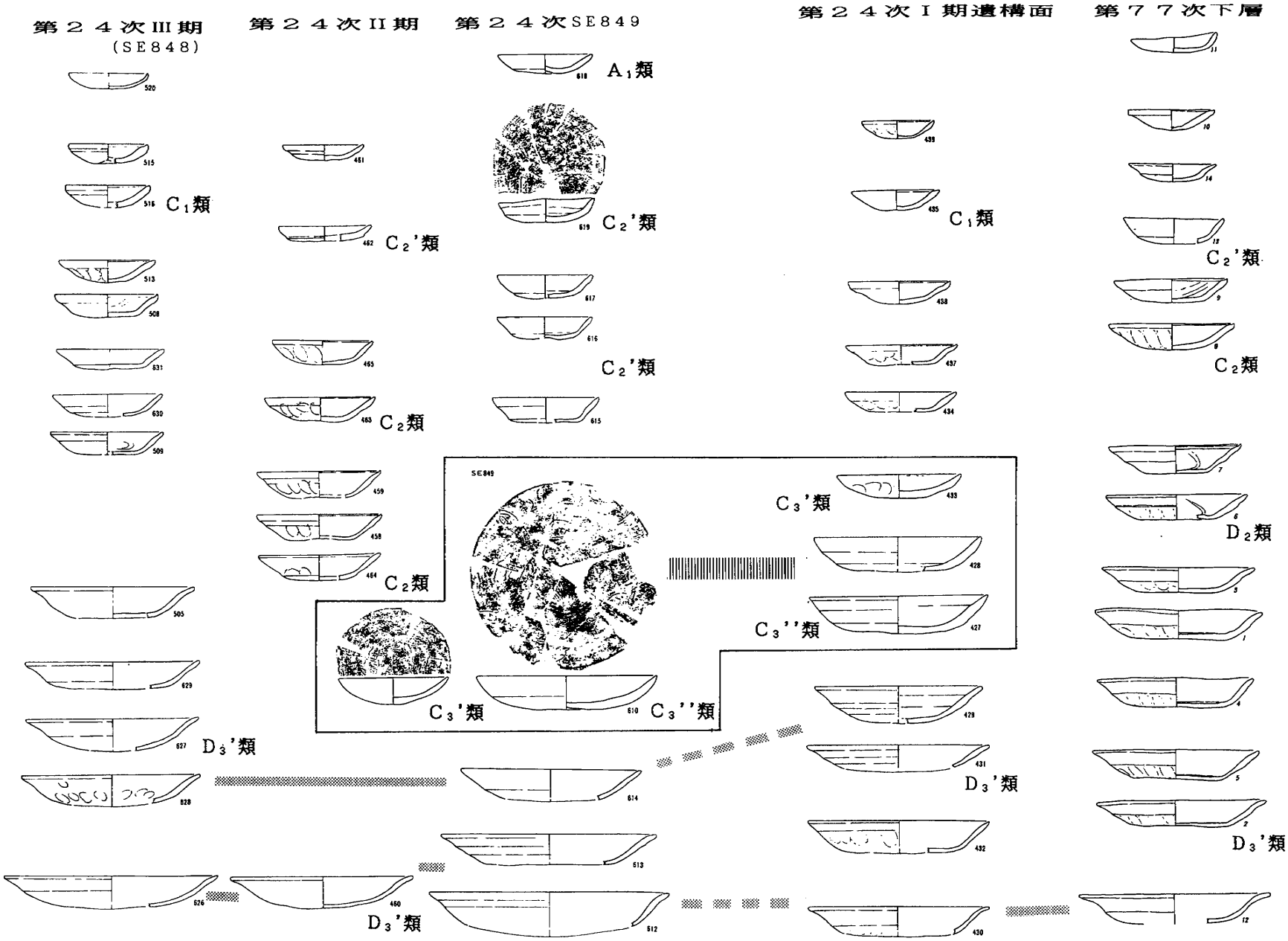
第61・62次調査出土カワラケの検討（挿図30）

さて、今回報告内容に取り上げた第61・62次調査出土のカワラケは本文図版で紹介したとおりＢ、Ｃ、Ｄ、Ｇ、Ｈ類の各器種を含み、器型の全体が把握できるものを図示したが、更にナデ成形が明瞭に見られるものを拓影図を付して再度取り上げた。

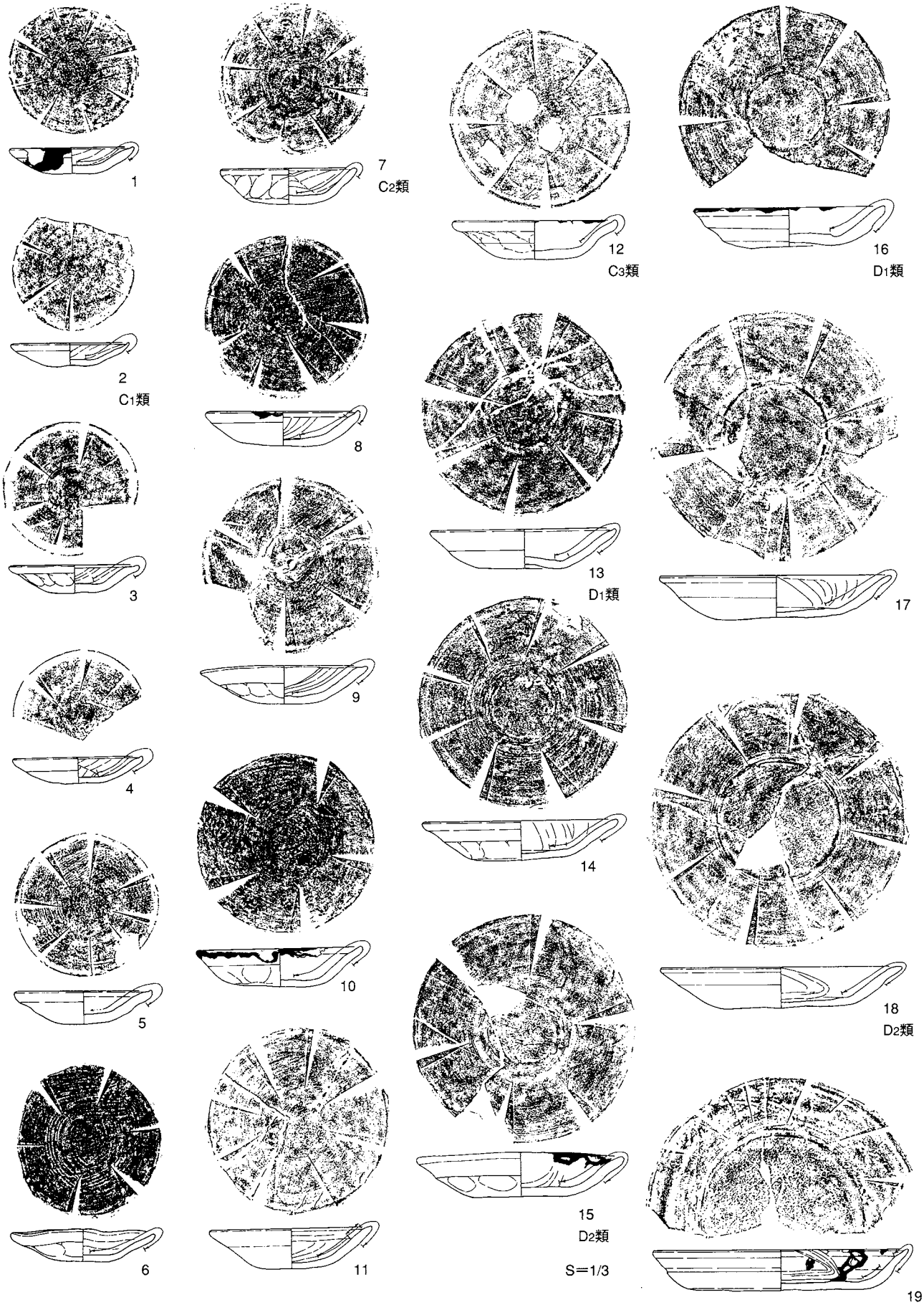
挿図30１・２は口径６㎝のＣ1類の小皿である。「の」字のナデ成形痕が明瞭に見られ、口唇部には水切部分に盛り上がりがある。歪みはなく、色調も安定して褐色を呈す。３～７は口径７㎝前後のＣ2類である。これも「の」字のナデが明瞭に残る。口縁部外面のナデ幅は通常口唇部ギリギリに５㎜前後であるが、10㎜ほどの幅広いものもある。器型に歪みが生じて口縁部が平行にならないものもある。口唇部水切部分に盛り上がりのあるものが多い。色調は殆ど褐色を呈す。

８～12は口径が９㎝前後のＣ3類である。このサイズになると内外面のナデ幅は一定する。内面は見込み中央を２～３㎝ほど残してナデ上げている。横ナデの後、見込み中央を軽く一方向に１回ナデるものもある。外面も口唇部から腰に向かって１㎝ほどを人差指で挟むようにしてナデている。口縁部はほぼ直線的に外反するのが特徴で、内湾したり、先端で端反りになるものはあまりない。外反の角度も概ね一定しており、約30～35°を示す。12の内面は火ハジによる剥離が見られる。

13・16はＤ1類で、圏線に明らかな凹線が入る。ナデもほぼ圏線までを「の」字にナデて１周したところで一旦引き戻すように逆方向に引いている。外面のナデ幅は1.5～6㎝で、Ｃ類に比べて幅を広く取るのが特徴である。器厚はＣ類と変わらず、５㎜前後である。14・15・17・18はＤ2類である。



挿図29　各調査区出土土師ニ皿の分類模式（2）



挿図33　第61・62次調査出土土師質皿（カワラケ）

ナデ手法はD1類と同様であるが、ナデる回数は１回とは限らず、拓影図で明らかなように圏線より内側に幅広くナデた後に、圏線から口縁部の幅を重ねてナデているようである。この場合は、圏線に顕著な凹線が見られずなめらかな立ち上がりとなるようである。これは工人のくせなのか、あるいは成形の違いを意識的に区別しているのか、問題ではある。前述のように「京都編年」ではこのタイプは16世紀の終わり頃に位置付けされる。

19は口径、ナデ手法からすれば明らかにD3類に属す。しかし、外反する口縁部はやや短く、立ち上がる角度も40°と若干深めである。今回の調査区では他に類例もなく多言は無用であるが、D3、D4類が概ねD1、D2類と相似関係にあることを考えると、'異型' と見ざるを得ない。口縁部には灯芯油痕があり、色調は褐色である。D3類が灰白色、卵白色など白っぽいものが多い中ではこれもひとつの特徴と言えるかも知れない。

Ⅲ　編年化作業への見通し

一乗谷出土のカワラケは、今回の分類基準の検討によってA類はA1、A2の２類に、B類はB1、B2、B2' 類の３類に、C類はC1、C2、C2'、C3、C3'、C3'' 類の６類に、D類はD1、D2、D3、D3'、D4類の５類に分かれ、E・F・G・H類を加えると計20種に細分化されることとなった。これらのカワラケ類は、当然のことではあるが、下層からの出土にも見られるようにすべての器種が一乗谷の断続期間のなかで、同時に使用され続けた器種とは考えられず、いくつかの段階をもって断続的に使用されたものと考えねばならない。

発掘が開始された当初の段階では、まだ器種構成の内容に大きなバリエーションも見られず、A～H類の大ざっぱな分類でカワラケの理解が行われていた。それでもC類やD類のように比較的内容量の豊富な器種については、形態分類の作業から進んで編年的位置付けへの作業が試みられたりしたが、いずれも功を奏しなかったことは、蓋し当然かも知れない。

はじめにでも述べたように、発掘開始当初から既に30年の年月が経過し、調査件数の増加に伴ってカワラケ資料も膨大な量の蓄積を見ている。下層トレンチ調査などによって、当初の分類に見られるカワラケ形態とは異なる資料も得られて、ようやく分類基準の見直しの機会を得るに至った。いささか遅きに失した感が否めないのも事実ではあるが、将来の見通しを射程に入れて敢えて再編・整理を行う。

グルーピング作業

挿図27～30に示した各調査区のカワラケを概観すると、朝倉館では最終段階の滅亡時の遺構面を発掘したのに止どまり、この面での整備が行われている。従って、この朝倉館でのカワラケをまずひとつの器種構成、セット関係をもった一群としてグループ分けすることが可能であると考える。このグループを「Ⅲ群」とする（注２）。

「Ⅲ群」は、明らかに後世の所産と見られるE類や御所・安養寺のみで今のところ追加資料の見られないF類を除いて、A・B・C・D・G・H類の各器種をもって構成される。口径差としてはA1類のへそかわらけのみが、７㎝前後で最も小さい。B類はB1、B2類を含み、口唇部をつまみナデするB2' 類などは含まない。C類はC2、C3類を含む。D類はD1、D2、D3、D4類で構成する。このように「Ⅲ群」はA・B・C・D・G・H類の各器種をもち、それらがいくつかのバリエーシ

ョンをもって計９種の器種で構成するグループと考えられる。

朝倉館の調査以後、新馬場あるいは平井地区での武家屋敷や挿図27・28で例示した59次でのカワラケの様相は、特にＣ・Ｄ類にバリエーションが見られ、口径差のある各器種が増加している。基本的な器種構成は朝倉館の器種構成を踏襲しており、大きな差異は見られないものの、近い将来においては、別の組合せ、グループを抽出することができるかも知れない。

この「Ⅲ群」とは器種構成の様相がかなり異なっているのが中惣の「土器溜り」など土壙一括で得られたカワラケの一群である。明らかな特徴としては「Ⅲ群」のＣ2類、Ｃ3類に加えて、口径６～７cm前後のＣ1類が加わっていることである。又、Ｂ類はＢ1類、Ｂ2類に加えて口唇部をつまみナデし、平坦に整える傾向が伺えるＢ2’類を含んでいるのも大きな違いである。正確な各破片の口径差によるカウントを経たわけではないので推量に過ぎないが、Ｄ3、Ｄ4類が少なく、「Ⅲ群」とは一線を画す。全体の器種構成の内容に不明な点を多く残してはいるが、こうしたＣ1類、Ｂ2’類を含む、という点で中惣の土器溜り出土のカワラケをひとつのグループに分け、「Ⅱ群」とする。

「Ⅲ群」、「Ⅱ群」のカワラケとは更に様相が異なり、概念的にも「Ⅲ群」、「Ⅱ群」に該当しない器種がある。挿図29に示した24次、77次下層出土のカワラケである。今これらをひとつのグループとして一括し、「Ⅰ群」としておく。小量ながら、Ｃ1類、Ｃ2類、Ｃ3類、Ｄ1類、Ｄ2類、Ｄ3類を含んではいるが、トレンチ調査が多いこともあり、あるいは下層掘り下げ段階での混じりの可能性もある。

「Ⅰ群」のなかで指摘し得る最も特徴的なものは、24次下層で出土したボテタイプ（Ｃ3’類、Ｃ3’’類）である。前項でも述べたように特徴的でまとまりのあるⅢ形態である。今後Ｂ2’類とのつながりがはっきりすれば、更にこのボテタイプは別グループとして分離することが可能である。今は「Ⅰ群」として一括したなかに止どめることとする。

更に同じ「Ⅰ群」のなかで顕著な差異を見出し得るものにＣ2’類とＤ3’類がある。Ｃ2’類は口径７cm前後でナデ手法が「の」の字にならず、また、腰が折れるような形態を示すのが特徴でもある。Ｄ3’類は破片資料が大半で、まだまだ資料的には十分ではないが、いわゆるＤ類のナデ手法にはならず、底部から緩やかに立ち上がるものと、屈曲して立ち上がるものがある。またいわゆるＤ類のように一定の幅をもって、口縁部が直線的に外反する形態とは異なり、外側にカーブを描いて開く端反りタイプが多い。口径が14～16cm前後に収束するＤ3類が共伴するが、色調は白色で器壁も薄い作りが大半である。これも「Ⅲ群」のなかのＤ3類（器壁５～６㎜）のものとは一線を画す。一乗谷平井地係の武家屋敷第15・25次、第24次調査をまとめた「報告書Ⅳ」（朝倉氏遺跡資料館1993）の中で岩田隆は、24次出土の下層カワラケを取り上げ、古手のグループとして改めて分離し個々の検討を行っているが、今回はそれらを敢えて細かく分離せず、「Ⅰ群」に包摂することとする。

「Ⅰ群」は、現段階では明瞭なセット関係を指摘できる状況ではないが、一乗谷のいわゆる「町割」以前のカワラケ使用における様相を反映するものとして、いくつかの形態別、系統別のグループが内在することが予想される。中世の各遺跡から出土しているカワラケ出土状況（注３）から類推すると、武生市「家久遺跡」の中世墓地出土のカワラケ（小淵1997）や大野市「新庄遺跡」でのカワラケの在り方、福井市「池尻遺跡」、「中角遺跡」など大小２種のセット関係で出土する在り方（例えばＣ2’類とＤ3’類の一群）が予想されるかと思えば、また一方ではボテタイプに見られるように、いわゆる「京都系カワラケ」（注４）とは明らかに系譜の異なる成形手法のものを含むことにもひとつの性格を伺うことができる。町割以前の段階においては単一系統の成形技法によるカワラ

ケの生産、使用ではなく、後者の年代がほぼ15世紀前半～中頃であることから推測すれば、そうした時期にボテタイプがどこからか持ち込まれ、それらを受け入れる要因が一乗谷のなかにあったと言えよう。もし仮に「Ⅱ群」に含めたB2’類がボテタイプの成形技法の延長線上にあることが確定されれば、いわゆるB類とつながることとなり、「Ⅲ群」の構成要因を伺う手がかりとなる。

更に「京都系カワラケ」の第２次波及期を、昨今指摘されているように14世紀末～15世紀前半頃と見れば、C2’類、D3’類の生産・使用を「京都系カワラケ」出現以前と見ることが可能なことから「Ⅰ群」の時期幅をかなり広げて考える必要性が生じてくる。

まとめにかえて

今回の報告は、カワラケの分類基準の再検討に主眼点をおいたが、概ねこれまでに公にされた調査報告書の記述、見通しの延長線上に立って基準設定を行った。ただ、時期別の編年序列を与える見通しについては各担当者間での十分な論議の積み重ねを経たわけではない。思い違い、不適切な判断があった場合はすべて筆者の責に帰する。

更に今回の検討対象から外れた調査地区として、カワラケ窯の存在が指摘されている第18次調査区の大量のカワラケ群がある（朝倉氏遺跡調査研究所1976）。一乗谷での生産活動を根拠付ける重要な調査区（注５）でありながら、種々の制約から検討段階にこぎ着けることができなかったことは大きな反省材料である。グルーピング作業の中で大別を行った「Ⅲ群」、「Ⅱ群」の内容の充実、ひいては「Ⅰ群」の精確な内容の確定化を図るためにも次回への必須課題と位置付けてまとめとしたい。

注１　京都では早い段階にカワラケに関する編年化作業が行われ、時期区分が確定しているようである。
横田洋三1981「付論 出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第５輯』他

注２　グルーピングにあたっては名称を「群」として振り分けたが、かって小野正敏が豊原寺華蔵院の調査報告書において、越前焼の編年化作業で古いタイプから新しいものにⅠ群～Ⅳ群の名称を付している。時期区分での混乱を避けるためにこの序列を踏襲し、また、将来において越前焼編年との照合を図る意味もこめて同様な群分けを使用した。但し、今回は小野の越前焼編年との対比、照合関係については論題から外れるため行わず、次回への課題としたい。
小野正敏編1981『豊原寺Ⅱ 華蔵院跡 第２次発掘調査概報』丸岡町教育委員会

注３　1992年に、富山県において開催された第５回「北陸中世土器研究会」において筆者は越前の近年における中世～戦国時代にかかる遺跡出土のカワラケについて概観した。また、近年では福井県埋文センター主催による福井県内の「発掘調査報告会」で、中世～戦国時代の各遺跡・遺物の紹介が行われてきており、漸次、様相が伺えるようになった。

注４　近年では、1998年の京都における第17回「中世土器研究会」による「京都系土師器皿の伝播と受容―中世後期を中心に―」のシンポジウムで波及期の問題が討議されている。

注５　窯跡研究会1997『窯研通信　第９号』誌上において、岩田隆は第18次調査で検出した町屋遺構のうち、竈遺構SX709・710を有する区画を取り上げて、カワラケ生産の可能性について言及している。近年まで操業していた京都岩倉木野家の窯構造との比較や、同市岩倉幡枝遺跡出土の窯体構造との比較検討による立命館大学木立氏の教示を得て、竈遺構をカワラケ窯として紹介している。また、この竈遺構が一乗谷の最終遺構面であったという見地から、継続年代を1530年から1573年までとしている。

【引用・参考文献】

朝倉氏遺跡調査研究所1975『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡Ⅵ 昭和49年度発掘調査・整備事業概報』
朝倉氏遺跡調査研究所1976『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ 昭和50年度発掘調査・整備事業概報』
福井県教育委員会1979『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 Ⅰ 朝倉館の調査』
朝倉氏遺跡資料館1987『一乗谷朝倉氏遺跡 朝倉館前連絡道路敷設に伴う発掘調査報告書』福井市教育委員会
朝倉氏遺跡資料館1990『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 平成２年度発掘調査・環境整備事業概要（22）』
南　洋一郎1992「越前・若狭における様相」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
朝倉氏遺跡資料館1992『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 平成4年度発掘調査・環境整備事業概要（24）』
朝倉氏遺跡資料館1993『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 Ⅳ 第15・25次 第24次調査』
朝倉氏遺跡資料館1995『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 Ⅹ 第29次 第77・78次調査』
富山正明1997「第３節 越前国における13～16世紀の土師器編年」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編
小淵忠司1997「第８節 家久遺跡の中世墓について」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編

平成11年３月20日　印刷
平成11年３月31日　発行

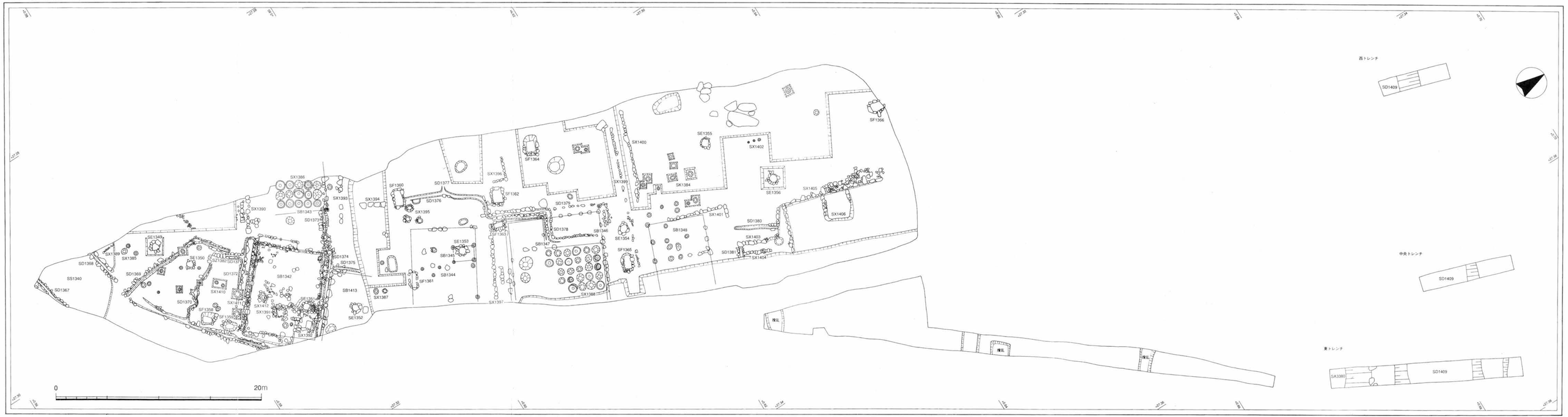
特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ
第35次　第56・85次　第61・62次調査

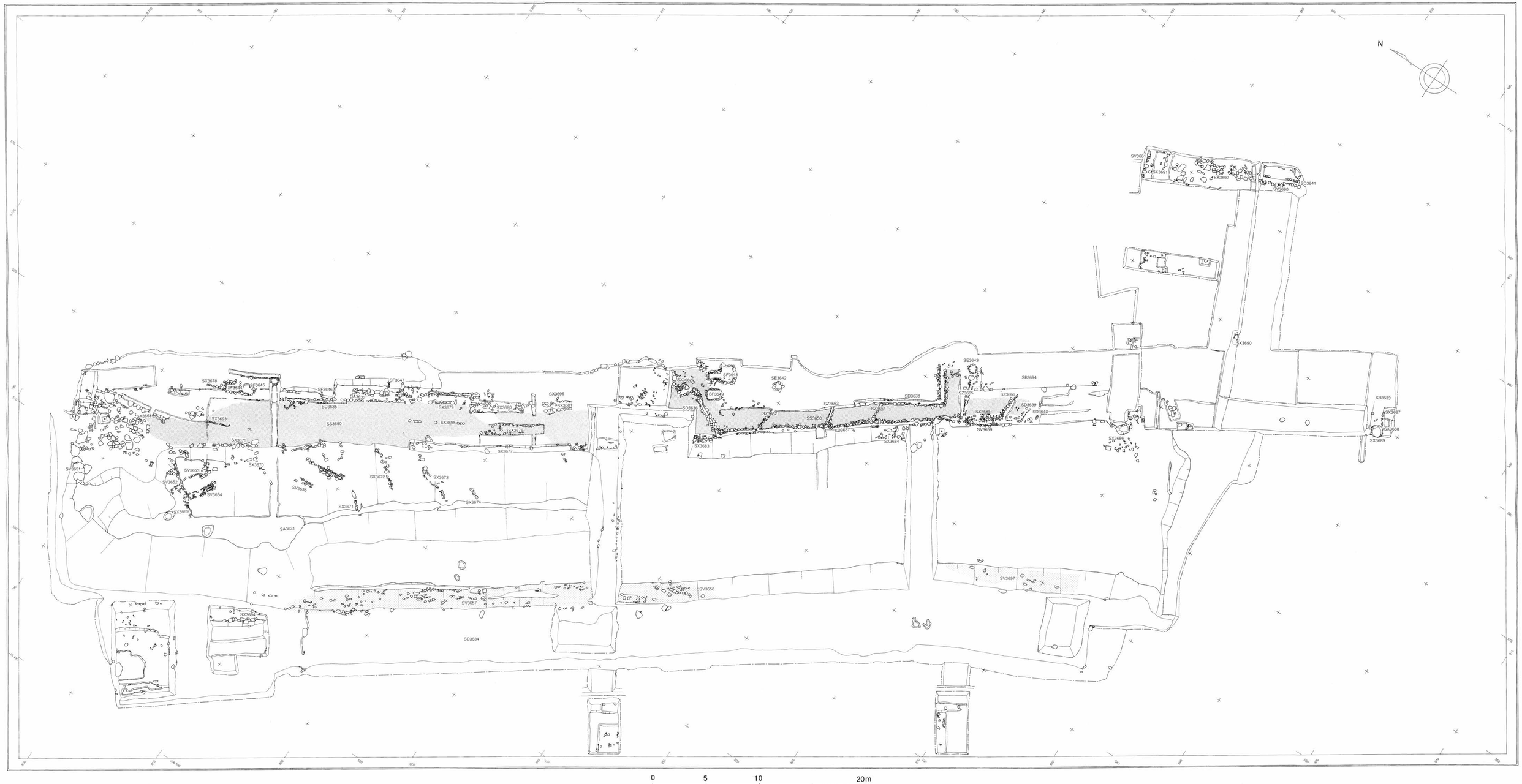
執筆・編集　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発　　行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4-10
印　　刷　大一印刷株式会社

付図1

特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡

付図2　第35次調査遺構実測図



付図3　第56・85次調査遺構全測図

付図4　第61・62調査（上城戸）全測図